

いつの間にかボスになってた。組織は滅んだけど

コズミック変質者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小心者のボスの少女と超有能な部下のお話。

目次

いつの間にかボスになってた。組織は滅んだけど	1
イタリアも日本も何も変わらないよ。だって部屋から出てないから	7
ラスボスが部屋に来た。味方一人もないんだけど	16
ラスボスが帰ってくれた。問題は山積みだけど	30
護衛が増えるらしい。信じていいかは分からないけど	41
なんとか現状を乗り切れた。もつと面倒なのが残っているけど	50
ちよつとした回想でもしてみよう。ロクなもんじゃないけど	62
運命が絡み合ってた。私は何も知らないけど	77
どうやら閑話休題したいらしい。処理に困っただけなんだけど	87
何かが起こっている。理解は出来てないけど	100
過去回想やるってよ。あまりにも突然だけど	112
原作のスタートを知らせよう。不安はいっぱいあるけど	129
私って主人公だよな。名前すら出てないけど	142
もう私は主人公じゃないのかもしれない。主人公らしいこととしてないんだけど	153
俺がタイトルを言うのは構わない。ところで語尾は必ず「けど」じゃないか？	162
ようやく私の出番が来たよ！なんか気付いたら増えてるけど	172
出番がないってことは毎日が夏休みじゃないか。今までも毎日夏休みだけど	183
誰かが時間を消し飛ばした。キンクリは私が持つてるけど	195

狂人の相手なんてしたくない。呼んだのは私だけど
魂燃える雄英体育祭の時間だア!!私が出ないけど
お前達、メリークリスマスだ!ん、なんだスキューロ?え、まだ5月
?何を言ってるんだ、カレンダーをよく見・・・
あけましておめでとうってね。年明けから二ヶ月経ってるけど

244

確信していた最悪の出現を見た。勝つのは私だけど
今日一最高の盛り上がりが訪れる。私は帰るけど
拍手しそうな程素晴らしい試合だ。周りは引いてるけど
いつの間にか体育祭が終わってた。もう次にいるけど
もうタイトル思いつかないよ。それでも捻り出すけど
私はお前を応援している。どうせ勝てないけど
勝敗は着いた。結果は言うまでもないけど
さよならなんて言わないさ。使い潰すだけだから
どう転ぼうが構わない。目的は一つなのだから

365

351

339

328

313

302

286

272

258

232

220

207

いつの間にかボスになってた。組織は滅んだけど

豪快な破壊音と人の叫び声、雄叫び。重火器が打ち鳴らされる音、爆弾による爆発音。各地、40箇所以上が一斉に摘発され、小規模な戦争を思わせるほど硝煙が上がっている。

また一つ、爆発。炎の規模からして施設全てを巻き込んだものだろう。敵を仕留められたかは不明だが、それなりに痛手は負わせられたはず。もし負わせていなかったら、無能もい所だ。

「間引きは順調に進んでいる。アンタの計算通り、資料も薬も全て焼却されている。事前に金も『ディスク』の回収も済ませている」

火の手が上がる街を一望できる場所から、黒いバンの扉に背中を預けている青年が、自分の背後、バンの中にいる人物に話しかける。ガラス窓が黒いマジックミラーなため、誰がいるのかは分からないが、そこには確実に誰かがいた。

「親衛隊も必要なメンバーも、既に予定の場所に散らせている。与えたマニュアルの通りに動くだろう。要望通り、アンタの痕跡を一切残さず。それで、俺達は今からどうする？しばらくイタリアには帰って来れないだろう、落ち着くまでどこで腰を落ち着かせるつもりだ？」

「日本に行く」

少しだけ開いているガラス窓から聞こえてきたのは女性の声。落ち着きがあり、存在感を感じさせる重い声だ。

「正気か？確かに日本は身を潜ませるのに適しているだろう。だがあの国は表はオールマイトとやらが、裏にはヤクザとかいう俺達と同じようなギャングが根付いているらしいじゃあないか。ロシアやアメリカの方がいいんじゃないのか？」

「だから、だ。私独自で集めた情報で、少しだけ気になることが二つばかりあってね。嫌だというのなら私一人でも行くが・・・どうするスキューロ？」

「・・・分かった、俺の負けだ。ただし、穏便に事を済ませてもらうぞ？流石の俺達でも、国一つを相手にして生き残れるとは思っていない

い。もしそうなれば、アンタを逃がすことさえも難しくなる」

「決まったならはやく行こう。時間は有限だし、空港が封鎖される前に高飛びしようじゃないか」

スキューロが鼻を鳴らして車に乗り、エンジンをかける。築き上げてきた組織が減んでいくのは少しだけ心が痛むが、スキューロの全ては車に乗っている人物に捧げられている。どちらが重要かと聞かれれば言うまでもない。

「楽しそうだな」

「そう見えるかい？」

「ああ。口元を確認してみろ」

ミラーから見えた口元は、愉快そうに笑っていた。

はじめまして皆さん。私の名前はフェリシータ。ヒロアカ世界に神様転生してきた小心者の一般人です。そこ、もう神様転生はお腹いっぱいだって帰らない。お願いします帰らないでください。

まあ私が転生した過程なんてどうでもいいから飛ばすとして、言うべきことはやっぱり特典だ。こういうのは勿体ぶらない方がいいよね。

私が貰ったのはズバリ、『スタンド幽波紋』だ。貰ったスタンド幽波紋は二つ。一つは便利オブ便利の『ホワイトスネイク』。遠距離操作可能な近距離パワー型のディスクのアレである。

これだけでもチートなのだが、もう一体いる。こちらはスタンド幽波紋の中の最強ランキングで必ず話が上がりながら、毎度毎度トップ3には入れない『キング・クリムゾン』。あの時飛ばしである。

『ホワイトスネイク』と『キング・クリムゾン』とかどんなチート?とか思ったがこの世界、前述通り『僕のヒーローアカデミア』の世界な

のである。個性の使い方とか色々あるんだなーとか思わせながら、結局は脳筋に終わる、バカパワーを用いて力こそパワーと言いたげな作品である。

いやいや、私原作ほとんど知らんし。知っているのはなんかデツカイ敵組織のチートボスがオールマイトにぶつ倒されるとこまでだし。アレを見て思ったね。チートを倒すのはパワーだって（白目）。

だが幸運なことに、私は危険地帯である日本を離れ、イタリアに生まれたのだ。バイタリアー！ピザやパスタの名地じゃないか！と喜んだのも束の間。私の父親ギャングのボスじゃないか（白目）。

この悪即斬の世界でギャングのボスの娘とかどんなイジメ？これも『吐き気を催す邪悪』の幽波紋スタンドを二体も持った罰？それにしても酷すぎるぞ。

何としてでも潔白な身にならなければ！私の父親の経歴真つ黒すぎるし、もしかしたら私もそうなるかもしれない！ていうか私が人質として狙われるかもしれない。

安全な生活を！平穏な人生を！そのためだったら後暗いことだつて幾らでもやってやる！吉良吉影のように平穏な人生を送るのだ！ディアボロのように自らをひたすら隠匿しながら過ごすのだ！

まずは部下を、いいや部下でも友でも何でもいい。信頼出来る味方を作らねば。D I O様にだって信頼出来る友がいたじゃないか！ならば私にもできるはずだ！

そう思つて張り切っていたのが懐かしい。

私の願い通り、信頼出来るものができた。異性の男の子でこの時代には珍しい無個性だったが、『ホワイトスネイク』のスタンドディスクを与えてやったら忠誠を誓った。これ信頼出来るかな？つて仄めかしたら一月後にはあらビックリ。

私の父親と組織の幹部達を幽波紋スタンドで暗殺しちゃったあ。

いや、言葉すら出ねえよ。信頼を得るってそういうことじゃねえよ。私の不安を取り除いて欲しかったんだよ。正確に言えばボデーガードになって欲しかったんだよ。

それがどうすれば皆殺し？徹底しすぎて幹部候補や父親のお気に入りまで殺つちまっていたぞ？逆にすげえよ。

幹部やボスを失った組織は空中分解も目前で、次のボスは誰だと思巻いていた所、なぜか私がボスとして召し上げられた。曰く、敵対者や不満を言う者はボスの親衛隊や右腕の暗殺者が一族郎党皆殺しにするとか、物騒な噂まで回っている。おかしい。私はこの忌まわしいギヤングの娘という経歴を消したかったのに、なにゆえ私は恐怖のギヤングスターになっているんだ？

組織の名前まで変えちやつたよ。ダメでしょ、『パツシヨーネ』は。^{スタンド}幽波紋使いは惹かれ合うんだぞ？^{スタンド}ジョルノやブチャラティ、天然の^{スタンド}幽波紋使いが私の事殺しに来るかも知れないんだぞ？

もうダメだ。このままでは私が暗殺される未来しか見えない。嫌だぞ、私はちっぽけな一般人なんだぞ？

その事を私の人生がぐちゃぐちゃになった原因であるスキューロ（信頼出来る部下）に相談したら、私はディアボロみたいに顔のないボスとして過ごすことになった。おい、これ本気で不味いやつじやないか。

もうディアボロ化一直線である。私はドツピオのような人格は生まれなかったが、『シクリーザ』というもう一人の私を生み出すことが出来た。簡単に言えば体格変化のみを習得したのだ。これ、私の個性ね。自在にと言う訳では無いがある程度は姿形を変えられるのは何かと便利だ。少し弄るだけで人は大分変わるのだから。

サン・ジョルジョ・マジョーレ教会に監禁同然の生活を送り、日々暗殺者や襲撃者、ヒーロー達に怯える日々を過ごしている。おつかしーなー、とかもう思えないわ。スキューロが必要な物を全て持ってきてくれるせいでこの生活が楽すぎて仕方ない。

これ実はスキューロヤンデレじゃね？とか思ってしまうレベルで

何でも揃えられてしまう。なんでも心配されてしまう。シャンプーのこれじゃない感、って言った次の日には大量の種類のシャンプーがシャワールームに用意されていた。どれも世界有数のブランド物じゃないですか。

PCの新型が欲しいって言ったならセッティングまでしてくれてたり、イタリアには売ってない物が欲しいって言ったら態々国外にまで行って買ってきたり。

いや、もうダメだ。スキューロってダメ人間製造機だわ。ここまで尽くされるともう何もする気になれない。

まあ、そんな怯えながらも不自由のない生活を送っていたのだが、ウチの組織の麻薬がイタリア中で問題になったらしく、近々政府主導の一斉摘発が行われるらしい。世界中からヒーローを集めてとか巫山戯んなよ。基本的にチンピラの集まりであるパツシヨネの雑魚共じゃ芋づる式に逮捕だわ。ていうか最悪私も不味いんじゃないか？

どこからどのように、どんな証拠を残してきたのかも分からない。全てスキューロとスキューロの部下の親衛隊に押し付けてきた弊害が出てきた。ディアボロはそういった身辺整理は全部自分でやってきたからきつとあらゆる所まで手を伸ばせたんだが、私は違う。気付いた時には落とし穴が目の前に広がっているのだ。あれだけ警戒していたのに、これも全部スキューロって奴の仕業なんだ……。

そして私は思いついた。私が警察に密告すればいいじゃないか。下っ端として入ったけど、自分には麻薬などの組織のやり方は合わなかったとかなんとか言えば、もし捕まったとしても恩赦を受けられるはず。これで行こう！私は早速スキューロに伝え、文章を作って匿名で警察に提出した。

アレ？なんか間違えた気がする。

これで私が捕まらなかつたら日本にでも行こ。やりたい事とか、会ってみたい人とか全部日本にいるし。アレ？私ってイタリアでの思い出ほとんどない？

二週間後、一斉摘発が行われた。

だがそれにしても酷いだろ。おいヒーロー共。お前ら加減知らねえだろ。周りの被害とか考えてるか、あ？

確かに組織の施設とかの場所を密告するようにスキューロに言ったが、摘発の勢い強すぎだろ？バンバン火の手が上がってくぞ？今度は何やったスキューロ。怒らないから正直に言いなさい。

え、間引き？金持ってトンズラ？私達と親衛隊、あと役に立つメンバーで高飛びして下っ端共は切り捨てて数年後動きやすくする？

何言ってるんだおまえ？

イタリアも日本も何も変わらないよ。だって部屋から出てないから

イタリアからトンズラしてきてもう一週間。スキューロが個人で持っていたプライベートジェットで空の旅をしていたのが約二日。日本に着いてからの五日間。私は充実した日々を送っていた。

朝起きて顔を洗ってシャワー浴びてスキューロの作った朝食を食べてゲームしてスキューロが作り置きして行った昼食を食べて昼寝して起きてゲームしてギター弾いてスキューロの作った晩御飯を食べてゲームして程々の時間に寝る。

アレ、これイタリアにいた頃と何にも変わらないんじゃないか？と思ってしまうような自堕落な生活。

その間一步も外に出ていない。今住んでいる70階のマンションだって、私が寝てしまった時に背負って連れてこられたらしい。てか70階ってなんだよ。普通に10数階でいいんだよ？態々高い場所にする意味がある？マジョーレ教会の時と同じこと思った。

スキューロの話じゃ60階から70階と屋上まで私たちのフロアになったらしい（白目。らしいって・・・絶対前に住んでた人いるでしょ？医者とか弁護士とか政治家とか。強制退去させてない？脅してないよね？日本に来てまで訴えられたりとか嫌すぎるよ。

もし私かスキューロのどっちかを恨んでいる人がいて、ここに住んでいることがバレたらきつとビルごと吹っ飛ばされるんだ。ケリ○みたいなのが相手だったら逃げ場なくなるって。キンクリだって万能じゃないんだぞ。

それよりも窓から下を見るのが少しだけ怖い。いや、70階だよ？下見たらなんも見えないじゃん。もし落ちたらって思うとチビリそうになるって。

ていうか普段スキューロは何してるんだろ？9時くらいからいつもいなくなるし。

私は14の時に高卒認定取ったから16の今でも高校とか行って

ない、というか小学校に2年間しか行ったことない。だから学校なんて今更行く必要も無いし、行ってボロ出すのとか嫌だし授業面倒だし。

本格的に自分がダメ人間だって思い知らされるよ。

外うるさいなくここ70階だよ？内からの防音は出来ても外は出来ないとか。後でスキューロに文句言つと・・・やめとこ。業者の人が宙吊りにされてまで壁の防音化をさせられそう。普通に可哀想だつて思つてしまう。

『ホワイトスネイク』、視界共有するからちよつと見てこい。距離も別に1km位しか離れてないし、別に戦闘するわけじゃないから、スタンドパワー全部遠距離操作に振れるのは楽でいいわ。幽波紋見れるのは幽波紋使いだから見られないし。

んん？でつかいドームがなんか凄い煙とか暴風とか出してるんだけど。それに凄い人が集まつてるなく。放送局員かな？デツカイカメラ持った人まで来てる。もしかしてこれ、雄英体育祭？もしかしてヒロアカの原作つてもう始まつてるの？

あ、あの目付き悪いボサボサの人って相澤消太じゃん。包帯は、ない？つてことは原作前？ふむふむ、一年生がいないと。え、原作一年前じゃん。来年原作？最初からお先真つ暗なのに今度は暗闇の荒野になつた。

うわー嫌だー。脳ミソ丸出しの化け物がうじゃうじゃ出てくるんでしょ？超再生とオールマイイトクラスのパワー、これに加えてシヨック吸収とかいう物理殺しがうじゃうじゃ闊歩するんでしょ？勘弁して欲しいよ。物理無効とかキンクリとホワスネじや抵抗出来ないつて、

スタンドディスクがあるつて？いや、あるんだけどさ・・・。スタンドディスクつて私自身に使えないつていうか、私自身になぜか適合するのがほとんどなかったんだよね。

人によって適正や入れられる数の限界？があるみたいでさ。一枚も入れられない奴とかいたし。スキューロは限界が7で基本どんなディスクにも対応する特殊体質だし、私が唯一つてくらい知つている

親衛隊は2枚が限界だった。そこから辺は精神力が関わってるのかな？それよりも7枚とかスキューロ凄いな。

それに強すぎる幽波紋^{スタンド}。例えば星の白金とか世界^{スターブラチナ}なんかはなかった。一番あつてほしいかもしれない幽波紋^{スタンド}なのにな。3部のディスクは合計5枚、4部は3枚、5部は全スタンド分、6部は2枚、7部以降は二周目の世界だから一枚もない。おい、流石に少なすぎるだろ。なんでこんなに偏ってるの？これも全部パツシヨーネのせいかな？そうなんだな。

全部のディスクを手元から離すのは気が引けるので、親衛隊や部下に使っているのは5部のディスクだけだ。他の部のディスクは何かと使い勝手がいいというか、性能が性能なだけにそれを使って反旗でも翻されたら流石にキンクリでも面倒。

間近で見るヒーローの卵達の戦闘って卵でも凄いな。地面からいきなり出てきたりなんか波動？みたいなので攻撃したり。あのすり抜ける子って『ビーチ・ボーイ』で釣ろうとしたらどうなるんだろ？

あ、誰か来たみたい。スキューロじゃない。誰が来たんだろ。

・・・なんで誰か来るの？

デパートの中、階と階の間にある階段の踊り場というのは死角である。基本的にデパートというのは階段のある場所に監視カメラというものをつけない。エレベーターやエスカレーターという便利な機能があるのに、階段を使うものがないからだ。

今では店員さえもが、店員用のエレベーターを用意されているた

め、何かがあつて避難する場合にしか使われない。

誰にも使われず、誰にも見られないからこそそこは死角となり、構造上、何をしても大してバレることは無い。例えば勝手に扉を一つ作つても、デパート側が設計を用意したわけではないので、きつと用務員の誰かが使用しているのだらうと思ふし、用務員は店員の誰かが使っているのだらうと思ふ。

知らない物に自分の都合のいいモノを重ね合わせた結果、そこは空白の部屋となつた。

後ろに誰も着いてこないことを確認する。別に振り向く必要は無い。幽波紋スタンドを出して後ろを向き、誰かがいればアクションを起こさなければいい。自律型と言う訳では無いが、それくらいの単純な動作ならば可能だ。

扉を開けばその部屋にはバーテン服を着た男一人しかいない。バーのような内装をしており、棚には酒瓶が並べられている。入ってきたのに気付いた男は愛想のいい笑顔を向けて、カウンターに座るように促す。

「予約していた者だ」

「鍵はどちらに？」

「受け取れ」

出した一本の鍵を男はまじまじとじつくりと見て、確認が取れたのかごゆっくりと言って鍵を棚にしまう。この男は情報屋でもなければ武器商人でもない。ただ場所を提供するだけの男。幾多の秘密の部屋を持ち、その中であった会話を確実に隠匿する。信頼を獲得ことが仕事なのだ。

鍵を渡すことで男の仕事は本格的に始まった。男はこれより何も聞いてないし何も見ていない。部屋でも何も起こっていない。ただここにいただけである。

「ワインを一杯貰おうか」

「かしこまりました」

注文し、ワインを選び始めた男を他所に持ち込んだケースからパソコンを取り出して開く。手馴れた手つきでパスワードを入力し、

チャット形式のテレビ電話機能を起動する。

起動すれば既にウインドウが二つ出て、それぞれに顔が表示される。男と女だ。女顔の褐色肌の男と、男気が見える女。

彼ら二人は親衛隊だ。ボス、右腕、親衛隊と、パツシヨーネの中で三番目に高い地位を得た者達である。

拝金主義の組織の中で、全く別の、純粋にボスに選ばれた者達だけが親衛隊になれる。パツシヨーネの中でも特別な存在達。

「バローロ・リゼルヴァ・モンフォルティーノです」

「ああ、ありがとう」

出されたワインを一口含み、喉を潤して彼らは会話を始める。

「今回は二人か。久しぶりだな、ティッツアーノ、シーラ・E。そちらの方はどうなっている？おや、珍しいな。スクアーロはどうした」

『ええ、お久しぶりですスキューロ。こちらは順調です。つい先程も、スクアーロが順調に処理してくれました。何も問題はありません。全てボスの要望通りに事は進んでいますよ』

『私の方も何も問題はないよ、スキューロ様。むしろもう少しハードでも良いくらいです。味気なさすぎて少しばかり退屈を覚えてしまおう』

「順調そうだな。ボスも喜んでくれるだろう」

『しかし良かったのですか、スキューロ。ボスに不満を言う訳ではありませんが、拡大した組織を一度瓦解させるのは、流石に勿体ないと云わざるを得ません』

「だが結果としてボスには何一つとしてデメリットは生まれていない。デカくなり過ぎたパツシヨーネという組織は一度間引き、必要な人材と全ての資金を持ってその姿を消す。そうすればボスの正体に辿り着くための足掛かりは、見ることにすら叶わなくなる」

パツシヨーネという組織の禁忌。ボスの正体を探ること。ほんの少しでも組織に探っていることがバレれば、入念な拷問の末、恐怖と苦痛の中で絶望的な死を与えられる。代表的な殺し方と言えば、ホルマリン漬けにして輪切りにされるなど。

それほどの恐怖を与えてまでも、組織はボスの正体を隠し通す。そ

れで不満が生まれ、恐怖で逃げ出そうとするのならソレすらも始末する。

血も涙もパツシヨーネには一滴たりとも存在しない。存在しない。いい。

「シーラ・E、お前はオーストラリアから撤退し、日本に来い。ボスの護衛役としてな。残った仕事は信頼出来る部下に預けるんだ」

『構わないが、いいのか？既にスキューロ様が護衛として就いているのに、私まで必要になるのか？いや、決して多すぎるって言いたいんじゃない。私が護衛に就くことで、少しでも怪しまれたりしないか』
「怪しまれるだけなら動き方次第でどうにでも隠蔽できる。重要なのは直接的に危険な者達だ。純粹に、戦力として警戒しなければならぬ者達だ」

『スキューロ様でも手に余るほどの奴らが、ジャッポネ日本なんかに居るのか？』

「ああ。少なくとも俺が日本に来てから裏を辿って、確認しただけでも二人。一人は日本のギャング、ヤクザと呼ばれる奴らのボス。オーバーホールと呼ばれている男だ。まだ掴んだばかりの情報だから顔はない。そしてもう一人、厄介なのはこちらの方だ」

『そこまで警戒するほどの相手なのですか？』

「そうだ。コイツに関しては情報が多すぎる」

『多すぎる？その情報には信憑性があるのですか？』

「恐らくは、あるのだろう。類似した情報が幾つかある。一や五なんかじゃあない。同様の何十件もだ。曰く、そいつは個性黎明期から存在する、他者から個性を奪いストックし、他者に個性を与える怪物らしい」

『…まさか、本当にそのような怪物が？幾ら何でもありの個性でも、いえ何でもありだからこそ、そういった絶望的なまでの個性が生まれるのですね。私達にはわからない感覚だ』

『だけどそれだけなら私達が恐れる程じゃないでしょう？個性を奪えようが与えられようが、私達の幽波紋スタンドはボスのデイスクから与えられた物。そして幽波紋スタンドは幽波紋スタンド使いしか見ること出来ない。まだ何

かあるのね、スキューロ様』

「ああ。どうやらソイツは、日本各地から敵を集め、敵連合という組織を結成しようとしているらしい。この情報に関しては確かだ。先日、適当な敵を尋問したら吐いてくれたよ」

『我が強い敵達が連合という徒党を組んでいる。成程、確かにこれは警戒しなければならぬ。もしよろしければ私とスクアードも護衛として日本に行きますが?』

「いや、そちらはもう少し身を潜めている。今の敵連合の統括状況からして、奴らが動くのは一年後か二年後。お前達が来るとしたらそのどちらかだ。それまでは、俺とシーラ・Eでどうにかする」

『分かりました。では、そのように』

「ああ。シーラ・Eも頼むぞ」

『分かりましたスキューロ様。明日には日本に向かわせてもらいます』

シーラ・Eの最後の言葉と共に、全てのウィンドウがブラックアウトする。残ったワインを飲み干し、スキューロはケースにパソコンを戻す。本来ならばこんなやり取り、携帯で済ませるのが一番いいのだが、声だけならいくらでも誤魔化せるため、互いの映像を見せ合いその仕草などから、相手が本物なのかを確かめ合わなければならぬ。多少面倒だが、互いの信頼の為だ。

やることは全て終わった。男に背を向けて入ってきた扉の方に向かう。スキューロの背中を見ながら、やはり男は愛想のいい笑顔を浮かべて、軽く頭を下げる。

店から出た直後、スキューロの胸の携帯が音もなく震えた。

直ぐに取り出し、画面を起動してみれば画面には一つの文章、部屋の隔壁が作動したという文章が書いてあった。

その文章を見たスキューロの目の色が変わる。潜め続けていたオーラは邪悪な物へと変わり、漏れ出ていく。溢れ出んばかりの特大的殺意に、スキューロは弾かれたように走り出す。

階段を飛び越え、ドアを蹴破り、車を全速力で走らせる。この調子なら目的地に10分とかからない。だが道路は混んでいた。普段な

らばガラ空きのことでも珍しくない時間帯なのに、よりによって今日、よりによって今に限って混んでしまっていた。

理由は後ろにあるドーム。雄英体育祭のせいだ。

「チイっ！『ベイビィ・フェイス』ならばどうにか出来たが、『息子』を作る時間が足りない！いいや、焦るな。こんな時にこそ冷静を保つのだ。今必要なのは誰か、恐らくは襲撃者に類する者から即刻ボスを護ること。そしてそのためにはマンションに最速で行かなければならない」

だが無慈悲にも道路は混雑している。どれだけの長蛇の列か分からない以上、手の打ちようがない、はずだった。

「鏡だ！そうだ、俺には鏡があるじゃあないか。車は無理だ、今この場に、車が入れるサイズの鏡はない。だが！車なんかよりもボスの身が重要なのは当然のこと。ならば、迷うことなどない！

来い、『マン・イン・ザ・ミラー』!!俺が鏡の世界に入ること、許可しろ！」

車の中に人型の何かが現れる。その人型はレザージャケットとサングラスのようなものを纏っている。見方によってはカメラにも見える。だが重要なのは見た目ではなく、その能力。

『マン・イン・ザ・ミラー』その能力は、鏡の世界を作りだし、その世界に自由に入ることが出来るのだ。

視界がねじ曲がりながらも、スキューロは鏡の世界に降り立った。鏡の世界に生物はいないが、車などの物は現実世界で動けば鏡の世界でも動く。今ここで、スキューロが鏡の世界の車から出たのなら、現実世界の車もドアが突然開いて、後ろの車を驚かせているだろう。

「すぐに向かう、ボス。次だ、『ホワイト・アルバム』」

スキューロの身体から冷気が漏れでる。視界に映るほどの超低温の冷気はスキューロの身体を覆い、氷がボディースーツの様に身を守る外装となる。

ボディースーツが全身に形成された瞬間、スキューロの正面の道路が氷でコーティングされ、その上をボディースーツの足についているスケート靴でスキューロは滑り出す。車に近いスピードを出せるが、こ

の行為は少々賭けになるともいえる。

『マン・イン・ザ・ミラー』で作り出す鏡の世界はエネルギーの消耗が激しい。その上から更なる幽波紋スタンドを使用しているのだ。並の精神力ではすぐに力尽きてしまう。

だが、スキューロには命を賭してでも守りたいものがある。その為ならば、今ここで身体が千切れてしまおうが、守りたいものの為ならばスキューロはお構い無しに進むことが出来る。

強靱なボスへの忠誠は、そのまま精神力へと変換された。

7枚ものスタンドディスクを身体に収めることが出来るその精神力は、ボスが思った以上に強いものだった。

ラスボスが部屋に来た。味方一人もいないんだけど

今日はいつもと以上に体調が良かった。忌まわしきオール正義マイトに碎かれ摩耗したこの肉体。呼吸器官は破壊されて喉にいくつものチューブを挿した。頭は碎かれて脳が少しだけ丸見えになってしまいい、今では試験管の中に、脳が浮いているように見えてしまう。

痛く、苦しい。嗚呼、オールマイトを殺してやりたい。ここまですめちやくちやにしてくれた返礼を今すぐにでもしてやりたい。大切な弟子を目の前でぐちゃぐちゃにして、守り続けた全てを目の前で破壊してやりたい。我慢しているのがもどかしい。

だが、これでいい。この感情をエネルギーに変えるんだ。来るべき日に、オールマイトをこの社会から抹殺する。その為の力に変えるんだ。大丈夫。たとえそれで死のうと後継者がいる。まだ未熟だが、いつか世界を覆い尽くせる悪になれる程の子が。

だから、準備しなければ。僕が消えたあと、彼が全てを支配できるように。彼が己の望むままに悪をなせる様に。

「僕のことを追っている奴がいるね」

最近、自分の配下が数人、死体になって発見された。彼らは僕自らが個性を与えた者達であり、近い未来に彼の駒としてその存在意義を發揮させるための者達だった。

そんな彼らが、ここ数日に何人も殺されている。

ヒーローは殺しはしない。ならば野良の敵か？サイランいいや違う。彼らは曲がりなりにも僕自らが厳選し、僕自らが選り抜いた個性を与えた者達だ。チンピラ程度に殺られるはずがない。

ならばあのヤクザ達か？それも違うね。彼らは比較的^{比較}に大人しい。もし動くとしても動くのはオーバーホール。彼の個性は良く知っている。死体からしてまず彼ではない。

そういえば最近、イタリアのギャング組織が丸々潰されたって聞いたかな。結構、というかかなり大きい組織だった。

あれに関してはとても興味深いね。世界から呼んだヒーロー達を使つて一斉摘発。アジトや麻薬設備などは全て破壊でき、組織のボスも捕らえることが出来たらしい。でも、僕の所に来た情報では、ヒーロー達は組織のボスに関する手掛かりが微塵も手に入れられなかったらしい。

非常に興味深い。どんな形であれ、そこに存在した痕跡という物は残るものだ。例えば構成員。少しでも特徴があれば話すかもしれないが、誰一人一貫して知らないと言うらしい。僕だつて全力で隠しているが、痕跡はほんの少しだけ残つてしまう。影も形も残さない。ボスは臆病者なのだろう。痕跡をほんの一つでも残してしまえば、残したものの次第では芋づる式に釣り上げることができる。

組織が潰れた時期と駒が殺された時期。照らし合わせれば丁度いい。偶然かな？偶然だろう。よくできた偶然だ。

久しぶりに散歩がてら、ちよつと調べてみよう。

僕は今、忌まわしい雄英高校が体育祭を行っているドームの近くに立っているマンションの70階にいる。本当ならこんな所には来なかつたし、ここに来るまでに少しだけ目立つ動きをしちやつたけど、それでもちよつと、というかかなり気になったことがあつて来てしまった。

少し前にこのビルの丁度70階から、浮遊する人影が出ていった。見たことない個性だ。奪つてみるかと思ひ、このマンションに訪れてみたんだけど……。最近のマンションの不審者対策というのは侮れないね。60階からはトラップの連続。ガトリング砲や赤外線レーザー。自動追尾式の自爆ドローン。アトラクションにしては過激す

ぎる。

もしかしてここにイタリアの組織のボスでもいるのかな？と柄にもなく頭の悪いことを考えてしまった。組織のボスともあろう者が、こんな目立つ高い場所に住居を構えるはずがないだろう、と考えたがその考えは払拭した。

そういつた安直な考えが一番良くない。もしかしたら高い場所にした理由はこういった簡単な心理を突いてきているのかもしれない。セオリーが通じないのは侮れない証拠にもなる。

全てのトラップは僕の個性の前に全て破壊された。中々量は多かったし、死角をついてのトラップも満点を与えなくなるほど良かった。だが、そういった小細工は圧倒的な力の前には打ち碎かれるものだ。

70階へ通じる道と階段、エレベーター以外に通じる唯一の扉。ここに、先程の個性を使った人物がいるか、いたか。危機を察して逃げたかもしれない。勝てると思って待っているかもしれない。どちらにせよ、個性の強奪、ストックが出来る個性を持つ僕の前では無力だ。コンコン、と扉をノックして自分の部屋に入るように扉を開く。

「失礼させてもらおうよ」

部屋の真ん中には分断するように壁——幾多にも重ねられた防弾ガラスが敷かれている。あちらは影だけが見える。カーテンが貼られていているが、ソファの影があり、声の場所からしてソファに人が座っているということが見てわかる。

怪しく揺らめく髪？だろうか・・・まるで生きているのではないかという殺気を漂わせる。

「ほう、客人とは珍しい」

「っ・・・!?!」

なんだ、今の感覚？悪のカリスマと自称するほどのこの僕が、男か女かも分からない声を聞いただけで、恐怖した？

馬鹿な、有り得ないと思えば手を握ると、手汗で湿っている。自分でも信じたくなかったが、逃避のしようがなかった。

「御客人、緊張しなくてもいい。仲良くしようじゃあないか。手始め

に友好の最初の一步として、君の名前を覚えてくれないかな？」

「友好的で助かるよ。僕も望んで敵対したくはないからね。僕はオールフォーワン^A。悪の象徴、この日本に住み着く怪物さ^F」

「自分で怪物と名乗るのか。面白いな、君は。私の名はパドレ。私と、友達になろうじやあないか」

なぜだか彼の言葉には、無意識に跪いてしまいそうな程の圧と、聞き惚れてしまいそうになる妖艶さがあつた。声の魔力、とでも言うべきものなのかな？言葉の端々にカリスマ性も感じられる。

彼は本当に、組織のボスなのかもしれない。少なくともこの感じ、そこらの野良犬が出せるものではない。

「そうだね、友達になることには異論はないんだけど、今からなろうという相手に顔を見せないのはちよつと礼儀がなつてないんじゃないかな？」

「それについてはすまないね。私はちよいとだけシャイでね。顔を見られるのが恥ずかしいんだ。例え、心を許せる相手であつてもね。だからなるべく詮索はしないで欲しいな。私は友と喧嘩はしたくないのでね」

つまり殺し合いなら大歓迎ということ？勝手な受け取り方だが彼が言うところ聞き取れてしまう。

「そういえば、君はどうしてここに来たのかな？まさか偶然なんてことではないだろう。運命、とは些か言い過ぎだが、来るべくして来たのか、教えてくれないかな」

「いいや、本当に偶然さ。いつも寝たきり座りきりだったから、たまには気分転換にと散歩をしていたんだ。そしたら驚いたよ。このマンションのこの部屋から、個性らしき人影が飛んで行ったんだから。僕は個性についてはかなり詳しくてね。そうだ、友好の証とし——
「貴様、今なんといつた」ツ!？」

反射的に後ろに退いてしまう。なんだ？先程まで感じていた圧とはあまりにもかけ離れている。それは悪などではなく、支配者の言葉のように。逆らうことを本能がやめてしまうほど恐ろしい何か。

間違いない。コイツは危険だ。生かしておけばきつと良からぬこ

とが起こる。もしかしたら気分一つで大虐殺をする類の人間かもしれない。

いや、ここはまだ様子を見よう。僕が踏んだ地雷をしっかりと確かめ、話し合い穏便にすませるんだ。オールマイトと戦う前に消耗しすぎる訳にはいかない。少しでも僕に有利な風に事を運べば大丈夫だ。「さて、なんと行ったかな。わざわざ一言一言確認するのは時間がかかるから、君が教えてくれないかな？」

「貴様、確かに先程見えたと言ったな。このマンションの、この部屋から、空を飛ぶ人型の何かが見えた、確かに貴様は私に言ったな？」
「ああ言ったとも。アレは君の部下？それとも君の個性かな？是非僕に教えてくれないかな。さっきも言ったが、僕は個性に詳しいんだ。だけどあんな個性は僕の知識にはない」

好奇心は猫をも殺すと言うが、殺されるのは弱者だけだ。そして僕は強者という自覚がある。ここまで砕いてきた全てに誓ってもいい。

この圧倒的な威圧感。僕でさえも怯んでしまうほどのこの気。彼は僕と同じ強者。僕よりも圧倒的に弱者を打ち砕いてきた者だ。うん、少し気に入らないな。もしかしたら同族嫌悪と言うやつだろうか？この年になっても新しい発見があるとは、生きてるといっはやっぱり楽しいね。

「気になるかね、私の能力が」

「すぐく気になるね」

「だから奪いに来たと？」

「やつぱり僕のことを知っていたんだね。イタリアのギャング、パツシヨーネのボス」

「私のことを知っていたのかね？」

「いや、カマをかけたただけだよ。まさか当たつ——ツ?!」

空気が揺れるのと同時に危機を感じて反射的に首を傾げる。次の瞬間、空気が圧倒的な速度と驚異的なパワーで押されている。空気を操作する個性での空気砲!? 後ろには誰もいない。空間に作用するタイプか!?

だか視界に見えたソレは空気と言うにはあまりにも形が整ってお

り、あまりにも色がついていた。

ソレは身体に塩基配列を刻み、各所に紫のパーツを付けている人型だった。身長は2 m前後。音もなく気配も感じさせずに、ソレはそこに存在していた。

ソレの姿はマンションから出ていった人影と酷似していた。

異形型？いや、コイツからはまるで人がいるという感じがまるで感じられない。操り人形なんかでもない。なんだ、この奇妙な存在は？

「やはり、ソレが君には見えているようだな」

「この個性は、君の物なのか？」

「ふふ、ふはははははははははは」

何故か突然、笑い始めた。ガラス壁のせいで音が反響する。反響した音の中、僕の後ろにいるソレに、音は当たらなかつた。

どういうことだ？音はあらゆる物体から反響するか、通っていく。なのにソレはまるでそこにいないように、幽霊のように音がすり抜けていく。

僕は既に敵対行動を見せようとしている。それが分からない彼ではないだろうに、彼は動く必要すら無いと言わんばかりに座り続ける。

「ふふふ、AFO君。さつき君は個性に詳しいと言っていたな？個性を研究していると。なのに君はそこ止まりか。見えているのにそこに行き着いてしまうのか」

「？それはどういうつ?!イキナリか・・・!」

「あらゆる超常現象を全て『個性』という括りに入れようとする。視点を広げられないことは、愚かだということだ」

「何を言って・・・まさかこの奇妙な感覚・・・この力は個性ではなくなにか別の——?!ぐうつ・・・このパワーは」

「私の絶頂を脅かす存在は、誰であろうと許さない」

襲いかかってきたソレの拳を、肥大化した右腕で受け止める。細腕から出たとは思えないほどのパワーに、思わず唸り声を上げてしまう。全力とはまだほど遠いが、これ以上の出力は今の肉体では些かきつい。

この狭い部屋だと僕のストックしてきた個性では戦いにくい、やりようはある。

繰り返される殴撃の最中、集中力を少しだけ割いて空気操作の個性で幾多の弾丸を生み出す。目が良ければ風のうねりで事前に察知できるが、察知してから避けるまでの身体能力も必要になる。

絞られ放たれた風の弾丸はソレに向かって一直線に向かっていく。ソレのスピードは不明だが、正面180度からの面の射撃。これでダメージを与えられなくてもいい。ソレのことを少しでも解明するのだ。

『なんて、甘っちょろいことを考えているんだろう』

突然ソレが喋り出した。振り向けば確かに彼がいる。確かに気配もそこにある。だが声が出したのはソレからだ。ソレは構えを解いて風の弾丸にその身を晒す。

結果、風の弾丸はソレに当たったが当たらず、彼の体を突き抜けて後ろの壁を射抜いた。

「ハハハ・・・笑っちょやうくらい分からないな、これは」

パワーがあり、風の探知に引つかからない。尚且つ壁をすり抜けることも出来、拳句の果てには喋り出した。訳が分からないな。もう幽霊でいいんじゃないのかな？

「ここは退かせてもらうよ。どうやらソレは僕の想像の範疇には居ないらしい。近いうちにまた会おう、パツシヨーネのボスよ。その時は、僕自らが殺してあげるよ」

残念だけど撤退だ。深追いはよくない。それにパツシヨーネのボスがここにおいて、ボスの個性らしきものであるソレのことが分かっただけでもマシだ。お釣りが来るかもしれない。

分かれれば次戦う時は対策を練ることが出来る。一つや二つじゃない。徹底的にだ。別にソレと戦う必要は無いだろう？本体とも言える彼を殺してしまえば解決さ。

ワープ系個性を発動させる。一瞬で動けないし、一度行った場所にはしか移動できないのは残念だが、複数の対象を移動できるのは便利でいい。次は顔を見せてもらうことにしよう。まあすぐぐちやぐちや

になって、忘れちゃうかもしれないけど。

「帰るのは勝手だが、ここに来た駄賃の一つくらいは貰っていこう。その賤の悪い気持ち悪い右腕を頂こうか。殺れ、K i——」

「了解した、ボス」

聞きなれない男の声。この場にいない第三者の声が聞こえた瞬間、僕の右腕が空中に跳ね上がった。

アイエエエ!?!ラスボス!?!ナンデラスボス!?!

なんでこいつこんなところ来てんの!?!なんで廊下中トラップだらけ!?!しかも全部ぶっ壊されてるし!!てかなんか部屋が変形してモニターとかガラス壁がでてきたよ!?!ついでにカーテンも張られた!?!どうなってんのこの部屋・・・本当にスキューロ何したの・・・。

スキューロどこ!?!ほら!?!いつもの忠誠見せてよ!?!ねえ!?!

ま、まさか本当に誰もいない・・・? 本当に私一人だけなのか・・・? スキューロは・・・本当にスキューロはいないのか・・・?

まさかAFOを呼んだのはスキューロ? いいや違う! そんなはずがない! あのスキューロが私を裏切るはずがない・・・もん・・・。

ヤバい、普段からコキ使いすぎた復讐かも・・・。もしかして私が密告したりしたの怒ってる・・・? 私を上にかけて黒幕ロールするつもりだったの邪魔したから?

そんなこと考えてる時間ねーよ、もう。AFOが部屋の前まで来ちゃってるよ。きつと大丈夫だ。落ち着くんだ。落ち着いて、冷静に会話をして友好的になって、穏便に済ませて、大人しく帰ってもらうんだ。

最悪、スキューロが私のことを裏切っていなかったら多分この状況をもう知っているはず。ならすぐに駆けつけてくれるはず・・・多

分・・・きつと・・・そうであってください。

希望にかけるしかない。最悪私が戦えば・・・ダメだ、私がぶち殺される光景しか浮かばない。

一か八かにかけるしかない。前提として私の正体、特に性別がバレるのはいいことじゃあないか。髪型も変えなければ。すぐに何かカモフラージュを・・・って寝癖すぎ。あ、肩パッドとかも・・・身体が、動かない・・・!?しまった・・・私が座っているのは人をダメにするソファじゃあないか!?こ、これではもう私は動けない・・・!個性の肉体変化も時間が足りない!会っている最中に姿が変化しているのを見られたらエラいことになってしまう!クソ!このままで会えないか・・・。

ああ・・・不安。

「失礼させてもらうよ」

ノックして紳士らしく入ってきたが、私はそれどころじゃない。髪はボサボサでなんかすごいことになってるし、ソファのせいで動くことも出来ない。恐怖感もヤバい。漏らしそう。女の子のおもらしとか最悪だろ。私もうこの界限で生きていけなくなるぞ。

てか反対側の様子がモニターに表示されてるけど・・・気持ち悪いな実物は。脳ミソとかグロすぎだろ。ちよつと気分悪くなったぞ。

ここはドツシリと、迂闊には手を出せないような感じのなんか凄いや声で喋るんだ。大丈夫、私の個性ならば出来る。私は知っている、その声の人物を、あの威圧感で女性をときめかせ続ける星痣の家系の男を!!

「ほう、客人とは珍しい」

ちっげえよ!この声じゃねえよ!これDIO様の声だろ!問答無用でカリスマ見せつけるとか相手に不信感抱かせる声じゃねえか!

ほら、AFO絶句してんじやねえかよ!これでやばい認定されて早速バトルじゃあ!とかなったら一瞬でプチッとやられちまうんだぞコッチは!?

そうだ、緊張をほぐそう。相手も自分も。緊張のしすぎは良くない。身体にも悪いし寿命も縮んでしまう。

もういいよ、ここはもうD I O様っぽく振る舞えるかは分かんないけどそれっぽくやるしかない……。一応声だけは出せる。威圧感とかは分かんないけど私、ガンバル。

「御客人、緊張しなくてもいい。仲良くしようじゃあないか。手始めに友好の最初の一步として、君の名前を教えてくださいませんか？」

「友好的で助かるよ。僕も望んで敵対したくはないからね。僕はオールフォーワン^A。悪の象徴、この日本に住み着く怪物さ^F」

「自分で怪物と名乗るのか。面白いな、君は。私の名はパドレ。私と、友達になろうじゃあないか」

いやほんと怪物だろ。D I O様の声って、話してる私でさえやばいのになんでそんな飄々としてられんの？ やっぱお前邪悪だわ。怪物だわ。なんも面白くねえよ。ボツチで友達欲しいって思ってるけど、絶対にお前なんかと友達になんかなりたかねえよ。さっさと帰れ。そんでオールマイトと河原で少年漫画みたいな喧嘩してる。

「そうだね、友達になることには異論はないんだけど、今からなろうという相手に顔を見せないのはちよつと礼儀がなつてないんじゃないかな？」

「それについてはすまないね。私はちよいとだけシャイでね。顔を見られるのが恥ずかしいんだ。例え、心を許せる相手であってもね。だからなるべく詮索はしないで欲しいな。私は友と喧嘩はしたくないのでね」

顔だけは見せない。このご時世、瞳がバレるだけで個人情報全部持ってかれるからな。一応警戒としてそういう知識に関しては人並み以上にはあるからな。世の中物騒すぎる現実突き付けられすぎて偶に鬱になるけどな。

まあいい。私が鬱かどうかはどうでもいいことだ。まずは会話を引き延ばそう。少しでも生存の可能性を高めよう。言葉遊びとかは全然得意じゃないから、それっぽいこと言えば大丈夫かな？

「そういえば、君はどうしてここに来たのかな？ まさか偶然なんてことはないだろう。運命、とは些か言い過ぎだが、来るべくして来たのか、教えてくれないかな」

「いいや、本当に偶然さ。いつも寝たきり座りきりだったから、たまには気分転換にと散歩をしていたんだ。そしたら驚いたよ。このマンションのこの部屋から、個性らしき人影が飛んで行ったんだから。僕は個性についてはかなり詳しくてね。そうだ、友好の証とし——
「貴様、今なんと言った」ツ?!

ヤツベ、話遮つちやった!でも仕方ないよな。だってアイツ確かに言ったぜ!見えたって!ホワイトスネイクが見えたって!え?聞き間違いじゃないかって?ああ!そうかもしれないな!本当かどうか確かめるためには本人にもちゃんと確認取らなきゃな!

「さて、なんと言ったかな。わざわざ一言一言確認するのは時間がかかるから、君が教えてくれないかな?」

「貴様、確かに先程見えたと言ったな。このマンションの、この部屋から、空を飛ぶ人型の何かが見えたと、確かに貴様は私に言ったな?」「ああ言ったとも。彼はアレは君の部下?それとも君の個性かな?是非僕に教えてくれないかな。さつきも言ったが、僕は個性に詳しいんだ。だけどあんな個性は僕の知識にはない」

うわあああああああ・・・幽波紋^{スタンド}使いの最大のアドバンテージになる幽波紋^{スタンド}は幽波紋^{スタンド}使いにしか見ることが出来ないっていう最大のメリットがこのバケモノの前に打ち砕かれた。いやおかしいだろ。何お前幽波紋^{スタンド}使いなの?個性奪って与えるとかいう天然チートのくせして幽波紋^{スタンド}まで持つてんの?

お前邪悪だから絶対ヤバい幽波紋^{スタンド}だろ?時止めたり触れたら爆発したりするんだろ?

てかこいつがここに来たのってスキューロのせいじゃなくて完全に私のせいじゃん・・・私が雄英体育祭をホワイトスネイクに見に行かせたのが根本だったじゃん・・・疑ってゴメンねスキューロ。

しかし、本格的に不味くなってきた。この世界には幽波紋^{スタンド}を見れる人間がいる。それは目に関する個性を持つものだけか、もしくは天然の、私がディスクを与えずに生まれた幽波紋^{スタンド}使いが存在するのかもしれない。

AFOより厄介じゃないの?いや、一番厄介なのは見えてるしチー

ト持ちのAFOだけど・・・。

「気になるかね、私の能力が」

「すごく気になるね」

「だから奪いに来たど？」

「やっぱり僕のことを知っていたんだね。イタリアのギャング、パツシヨーネのボス」

「私のことを知っていたのかね？」

「いや、カマをかけたただだよ。まさか当たつ——ッ?!」

ホワイトスネイクがバレた時、私の素顔と同じぐらい最後まで隠したかった最後の真実。パツシヨーネのボスだという揺らぐことのない事実。その事実をあ、バレたって思った時には私は既に行動に出ていた。

ホワイトスネイクは自我を持つ幽波紋^{スタンド}。そしてその自我は私自身の心の内と同じようなものだが、基本的には独立し、自分で思考し、私の為に動く。要はこいつ、初期のスター^星プラチナ^{白金}と同じだ。ほら、檻の中にラジオやジャンプ持ち込んだりしてたでしょ？プツチはホワイトスネイクの自我を塗り潰してたけど、私は残しておいた。

そして今、その残された自我は目の前の脅威を消そうと行動に出た。AFOを殴り壊そうと拳を振るっている。だが奴に受け止められる。やはり、何故かはわからないがこちらから殴ろうとする意思があれば受け止められるか。もしかしたら少しだけ幽波紋^{スタンド}の法則が変わっているのかもしれない。

後で確かめるようにスキューロに言っておこ。

ん、あの鏡・・・今なにか・・・いや、アレは!?

「やはり、ソレが君には見えているようだな」

「この個性は、君の物なのか？」

「ふふ、ふはははははははははははは」

目の前の鏡だ！鏡に居るじゃあないか！ああ、笑っちまいたくなる位嬉しくなってきたぞ、スキューロ！流星は私のスキューロだ！もう駆けつけてきてくれたか！『マン・イン・ザ・ミラー』で作り出した鏡の世界！その世界のこのマンションを、『ビーチ・ボーイ』で登って

くるなんて！やっぱスキューロすげえよ！普通なら絶対にやらないが、偶にあるその派手な行動！そこに痺れる憧れる!!

派手に笑って動く手で指示を出す。早く私を鏡の中に入れてくれと。必死にジエスチャーを後ろから見られないように、ホワイトスネイクを現出させて気を引きながら行う。

スキューロは私の切り札となる存在だ。『マン・イン・ザ・ミラー』は当然として、釣竿の形状をした『ビーチ・ボーイ』も使い方次第では糸で斬撃を行えるという破格の性能がある。私に許可をくれ！もう私の口は勝手に喋りまくってるぞ！テンションが最高にハイになってるぞ！「私の絶頂を脅かす存在は——」とか言ってるんだぞ！どうだ、この喜びようは!?さあスキューロはや……

お前どこ行ってるの？

なんか凄い了解した、みたいな顔してるけど……なんで私の前からいなくなるの？いやマジで待てよ！置いてかないでよ！お願いスキューロ！何でも言う事聞いてあげるから！

アレ？なんかホワイトスネイクが私の制御から離れてない？いや、今スキューロに集中してたからありがたいんだけど……もう動かす気にもなれないよ……スキューロのバカああ……。忠誠なんて信じていた私がアホみたいじゃないか。もう私これじゃあ気持ちが悪化し過ぎてモンキーだよ？あ、もう自分でも何言ってるか分かんないや。

もうストレスがやばい。テンションの落差半端ないぞ。裏切られるってここまでイライラするんだ。ああ、私らしくないけど何かに当たりたい。この怒りは何かを壊して発散するべきものだ。そうでなければ発散出来ない怒りだ。

「ここは退かせてもらうよ。どうやらソレは僕の想像の範疇には居ないらしい。近いうちにまた会おう、パッションネのボスよ。その時は、僕自らが殺してあげるよ」

は？お前帰んの？何でもっとはやく帰ろうとしないの？マジふざ

けんなよ。コツチはお前のせいでストレスが一気に溜まったし、寿命だつて数十年分縮んだかもしれないだぞ？この怒り、やっぱお前で発散するわ。知ってるか？お前もう私の射程内にいるんだぞ？ホワイトスネイクじゃない、私の真の幽波紋スタンドのな。見せてやろう、私の最強の力を。帝王と呼ばれた者を帝王たらしめた力を。

知ってるんだぞ？お前のそのワープの個性、少しだけ時間が必要なんだつてな。

「帰るのは勝手だが、ここに来た駄賃の一つくらいは貰っていこう。その賤の悪い気持ち悪い右腕を頂こうか。殺れ、K i——」

「了解した、ボス」

ワープする寸前、キンクリでぶん殴ろうとしたらAFOの腕がぶつ飛んだ。いや、なんで。

え、このタイミングでなぜにスキューロ？

ラスボスが帰ってくれた。問題は山積みだけど

「ようやく戻ってこれたか・・・クソ！時間をかけすぎた。これではもう、ボスの場所に辿り着かれてしまっている！」

鏡の世界のマンションにこれ以上ないほどの全力で、氷の道を滑りながら戻ってきた。しかし、既に俺は取り返しがつかない失敗をしてしまっている。

最も重たいのは敵を侵入させたことではなく、トラップで仕留めきれなかったことではなく、間に合わなかったことではなく、ボスと敵を同じ部屋に入れてしまったこと。

ボスの能力が強力なのは知っている。絶対にありえないが親衛隊と共に挑めば、分も要らずに皆殺しにされるだろう。どんな相手でも、例えば軍隊を相手にしてもボスは勝つことが出来る。

だが、ボスは自らが戦うことは決してしない。どれだけ強くても、ボスは決して人前に姿は現さず、親衛隊の前に姿を現す時も遠距離操作が可能な『ホワイトスネイク』を通じての会話。

ボスは警戒しているのだ。親衛隊の、組織の誰かの裏切りを。何故そこまで警戒する？それほどの力があれば恐れるものは何もないだろうと、俺はかつてボスに聞いた。

そしたらボスは、

『スキューロよ、私はこう思うのだよ。人は誰しも不安や恐怖を克服するために生きているのだと。金を手に入れるのも地位を手にするのも名声を勝ち取るのも、全て自分の安心を手に入れるためだ。』

結婚するのも友人を手に入れるのも同様だ。愛や平和などを語り、他者の役に立とうとボランティアなどを行うのも、自らの安心を求めするための物なのだ。私も同じだ。私はこの身に降りかかる不安を取り除きたいのだよ。

では、スキューロよ。『不安』とはどこからやってくるものだと思う？全てからだ。『過去』と『現在』、『未来』。つまりは自分の起こす行動全てが、たった一つのちっぽけな行動が、衝動に任せた動作が、命を脅かすほどの大きな『不安』を呼ぶことさえあるのだ。

どんな人間だろうと人生には『浮き沈み』があるものだ。高卒だろうが大卒だろうが、エリート社長だろうが無職のホームレスだろうが、『成功したり』『失敗したり』の繰り返しなのだ。

だが！未来という目の前に、ポツカリと開いた『落とし穴』を見つけ！『現在』の行動を考え！過去に存在を残さなければ！人生は決して沈むことはない！

永遠の絶頂を享受し続けられるのだ！

私が戦わないのも、幽波紋スタンドを滅多に見せないのも、私が姿を隠し続けるのもこれが理由だ。たった一つの小さな情報から、私にとつもない『不安』を与える。

私は臆病なのだよスキューロ。お前が思っているよりもずっと、私は怯え続けている。今、お前と対面しているこの時でさえも、だ。

スキューロよ、お前に与えた幽波紋スタンドはどれもが強力なものだ。使い方に一工夫加えるだけで私を殺すことさえできる。

今ならば、私はなんの抵抗もしない。幽波紋スタンドを出すこともしない。お前の忠誠が、私に相応しくないと思うのならば、私を殺せ。油断なく、確実に私の息の根を止めるといい。

だが、お前が私に忠誠を誓い続けるというのならば、お前が私の『不安』を取り除いてくれるというのなら———』

そこから俺は何を考えていたのか、覚えていない。気付けばボスの前に片膝を突いて跪いていた。絶対の王を前に控える臣下のごとく、頭を垂れてボスに忠誠を誓った。ボスが臆病だろうが、関係ない。俺にとつてのボスはボスフェリシターただ一人なのだ。

俺はこれから、ボスの『不安』を取り除くために生きていこう。人並みの幸フェリシター福は全て、ボスの為に切り捨てよう。

決意は決めた。覚悟は出来ている。俺はボスのために死のう。

鏡の世界で物を動かせるのは俺のみ。そして鏡の世界で動かした物は現実世界でも動いてしまい、現実世界で動いても同じ。まさしく鏡の世界。『マン・イン・ザ・ミラー』。膨大なエネルギーを鏡の世界を作り出すことに割り振った近距離パワー型幽波紋スタンド。暗殺をするのであれば、確実に上位に入る幽波紋スタンド。

「おかしい・・・」

鏡を手にして、現実世界を映しながらエレベーターで上っていく。俺が今乗っているエレベーターは60階まで自在に上ることが出来る物だ。当然のように70階までの直通は破壊されていた。試しにボタンを押してみたが、反応はしなかった。

これは理解できる。部下達が気づいても簡単には来れないように仕掛けるのは、至極当然のことだ。誰だってそうする。俺だってそうする。

だがおかしいのはそこじゃあない。ここが『パツシヨーネ』のボスの居場所だと分かりながら、あまりにも人が少なすぎる。せめて廊下に一人か二人、エレベーターの前にも待機させていいはずなのに、ここには誰もいない。

そしてこのマンションには静かすぎる。普段なら大物政治家や医者達が女を連れ込んだり、忙しく秘書達を連れて出入りしているというのに、ここに来るまでは誰一人、警護もベルボーイの一人さえ見かけていない。

やはり何かがおかしい。

気配を殺しながら慎重に60階から70階までの階段を登っていく。やはり人は一人もおらず、現実世界は相変わらず閑散としている。あるとすれば仕掛けておいたトラップ類の数々が全て無惨な鉄屑に変化していることのみ。

「襲撃者は本当に一人なのか・・・？」

破壊痕がバラバラすぎる。やけこげた後が付いているものもあれば切断されたもの、銃で撃たれたかのように穴だらけにされたもの、そして握り潰されたものまで。それだけ多くの人材を連れてきたということは、本気でボスを潰そうという意味の表れなのか。

一体誰が、どの組織が。

「二人だけ、こんな無茶苦茶なことを出来そうな奴がいるじゃあないか」

噂話として流れてきて、先程ティツアアノやシーラ・Eに語った人物。この日本社会に深く根付いているだろう個性の怪物。もし本

当にそうなら、奴の狙いは丸分かりだ。ボスの幽波紋スタンドを奪うこと。どこから奴が幽波紋スタンドの正体を嗅ぎつけてきたのか。恐らくその失態は、俺にある。

尋問に使った幽波紋スタンド。俺が使っているところをおそらく見られていた。幽波紋スタンド使いでない者に幽波紋スタンドは見えないはずだが、目に関する個性を持っているのならば、どうなるのだろうか。

「やはり、敵はもう、ボスの部屋に入っている！」

69階。この部屋は俺の私室として扱われ、上のボスの部屋と秘密裏に直通している。俺の私財を投げ打って改装したこのマンションの分厚い壁。この壁は防音の効果と共に、壁の中が一人通れる空洞になっている。

壁の扉を開く。重たいが、仕方が無いことだ。普段は普通の壁なのだから。この空洞から上に行けば、行き着く先はボスの部屋。部屋に区切りがされているのならば、ボスのいる方に出る。

無論だが、ボスの部屋には幾つもの鏡が置いてある。非常事態の時、俺と共に鏡の世界から逃げてもらうためだ。まさか、こんなことに使うとは思っていなかったがな。

壁から出る。床の一部をくり抜いて開けるといふ、少々斬新な出方だが、どうせこの拠点はもう使わない。一度ボスの居場所がバレた以上、同じ場所に居続けるのは危険すぎる。ボスがここを気に入っている、というのならば別だが。

鏡越しに区切られた壁の先を見る。そこには脳ミソが丸出しの醜悪な襲撃者と、ボスの『ホワイトスネイク』がいる。いるのではない、戦っている！ああクソツタレめ！この無能が！やはり間に合わないか。あったじゃあないか。ボスが戦ってしまっているじゃあないか。

ボス！と叫んでその姿を確認しようとすると、ボスは俺の方を見ていた。

「待っていてくれ！今すぐアンタをこっちの世界に——」

俺の言葉が途切れ、行動が止められた。ボスは俺に仕草を出していた。その仕草はボスが知らないはずの、部下である俺達が多数数を相手に暗殺などをする際に使う手話をモチーフとした合図。

種類が多く、覚えるのが大変だが、だがそれでも確実に安全に相手に伝わる合図をボスが俺に出していた。

(奇襲・・・回り込む・・・合図・・・奇襲・・・ま、回り込んで奇襲しろと、そう言いたいのか!?)

ボスはまだ、俺の事を信用してくれている！俺に信頼をくれている！ああ、分かったぜボス。必ず、必ずあの敵を仕留めてみせるからな。幸いにも区切りの向こう側にここから行くことは可能だ。そして鏡から敵までの距離ならば、俺の幽波紋スタンドでなら仕留められる。

急いで回り込み、鏡の世界で息を潜める。今の俺は誰にも見られないようにしている。『マン・イン・ザ・ミラー』は自分のことを見れる人間を選別することも出来る。敵から見たら俺は鏡の中にはいない。ここにいる俺は正真正銘どこにもいない。

いつもと同じようにゆっくりと息をする。集中するのだ。ボスの合図に。合図をした瞬間、俺は奴の身体を内側から破壊する。手加減なく、油断なく容赦なく、必殺を御見舞してやる。

あ、あれは泥？なんだあのおぞましい黒い泥は。あれも奴の個性によるものなのか？

いいや、気を取られるな。俺はただボスの合図を待ち続けるんだ。長い時間が過ぎたと思う。視界が白黒に染まるほどの集中力。これ程集中したのはいつ以来か、思い出せないくらいだ。

そして、

「帰るのは勝手だが、ここに来た駄賃の一つくらいは貰っていいこう。その羨の悪い気持ち悪い右腕を頂こうか。殺れ、K i——」

ボスの合図！だが、ボスは殺さずに右腕と言った。口惜しいが右腕だ。右腕に狙いを定めるのだ。『マン・イン・ザ・ミラー』、俺がこの世界から出ることを許可しろ！そして、ここからが奇襲を仕掛けるのだ！

「了解した、ボス」

鏡の世界から出ると同時に幽波紋能力スタンドを使用。奴の体内に潜んでいた幽波紋スタンドが今か今かと待ち望み、研ぎ澄ませていた牙を剥く。奴の体内から現れたのは幾多の鉄の刃。巨大な鉄刃が敵の右腕の付け

根から食い破るように現れ、奴の右腕と胴体を泣き別れさせる。

切断された右腕は切断面はぐちゃぐちゃになり、地面に軽い音を立てて落ちていく。敵は苦悶の声を出し血を撒き散らしながら、泥に沈むように消えてしまった。殺せなかったのは残念だが、これも全てボスの指示通り。右腕。確かに奴の右腕はここにある。

「ボス・・・すまない」

区切りの向こう側から、こちらをボスが見ているのが分かる。その内にあるのは怒りか、失望か。どちらにせよ、俺はとんでもない失態を犯してしまった。今ここで、ボスが俺を殺そうというのなら大人しく殺されよう。例えどのようなに惨い方法でも構わない。輪切りソルベにされてホルマリン漬けとなり、道端に投げ捨てられて晒し者になってもいい。

ボスの求める『平穩』は、俺如きの命一つでは贖えない。

「何を謝っているのだ、スキューロよ」

「ボスと敵を接触させてしまった・・・ボスの『不安』を作ってしまった・・・俺は——「私はな、別に怒ってなんかないんだよ」

「遅かれ早かれ、私は奴と接触する運命だったのだ。例えどのような場所に逃げようと、運命という力からは逃げれない。磁石のように惹かれあつたのだ。会うべくして会つたのだ。私とお前のような。まあ、残念ながら友好的な関係は結ばなかったが、奴からは駄賃として右腕を奪つた。そして何より奴はたった一つだけ与えてくれた。私が理解していたことをもう一度、正しく深く理解させてくれた。

それはな、スキューロよ。私がお前を信じていることだ。お前ならば必ず、私の元に駆け付けると信じていたぞ。よくぞ私の元に来てくれたな」

言葉は何も出なかった。ボスの前で涙を流すということもせず、恐らく表情も変わっていない。だがどうしようもないほどに嬉しかった。

「ボス、命令してくれ。今すぐ奴を『ベイビィ・フェイス』で追跡し、殺すことを。奴の右腕ならここにある。年老いている腕だが、右腕分の血液がここにある。そして鉄分も大量に奪つた。マトモに動けな

くなるほどに。今頃酸欠で苦しんでいるだろう。

血液もこれだけあれば『息子』を、母親を数人揃えるだけで大量に生産することが出来る。命令を、奴を殺す指示をくれ」

俺の言葉に、ボスは沈黙している。沈黙は肯定というが、そんな曖昧な物で動く訳にはいかない。ボスの確かな許可がなければ、俺達は動くことが出来ない。だが一度許可が、命令が出れば確実にその任務を遂行する。その自信があり、確信がある。

どれほど沈黙が続いたか。俺としては一瞬でも早く、ボスの命を脅かしたあの敵を殺してやりたいが、まだだ、堪えるのだ。

二分ほどか、ボスはようやく口を開いた。

「いいや、殺害命令は出さん」

出てきた言葉は不許可だった。何故、と聞こうとする前にボスは理由を話してくれた。

「一週間だ。私達がここに来てまだ一週間しか経っていないのだ。たった一週間で、奴に私の居場所はバレた。油断していたのだよ、私達は。イタリアとは違い、日本には『パツシヨーネ』の縄張りはない。確かにここはいい場所だろう。ヒーローの目も来ない。木っ端の敵 ^{ヴィラン} 共もこんな場所は狙わないだろう。ここはそういう場所なのだろう？

だが、奴にはバレたじゃあないか。当然だ。奴は世界有数の実力者だ。私と奴、戦えばどちらが勝つかなど決まってはいるが、油断していい相手ではない。そういう相手なのだよ。

奴は引いてくれた。こちらから態々出向いてやる必要などない。確かに危険な敵だ。いつ我々に牙を向けるか分からないだろう。右腕の復讐と言って今にも来るかもしれない」

「なら、尚更」

「殺せば確かに楽だ。そしてスキューロの『ベイビーフェイス』ならば、確実に殺せることは理解している。だが、殺した後だよ。奴には役目が残っている。奴自身の私たちを無視しても成し遂げなければいけない願望がある。そして奴の目的は、私の利益でもある。今ここで殺す理由はない。許可はしない。奴は生かす。いいな、スキューロ

？」

「ボスがそういうのなら。だが、血液は貰っておく」
「構わないとも。もし奴がしくじって、目的半ばで逃げる事があれば、お前直々に殺してやるといい。失敗したのなら確実に、確実に消えてもらう。私の安心のために」

最後のボスの言葉に、これ以上ない恐怖を与えられたが、それでもボスは、いつもの様に笑っていた。

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ。

私を見捨ててどっかいったはずのスキューロが、鏡の中から出てきてAFOの右腕をぶった切った。いや、今なら落ち着いたから言えるけど・・・アレ間違いなく『メタリカ』だよな・・・。作中で『エピタフ』とキンクリの『両腕』を与えられたドツピオを瀕死寸前にまで追い込んだ『メタリカ』だよな？

『メタリカ』ってカミソリ作ったり鋏作ったりして尋問という名の拷問してたの知ってるけど・・・本気出したらこんなになるんだ・・・。右腕から鉄の刃が生えたりとか・・・ヤバい、強すぎる。

それにこの登場、危うく惚れそうになるじゃねえか。タダでさえジョジョ世界風のイケメンフェイスだぞ。チョコ先生みたいな反対顔とは真反対の顔なんだぞ。惚れたらドラマみたいなドロドロ展開になっちゃうじゃねえか。私じゃそんな恋愛なんか出来ないけどな。

え、スキューロさん突然なんで謝った？謝りたいのこっちなんだけど。疑いまくって挙句の果てにスキューロがAFO連れてきたと思ってたんだよ？だが長年スキューロを間近で見てきたから分かる

ぞ。かなり、かなり深刻に思ってるな。切腹とかやめてくれよ。私の部屋って言ってるのか分からないけど・・・ズタボロになっている上に殺人現場にはしないでくれよ。いや、もうAFOの右腕が大分血を撒き散らしてるんだけどさ。

それよりもスキューロをどうにかしなければ。スキューロの信頼を失わず、失望されず、また自殺もさせないようにするのだ。そうじゃなかったら私の明日が危ない。私は他の親衛隊の連絡先を知らないんだ。私の携帯なんてスキューロとの連絡機能が付いたゲーム機だぞ？

他の親衛隊が私かスキューロ、どつちに忠誠を誓っているのか分からないんだ。確かに幽波紋能力スタンドを与えたのは私だが、選び抜いて集めたのはスキューロだ。

私が本当に信用出来るのってスキューロだけ？嫌だ、私の組織私からの信用無さすぎ。

「遅かれ早かれ、私は奴と接触する運命だったのだ。例えどのような場所に逃げようと、運命という力からは逃げれない。磁石のように惹かれあったのだ。会うべくして会ったのだ。私とお前のように。まあ、残念ながら友好的な関係は結べなかったが、奴からは駄賃として右腕を奪った。そして何より奴はたった一つだけ与えてくれた。私が理解していたことをもう一度、正しく深く理解させてくれた。

それはな、スキューロよ。私がお前を信じていることだ。お前ならば必ず、私の元に駆け付けると信じていたぞ。よくぞ私の元に来てくれたな」

い、言い切った。長い文章を反論させずに喋りきれた。さっきの緊張とかあつてめちやくちや喉乾いた。ていうか今度はDIOボイスじゃなくて地声かよ。なんでだよ私の個性。ちゃんと働け。

スキューロはなんで立ったまま硬直してんの？動いてよ、何か言つてよ。私を殺そうとしてるのか悩んでるように見えて不安になるじゃないか。

「ボス、命令してくれ。今すぐ奴を『ベイビー・フェイス』で追跡し、殺すことを。奴の右腕ならここにある。年老いている腕だが、右腕分

の血液がここにある。そして鉄分も大量に奪った。マトモに動けなくなるほどに。今頃酸欠で苦しんでいるだろう。

血液もこれだけあれば『息子』を、母親を数人揃えるだけで大量に生産することが出来る。命令を、奴を殺す指示をくれ」

や、やったぞ!!これはスキューロがまだ私に忠誠を誓ってくれてい
るんだ!だってほら!追跡してぶっ殺そうとしてくれてるぜ!嬉し
いぜスキューロ!まつ、許可はしないけどな!

なんでかって?私の知識じゃAFOはオールマイトに負けてるん
だよ。完膚なきまでに叩きのめされてるんだよ。分かるだろう?
オールマイトだよ?連日テレビ放送で私に恐怖を送ってくる平和の
悪魔だよ。

パンチでソニックブームが起きてるのは当たり前とかなんだよ。
周りの一般人逃げろよ。吹き飛ばしちゃうぞ。

ぶっ飛んだ敵が壁にめり込んで白目剥いて泡吹いてるのに一人だ
け観客にアピールとか、めり込んで間抜け晒してる敵が哀れだろ。せ
めてさつさと引渡しくらいしてやれよ。

そのオールマイトはAFO戦で力を失う。私の狙いはそれだ。主
人公?あんなの怖くないね。AFOほど力の扱いは上手くないし、経
験だって足りてない。それに幽波紋使いの戦闘は正面戦闘ではない。
人質取るなりすれば簡単に逃れることが出来る。

確かに主人公の考察力は凄いが、AFOと同じだ。所詮は個性とい
う規模でしか測れない。

AFOには役目がある。オールマイトを潰してもらおうという役割
がある。あのパワーは驚異的だ。出来るならAFOと共に消えても
らいたいのだ。

だから『ベイビー・フェイス』での追跡はさせない。『ベイビー・フェ
イス』は便利だが、母親が必要という面倒がある。そして母親を探し
ているうちに、もしかしたら何か残してしまうかもしれない。

スキューロならばそのようなミスはしないが、問題は『息子』の方
だ。人間から生み出される『息子』は誰にでも見えてしまう。

流星に心配症が過ぎると言われればそうとしか言い様がないが、こ

の世界なんてそんなものだ。それに『息子』はこちらの言うことを教育次第では聞かない可能性がある。

個性という何でもありのものが存在するのだ。明らかに捜査向きの過去視なんてものがあれば確実にバレてしまう。『ベイビー・フェイス』は強いが、誰にでも見えるという厄介極まりない特性を持つてしまっている。

だからスキューロ、今は我慢してくれ。多分内心殺したくてしようがないかもしれないかもしれないけど、AFOだけはダメだ。他の奴らならいいから。

まあもし失敗したならば「確実に消えてもらう。私の安心のために」やっべ、声出ちやっただ。

スキューロ震えてんじゃん・・・そんなにカリスマあったか、今の言葉・・・？

護衛が増えるらしい。信じていいかは分からないけど

シーラ・Eという女性の人生の中で、最も緊張した瞬間と聞けば、2回と答える。一度目はイタリアのスラムで燻っていた頃、当時パツシヨーネの代替わりをしたばかりの時に、スキューロに勧誘されてボスと面会した時。

その時のことは永劫忘れない。何の力も無く、淘汰され続ける弱者であったシーラに、スタンド幽波紋という強大極まる力を与えた。当初は冷めない興奮とボスの放つ圧倒的な威圧感に数日間魘されていた。

そしてもう一つの時は、今。ボスと面会する直前。

予定通り日本に着きボスの現在の居住区であるマンションに来たまではよかった。だが玄関の前で久しぶりに会ったスキューロはシーラに手錠をするように要求した。今更何を、と思ったが様付けするほど慕うスキューロの言うことにシーラは逆らわず、大人しく身体の前で両手に手錠を嵌めた。

押し込まれたエレベーターは広い。スタンド幽波紋を使った十分な戦闘ができるほど。

「部屋に着いたらお前と俺だけで『マン・イン・ザ・ミラー』の世界に入る。少しでも怪しい行動をとれば、俺のスタンド幽波紋がお前を即座に殺す。分かっているな？」

「言われなくても大丈夫よ。私だって好き好んで死にたくはないし、スキューロ様は勿論、ボスにも恩があるもの」

「ならばいい」

仲間でも躊躇しないのはスキューロも親衛隊も同じだ。シーラも命令さえ下されれば躊躇なく殺すことが出来る。だが殺される側になれば大人しくしているつもりは無い。出来る限り抗い、その果てに生死が決められる。

「行くぞ」

エレベーターが止まり、スキューロに背中を押されて歩いていく。

少しばかり強引だが、実質的に上司のスキューロに文句を言うつもりは無い。そもそも文句を少しでも言った時点で指の一本は切り落とされるかもしれない。

そう思わせるくらいスキューロはピリついた雰囲気を出していた。エレベーターを降りれば避難通路用の階段の入口以外に扉は一つしかない。恐らくそこにボスがいる。いや、ボスと会話できる場所まで通じる入口がある。実質部屋には誰もいない。いるのは鏡の向こう側。

「幽波紋はここに置いていけ。さつきも言ったが入ることが出来るのは俺とお前だけだ。不用意な行動は控えろよ。優秀な部下には死んで欲しくないからな。俺も、ボスも」

スキューロに評価されていると言われ、少しだけ緊張が和らぐが、部屋の先にある姿見を視界に入れた瞬間、シーラの背中に冷たい汗が走る。

この感覚を味わうのも二度目。どれだけ危険な状況に身を置かれようとも決して味わうことのなかった感覚。絶対的な強者、帝王と呼ぶに相応しい者の前に立つことでしか味わえない悪寒。

『グールドウー・チャイルド』

シーラの呼び声で現れるのは彼女がボスに与えられた幽波紋^{スタンド}。げっ歯類のような人型の幽波紋^{スタンド}。細い外見からは思えないが、これでも近距離パワー型。暗殺向きの幽波紋^{スタンド}ではないが、正面戦闘は優秀と言えるほど優秀。

『マン・イン・ザ・ミラー』、俺とシーラだけが入ることを許可しろ』
シーラは初めて味わう『マン・イン・ザ・ミラー』で鏡の世界に入る時特有の視界の捻じ曲がり。慣れない感覚に少しだけ吐き気を感じてしまう。

初めて入る鏡の世界。自分の分身とも言える幽波紋^{スタンド}が居ないというのに、不思議と身体に違和感を感じられない。そこにいないのにそこにいる。頭で考えてしまえば不思議な感じが出来てしまう。

ボスはここにいない。しかし、『ホワイトスネイク』がここにいた。「連れてきたぞ、ボス」

「ご苦勞だったなスキューロ。下がっている。さて、久しぶりだな
シーラ・E。君の仕事ぶりは聞かせてもらっている。いい仕事ぶり
だ」

「あ、ありがとうございます」

久しぶりに聞いたボスの声。『ホワイトスネイク』越しとはいえそ
の威圧感は変わりない。心底恐ろしい。自然と膝が屈してしまいそ
うなほど、ボスが恐ろしい。称賛を受けているはずなのに、マトモに
喋ることすら出来なくなる。

「既にスキューロから話は聞いているな？当然ながら時間は有限だ。
無駄は省いて早速本題に入ろうじゃあないか。」

シーラ・E、私は君を信用していない」

前にもこの言葉は言われたことがある。その言葉に不快感を覚え
たことはない。この業界にいれば、心の底から信じていい相手など、
ほとんど存在しない。同じ親衛隊でティッツアーノとスクアーロの
ように、運命によって導かれた者同士でもない限り。シーラ・Eは自
分が運命によって導かれた者だという自覚がある。信頼できる友と
は巡り会えなくとも、己のすべてを捧げられる相手を見つけられた。
「君に聞こう、シーラ・E。人が人を選ぶに当たって、最も大切なこと
は何だと思うかね？」

「・・・才能や頭の良さ、その人物がどれだけ役に立つかの信頼性」

「ディ・モルト非常にいいよ、その答えは。確かにその答えは正しい。間違ってい
ない。だが正解もしていない。一回だけ正解を言う。よく聞いてお
きたまえ」

そんな風に念を押されなくとも、ボスの言うことは脳裏から離れる
ことはない。帝王の言葉は頭の中に浸透し、聞いた言葉によっては、
無限の悪夢にもなってしまうのだから。

「人が人を選ぶにあたって、最も大切な物は『信頼』だよ。決して裏切
らない、背中を晒しても大丈夫、平穩を預けられる様な『信頼』こそ
が最も大切なんだよ。それに比べれば才能？役に立つ？そんなこと
は重要じゃあないんだよ。才能がないなら私が与えればいい。君に
与えたようにスタンド幽波紋をね。役に立つというのなら私のために生きて

私を庇い死ぬだけでいい。

分かるかね？そんなものはいくらでも替えが利く。だが『信頼』だけは違う。『信頼』とは誰もが最もつかみ取るのが難しいものであり、それをつかみ取ったとき最も信用できる物なのだ。

ではどうすれば『信頼』はつかみ取れるのか。相手の隅々まで知り尽くし、絶対に裏切らないと確信を得ることだ。

話してくれシーラ・E。君の全てを、君の真実を。そうしたとき、君は初めて私の信頼を得ることが出来る。

さあ、私と、仲間になろうじゃないか」

ボスの言った言葉の数々は、まともに頭の中に入ってこなかった。それは言葉の端々に含まれていた威圧が、いつしか身を委ねたくなってしまうほどの甘い声に聞こえてきてしまったから。その言葉に私は捕らわれてしまった。ただ正面にいる『ホワイトスネイク』を通してボスの姿を幻視していた。

やっべーよ。気紛れで聞いたシーラ・Eの過去がヘヴィ級のパンチ打ってくるんだけど。数年前のスキューロの暗殺現場に居合わせて、スキューロの殺した人間がシーラ・Eの姉を殺した人で、シーラ・Eはその復讐のために来てた？

それで復讐対象を殺したスキューロを様付けと。

しかもシーラ・EのEは偽名？Eの意味はE^復rinni^讐？いや私が思わず気を使っちゃうなんて相当だぞ。そりゃスキューロを神聖視したくもなるわ。殺そうと思っていた復讐相手が突然現れた超絶イケメンの手にスタイリッシュにかけられて、行き場がないってことそのまま組織に勧誘されて無個性から幽波紋^{スタン}使いになったんだから。シーラならもしかしたら『矢』と『ブラック・サバス』でも幽波紋^{スタン}使いになってたかもしれないけど。

まあ後者はともかく前者は存在しない……よな？運命とか言っ

怖』が私の中にあるのだ。痛いのも嫌だ、怖いのも嫌だ。常に『安心』と『平穩』を求め続けるからこそ、信用できないという『恐怖』に怯え続けるのだ。いつ終わるかも分からない力。効果がなくなつたことに気付き、それに対処するまでの時間があれば、私から『平穩』を奪うことはできる。

私はD I O様の如き帝王ではない。『恐怖』を克服することが出来ない。私に出来るのは『平穩』を求めするために『信賴』することだ。そう、それしか出来ないのだ。私に心の声を聞く幽波紋スタンドはない。結局は私次第なのだ。私が『平穩』を得るためには、私自身を危険に晒すしかないのだ。スキューロの時のように。

あの時はホントに怖かった。年頃の少女がガン泣きしてちびりそうになるくらい。

スキューロを本当に信賴したように、私が先に信じてみるのも偶にはいいかもしれない。

もしもの時はスキューロに丸投げしよう。私は一目散に逃げる。

あー嫌だな。『覚悟』とかしたくないなー。

私はこの後、凄く後悔した。もつといい方法普通にあつたじゃん、と。

一瞬だった。転移系の個性で隠れ家に転移する刹那、僕の右腕は内側から弾けるように宙へ舞った。右腕が奪われたことに気付いたのは、隠れ家の薄い明かりに照らされてすぐだった。

「えっ。」

自分でも驚くくらい、軽い声だった。その声は右腕の付け根から吹き出る血が飛び散る音に掻き消された。腕がないと認識すると、そこから灼熱の痛みが脳裏を駆け回る。この痛みはオールマイイトに負けたときと同じか、それ以上のものだ。

「がつづああああアアアアアアアアアア！ぼ、僕の腕があああああああああああああああああああ！いい、いつだ、いつ僕は右腕を、どんな手段で奪われたんだ・・・!?!」

必死のため込んだ回復系個性をフル稼働する。だが右腕は元には戻らない。確かに個性は働いている。なのに右腕は微塵も回復しない。むしろ個性を使った時の副作用の激痛だけが溜まっていく。

「こ、これは・・・」

飛び散った血が視界に入る。傷口を抑えていた血濡れの手も視界に入る。それは見慣れた血の赤ではなく、悍ましいほどの黄色だった。

「き、黄色い・・・。僕の血が黄色くなっている・・・！それに今ようやく気づいたが、呼吸が荒い・・・！知っている、僕はこの現象を知っている・・・！」

己を悪だと自称する位には、悍ましい悪行を行ってきている。快樂的な殺人も何度もやった。その中には出血死していく様子を観察するというものがあつた。その時に見た物と同じだ。血が黄色くなる現象は、体内に酸素が回っていないから。そして酸素を運ぶのはヘモグロビン、要は血液だ。血液がなくなれば酸素は運ばれなくなる。酸素が少なくなれば呼吸回数が増える。血液がなければ激しい呼吸に意味がなくなる。そして酸素が与えられない血液は黄色くなる。ほんの一瞬。彼の言葉を聞き終えるのと同時にあつた内側から弾ける感覚。

「血液を操ったのか・・・！血液を硬化し——」

真実に辿り着いたと思ったその時、チャランと金音がした。何かを踏みつけてしまったらしい。足をどけるとそこには所々が血で濡れている剃刀が転がっていた。それを残っている左手で拾い上げると、ボロリ、と崩れ落ちた。

イタリア最大のギャングのボス、吐き気を催す邪悪、正体不明の人の個性、鉄分を操作するという強力な力。心が高ぶる。気分が狂う。久しぶりに湧き上がった新鮮な感情に悦びを隠せない。久しぶりに味わう激情は、AFOに力を与える。

「君を殺したい。他の誰でもない僕が殺したい。苦しめて殺して、あっさりと殺して、絶望させて殺して、恐怖させて殺して、作業的に殺して、社会的に殺して、苦悶させて殺して、叫ばせて殺して、狂わせて殺して、愛して殺して、食べて殺して、犯して殺して——嗚呼ああアアあ・・・凄くいい」

オールマイトも殺したいが、彼も同様にめでたいことにランクインだ。オールマイトの次は彼を殺すと決めた。この失った右腕は、彼の右腕を移植しよう。目の前で引きちぎって、僕の物にしてやろう。ついでにオールマイトとの戦いで臓器が負傷したら彼のを使おう。腸を引きずり出してパズルみたいに当て嵌めよう。

楽しみだ、ああ楽しみだ。

はやく君達を殺したいな、オールマイト、パッションネのボス。

なんとか現状を乗り切れた。もつと面倒なのが残っているけど

ボスの雰囲気が出なくなっているのを感じる。今ボスはこの鏡の世界にいない。遠距離でも使用出来るボス曰く「幽波紋スタンのルールを超えている」『ホワイトスネイク』を通して見聞きし、会話している。

表裏一体のこの世界、ボスがいるという雰囲気はこちら側にも伝わってくる。

不穏な空気だ。過去語りをしていたシーラ・Eは少しだけ顔色が悪くなっている。全てを語り終えてからだ。ボスの雰囲気が変化したのは。やはり護衛には相応しいとは思われなかったか。

いくら俺が適正だと考えても、全てはボスの意思で決まる。使うかわらないか、生かすか殺すか。

普通の組織であれば、シーラほど優秀な者を殺したりはしない。シーラは若くして組織の敵対勢力を一人で滅ぼし、そいつ等が持っていた縄張りを組織へ提供している。普通のギャングであればボスの側近として重宝されてもおかしくない。だが、パッションネは違う。『ホワイトスネイク』が指を少し動かす。まるで指を鳴らすように、不気味に動かす。ここにシーラの幽波紋スタンはない。近距離パワー型の『ホワイトスネイク』の有するパワーならシーラの頭をトマトのように握り潰す事が出来る。まさか、殺すのか・・・？殺すのならばボスの手を煩わせることなく、俺が殺すのだが、ボスからその命令は受けていない。勝手に動いてボスの気を悪くしてはいけない。

『スキューロ、世界を閉じろ』

「な・・・!?正気かボス!?今のアンタはここにいます！現実世界にアンタは存在している!!それに出してしまえばシーラ・Eの幽波紋スタンの制御がも

———

思わず口を噤んでしまう。ここにいるボスの気迫が、俺にそれ以上の言葉を言わせない。そしてそうなることで、俺は冷静さを取り戻す。

「すまない。アンタの決定に逆らうつもりは無いんだ。ただ、」

『それ以上は言わなくてもいい。お前が私の為に言ってくれたのは理解している。有能な部下というのは時として上司に諫言をするものだ。だがなスキューロ。これは必要なことなのだ。私にとっても重要なことなのだ』

「・・・分かった。『マン・イン・ザ・ミラー』、鏡の世界を閉じろ」

そばに控えていた『マン・イン・ザ・ミラー』が世界を閉じる。眩い閃光と共に鏡の世界は崩れて閉じられる。視界を開ければ同じ様な部屋だが、ここはもう鏡ではなく正しく現実。文字は正常な方を向き、全ては反対になっていない。

現実世界で待機していた『グードウー・チャイルド』がシーラの中に戻っていく。出しっぱなしで疲れていたか、もしくはボスの放っていた威圧感か。どちらにせよシーラには疲れが見えている。

「ボス？」

ゆらりと、『ホワイトスネイク』が霞のように消えていく。それと同時に後ろ、部屋と廊下を繋ぐ唯一の扉が開く。

そこから入ってきたのはシーラから見れば場違いなどこにも居る十代後半の少女。だがその身から放つ気配は『ホワイトスネイク』が放っていた物と同種のもの。すなわち帝王の威圧。

そして俺から見れば、それは個性を使つて顔も体格も変化させていない、^{フェリシータ}ボスその人だった。

「先程まで話していたが、はじめまして、シーラ・E。私の名は^{フェリシータ}幸福。お前に^{スタンド}幽波紋を与えた者であり、パツシヨーネのボスの座にいる者だ」

「・・・え？」

シーラが抜けた声を上げる。当然だ。突然出てきた少女が、突然イタリア最大のギヤングのボス等と名乗れば、こうなるのは当然だ。ありえないと断じてしまおう。だが内心ではシーラも気付いてい

るはずだ。少女がその身から放つ威圧感の間違いなくボスの物。想像のボスと現実のボス。いつそ清々しいほどのギャップだ。

「ああ、安心していい。普段は個性で誤魔化しているが、正しい私の顔は、身体は確かにこれで合っている。信じられないのならば証拠を見せよう。出てこい、『ホワイトスネイク』」

ボスの身体から出てきたのは間違いなく『ホワイトスネイク』。塩基配列の刻まれた身体も、体の各部位にある紫の飾りも、間違いなく正しいものだ。

「これで信じてくれたかな？ 私がパツシヨーネのボスだということ。理解してくれたのならば頷くんのだ」

ボスの言葉に、シーラがゆつくりと頷く。ボスはそんなシーラを見て満足そうに頷き、『ホワイトスネイク』を消してシーラの顔に自分の顔を寄せる。あと少し近づけば鼻と鼻がぶつかるほどの距離。シーラの顔が唐突に青ざめていく。

「なあシーラ・E。先程私は語ったな。私の考える『信頼』を。これが私が君にする『信頼』だ。これこそが私が君に与える『信頼』だよ」ボスは顔も姿も性別も声も名前も誰にも教えない。ボスのいう『信頼』とは恐らく、自分を見せること。顔も姿も性別も声も名前も何もかもを相手に見せること。ずっと秘匿してきた。知ろうとした者を残虐に処分し、組織にボスの正体は探れば死ぬという暗黙の了解を作り出す程に。俺と対面する時も、顔も声も微妙に変えていた。

そのボスが、『信頼』のために全てを投げ出す博打のような行為をしている。

「君は今まで何人に顔を覚えられてきた？ 10人か？ 100人か？ どんな人間に自分を教えていた？ 行きつけのバーのマスターか？ レストランの店員か？ 隣の家の夫婦か？ 同じ組織の者達か？」

私は一人だ。私はセキュロという絶対の信頼を任せられる大切な部下のみに、私を見せてきた。

なあ分かるだろう？ 私が何を言いたいか。理解しているだろう？ 私が今、何をしているか。

私はお前に預けたのだ。『信頼』という私の大切な『平穩』を。お前

が警察にでも駆け込んでパツシヨーネのボスの顔を見たといえ、私は終わる。私の積み上げてきた、守ってきた何もかもがだ。この時世、記憶を読み取る個性などいくらでもあるからな。

シーラ・Eよ、私はお前に『信頼』を与えた。今この世界にまだたった一つしかない、私の命がかかった『信頼』を与えたのだ。ならば、お前は私に何を返す？何を持って私の『信頼』に値するものを返すのだ？

敵対か？逃亡か？公表か？それとも同じく信頼を返してくれるのかな？何でもいい、今ここで私に表明してくれ。私にその想いが本物だと示してくれ。私に敵対するのなら『ヴードゥー・チャイルド』で私を殺しにこい。逃亡するというのならばすぐここから出ていき、二度と私の前に顔を見せるな。私を公表するというのならば警察かヒーローにでも知らせればいい。それとも信頼してくれるというのならば何かを示せ。

さあ、どれを選ぶ？君は自分の未来をどう選択する？決めるのは自分の意思だ」

相も変わらず、こういった時のボスは凄まじい。俺の時もそうだった。ボスはこういったギリギリの勝負によく出る。見ていてヒヤヒヤしてしまう。あの時は自分のことだったからまだマシだが、今回は他人。思考が読める訳では無いので不安しかない。

いや、ボスが大人しく殺されるはずもない。もし敵対するアクションを起こせば即座に殺すだろう。あの時と違い、ボスは抵抗しないと断言している。『ホワイトスネイク』の速度なら、『ヴードゥー・チャイルド』に追いつける。それにボスにはもう一体の幽波紋がある。究極にして至高、間違いなくこの世界最強の力。運命に愛され、王として生まれたボスが運命に与えられた最強の幽波紋。

「私は・・・」

今にも挫けてしまいそうな、掠れるほどの声だ。それに声に迷いを感じる。逃げるか従うか悩んでいるのか。こうなったのはボスの威圧感にやられたからか。無理もない。常人であれば声だけで心が折られる程なのだ。幸福がボスとして在る時は圧倒的なまでの差を

感じてしまうのだ。周囲の生物とは同じ次元に存在していないという差を。

「私は『覚悟』をしてここにいる」

掠れるシーラの声を塗りつぶすように、ボスがシーラから顔を離れた。

「お前にもしかしたら殺されるかもしれない、裏切られるかもしれない、『平穩』を失うかもしれない。そんな『恐怖』に彩られ、暗闇に消えた道から、輝く朝日の如く、美しい『平穩』を取り戻すために『覚悟』したのだ。『覚悟』とは暗闇の荒野に進むべき道を切り開くことだ。

私は『恐怖』を乗り越え踏破し『信頼』するために『覚悟』した。別に言葉で理解する必要はない。『心』で理解するのだ。

シーラ・Eよ、君の『覚悟』を見せてくれ。君の進むべき道を、私に見せてくれないか」

ボスの言葉——『覚悟』。ああ、俺は理解出来た。この『心』でボスの言葉を理解した。己を臆病者と語るボスが、何よりも大事にしている『平穩』を暗闇へ消し去る可能性のある選択肢を与えること。それその物がボスの『覚悟』だったんだ。賭けなんかじゃあない。アレこそがボスが道を切り開くために見出した物だったのだ。

俺の時だつてそうだったじゃあないか。

「私は……！」

シーラの体が崩れ落ちる。いや、崩れ落ちるかのような速度で片膝を突いている。その姿はまるで主に忠誠を誓う騎士のように、気高く強固な忠誠を物語っている。

シーラ・E、本名シイラ・カペツツートはこの瞬間、ボスの『信頼』に忠誠を返すことに決めたのだ。それは正しく、過去のスキューロと同じ光景だった。絶対的な帝王に頭を垂れる忠実な臣下。

「ありがとう、シーラ・E。いや、シイラ・カペツツート。私は確かに君から『忠誠』という『信頼』を受け取った。そしてその『信頼』を盤石のものにしようじゃあないか。出番だ、『ホワイトスネイク』」

待つていたとばかりに三度『ホワイトスネイク』が出てくる。ボス

が何をしたいのか、俺にも分からない。が、シーラはボスに身を預けるように微動だにしない。どうやら、殺される覚悟はあるらしい。シーラの様子に満足したようにボスは頷く。

「私の『ホワイトスネイク』のDISCには複数の種類が存在する。他者の幽波紋スタンドを管理する幽波紋スタンドDISC。記憶を読み取ったり消したりできる記憶DISC。そして命令を書き込みそれを実行させる命令DISC。今から使うのは命令DISCだ。私はこのDISCで君に一つの命令を与える。書き込んだ命令は基本厳守だが、何かあるかは分からない。世の中は奇妙なことが多いからな。

だから、これは保険だ」

ボスがDISCを片手に、もう片方の手でシーラの顎をクイツと持ち上げる。床に視線があったシーラは強制的にボスと目を合わせられる。

上がったシーラの目は、ボスに入れ込むような熱い視線となっていた。彼女もまた、ボスのカリスマに真実魅入られたのだ。

「さあ、私に全てを委ねるのだ。安心しろ、痛みもなく一瞬で終わる」DISCがシーラの頭に入っていく。人の頭にDISCが入るというあまりにも異質な光景は、俺は既に見慣れたものだった。命令に何を書き込まれているかは分からない。が、恐らくはボスの『平穩』を守るためのものだろう。

「これで私達の『信賴』は成立した。これからよろしく頼むよ、シーラ」
E

う・・・上手くいった。目の前の障害を乗り越えられた。確かに私は『覚悟』を終えた！

もうやだよ全部投げ出してゲームして引きこもってたい。『信賴』

を得るのに毎度毎度『覚悟』が必要になるとか冗談抜きで胃がもたない。

こちとらクソ雑魚メンタルで日々怯えて暮らしてんだぞ。メンタル面で圧かけて来るなら主人公にやってこいよ。

今回はいつものよく知らないうちに事態を進ませるのではなく、私が高場の主導権を得るために、態々一対一で素顔を晒してやったんだぞ。ホントに危ない橋だった。『ホワイトスネイク』って一応パワーAスピードAだけど、純粋なAって訳でもないんだよな。Bには勝てるけどAには一歩劣るんだよ。

『マン・イン・ザ・ミラー』とかと同じ。パワーが能力に振られてるタイプ。それにしても色々高性能高いけど。

シーラに与えた『ヴードゥー・チャイルド』はパワーはBで一歩劣るけど、スピードは紛れもないA。あのまま戦闘になってたら『ホワイトスネイク』のラツシュを抜けてぶん殴られてましたね。今日が日曜日で良かった。ゴミ収集車だけは勘弁だからね。

何はともあれ一件落着。シーラにはしつかりと命令DISCを差し込んだ。本当は私の腕をシーラの頭に入れた方が手間が要らないんだけど・・・なんか気持ち悪いじゃん。入れる方も入れられる方も命令DISCには勿論、私の正体について極秘にすることを一番として植え付けた。これからはシーラに入れたDISCがどれだけ効果を保っていられるか気にしなければ。

ていうか今回、恐れるべき相手であるジオルノの名言とか応用したけど・・・ちゃんと使い方合ってたか？あまり喋ることが少ないから喋りすぎると息継ぎが多くなるんだよな。『ホワイトスネイク』が便利すぎるのも問題だよなー。

今、シーラはこの部屋にいない。顔を青くしていたから今日だけ別の部屋で休ませている。明日にはこのマンションを出なければならぬ。私の護衛として、万全を期してもらいたいのだ。精神の揺らぎが時としてダイレクトに性能に出てくる幽波紋スタンド使用だからこそ、休息は必要不可欠なのだ。

「切り終えたぞ」

ダイニングからスキューロが熱々のピザとタルトを持ってくる。スキューロ、やはり料理も万全である。和洋中からスイーツまで、コイツ本職料理人じゃないのか？と勘違いするほどの腕がある。デリバリーのピザでも良かったのだが、明日は忙しい。舌に合うか不明な物より、三ツ星レストラン顔負けの腕を持つスキューロの食事の方が、英気を養える。

「明日、9時にはここを出ていく予定だ。新幹線が来るまで時間は大分余っているが、何かやりたいことでもあるか？」

「ああ、それなんだがね。明日、『シンデレラ』の所に行こうと思っ
ているんだ」

「・・・『シンデレラ』の所にか？随分と急だな」

あ、スキューロ機嫌悪くなつたな。声音でわかるくらい嫌ってるもんな、『シンデレラ』のこと。まあ原因はアツチだから、スキューロは何も悪くないんだけど。

ピザの生地に乗ったチーズをわざと長く伸ばしながら、上を向いて垂直に口の中に入れていく。身に付いてしまった癖なんだ。変な食べ方とか言うなよ。

『シンデレラ』。パツシヨーネの中でも私とスキューロしか知らない人物。一応はパツシヨーネ所属で、半年に一度、口座に金を入れ続けられていている人物。フェリシータ私ではなくシクリーザ私との交友を持った者。とある分野においては群を抜いて、最早世界で一番とも言える腕を持つ。そして時折幽波紋スタンドを与えている。

「俺達二人で行くのか？」

「いや、シーラ・Eも連れていこう。もしかすれば、彼女も『シンデレラ』のお眼鏡に合うかもしれない。まあその場合は、シーラ・Eが無事で居られるかは分からないが、今後は私の代わりになってもらう」

『シンデレラ』はある問題を抱えている。偶に、本当に偶に自分が目をかけた相手を自分の望み通りにしたいということで、態々その人物とイタリアまで来て、スキューロを通して幽波紋スタンドを借りたと言ってくるのだ。

『シンデレラ』との交友を続けていきたいし、貴重な人材であることか

ら普段から珍しくかなり譲歩している。日本に支店作るなんて言い出した時には金まで払った。・・・私のポケットマネーで。

シクリーザとして接し続ける限り、『シンデレラ』はモロに私の弱点となる。別に強い訳でもないし、有能な個性がある訳でもない。ていうか私の周り無個性ばかりである。

『シンデレラ』は私と同じく一点における『信念』が強いのだ。私が徹底して『平穩』を求めるのと同じく、『シンデレラ』も強固な『信念』を持ち、それに従って行動している。

それにちゃんと私が決めたルールに従っているため、下手に文句を言いにくい。

全く、頭の痛い話だ。

喋りながらも手と口はピザを運び続ける。

「まず間違いなく、あの幽波紋スタンドは貸し与え続けることになるだろう」「いいのか？あの種類は貴重なものなんじゃあないのか？」

「そうだ。数少ない切り札を切つてでも、私の為にはアイツの力は必要なのだ。それに奴は約束を破ることは無い。それは私達が出会ってから今日まで、しっかりと証明されている」

ピザを取ろうとした手が実体を掴まず、指が皿に当たる。あ、痛い・・・爪が少しだけ傷ついた。別にネイルとかしている訳でもないし、人に爪を、自分を見せたいなんて一度も考えたことは無いけれど、私は性格上人の視線などを気にし過ぎてしまうのだ。

人に会ったり外に出る時は服装は正すし、髪はきちんと整える、顔は化粧つけなしで帽子をかぶったりして少しだけ隠す。

外に出ないからあんまり意味ないけど・・・。

毎日食べ続けたらデブの道をフォーミュラカーで最果てまでゴーアウェイしそうなタルトを口に含む。中身はリンゴだ。いいよ、リンゴは好物だ。ふむ、彼奴め、また腕を上げおったな。あつという間にペロリとタルトを平らげてしまった。更に欲しいと空腹感を感じないように、スキューロが持つてきてくれたアフタヌーンティーをすぐに口に入れる。

ぬるめのティーがまだ欲しい、食べたい、食わせろ寄越せと言い出

しそうな体に満腹を感じさせてくれる。

「ふう……」

しかし、『シンデレラ』か。アイツはまだ歯止めが利いているからまだいい。まだ食い止めることが出来ている。まだブレーキがちゃんと機能しているからいい。

アイツの本質はゴミ屑筆頭の燃えるチヨコ燃えるライターと同じ物だ。好奇心、そして目的のためにブレーキを全てアクセルに変えられる。

チヨコライターは好奇心が群を抜いているが、アイツは好奇心はほんの少しだけ。それでも常人に比べるとかなり大きい。アイツの中で群を抜いているのは探究心だ。好奇心も探究心も行き過ぎれば最悪の代物だ。もし放っておけば最悪とも呼べる存在になっていたかもしれない。

それでも始末しないのは、私に対する有用性が高すぎるのとやはり歯止めを理解しているから。アイツの探究心は異常なものだが、人並みの常識を理解している。

ああ、会いたくねえ。けど会わなきゃいけないんだよな。東京から出る前に施術だけはしておかないと。もしかたそれ以上のことをせがまれたら、うん、シーラ・Eに全投げしよう。他の面倒事はスキューロにぶん投げられるけど『シンデレラ』関係だけは別だ。ホントにあの二人は仲悪いから。最悪殺し合いになるんじゃないかね？つていつもピリピリして、私が何故か仲介してたから。ていうか普通の奴じゃ手に負えない。見向きすらされない。だから普通じゃないシーラに任せる。多分シーラなら『シンデレラ』の好みに合うはず。

日本に来て初めての任務が『シンデレラ』の相手とか、合掌して黙祷してやりたくなる。でも護衛とは身を呈してでも対象を守り抜くこと。その身を呈して、是非私を『シンデレラ』から守ってくれ。

アイツホントに扱いづらいんだよな。吐き気を催す邪悪って訳でもない。ただ理性が突き抜けてるだけなのが面倒なんだよ。やっていることも別に殺しとかじゃないし。

ああ、なんでもあの時アイツとの関係を一回きりにしなかったんだろ……。さつさと交友関係切っておくべきだった。でもそうしたら

そうしたらでシク^安リーザ^心の為にならないんだよな……。生かしたくないけど生かさなければならぬのがここまで面倒とは……。アイツ以上にクソ野郎だったチョコとセッコを抱えていたディアボロマジ苦勞人。

せめてスキューロとの仲がもう少し良ければ、もつと安心していられたんだけどな……。

休日の洒落た場所には洒落た人間が集まるものだ。その場に溶け込もうと、ふさわしくあろうと背伸びしたオシャレをして、普段以上に化粧に時間を使って。この場にいる自分に自信がない、もしくは自分よりも綺麗な者を知っている。

不安は顔には出ずとも、行動や仕草にでてしまうもの。気を使って他者から一歩引いたような行動をしている者。そんな者こそが『相応しい』。

他者から虐げられている者、自分が下だと思っている者。人間のカーストの下に位置する者こそが『シンデレラ』の標^{ターゲット}的なのだ。

『シンデレラ』は道行く人たちを見ながら、サングラス越しに獲物を探す。自分が魔法をかけるのに相応しい者はいない。『素材』がよくても中身がダメだ。頭の緩いバカに価値はない。『シンデレラ』の求める者は現実を知り、怯えながら生きている者がいいのだ。心と行動を蝕む物を取り除き、その行動を観察したいのだ。

いささか求めるラインが高すぎるのも問題なのだ。かつて、修行中に見た最高にして究極の素材。美食を求めた美食家が、並大抵の料理では満足出来なくなるように、『シンデレラ』もまた、良すぎた素材と出会ってしまったことで満足感を失ったのだ。

このままでは千日手。『シンデレラ』は世界的な店を持つ身で、明日

も今夜も仕事がある。あまり気は進まないが、求めるラインを下げるしかない。

(見つけた)

飢えを満たすため、素材にこだわりを求め続けて既に2時間。ラインを下げたからか『シンデレラ』は素材を見つけた。これから素材を捕まえて、下ごしらえをして実食に移る。今回の素材は少し期待度は薄い。致し方ない。

「ねえ、その貴方。違うわ、貴方じゃないわ。隣の、そう貴方。ねえ、少し私とお話しない？二人、でね」

私は『シンデレラ』。私は美の魔法使い。私の魔法で貴方の枷をなくしてあげる。貴方をお姫様にしてあげる。虐げている周りの目を奪って、王子様の心を奪って、這いつくばらせてガラスの靴をなめさせましょう。

綺麗なお城、使用人は周りの人間、王子様は奴隷。それはきつと、とても気持ちのいいことよ。

さあ私の手を取って。貴方に魔法をかけてあげる。あらゆる物を思い通りに出来る美の魔法を。

ちよつとした回想でもしてみよう。ロクなもんじやないけど

月曜日ってホントにみんな辛そうだよ。道行く人たちの顔が完全に実写版ピ〇チュウのしおれた顔なんだもん。学生も社会人もみんな同じ顔に見える。私はいつだって土曜日さ。なんで日曜日じゃないかって？日曜の朝は虚無感で満ちあふれるじゃん。まあ生活スタイルとか考えたら完全にスキューロの臍を嚙っているクソニートなんだけどな。

てかやっぱり日本人の顔に違和感覚えちゃうな。生まれも育ちもイタリアだったせいとか、もしくは自分の顔がイタリア風になったせいか。まあどうでもいいか。

私の斜め前、運転しているスキューロの隣の助手席に座るシーラの顔が悪い。持っている荷物ケースのせいだろうな。シーラの持っている超頑丈（スキューロ談）なこのケースは、幽紋波スタンのパワーBまでなら防げるとかいう頭のおかし・・・くないか。オールマイトにぶん殴られたらケースが中身ごとスクラップになっちまうからな。

このケースの中身は本気でシーラの命よりも貴重で、重い物だ。もしシーラとケースが人質になるようなことになったら、迷わずシーラを切り捨てるぐらいには。何せこのケースの中身は私の持つ幽波紋スタンディスクの全て。ありとあらゆる幽波紋スタンがこのケースに封印されている。

エニグマがあればもつと持ち運びやすかつたんだけど・・・なんでもないんだよ畜生。戦闘能力皆無だからあってもいいだろ。

このケース、耐久性だけではなく形状も凄い。見た目は普通なのに両側面に二個ずつ鍵がついており、開けた鍵に応じてその部のディスクが出てくる仕組みになっている。

普段は絶対にバレないように隠しているか、私が部屋にいる時は常にそばにいるようにしている。だがこうして外を出歩く時は、私が持つと流石に不相応過ぎて違和感マシマシなので、スキューロに持たせ

るようにしている。今はシーラが増えたので持ち運び役はシーラになっただけ。

部屋出る前にスキューロが壁ドンしながら殺気モリモリで脅していたからな……。本当に今日はシーラの厄日になるな。

「着いたぞ」

「あの……。ここってエステ……。ですよね？」

着いた場所、エステ『シンデレラ』という高級エステティックサロン。世界的に有名なエステティシャンが経営している店で、店長は『魔法使い』と雑誌に毎月掲載されるような超凄腕。

「ソイツは肌身離さず持っているよ」

車から降りて店を見上げる。見上げるほどデカいとかどうなってるんだよ。ここ本当にエステティックサロンか？なんでエステに高さを要求してるんだよ。

あ、なんか女の子出てきた……。高校生くらいかな？うわ、この時間だと朝帰りじゃん。なんか肌とか凄い綺麗になってるし……。ああ、またご趣味ですか。お盛んなことすごいですね。

「日本の学生って、みんな朝までエステに通うようなものなの？」

「そんなわけあるか。どうせ、あの女のロクでもない趣味で連れこんだのだろう」

あの女、頭の中身は兎も角としてエステの腕に関しては本当に『魔法使い』って言えるレベルなんだよな。人の心を変える感じ？気弱を強気にしたりとか。実際今出てきた女の子も、黒塗りの高級車から降りてきた怪しい3人組に気付いて、ウインクして去っていくとかいう素晴らしいほどの勇氣。

「行くぞ、シクリーザ」

スキューロに先導されて店に入る。そう、今の私はシクリーザ。パッショーネのボスではなく、イタリアから日本に旅行に来ただけの女性。そばにいる二人は一緒に来た友人達。

勿論顔も体格も変えている。変えているといっても少ししか変わらないが、仕方の無いことだ。生まれつきのこのクソ個性、もう少し効果範囲広くしてくれないものか。それが出来たのならこんな場所

に来なくてもよかつたのに。

相変わらず煌びやかな内装だ。正にThe金持ちのマダム方が来そうな場所。うわ、シャンデリア吊るしてある。ここ本当にエステだよな？ガラス張りの螺旋階段とかもう完全にお伽噺のお城だぞ？

所々にある装飾がウザつたい。煌びやか過ぎて目が痛くなる。どこに金かけてんだこの店は。募金でもしてろ。

『シンデレラ』がいるのはいつも最上階の部屋、アイツだけが入ることが出来る部屋らしい。最上階まで全部螺旋階段とか面倒極まりない。エレベーター付けろよつて文句言ったら、お城にはないでしょう？とか言われた。やっぱりここエステじゃなくて城じゃん。

ただ螺旋階段だけならいいが、外見通りこの建物大きいんだよ。5階とか近所迷惑レベルだぞ？日照権の侵害で訴えられればいいのに。

最上階に着いた時には既に額に汗が流れている。前髪がくつついて鬱陶しい。こんな時、自分の体力の無さが疎ましい。精神力はあるのにスタミナがないとはこれ如何に？

「久しぶりだな、『シンデレラ』」

やはりこの店に、この階にいた。『シンデレラ』は機材の後片付けをしていたが、私達が来たことに気づいたのか、気楽に笑顔で手を振っている。シーラが横で驚いている。『シンデレラ』として私に重要視されていた人物が、まさかこんな女性だったとは思うまい。

「あら〜？あらあらあら〜？シクリーザ^ポじゃない〜。いつ日本に来ていたの〜？ていうかその子は〜？初顔^{スタンド}だけど、幽波紋^{スタンド}使いの子かしら〜？」

うざつたい言葉遣いをしながら、『シンデレラ』はシーラを頭のとっぺんから足の爪先までをじっくりと見る。見られているシーラは居心地が悪そうだ。殴つていいぞ、ソイツ。ていうかむしろ殴つてくれ。

「うんうん。いいわね〜。実にいいわ、この子。私の素材としては合格よ〜。ねえ〜今日もいつものやりに来たんでしょ〜？なら、この子も弄つていいかしら〜？」

「お眼鏡に適つたなら良かった。弄つてもいいが時間が無いのでね。

なるべく手短に頼むよ」

「ボス……じゃ無くてシクリーザか。えつと、弄るって何を？」

若干恐怖を覚えたのか、シーラが少し引きながら聞いてくる。私の呼び方はボスではなくシクリーザに統一させている。外でボスなんて年下を呼んでいたら確実に怪しまれるからな。シーラの問いに答える間もなく、『シンデレラ』に肩を掴まれたシーラがそのまま運ばれていく。

ニコニコと薄気味悪い笑顔だ。それだけ欲求不満だったか。

「連れていかれたが、いいのか？」

「いいんだ。そのためにここまで連れてきたんだから。玩具になるのはシーラでいい。私は御免だからな」

正直いつてアイツの個人的な趣味に付き合っていると、なんかメローネを想像しちゃうんだよ。ほら、あの気持ち悪い問診。一応は私も女性だからさ、流石にあんな感じで問い詰められて、あんなキスの仕方とか聞かれるのはゴメンなわけよ。アイツもそんなことするのよ。他人の心を丸裸にするために。対象が思う理想の顔を見つけ出すために。

「俺はともかくとしてボスに茶の一つも出さないと、相変わらず失礼な女だ」

「あら〜？ちゃんとあなたの分も持ってきてあげたのにその言い草は何？」

スキューロのうわ言のような文句に、まるでタイミングを計ったかのようにポットとカップを持って出てくる。あの様子じゃシーラは簡単に捕まったな。待てよ、シーラ今放置されてんの？

「はい、アールグレイよく。砂糖は一つで良かったわよね？」

「……覚えていてくれて嬉しいよ」

嬉しいわけあるか。コイツの問診に紅茶やコーヒーに入れる砂糖の個数が項目にあったんだ。本当に何なんだよこいつ。『ベイビィ・フェイス』の息子でも作ろうとしてんのか？

御丁寧に自分で入れるのは私の分だけ。スキューロはカップだけでカップの中には砂糖が山盛りになっている。しかも砂糖が角砂糖

じやなくて粉末状だ・・・この女、酷い嫌がらせだ。スキューロのと嫌いすぎだろ。

「そういえばニユースで見たわよく。イタリアで凶悪なギャングが一斉摘発を受けたって。イタリア中の警察と世界中のヒーローを総動員したイタリア全土での一斉摘発。確かボスの身柄も抑えたとか」
「ソイツは良かった。私の故郷のイタリアに平和が訪れたのはいい事だ」

「でも私の前にいる二人は摘発されたギャングのボスとその側近。あらくどうしてかしらく？ボスは捕まったはずなのに」

「何が言いたい」

「あらくただの世間話よく。何も関係ないわ」

コイツぶん殴りてえ！って心の底から思えるのはコイツだけだ。キンクリの必殺ブチャラテイ割断チョップ御見舞いしてやろうか？いいやダメだ。コイツがどれだけウザくとも、殺したくてもダメだ。コイツハツカエルコイツハツカエル。なんか暗示かけてるみたいだな。

「それで本題は何かしら？顔だけじゃあないんでしょ」

「正解だよ『シンデレラ』。いいや、彩辻彩」

『シンデレラ』——本名彩辻 彩に依頼したいのは顔だけではない。私が測り損ねているもの、簡単にはいかないもの、そもそも手が足りないもの、今まで確かめるべきものだったのにも関わらず、真実を知りたくないという私の臆病さが見逃してきたもの。

重い息を吐きながら、アタツシケースに付いている四つある鍵の一つを開く。開かれた先にあつたのは横に並べられている三枚のディスク。私の持つ数少ない貴重な四部の幽波紋スタンドディスク。

そのうちの一枚を手に取り、机に置く。

「先日、とある敵が私の居場所を突き止めて、襲撃を仕掛けてきた。私と奴は戦闘に移行した。私が戦うことを選んでしまうほどの実力者だったからな、襲撃者は」

「へえ、殺したの？」

「いいや、駄賃として右腕を置いていってはもらったが、アレはアレで

使い道があるからな。まだ生かしているが、殺すのは時間の問題だ」私のミスで起きたことだが、アホな無能と悟られないように、あえて不都合な部分は言わない。呼び込んだのは私だとか絶対に言うもんか。

「戦っている時、アレは私の幽波紋スタンダードが見えているかのような動きをとっていた。私がディスクを与えていない非幽波紋スタンダード使用であるにも関わらず、奴は私の『ホワイトスネイク』の動きを見ていたのだ」
「ふうん。つまりはく私が『シンデレラ』に来る客に対してく幽波紋スタンダードを見せて、見える条件を炙り出せばいいのね？」

「話が早くて助か・・・早いよバカ」

コイツ、話が終わってないのにディスクぶっ挿しやがったよ。もう抵抗がないとかそういうレベルじゃねえ。笑顔で挿したよ。ていうかまだ挿していいって言ってないじゃん。気が早いんだよ。

「うんん。やっぱりいいわくこの感覚く」

自分の幽波紋スタンダード『シンデレラ』を早速呼び出し、踊るように自分の身体と同調させて旋回させる。楽しそうだなによりだよクソ野郎。

はあーAFOが幽波紋スタンダードを見るのが出来たということには必ず何かしらの個性が関わっているはずだ。でなければアイツが天然の幽波紋スタンダード使用として芽生えかけていたか。五部でトリツシユが幽波紋スタンダードを持つていないにも関わらず、幽波紋スタンダード使用の才能が半覚醒していたという理由で彼女は幽波紋スタンダードを視認できていた。AFOもその口か、もしくはお得意の個性の強奪による何かしらの変化か。

ていうかアイツ、気持ち悪い顔だったからなるべく直視しないようにしていたけど、目はあつたか？もし無いなら見えていた、という表現はおかしいかもしれない。

「いいわくやってあげる。私のお客は私の物。私の物に私が何をしようが私の勝手なものく」

相変わらず自由な奴。客からしたらいい迷惑だ。でもこんなクソみたいな奴でも性格隠していれば世界的なエステティシャンなんだよな・・・。世の中は残酷だ。

「じゃあ、私は彼女に魔法をかけてくるからく、シクリーザは少しだけ

待っていてね」

ヒラヒラと幽波紋^{スタント}で手を振りながら、奥へとまた消えていく。ああアイツの相手は本当に嫌だ。S A N値がゴリゴリ削れていくわ。

あ、でもシーラがどんな変化を遂げるのかは気になるな。シーラも美女なわけだしさ。

「いいのか？あんな女に任せて」

「脳ミソは兎も角として腕や『信頼』は確かだからな。頼りたくなくても頼らなければいけない。そういうラインにアイツはいるんだよ……。本当に、なんであんなのと出会ってしまったんだか……」

彩辻彩と出会ったのは五年前、イタリアのミラノだった。近々ミラノでファッションショーが行われる予定だったらしく街はいつも以上に人で賑わい、テレビのカメラは連日会場前や、街に入るモデル達を追いかけていた。

そんな時、私は迷子になったのだ。

いや、普段ミラノの街とか行かないし。あの時ミラノに行ったのだからちよつと欲しい限定品があったから。ス、スキューロには勿論伝えたよ？まるで『はじめてのおつかい』をする子供を見守る親のような目をしていただけ……。

まあ私の普段のホームはマジョーレ教会付近だったからミラノまで行くのは実質初めてだったんだけど、スマホのGPSとかあるからいいかなつて。まあそれが失敗だったんだけど。

予想外にも人が多かったのだ。多すぎるほどに多かった。勿論の如くあちらこちらから乱れ飛ぶ電波によって私の電波は壊滅。GPSなど海の上に現在地を指し示した。

完璧と言えるほどの迷子。人波にあれよこれよと流されて、いつの

間にかどこぞのカフェに行きついていた。

休憩がてらにカフェに立ち寄り、席がないので相席を頼んだ。その時に出会ってしまったのだ。当時、未だ駆け出しを終えたばかりのエステティシャンであった彩辻彩と。

初めて出会った彩辻は何故か突然発狂したように暴れだした。なんだコイツジャンキーか!?!と思うほど唐突に。なんの前触れもなくだ。頭も痛いのか両手で抑えるほど。体を振り回すのは痛みを誤魔化そうとしているのか、それとも耐えきれないからか。

発狂した奴に関わりたくなんてなかったが、流石に人の目もある。私は何もしていないという証明のために一応大丈夫かと声をかけ、肩に手を置いた。

するとどうだ。突然私の両肩をガツシリと掴んで、私の素材になって欲しいと懇願してきた。お前さっきまでの発狂はどうしたア!?!と突っ込むようにあの時反射的にキンクリでぶん殴ったのは私の脳がフリーズしたからだ。いや、発狂していた奴に突然素材になってくれと言われたら、誰だって反応なんてできまい。出来たら凄いや。いや、お世辞抜きで。

流石に幽波紋スタンドを持っていても怖かった。当時の私は十代前半の少女でしかない。まあその頃から私の平穏を求めるスタンスが根付いていたのも理由の一つか。目立ちたくなかった私は速攻で逃げた。人混みに入って身長の高さを利用して足の間をすり抜けて、何とか遠くまで逃げた・・・と思っていた。

彩辻は私の匂いを嗅ぎながら辿ってきたとか、訳の分からないことを言っただけのことを追ってきた。血眼になっただけか弱い少女を追いかけるとかまじキチガイの所業。

もういい加減本気でぶっ潰してやろうかと思った。たかが人間一人、事故に遭うのは不自然じゃあない。この女が街を走り回っていたのは周知のこととなった。なら、ここでたまたま事故に遭って亡くなったって、問題は無いじゃあないか。

行動に移そうとした時、どこからかスキューロが現れて彩辻をぶっ飛ばしたんだ。アーマー状に固めた氷の拳で。殴られた彩辻は地面

を二、三度バウンドしながら転がった。

流石に気絶したかと思ったら、まさかの復活。第二ラウンド開始じゃあ！と言わんばかりに鼻息を荒くしていた。

まあ勿論ながら勝てる訳もなく、スキューロがトドメを刺そうとしていたところを拘束させた。いつでも殺せるように『マン・イン・ザ・ミラー』で首から下を鏡の世界に送って、ギャングダンスを踊りたくなるような状態にしてやった。

尋問紛いをして吐くわ吐くわ。私のような人間は見た事がないだの、美しさに手を加えて更に美しくしたいだの。まあ素材と言われるよりはマシだったかな。あんまり褒められたこととかないから、少しは気分が良かった。

そう、気分を良くしてしまったのだ。不用意なことをしないという条件で、アイツにシクリーザ^私の顔を弄らせてしまったのだ。まあ、当時は丁度、手が空いたら探していたからな。特に『顔』に詳しい人物を。

私の持つ体格変化の劣等個性、この個性はどうかやら覚えた肉体の形を表に出すものらしい。ああ、つまりだ。私の個性はPCにダウンロードされている二枚の画像のどちらかをPCのホーム画像にするものだ。これなら分かりやすいか？

要は、私には二つの顔があるのだ。フェリシータとシクリーザ^私。しかし流石は違いが薄すぎるほどの劣等個性。指紋も声帯もDNAでさえほとんど変わらない。最早無駄ア！と言えるほど。だから根本的に全てを変えたかった。

だけど普通に整形とか怖いし、何よりこの個性の影響でどんな風に作用してしまうのか分からない。

私の不安を解決してくれそうな幽波紋^{スタンド}はあった。『シンデレラ』という戦闘力皆無の幽波紋^{スタンド}が。スキューロに何人か用意させて使えるかどうかの実験をしたが、どうやら『シンデレラ』の扱いには相当のセンスがいるらしい。そもそも幽波紋^{スタンド}とはその大半が才能の延長線上にあるもの。この幽波紋^{スタンド}はその方向が特に顕著に出ている。『ヘブンス・ドアー』と並んで元の所有者が屈指の才能マンだったからな。

だから探していた。私の顔を変えられるほどの『シンデレラ』の使い手となれる存在を。ただの、そこら辺にいる肩書きだけの無能ではダメだ。才能のないものに幽波紋スタントを、私の顔は預けられなかった。

彩辻の実力は素人目でも分かるほどに、文句無しのパーフェクトと言えるものだった。最早別人にまで見えてしまうほど。

期待は少なめでスキューロと一緒にその腕を見てやったら、まさかのビックリな程の手腕。やっぱりタガが外れた人間ってのは凄いだねって思い知らされたよ。

即採用して幽波紋スタントを与えて慣れさせて、いざ開始！だと思つたらまさかの問診からスタート。自分の好きなものや日常での行いなど、完全にメローネみたいなのを言い始めた。挙句の果てにはキスの仕方まで。

問診だけで一時間。アホじゃねえのかと叫びたくなるのを我慢していざスタート。整形は初めてだったから緊張していたが、途中で緊張の糸が切れて眠っていたらしい。

後でスキューロに聞いたが、彩辻は熟練の幽波紋スタント使いのごとく、余計なことはせずに何も問題なく処置を終えたらしい。

それで、数週間後に包帯を取ったらあら不思議、そこには新しいシクリーザの顔があつたではありませんか。

実際に体感してみても興奮するほどの素晴らしい腕だったため、今後もし良い関係を築いていきたいと口を滑らしてしまった。すると奴は獲物がかかるのを待ち望んでいた詐欺師のように、極上の笑顔で私の両手を掴んで、こちらこそと言ってきたのだ。

全部終わって、帰つたときに後悔したよ。だって冷静になつて考えてみなよ。周りを気にしながら怯えている人間が大好きとか趣味悪すぎだろ。私はそんな変態と、今後とも仲良くしていかなければならないのだ。

友好の証として『シンデレラ』を貸し出してしまっている。もういつそのことスキューロに始末させようか悩んだが、また顔を変えなければならなくなるかもしれない。それはいつになるか。一年後か、一ヶ月後か、一週間後か、明後日か、明日か。

いつ何が必要になるか分からない、もしそこに存在していたとき実際に近づかなければ対処のしようがない恐怖。

性格は屑だが、彩辻は確かに使える。私という彩辻にとつての最高の餌をぶら下げること、制御する。信頼してもいいのだが、うかつに信頼してしまえば絶対に取り返しをつかないことになる。そんな気がしたのだ。

そこから現在に至るまでの数年間、彩辻とシクリーザ私の関係は続いた。私は会うたびに玩具にされて、彩辻はそのたびに腕を上げた。スタンド幽紋波を常時与えているわけでもないのだ。世間が言うとおおり、もはや彩辻の成長は『魔法使い』と呼べてしまうほどまでである。

成長し、名が知れ渡り、人が金を積んで彩辻に『美』を求め、彩辻は私に金を振り込み、私は彩辻に遊ばれる。

こんな関係さつさと終わらせたいと思うが、この関係が彩辻の制御を取り持っているのだ。彩辻は私に忠義があるわけではなく、脅しに屈するようなまともさはない。

流されるがまま、私は彩辻を受け入れていた。

「終わったららしいな」

嫌な回想をして適当に時間を潰していたら、スッキリした顔になった彩辻が出てきた。シーラは・・・うん、ご愁傷様としか言い様がないな。顔とかはちゃんと綺麗になってる。だが明らかに顔に疲れが浮かんでいる。本当にエステしていたのか疑問に思いたくなる光景だな。

「準備は出来ているわ。さあ、たあくさあん楽しみましょ」

笑顔で手招くな。ていうかシーラじゃ満足出来なかったのかよ。

「スキューロ、シーラを看病してやれ」

スキューロが相手ならシーラも嬉しいだろ。

私はゴクリとわざと音が出るように唾を飲み込みながら、この世とあの世の境目にも見える敷居をまたいだ。

「相変わらず綺麗で真つ黒な子」

人一人がすっぽりと収まる台の上で眠っているシクリーザを見下ろし、使い慣れた器材をもてあそびながら、彩辻は頬を緩める。

彩辻彩は『美』の探求者である。それは世間が言うような生易しい物ではなく、悍ましく冷徹、執念とも呼べるほどの物である。求める『美』のためならば、人など薬物などの実験で使われるマウスと同じ認識である。それはつまり、『美』のためになるのなら、たかだかマウス程度の犠牲など考慮しないということ。

この悍ましい精神は天性の物だったわけではない。この個性社会で生きていくうちに、芽生えてしまった物なのだ。誰にも知られず、隠れ積みながら培われてきた物なのだ。

彼女は平凡な人間だった。ただ少し、周りとは毛色が違う個性を持っているだけで、どこにでもいる人間だった。そんな彼女がシクリーザをドン引きさせるほどの変態となったのは、やはり個性のせいだった。

彩辻の個性は人の感情を色彩として認識するもの。幸福やそれに近い感情は明るい色に、負の感情は暗い色に。第三者から見れば無個性として見られるこの個性は、確実に彩辻の精神を歪めていった。

彼女は優しい人間だった。人を喜ばせたい、幸せにしたいと心のそこから思っていた。それに対して持ち得た個性は、まさに最高の代物

だった。学生の頃から夢を抱いていた彩辻は、人の観察を趣味としていた。彩辻の目に見える人の持つ感情の色。それらの違い、人による差違を判明させたかったのが理由だった。

高校三年間、長く短い時間を使って導き出した答えは、『美』だった。観察対象に女性が多かったのもこの答えになった理由だろうが、根本はそこではない。

男であれ女であれ、幸福な感情を出している人間は総じて外見に自信を持っていた。ファッションではなく顔。顔の善し悪しが感情に対して大きく関わっていたのだ。逆に顔が良くない人間は、自分に自信がないのが行動にも丸見えで、他人の視界に入らないように徹しているような行動を見せた。

そこにある感情が怯えだと気付いたのはすぐだった。そしてその解決法もすぐに見つけ出した。

高校卒業後、抜群の成績を保持していた彩辻はエステティシヤンの道に進むべく、教師達の制止を振り切って国内屈指のエステ専門学校に進学した。

観察によつて『美』に並々ならぬ興味を持ったため、完全な独学で鍛え上げたエステの手腕はプロにさえも引けをとらないと判断され、いずれは世界に通用すると判断された彩辻は特別に、世界で名を轟かせているエステティシヤンに、専属で指導を受けられるようになった。

専属で指導してくれるという人の元に弟子入りしてから数年、彩辻の腕は既に師となった人物を超えるほどのものとなっていた。そこに対する師は悔しさや嫉妬を吐露するも、初めから分かっていた結果だと割り切つて彩辻にとある仕事を任せた。

近々、ミラノで行われるファッションショー。その前準備となるモデル達のエステを行えと言つたのだ。

これを彩辻は渋々と引き受けた。

もとより、彩辻のしたかったことは負を正に変えること。今をときめく者を美しくするためではない。だけどイタリアに来てから扱うのは正の者だけ。偶に来る負の人間も、少し手を加えるだけですぐに

反転してしまう。

この頃からだろう。彩辻の歯車が歪んだのは。

長い時間を過ごすうちに、彩辻は腐っていつてしまったのだ。元来の目的は既に忘れ、自分が何故こんなことをしているのかと疑問にさえ思ってしまう。行動原理すら忘却してしまった彩辻に残ったのは、エステティシャンとしての天才的な腕だけだった。

ミラノに滞在してからも、高校時代からの日課として行われている人間観察は、ただ視界に色を映し、退屈を溜め息として吐き出す時間だった。もうどんな色がどんな感情を表しているのかも分からない。いろんな感情が混ざり合ってぐちゃぐちゃになっている。もう気持ち悪いほどに。

日本に帰ろっか、とこんな思考が頭の片隅に小さく生まれ始めた直後、相席を頼まれたので適当に受け入れた。彩辻にとってはそんなこととはどうでもよかったのだ。だが、相席してきた人物を横目に見た瞬間、彼女の視界は消えた。否、消えたと錯覚するほどドス黒い色をした膨大な感情が視界を埋め尽くしたのだ。あまりにも大きすぎる負の感情。その情報量が脳が気を狂わせるほどの激痛を発する。

弾くように椅子を膝裏で倒しながら立ち上がり、呻き声を上げながら飲んでいたアイスコーヒを腕で倒し、痛む頭を懸命に抑える。

大丈夫か？と聞かれて相席を頼んできた少女が彩辻の肩に手を置いた。触れられたことよって頭痛の中、彩辻はまたしても少女を視界に収めてしまった。今度は横目でなく正面から、二回目というほんの少しの耐性をつけてしまつて。

頭を破壊するほど鳴り響いていた頭痛が波のように引いていく。次に彩辻の頭を支配したのはやはりどうしようもない程の目の前の感情だった。

理解不能なまでに大きくて、理解不能なまでに見えなくて、理解不能なまでに暗闇で、理解不能なまでに負の感情で。

頭がスツキリとしていくのを彩辻は感じた。人生で一度味わえるかどうかという程、頭の中がクリアまっさらになっていく。いや、もしかしたら本当の意味でクリアまっさらになっているのかもしれない。

運命が絡み合ってた。私は何も知らないけど

「なあ、一つだけ教えてはくれないか？」

彩辻の処置が終わり、籠の中に入っていた服を着直す。彩辻は相変わらず、シクリーザの着ている服は派手過ぎないかといつも思ってしまう。必ずといっていいほど身体の一部が露出しているのだ。まあこれはシーラにもスキューロにも見られる光景ではある。イタリア人は皆こうなのか？と偏見を抱いてしまいたいそうになる。というかその服どこで売っているんだと言いたくなるものばかりである。

「何が聞きたいのかしら〜？」

「シーラの処置の時、仕込んだのか？『シンデレラ』の持つ本当の能力を。運気を呼び寄せる相を、仕込んだのか？」

『シンデレラ』の全身整形はあくまで能力の一部分に過ぎない。その本当の能力は人間の外見上のパーツを取り替え、肉体のイメージを交換することで、運を呼び込む相に変えるという能力。

この能力は彩辻が《シンデレラ》と称される所以となったもの。曰く彩辻の所にエステに行ったものは、その後運気が良くなるということ。

当然の如く噂は広がり様々な場所に取り上げられ、今では『魔法使い』となつてしまった。だが種が分かっているシクリーザからしてみれば、そんな能力は最悪の類のものだ。

この能力は永劫続く訳では無い。元々の『シンデレラ』のDISC保持者であるシクリーザでさえ、というか原作ジョジョにさえ、この能力の全貌は明かされなかったのだ。

原作では保有者が決めたルールに従って、『シンデレラ』の能力が解けるようになっていたが彩辻は外見だけならいつまでも使い続けることが出来る。ハツキリ言つてこの能力は底が知れない。

運気の上昇がどれほどのものかさえも明かされていないのだ。不明瞭な能力だ。そして何より、上昇があるということは下降もある。この能力が、未来にある運を使っている可能性さえ否めない。幽波紋スタンドとはそういうものだ。能力の際限がない。広がるところまで広がっ

てしまう。それにDISCとして幽波紋スタンドを与えることにより、幽波紋スタンドその物に対する何らかの影響さえあるかもしれない。

シーラにこの運の能力が使われていた場合、能力が切れた時シーラは不幸だと思ふことがあるだろう。そして幸福だった時間に甘えて、連鎖的な不幸が始まる。人生とはそういうものだ。一つの失敗が更なる失敗を呼び込むように、運もまた同じ。

もしシーラの運が下がり続けたらどうなるだろうか。隠れているシクリーザの居場所が割れ、正体がバレて、刑務所にドーン。そして極悪ギャングのボスとして世間に晒しものにされる。想像すらしたくない未来だ。

この能力はシクリーザにとっては禁忌だ。故に未来の危険を、あるかもしれない可能性を事前に排除するのは当然のこと。だから殺してでも使わせない。

「まさか〜私があなたのお願いを聞かないわけじゃないじゃない」

さすがに狂つていようとも殺されるのは御免だ。幽波紋スタンドを扱い、かつて不意打ちで死なない程度にぶん殴られたからこそ、シクリーザの幽波紋スタンドが彩辻を一撃で殺せるのは知っている。

命あつてこそその探求。他人の命はどうでもいいが、流石に自分の命には拘りたい。

「ならいい。それなら相変わらず完璧な技術だよ。惚れ惚れする程だ」

鏡を見て両手で顔に触れる。そこにあるのはシクリーザの顔なのに、普段見ていたのとは違う印象を受ける。顔の部位などは弄つていないのにここまで変わつて見えるとは、流石としかいようがない。「そういえば〜一つ聞きたかったんだけど、どうして日本に来たの〜?」

高跳びする場所はアメリカにロシアやオーストラリア、それこそハワイのような場所でも良かったはずだ。シクリーザやスキューロならば国外に邸宅を幾つか持つていてもおかしくはない。容易に想像がついてしまう。

「ああ、その事か。まあ、そうだな。アレだよ。」

友達に会いに来たんだよ」

その一言に、彩辻は当然ながら最高の笑顔を返した。

「終わったぞ。さあはやく行こう・・・シーラ、何をしている」

ようやく変態から解き放たれたと思ったら、シーラが鏡の向こう側とキスするんじゃないかってくらい見つめ合っていた。うん、分かるよ。今のお前の気持ち。アイツのエステ受ければ最初は誰だってそうなるよ。

明らかに別人に見える自分に戸惑っているな。顔のパーツは少しだけ変わってるかな？ただアイツの着眼点を組み変えれば少しが大幅に変わったように見えるんだよな。

「ボスも別人みたいに見える・・・」

「それがアイツだよ。本当に気持ちの悪い腕だろう？問診はされたのか？」

「ええ、小一時間ほど。明らかに関係の無い内容を延々と繰り返されてたわ。最後辺りなんてやるときは体位まで聞いてくるとか、アイツどうかしてるんじゃないの？」

え？アイツ暫く見ないうちにエスカレートしてんじやん。やるつてアレだよな？あれがああしてああなるあのアレだよな？私の時はそんなこと聞いてこなかったぞ。やはり変態だ。成長の方向性も変態一直線だ。

「スキューロ、時間は？」

「まだ少し余裕はあるが、どこか寄ってから行くか？今の時間帯なら昼食にするのもアリだとは思うが」

「いや、遠慮しておこう。私のいつもの食事帯からは早すぎる。それ

に、日本の駅弁に興味があるんだ」

「分かった。着いたら買っておこう」

いや、私まだ興味があるしか言っていないぞ。あーあ、多分このままじゃ駅弁一つずつ買ったりしそうだな。持ち運びは・・・多分シーラか。なんかこの面子だとシーラってパシリにしか思えないな。

そういや昨日までは堅苦しかったけど口調はいつもの強気なものに戻ったな。まあそういういったフランクな感じは責めないよ。外にいる時にそんな話し方されたら変に思われるかもしれないし。

彩辻の見送りをエンジン音で無理矢理かき消して車を出す。ナイスだスキューロよくやった。どうせ彩辻は最後にまた要らんことを言うからな。聞くだけ無駄だ。ストレスが溜まるだけだ。

『シンデレラ』から車を出して、駅までは一時間足らず。まあ車は進まない。それもそのはず。また性懲りも無く敵とヒーローが街中で追いかけて。普通に敵が出るなら問題なく普通に行けた。なにせ敵もバカではない。下手に時間をかければ応援を呼ばれて確実に負けるからだ。だからまずは逃げを選びながら、出来れば応戦して撒くといった風にするのだ。

問題は脳天気な一般人だ。コイツら、敵とヒーローが現れたと見るや否や、一時的に車列が停止したのをいいことに、道路を占領して戦闘している敵とヒーローを囲んで観戦し始めやがった。

逃げろよスカタン。巻き込まれて死にたいのか。この世界の日本は平和ボケが酷すぎるぞ。こんなのが私の元出身国なのか・・・。

本来であればヒーローが逃げるように言うべきだろう。だがヒーロー達が欲しいのは功績と名声。一般人の前でカツコよく華麗に敵を撃破！人気はオレの物だぜヒヤツハー俺を見ろオ！とか思っている。怪我させる前にはよ散らせ。新幹線まで余裕だった時間があるうねえんだぞ。

ああクソ。だからヒーローは大嫌いなんだ。大体、生温いんだよ。

「あまり苛立つな、ボス。ボスの不機嫌はシーラにはまだ早い」

「あ・・・すまないシーラ」

自分の身体を抱きしめて縮こまって、私そんなに怖かった？ホント

にごめんシーラ。いや、待つて何で震えてるの？え、私が不機嫌な時って周りの人間こんな感じになんの!?だったら普段の教会の大鐘楼の中とかえらい惨事になってるぞ?!主にゲームとかゲームとかのせいで!

「それよりも、本当にどうなっているんだ日本人というのは。あまりにも危機管理能力が低すぎる。しかもこの状況、まるでプロレスの試合でも見ているかのようじゃあないか」

ふむ、言い得て妙だな。リングは道路。ロープ兼観客。そして乱入してくる選手。その度に観客は盛り上がりを見せる。うわ、まんまプロレスじゃん。

イタリアは敵よりもギャングや麻薬が身近だったからな。明確な暴力で解決出来る脅威が相手じゃなかったら、ヒーローなんてほとんど無能に終わるからなー。むしろここまで暴力的な他国が世紀末にも思えてしまう。あ？

「どうした、ボス」

私が事件とは真反対の一点を見つめているのが気になったのか、スキューロが話しかけてくる。だがスキューロの声は私には遠く聞こえた。私の視界内にいるのは黒のパンツにパーカーの男。その男から見えた顔は、どこかボロボロに見え、見覚えがあった。

いや、あの顔知ってるわ。え、なんでアイツここにいの？死柄木弔じゃん。そうだよな？なんか特訓でボコボコにされた後みたいな顔してるの、絶対に死柄木弔だよな？ほら、携帯の持ち方だって指一本だけ外してるし。

「気になっているのはあの黒い男か？」

スキューロも気付いたらしい。まあ、見ればなんとなく分かるよね。アイツのドス黒いオーラってのが。明らかになんか周りから浮いてるんだよな。カモフラージュ能力無さすぎ。

「いや、なんでもない。見ないでおけ。今はまだ奴を気にする必要はない」

「まだ、か」

「そう、まだまだ」

私は運も信じるし運命も信じる。運とは信じていればミスタのように確実なものに変わる。運命も信じていれば確実なものとなる。

私と奴の道がここで交差したのは運命だ。運命とは引力であり、引力とは出会いだ。

オールマイトと緑谷出久が会うべくして会ったように、人には必ず見えない運命の糸が絡み付いているのだ。

そしてそれは私達にも言えること。私はスキューロに出会い、スキューロと出会ったことでシーラと出会った。その果てに、信頼を与えたのだ。

「まだ、安心は私の心の中にある」

私が転生者であるならば、恐らくは『原作』という大きな運命に絡まれる。星形の痣の家系なんか正にそれだ。必ず邪悪に出会うように、転生者という存在も、関わらずにはいられないのだ。そこに関しては納得もしているし、諦めもついている。

リゾットも言っていた。失敗は反省して、前向きに利用するのだ。『原作』に何かしらの形で大きく関わるということを前向きに利用するのだ。どんな形であれ、最後は私が『幸福』ならばそれでいい。

あまり信用はならないが『シンデレラ』や、それに親衛隊にスキューロもいる。幽波紋^{スタンド}DISCもまだ沢山ある。最悪、あまりやりたくはないが『ホワイトスネイク』のDISCで私の代理人を作ればいい。辿り着ける勝利はいくらでもある。大切なのはどの勝利を掴むかだ。掴むべき勝利を間違えなければ、未来は私の手の中にある。

この後めちやくちや新幹線に乗り遅れた。

死柄木弔。A F Oの後継者として見出された青年。自傷癖か後継者になるための修練か。その貌は傷で溢れており、悍ましささえ感じさせる。

未来の王は社会勉強として、A F Oに校外授業のため、適当に暴れ回っている敵を^{サイラン}観察してくるといいと言われ、部下の黒霧によって隠れ家から放り出された。弔としてはこんなこと、何度も何度もやらされてきた。今更必要とは思えなかった。

前を見ればいつもと同じ、くだらない木っ端の掃いて捨てるようにいる敵とどこにでもいるクソヒーロー。周りを見れば傍観者気取りの一般人^共。ああ、イライラする。あたかも自分は関係ないと高をくくり、テレビでも見ているかのような顔をしているこいつらを壊してやりたい。ついでに、最近の鬱憤の八つ当たりもしてやりたい。

最近、久しぶりに会ったA F Oの右腕がなかった。綺麗さっぱり、根元から寸断されていた。教師として、育ての親として関わってきた弔は、その光景に戸惑った。5年前に弱体化したとはいえ伝説の悪、世界の頂点と言っても過言ではない実力者なのは嫌でも知っている。そんなA F Oが、無様にも右腕を切り落とされるといふ醜態を晒していた。

A F Oには『超再生』という個性がある。文字通り肉体を治癒ではなく再生する個性だ。この個性はA F Oをして、5年前の段階で手に入っていれば、弱体化することもなかったと言わせるほどの個性。唯一の欠点として治ったと看做された傷は再生できないという物があるが、それを差し引いても十分に強力だ。

A F Oはその個性を使わなかった。誰がやったか、治さない理由を聞いても何も答えてくれない。この接し方に、未だ精神の成長が未熟な弔が不満を抱くのも当然。更に追い打ちをかけるように放り出された。八つ当たりの一つもしたくなる。

^{サイラン}戦闘が終わった。増援が来ていたのか、二人のヒーローが捕まえた敵を横目に、フアンサービスに熱心になっている。悪を為した者が正義によって裁かれる見飽きた光景。今ここでヒーロー含む数人を壊

したらどれだけ楽しいか。喜色に顔を染めているやつらの顔は恐怖に変わるだろう。傍観者を気取っている屑を殺すのは、きつと素晴らしい愉悦になる。

だが、ここで問題を起こしても何のメリットもないことくらい、精神が未熟な弔にも分かる。弔には進むべき未来がある。今が準備期間なのは弔とて理解している。見るものは見た、さっさと黒霧を呼ぼうとした直後、背筋に氷柱を差し込まれたかのような感覚。ぞつとしている。人としての感性が壊れている弔が、何かに怯えている。

この怯えは知っている。かつて模擬戦でAFOと戦ったときと同じか、それ以上。生物としての絶対的な強者が放つ威圧感。

弾かれたように辺りを見る。正面、違う。後ろ、違う。左右、いた。威圧感の発生場所。ヒーローの戦闘で足止めを食らっている車列の先頭にいる外車。運転席に座っている男、ではない。確かに奴も実力者なのだろう。経験から分かる。間違いなく強い。だが奴ではない。確かにあの男は強い。実力は間違いなく弔よりも上だ。だがあの男からはAFOのような恐怖は感じられない。

しかし間違いなく気配は車からした。

目を凝らして注視する。無意識に出していた右手の携帯は、既に回収役の黒霧にかけられている。ああ、これだったのか。こいつだったのか。先生が見てこいと言ったのは、そこで回収されている木っ端ではなく、アレだったのか。

弔の視界には映っていた。帝王の姿が。AFOと同じか、あるいはそれ以上。恐らく今の弔などゴミのようにあしらわれて終わりだ。ともすれば相手にさえされないかもしれない。

そんな事実が気に入くない、気に入くないよなあ。

気に入らないから壊す。弔にとっては聞き飽きた至極当然の教え。AFOがどうしてオールマイトを殺したのか、正しい意味でようやく理解できた。いずれ頂点に立つのは弔だ。そうでなくてはならないのだ。そうなるための教育も施されている。

あそこにいたのは間違いなく頂点に座する者だ。だがそこに座るのは弔なのだ。そうでなくてはならないのだ。

強くなろう、賢くなろう、邪悪になろう。今度会うときは無視なんて出来ないように、敵として、脅威として認識されるように。その時は弔も頂点にいるだろう。そして、頂点は二人もいらぬ。

「お待たせしました、死柄木とむ——」

迎えに来た世界的にも貴重な個性を持つ黒霧と呼ばれる、普段はバーテンダーをしている男。黒霧は元々はAFOの部下だったが、AFOの意思により将来的に弔の右腕となることが決まっており、黒霧自身もそれを容認している。右腕になる存在だからこそ、弔の成長はAFOと同じくらい近くで見えてきた。

いつも通り、AFOの課題で外に出されていた弔を個性で迎えに行った。黒霧の『座標移動』はつきり言ってもものすごく便利だ。視界内ならどこでも自由に、遠隔でもワープさせることが出来る。敵の攻撃を敵自身に食らわせることも出来る。下半身だけワープさせれば自由を奪うことも出来る。

座標を教えてもらい、ゲートを開けばそこは薄暗く小汚い路地裏。どんなにヒーローが飽和しようが、こういう場所が消えることはない。そして基本的に誰かが来ることはない。

はじめは、そこにいるのが誰だか分からなかった。だが少しして、そこにいるのが弔だと理解することが出来た。正確には、外見を視界に納めることで、だ。そうしなければ、黒霧は弔を認識することが出来なかった。

少し前にAFOが苦言を漏らしていたのを黒霧は聞いていた。弔の肉体的、个性的成長は期待以上だ。だがその反面、精神的、悪的成長が芳しくない。前者の成長はトレーニングなどで筋繊維を破壊して自然治癒で強くすればいい。だが後者は『経験』が必要になって

くる。

これに関しては弔自身の問題だ。はっきり言って黒霧にはどうしようもない。最後の一押し、卒業式の計画は既にある。いや、そちらに関しては凶らずもそうなる。十分な才能の種はあるが、そこまで育てなければ、全てに意味がなくなる。

だが、ほんの少し、目を離したただけなのに弔は変わった。黒霧が認識出来なくなるくらいに中身が変化したのだ。それは洗剤同士を混ぜ合わせて出来る有害物質のように、邪悪の劇物が誕生していたのだ。

今はまだ青いが、いずれ、そう遠くない未来に最低の悪になるかもしれない。AFOの後継者として相応しいほどの邪悪に。

「おい、さっさとゲートを閉じろ」

声の中身にも変化があった。素晴らしい成長だ。誰がやったのか、何が成長させたのかは分からないが、弔を飛躍的に成長させてくれたことには感謝しかない。これにはAFOも満足するだろう。

弔に言われてゲートを閉じる。弔はアジトのバーのいつものカウンター席に座り、黒霧もカウンターの中间に戻る。いつもとは違って、心なしか機嫌が良さそうだ。

「何かいい事でもあったんですか？」

「俺、そう見えるか？」

「ええ、とてもいい笑顔をしていますよ」

「ならあったんだろうな。とても、いい事がさ」

そうですか、と言っつていつも通り使っていないコップを拭く。AFOにいい報告が出来ることで、黒霧も少し気分は良くなっていた。

どうやら閑話休題したいらしい。処理に困っただけ
なんだけど

昼過ぎ。昼食終わりの会社員達や学生達の喧騒から背を向け、スキューロは路地裏の闇に紛れていく。『シンデレラ』に行つた日からもう一ヶ月。都内から少し離れて静岡県に居を移した。

ここはホームのイタリアではないため、途中何度か住処を変えることがあつたが、AFOの時のような問題は一切起こらなかった。

ボスも落ち着いて、『平穩』と言うに相応しい生活を送れている。少なくとも幽波紋^{スタンド}を出すようなことは何も無い。

日本にいない親衛隊達も『残り滓』の始末を終え、今はそれぞれがそれぞれの時間を過ごしている。シーラも護衛の仕事のみとなつている。

現時点で外敵に対する仕事をしているのはスキューロのみ。

「なあそこのお前達。少し聞きたいことがあるんだが」

路地裏に屯している三人の男。青年と呼べるほど若くはなく、中年と呼ぶには些か早すぎる。着ている服の色は各々違うが全員がスーツで統一されている。

話しかけられたのが気に食わないのか、それともスキューロの態度がカンに障つたのか、男達はガンを飛ばしながらスキューロに近づく。

距離がだんだんと縮まっていき、鼻がぶつかり合うほど互いの顔が近くなつた。スキューロの体格は良く、目を合わせるには首を下に傾けなければならぬ。そうすると自然と見下ろすような形になる。

「見下ろしてんじゃねえぞ、ガキツ——ツアツ、テメツ離しやがれ
!!」

「早速武力行使か。少し頭に血が上るのが早すぎるんじゃないか？俺はただ、ほんの少しばかり聞きたいことがあると、言っただけなんだぜ」

スキューロの頭部を掴んで頭を下げさせようとした所を、腕を掴ん

で握り潰すように力を込める。掴まれた男は振りほどこうと身をよじるが、スキューロの握力はそれを許さない。

いや、スキューロの握力だけではない。スキューロの腕に重なるように、幽波紋スタンドの腕が浮かび上がる。まるで纏っているかのように。だがそれが見える者は誰もいない。

「調子乗ってんじゃねえぞ!!」

スキューロを囲んで様子を見ていた二人も堪忍袋の緒が切れたらしい。表面がメタリックな金属に変化した片腕と、サイレンサー付きの拳銃がスキューロに向けられる。だが腕は振るわれることはなく、拳銃は弾丸を吐き出す前にその形を変えた。

「お、オワああああ!!」

「ヴオオオおおおおお?!」

金属化の個性を持つ男はどこからか出てきた数十を超える『メス』で、金属化した腕と共に身体を穴だらけにされた。偶然か必然か、心臓などの重要器官は一切傷ついてはいない。針治療で痛みが出ないツボを針で刺すように、痛みと出血量の多い場所だけを正確に切り裂いている。

拳銃を持っていた男は突然口から剃刀を吐き出した。一や十では数え切れない。まるで蛇口から出る水のように絶え間なく剃刀が口内を切り裂きながら血と共に吐き出される。

「ようやく話を聞く準備が出来たな。では質問を続けよう。抵抗はオススメしない。お前だつてこうなりたくはないだろう? 大人しく、正直に話すんだ。A F O、そして敵連合。どちらかの名前に聞き覚えは?」

「な、ない!!」

仲間二人の突然の再起不能とも取れる光景から、怒りは怯えに早変わりした。目の前にいるスキューロから伝わってくる底知れない恐怖に当てられ理解した。この男はやると言ったらやる人間だと。一切の躊躇なく、家畜を殺すように冷淡にこなす男だと。

本能が恐怖したため、もはや彼の口は嘘をつけない。目の前で実演された攻撃。全身を無数の刃物で刺される、口から剃刀が出てくる。

この奇妙極まりない現象を受けた仲間と同じ目に遭いたくはなかった。

「ふむ、どうやら知らないらしいな。では次だ。『オーバーホール』。この名前に聞き覚えは？」

「そ、それは・・・」

知っている。その名前はよく知っている。三人の男達が所属している組織の若頭。頭もキレ実力もある。こんな場所で屯しているチンピラヤクザとは違って、上に立つ才覚を十分に持った男。だが若いからか、もしくはは行動からか批判も多い。現在倒れて意識不明になっている組長。その組長を意識不明にしたのはオーバーホールでないかという噂もある。

気に入らないのはこの男も同じだ。そもそもこの男が憧れたヤクザというのはこんな時代でも任侠を守り続けた組長のような『漢』なのだ。だがオーバーホールは組長の掲げる任侠に背いた行為ばかりだ。

アレだけ組織で手を出さないと決められていた薬の売買に手を出し、最近では組長の遠縁の娘らしき少女を、何やら実験台にしているらしい。いくら己がクズとはいえ、流石に人として嫌悪感を覚えずにはいられない。

そんな気に入らない奴だが、裏切ることは果たして任侠として、『ヤクザ』としてどうなのか。

「その反応、何か知っているな。何を知っているか教えて貰おうか。言いたくないなら言わなくていい。時間はいくらでもある。とことんだ。とことんやろう」

その言葉と共に、スキューロのコートが靡く。風は通っていないのに、まるで強風でも吹いているかのようにバサバサと音を立てながら。

「お前達が鏡の中に入ることを、許可しよう」

視界は歪み、世界は反転した。

「有益な情報だった。感謝する」

拷問が終わり、世界の歪みは消えてなくなった。先程まで拷問していた男を投げ捨てる。ドチャリ、という音を出しながら肉の塊が地面に投げ捨てられる。明らかに痛そうな投げ捨てられ方だがどうでもいい。死人達に気を使うほど、スキューロという男は優しくもない。

「中々粘った方じゃないか。イタリアのチンピラ程度なら最初の一発で洗いざらい吐いてくれるんだが。成程、これがヤクザの持つ任侠という物か」

捨てられた死体はどれもグチャグチャだった。顔が内側から弾けていたり、手足が細かい穴だらけだったり。まるで何らかの武器を使っていた以外は殺し方に統一性がない。

痛ましく惨たらしい光景を見下ろしながら、スキューロは懐からメモ帳とボールペンを取り出して、聞き出したことを書き加えていく。本来ならこういった作業はスマホなどの情報端末でもいいのだが、秘密事ならば紙媒体の方がやはり機密性は高い。

「治崎廻。ヤクザ組織死穢八齋會のN.O. 2。いや、組長が倒れているなら実質的なN.O. 1か。『分解』そして『修復』。手首から先までしか効果がないとはいえ殺りづらいな。それに話じや地面などを分解して『修復』することで遠距離でも使える。確かに強い。そして、用心深い。暗殺は不可能と見ていいだろう。だが、やり方は幾らでもある」

最低限、必要なことを書き込んでメモ帳をしまう。確かにオーバーホールは強敵となるだろう。純粹な近距離。パワー型のシーラでは分が悪い。スキューロは『マン・イン・ザ・ミラー』で鏡の世界に引きずり込めば確実に勝機は見える。鏡の世界ではスキューロ以外は物を動かすことが出来ない。鏡の世界でオーバーホールは地面を分解できない。必然的に接近戦を強いられ、スキューロは距離を保って罠り殺すことができる。

血があるのなら無敵に近い性能を持つ『ベイビィ・フェイス』で殺

せばいい。

それに、

「ボスにいい土産話が出来そうだ」

現在も裏で流れ、パツシヨーネも取り扱っていた個性をブーストする薬の逆。オーバーホールが開発している個性を壊す薬。これはスキューロとしては非常に興味深いものだった。これがパツシヨーネの、ボスの手に渡ればボスの平穩はより潤ったものになる。

パツシヨーネに敵対した者にこの薬を使って永久に個性を奪い、無力としてしまえばいい。誰もパツシヨーネに敵対しようとも、ボスの正体を知ろうともしない為のアイテムとしては非常に魅力的だ。どんな人間であろうと、生まれ持ち慣れ親しんだ『力』を失うのは怖いことだから。

ヒーロー達が時間をおいて来るだろう。そうするように匿名で、死体の携帯を使って仕向けておいた。何人来るか。そういった様々な被害状況から、大体どの程度のヒーローが来るのかも、とりあえずは調べている。

「思ったよりも長い付き合いになりそうじゃないか、死穢八齋會」

スキューロの脳裏に描き出される未来予想図は、確かにボスの求める平穩へと道が続いていた。

はじめてだった。あんなに怖い目に遭ったのは。

はじめてだった。まともに正面から向かい合ったのは。

はじめてだった。目と目が合ったのは。

はじめてだった。今まで見てこなかった現実を、見えない壁を隔てた向こう側を見たのは。

はじめてだった。今まで軽く考えていたことが、こんなに重くのしかかってきたのは。

急速に唇がカラカラに乾燥していく。ぶわっと嫌な汗が額に滲み出てくる。足は無意識に後ろへ、後ろへと動いていく。ウチの目の前に、^{サイラン}敵がいる。5mほどの巨大な身体をレインコートで覆い隠している。首から下げられている旧型のラジオが何かを発しているが全く耳に入ってこない。

それはウチを壁に追い詰めると、覆い被さるように身体を傾けて壁に手を突いた。なんてことのない、そんなありきたりな行動で、突いた手がめり込んでいき、壁が破壊された。まるで力を込めた様子が感じられない。恐らくそれは、素の力で壁を破壊したのだろう。見るからに異形型。だがその姿は今まで見てきたクラスメイトや、街中ですれ違う誰よりも恐ろしかった。

「ギャンブルヒーロー、D、ARBYの事務所はどこにありますか？」
それが発した言葉はゆっくりで聞き取りやすい物だったが、ウチの耳には全く入ってこない。聞こえるのは壊れそうなほどに脈動している自分の心臓音だけ。

逃げると本能が警鐘を鳴らしているが、自分の足は震えるばかり。それどころか力が抜けて体が崩れ落ちる。それは怖き故。

「もう一度聞きます。ギャンブルヒーロー、D、ARBYの事務所はどこにありますか？」

「ひっ」

言葉が出ない。出ないのはあまりの怯えに喉が枯れ果てたから。

目尻に涙が溜まる。号泣しなかったのは流せないほどに怯えていたからか。

恐らく殺そうと思えば虫を殺すようにあっさりと簡単に殺すことができるのだろう。今は猶予期間。多分コイツはヒーローと戦おうとしている。なぜだかウチはそう理解していた。

「知らないのですか？それとも知っていて教えてくれないのですか？もし教えてくれないのなら、少し痛い目に遭ってもらいます」

このままでは間違いなく殺される。それを理解した瞬間に、脳が工

助けてくれたのか。恐らく増強型の個性だと思うが、正確な判断がつかない。

ウチがさつきまでいた場所は無残に破壊されていた。圧倒的なパワーを持つていることが見て取れる。

「確実に潰したと思っただんですが。何者ですか、あなたは」

「しがない旅行者、って言っても関係ないよね。まあ、明らかに絶望している子がいて、誰も助けがない状況。見るに堪えなくて飛び出してきた愚か者って感じで認識するといい」

「そうですか」

レインコートから両手を出して、まるで肉体に不備がないか確認するように開いたり握ったりしている。戦闘態勢に入ろうとしているのか。心做しか身体が先ほどよりも大きくなっている気がする。

「おいおい、何をしているんだ。私はソコにいないよ?」

突然振り向いて拳を振るった。ビルさえ震わせ破壊する衝撃波が撒き散らされる。街路樹は吹き飛びそうになるほど揺さぶられ、コンクリートの破片は撒き散らされる。

「足が速いんですね」

こつちを見ないで、それはそう言った。まるでウチらがここに居るのを認識していないように。それは反対側へ体を進ませる。歩む足は地面を打ち砕き、粉碎しながら進んでいく。それを見た彼女はバカだな、と静かに呟く。

「走れるかい? 走れるならすぐに全力で走るんだ。逃げ切るためには路地裏やら細かい道を通ることになるから、絶対に私から離れちゃ駄目だ。出来れば抱え続けてあげたいが、生憎私にそんな力も体力もない」

地面に綺麗に飛び降りてウチを下ろす。まだこつちには気付いていない。女性はこつちだ、と小さく呟いて走り出す。ウチもその背を見つめながら、一心不乱に走り出す。よく分からないが、女性は恐らく何かをしたのだ。幻覚でも見せたのか、明らかに何かをした。何はともあれ結果的にコツちに気を向けていないのはいい事だ。

何分くらい走っただろうか。二人とも汗だくで、ベンチに座り込む。細く汚く暗い路地裏を必死に駆け抜けて、大通りから近くにある大きなデパートまで逃げてきた。途中ここまで逃げなくてもいいのではと、息絶えながら聞いたが、なるべく人が多い方がいいらしい。女性が逃げ切った、と確信して止まった時、ウチはブレーキをかけることが出来ず、前のめりに転んでしまったが、また助けられてしまった。今度は片腕で抱えられた。見かけによらず案外体力あるんだな、と思ったのも束の間。今度は女性が倒れてしまった。

怪我か何かをしたのか!?!と不安になったが、どうやら体力が無くなっただけらしい。本当に、心配した。

「はあ、はあ・・・何とか、逃げ切れましたね・・・」

「ああ。まあ正直なところ射程距離はギリギリだったけどね。でもあんな派手なのが暴れ回ったんだ。そろそろヒーロー達と追いかけてこでもしているだろうさ。っと、喉乾いたでしょ。何か買ってきいあげよう。何がいい?」

「い、いや、お構いなく」

「遠慮しないでいい。そのベンチで休んでいてくれ。お茶でいいかな?」

構わないと伝えると、女性はふらついた足取りで近くの自販機に近寄っていく。買っている間に近場のベンチでお言葉に甘えて休ませてもらおう。なんか、頭が上手く働いていない。

「お待たせ。はいどうぞ」

「ありがとうございます——」

買ってきってもらったお茶を受け取ったら、手からするとこぼれ落ちてしまった。おかしいなと思って拾おうとするが、身体は一向に動かない。

「あ、アレ?ウチどうして。どう、して・・・」

どうして、涙が出ているんだろうか。両の瞳から零れ落ちる雫は腿の上に染みを作っていく。服の袖で拭うが、何度も何度もとめどなく零れ落ちていく。

やがて涙を拭う腕は、身体に回され蹲るように抱え込む。身体が震

えている。自分でも分かるほどに。しっかりと、理解出来ている。「君は、『安心』しているんだ。心の底から、再会出来た『安心』に心が震えているんだ」

頭が彼女に抱え込まれる。優しく、宥めるかのように。慈愛さえ感じるほどの優しい抱擁は、自分という存在を包み込もうとする。

『安心』は生まれてから誰もが持つていながら、ほとんどの人間が理解できないものだ。尊さも偉大さも優しさも温かさも持つているのが『安心』なんだ。だが、人は『安心』を軽視する。守ってくれる存在がいるから大丈夫だと思いこみ、己の身を『安心』から遠ざける。やがて自分の身を危険に晒したその時になって、人は都合よく『安心』を求めらるんだ。自分から遠ざけておいて、手放しておいてそう言うんだ。

まるで『安心』が安売りしているかのよう。それは、正しい意味で『安心』を知っている私からすればバカらしいことだけどね」

離れて空を仰ぐ。そこから感じられる嫌悪感は何に對してか。いや、既に分かっている。彼女の発した言葉は、簡単に正解へと辿り着かせる。ヒーローという存在を肯定する社会を嘆いているのだ。

個性社会において山のよう持て余した者達に溢れてくる敵。そんな者達から市民を守るために働くヒーロー。ヒーローは人に『安心』を与える。人が生まれ持つ『安心』を奪い、作り上げた『安心』を与える。与えられた『安心』は危機感を奪った。きつと助けてくれると思いつつ、マトモな抵抗をしなかった自分がそうだ。

与えられた希望に縋って、最後は恨みつらみを積み重ねる。

「まあ、別に今の平和を壊そうとかは思わない。私には私だけの『安心』がある。他人に『安心』を説くためにそれを手放そうとするほど愚かじやないし安くもない。それにヒーロー達がそれなりとはいえ『安心』を与えているのも事実だ。それを受け入れられない私は、狂っているか壊れているのさ。」

君は普通だよ。そして幸福だ。違和感を持たず今を納得することが出来る」

要は見えていないものが見えているだけ。目を逸らしていたこと、

そもそも見てすらいなかったことを認識しただけなのだ。その上で、自論を重ねているだけ。エゴだと分かっている、他人とのズレを認識していてもブレない。自分を確立させ続けられる強さがある。

「凄いな・・・」

「凄いもんか。螺子が外れているだけだ。いい事なんて何も無い。要は私のこの不満はヒーローに対してのものだ。お前らなんて必要ないつて喚いているだけ。自分は何もしないくせに他人がやっていることに憤る口先だけ。最低の人間なのさ、私は」

自嘲し、飲み終えたペットボトルを放り投げる。軽く投げられたペットボトルはゴミ籠に綺麗に入る。

「根本的にどこかは分からないけど、どこかが嫌いなんだよね。感覚的なものか理論的なものかは分からないけど好きになれないんだよ、応援する気になれないんだよ。ヒーローって奴がさ。私が基本的に屑だからかもしれないけど」

その思考は世間から疎まれる物。消さなければと躍起になられてもおかしくないもの。今の社会はヒーローがいてこそ成り立っているとさえ言われる程だ。ヒーローは受け入れるのが当然の如く扱われるのだ。受験勉強の合間に見たテレビのコメンテーター達がヒーローについて論議する時、必ず『必要なのか』ではなく『こうするべきだ』という討論になる。そんな頑固者達すらもヒーローという存在を認めている。

つまりはそれほど受け入れられているのだ。

彼女の言うことは、憤りは理解出来る。自然とスルリと頭の中に入ってくる。だけど、でも、

「なら、ウチがなる。誰かに本当の『安心』を与えられてあげられるよな、あなたが受け入れられるようなヒーローに、なってみせます」
自分の成りたい物を正面から嫌われるのは、すごい悲しいことだから。

「・・・それを今私の前で言うの？」

ポカンとしている。当然のことだ。否定的だったものに、語られた人物がなりたいたったんだ。

「そう、か。いや、別にいいんだけどね。君の人生だ。どうするかに私
が口出しするのは愚かなことだから。でもまあ。うん。なら、なつて
みてよ。私がこの社会に、君に、かけがえのない『平穩』を預けられ
るような、そんなヒーローにさ」

優しい笑顔で彼女は言った。その言葉にはどんな感情が込められ
ているのだろうか。哀れみだろうか、侮蔑だろうか、祝福だろうか、応
援だろうか、愉悦だろうか。上っ面の言葉なのかどうか。それを測る
ことはウチには出来ない。

でも、例え今、どんな感情を抱いていても。

「そういえば名乗り忘れていたね。私の名前はシクリーザ。これはイ
タリア語だね。日本語に訳すと『安心』という意味だ」

「ウチは——」

それから、ウチとシクリーザさんの交友関係は続いていた。受験
勉強を教えてもらったり相談に乗ってもらったり。沢山色んなこと
が続いていった。

時は過ぎる。景色は滲む。

人生で見ればほんの短い時間が過ぎていった。

ウチは、ヒーローになるための最初の入口。雄英高校の門を叩い
た。

「あつぶなかつた〜」
どこかで女が安堵した。

何かが起こっている。理解は出来てないけど

千鳥足のように歩きながら、住処までの道を歩く。身体が、というか足が痛い。久しぶりにあれほどの距離を、あんなに本気で走ったぞ。心臓に悪いのなんの。走る途中で道に迷ったりするしき。

本当に今日は運がないな。たまたま行こうとしていた道の近くで惨殺死体が発見されたらしく、勿論道は通行止め。都内のヒーロー達が出で警戒と不審者探し。仕方なく遠回りしようとしたら、今度はなんかレインコート着た巨体が女の子に壁ドンしてた。

見た時は自分の目を疑ったよ。首からラジオかけて、晴れの日にレインコート着た明らかな不審者が真昼間から女の子口説いてるんだよ？普通に怖いわ。明らかなストーカーだろ。

いけないものを見てしまったと回れ右してさらに遠回りしようと思ったら足を止めてしまった。いや、注視したせいで無意識に止めてしまった。気づいたんだ気付けたんだ。

あそこにいるの原作キャラじゃね？

名前は忘れたけど間違いない。特に大した活躍もなく日々を過ごしていた普通の子だ。

悲報、原作キャラ原作開始前に不審者に壁ドンされる。乙女にはトラウマになるような経験だろうな。

だがそう巫山戯たことを言っていられなくなった。知っているとおり私は警戒心が高い。部下さえマトモに信じられないくらい。私は過去も未来も警戒する。幾億通りにも分岐していく未来のパターンは、何度想像したとか。そしてその中に、私と同じ転生した者がいることだつて勿論想像した。

二次創作でよくあるクラスから一人消滅するか、もしくは一人増えるか二人増えているか。どちらにせよ、私以外に『存在する』ということそのものが良くない。もし、もしだ。そいつが私と同じ幽波紋スタンド使いだったら、私の持ち得ない全ての幽波紋スタンドを持つていたら、ど

うだ？

考えたくないこと、地獄の未来から目を背けないで考えるんだ、想定するんだ。まず間違いなく、私は消されるだろう。もしくは幽波紋スタンドを持つていることさえ忘れさせられるだろう。

もしそいつが、ヒーローを目指していたら、便所のタンカスのような正義感を持っていたら。もしそいつが、星の一族だったら。ああ、それはとても恐ろしいことだよクソツタレ。

幽波紋スタンドじゃなくても、チートバツカーズとかあの系でも最悪だ。そういつた枠組みから選ばれるのは十中八九、邪眼か雷帝、そして運び屋など最強スレに乗り込めるレベル。無理だ勝てない。そもそも身体能力のバカ上げ系は冗談抜きで策ごと全滅する。

戦い方とかそういうレベルの話じゃない。生物としての格が違うんだ。

どこの形成（笑）も言っていたじゃないか。奇策や相性で覆せる強弱なんて実力が拮抗していることが前提なのだ。最初から絶望的に開いている性能の差を埋めることなんて出来やしないんだ。

生物としての格が上というだけで、幽波紋スタンド使いは簡単に殺すことが出来る。形成（笑）にさえ、幽波紋スタンドは勝つことが出来ないんだ。

人生における落とし穴は塞がなくてはならない。障害は何としても回避しなくてはならない。この修羅の世界で、私が絶頂平穩を守り続けるために必要な行為をとらなくては。

どうして助けるか。決まっている。『流れ』を守るのだ。決められた未来へ進む『流れ』に不純物を混ぜないために。そしてあらゆる『流れ』を知る為に。

そこからはもう流れるかのような救出作業に入った。普段、ほとんど使うことの無い『キング・クリムゾン』の時飛ばしを使い、不審者の攻撃の『過程』を消し飛ばして攻撃が当たらなかつたという『結果』だけ残す。スローモーションに動いていく世界の中で幽波紋スタンドの脚力で一気に駆け抜け、そのまま救出してスーパージャンプ。カッコよく決まったぜ！なんて言ってられない。

時飛ばし発動時に起こる『奇妙な感覚』を覚えさせないように、適

度に声がけする。

正面から見た不審者の顔はめちやくちや怖かった。まともになら逃げ腰になって泣くな。ていうかなんかデカくなってないか？

まあ勝利条件は既に私が抱き抱えている。腕が疲れて下ろしたけど。ホントに力も持久力もないな。

だからもうマトモに対面する気は無い。『ホワイトスネイク』を幻覚を見せられるほどのパワーがあるギリギリの距離に出し、声をかけて全力ダッシュ。逃げ足だけは無駄に速いらしいぜ、私は。

逃げている途中で道に迷ったりもしたけど、止まってなんていられない。ていうか追ってきてないか心配。『ホワイトスネイク』はとっくに引っ込めてるし監視すらしていない。実はあの巨体で隠密高速移動とか出来たら泣けてくる。

だから実行したのは『鬼ごっこしようぜ、お前囷な！』作戦だ。なんてことは無い。ただデパートとか駅とか、とにかく人が居そうな場所に逃げて、もし追ってきたら善良な市民たちに善行をして貰おうというだけだ。

ていうかこの子足速いな。一応手加減しているが、スタン幽波紋で脚力上げながら走っているのに、後ろにちゃんと着いてくるとか。ええい、ヒーロー候補生は化け物か。

なんとか撒いたことを確認。ベンチで休むように促して私は自販機で飲み物を購入して渡す。渡したら泣き出しちゃった。いや、不味いよ。ここ人多いから、私が女の子泣かせたみたいに見られちゃうじゃん。なんとか慰めようとりあえず頭を抱いてあげる。何してんだ私？って思ったがやってしまったものは仕方がない。なんとか落ち着かせてあげなければ。

落ち着かせようと言葉をかけたなら、いつの間にか私の不満を漏らしているだけだった。この世界、ヒーロー嫌いとか言ったら反社会因子に認定されないよね？

慰めたらこの子、ヒーローになるって宣言しちゃった。分かります
雄英に行くんですね。

え？別に止めないよ。だってここで止めたりしたら、態々私が時飛

ばしまで使って助けた意味がなくなるじゃん。この子には私の密告者になってもらうのだ！まあ密告って言っても大したことはさせないよ。クラスの話とかで大まかな『流れ』を確認するだけだし。

幸い、私はいいいポジションを手に入れることが出来た。あの爆発物のようなクラスで目立たず普通に行動している子と、友好関係を築けた。初めて、初めて私のSNSアプリにセキュア以外の人が追加されたんだよ……！こんなに嬉しいことはない。

彼女は親に迎えに来てもらうらしい。ってことで私は一足先に退散、と言いたかったが目的地がこのデパートだった……。嘘だろと嘆きたかった。だってここに来るまで殺人事件で通行止め、何度も何度も遠回りして挙句の果てには敵にまで襲われ、全力ダッシュで逃走して汗だく。

ただ私にはもうデパートにいくだけの体力なんてなかった。汗で額に張り付く髪も鬱陶しく、早くも筋肉痛の症状が出ている。普段走らない駄目人間が急に筋肉なんか使うべきじゃないね。

家で待機させているシーラに連絡しようとしたけど、そもそもアイツの連絡先は知らず、免許だつて持っていない。イタリアじゃ免許が無くても良かったけど、日本じゃ流石に無理。仕方なくセキュアに連絡しようとしたところで端末がダウン。巫山戯んな！つて言つて幽波紋^{スタンド}パワー全開で叩きつけたくなった。タイミングが良すぎるんだよ。

駅の場所も分からない私がバスでマトモに帰れるはずもないので、仕方なく歩いて帰る。疲れた体に染みる。激動の一日つて程でもないが、体力的には激動である。ただ単に上限値と消費量が激しいだけなのかもしれないけど。

住処が近くなると急な雨が降ってきた。勢いが強いな。一瞬でずぶ濡れになってしまった。コンビニで傘を買つてもいいけど、やめておくことにした。何となく濡れていたくなったのだ。それに今回あの子と出会ったことで今後の身の振り方も決まった。

だから、うん。

今まで妥協してきた問題を、片付ける時が来たのかもしれない。私

の知らない間に起きていたことを、思い出さなければならぬのかもしれない。

「要は、一つの『記憶』へ向かう時が来たんだ。」

ガチャリと、ようやく聞き慣れてきたこの家のドアが開く音が聞こえる。風のように駆け抜けて、タオルを装備したスキューロが玄関に向かう。シーラも歩きながら迎える。日本での室内では靴を脱ぐという習慣に、未だにシーラは慣れていない。感覚的にダメらしいので、とりあえずは内履きで我慢している。そのせいで偶に、内履きのまま外に出そうになる。

帰ってきたシクリーザはズブ濡れだった。髪は雨で張り付いて幽鬼のように見える。服は素材が厚いお陰か、透けてはいないがより一層扇情的に見える。地味に首が傾いているため、表情が上手く見えな

い。「風邪をひくと体に悪い。タオルで拭くから、とりあえず後ろを向いてくれ」

スキューロの言う通りにシクリーザは振り向き、身を預けるように立ち尽くした。スキューロは慣れた手つきで水をタオルに吸い取らせていく。タオルで拭いている間に暖かいココアを入れ、着替えを持ってくるようシーラに指示する。最早完全に保護者である。

「・・・麻薬チームを、メディジーナを日本に呼べ」

シーラが居なくなつたのを待っていたように、シクリーザが言葉を発する。その声にはスキューロに懐かしさと安心を与える様な、言い知れぬ何かが含まれていた。

「そうか・・・。とうとうこの時が来たのか」

シクリーザは——ボスは幽波紋スタンドを与える時、スキューロと『ホワイトスネイク』が同じ部屋に居ることを絶対としていた。それはボス

が最初の幽波紋使いであるスキューロを生み出した時にはなかったこと。

メデイジーナは、ボスがパツシヨーネのボスとなってからすぐに幽波紋を与えた者だ。信用したわけでもなく、信頼したわけでもなく。

それでもボスは幽波紋を与えた。何故か、スキューロは問い尋ねたことがある。別に文句がある訳では無い。いつも通りの興味本位だ。

返ってきた答えは、「分からない」だった。何故その者を二人目の幽波紋使いにしたのか。その者が何者なのか。何故後に組織の資金の七割を集める麻薬に関する幽波紋を与えたのか。ただ漠然と、そうしなければならぬという自分でもよく分からない使命感のようなものがあつたらしい。

それ以降、これは疑問として残り続け、時が過ぎる事にすり減るように脳裏から消えていき、そうである事が当然のように思ってきた。スキューロも何も言わず、ただ裏で命令を出し続けていた。

そんなある時だ。ボスは二週間に一度、必ず幽波紋DISCの掃除をしたり枚数を確認したりする。

四個に分かれたグッズに収まるDISC達。その正確な数はスキューロも覚えている。幽波紋の実験で、散々自分を使ってもらったからだ。

そのDISCが、一枚多く入っていた。減っているのなら分かる。だが多かったのだ、一番端、スキューロやシーラに与えられたDISCが入っていた物ではない、制作当初から何も収まることのなかった場所に、DISCが一枚入っていたのだ。DISCには表面に『medicina』 『il passato qui』
『inutile ora』と書かれていた。

突然現れた見覚えのないDISC。そして書かれている訳の分からない言葉。それは気味が悪かったが、とりあえずは他のDISCと同じように仕舞われることになった。

今思い返せば、恐らくあれは幽波紋DISCではなく記憶DISCで間違いなかった。そして『medicina』とは二人目の幽波紋

使いの名前。つまり、何故いるのかも分からない麻薬チームのトップが何者なのか知ることが出来る可能性が大にある。

「だが時間がかかるぞ。少なくとも向こう一ヶ月は他のことでは動けない」

「時間がかかるのは構わないが・・・そうだな、七月中までには奴を日本に呼ぶんだ」

「殺すのか？」

「それは、記憶が決めることだ」

正体不明の、誰のものかも分からない記憶DISC。その中に、まだ見ぬメデイジーナという人間の未来を決めることが詰まっている。

ボスにとって都合がいいなら生かす。都合が悪いなら殺す。結局いつもと何ら変わらない。全てはボスの御心のままに。

最近楽しい。楽しすぎるほど楽しい。

耳郎ちゃんと連絡先を交換してから、怯えと墮落の人生が楽しく感じられてきた。マトモに他人と話すことってこんなに楽しいことなんだ！やったね彼女は私を助けてくれたヒーローだ！

共通の趣味がある、年上の私と悩める年頃の彼女。親にも言えないような事の相談相手になれることが大きな要因だったのかもしれない。たまに会うが、すごく心を開いてくれている。『友達』として順調に仕上がってくれている。

最近では雄英の模試でA判定だったり、個性を伸ばして色んな必殺技を作っていたり。努力を正面から受け止めて褒めてあげられる人という立場が美味しすぎる。基本言ってきたことに対して聞こえの良い答えを返すだけで、あっちが肯定的に受け取ってくれるのはパーフェクト。

話の振り方が下手くそな私からしてみれば、ありがたい相手だ。それに私のテリトリーにズケズケと踏み込んでこないのもいい。絶妙なラインにいてくれる。

友達枠として有能過ぎるんだよな。

なんて、楽しい思い出も振り返らなきややつてられないんだよ。

慣れたマンションに一人。スキューロもシーラも出払ってもらっている。スキューロはいつも通りやることがあつて何処かに。シーラにはスキューロの付き添い兼ちよつとしたお使いを頼んでいる。

そのお使いの内容は、『ミスター・プレジデント』の所有者になる亀を買ってくること。実は『ミスター・プレジデント』は、人間にDISCを入れることは出来たのだが、能力が発現しないという恐るべき事実が発覚した。理由は大体分かつている。

恐らくではあるが、人間には鍵をハメられるような『硬いもの』がないからだ。人間は亀の持つ甲羅のようなものは無く、『ミスター・プレジデント』の元の保有者であつたココ・ジャンボは甲羅のある『亀』である。多分能力が発現しない理由はこれで間違いない。実際にDISCを入れた際には鍵だけが出てくるという不思議な現象が起こつた。『ミスター・プレジデント』を起用するためには『亀』が必要不可欠な存在なのだろう。

なんで今まで使つてこなかつたんだよ。こいついたらもつとマシだったんじゃないのか、エエ!?!とか言わないでくれよ。ここから先は誰にだつてある得意不得意好き嫌いの話になる。

そもそもとして私は、亀が苦手なんだ。というか哺乳類以外の動物は全滅である。爬虫類両生類は全滅。鳥類魚類は触ることが出来ない。犬猫ハムスターしか触れることも出来ないのだ。

『亀』を幽波紋スタン使いとするなら、ペットとして飼うことになる。だが私は亀が苦手。具体的にどこが苦手とか、ここをどうこうすればいけるようになるとかじゃないのだ。なんか知らんけど無理なのだ。もうどうしようもないんだ。

『ミスター・プレジデント』がなくても、今までは上手くいつていた。けど前提として忘れてはいけない。この世界は修羅ジャンクの世界。使える

ものを躊躇って、強者オーラを出しながら余裕ぶっこいていたら次の日にはぶち殺されちまう、そんなハートフルワールドなのだ。

何かと便利な『ミスター・プレジデント』。鍵の付いている亀というのはおかしなものだが、そこさえ見られなければ何とかなるはず。多分……。

閑話休題。

「こんなのは現実逃避のための話でしかない。

真に語るべきなのはこの正体不明のDISCだ。本気で見覚えがないのが余計怖い。この中にどんな記憶が詰め込まれているのか。記憶DISC、そしてここに命令が書き込まれていないのは分かるんだ。一応は、私が作り出したであろうDISCだから。だが、これをいつ作ったのかが分からない。私はつい最近まで『ホワイトスネイク』の能力を誤認していたからな……。

しかも書いてあることが不吉すぎるんだよな。『medic^薬ina』『il^過passat^去o・qui^に』。この二つだけでも不吉すぎる。一つ目は麻薬チームのメイジーナなのは間違いない。あいつに関しては、私は当然としてスキューロでさえ何も知ることが出来なかつたらしい。私と同等レベルの過去^{存在}の消去。書かれている字は私の字で間違いない。では書いたのが私ならば、私はメイジーナについて何かを知っていたのだろうか。

メイジーナは無力というか無感情というか、まるで幽霊や死体を相手にしているかのように無機質な男だった。黒のダブルスーツに黒のハット。まともに話したことはなく、話しかけると聞こえないほどボソボソと小さく何かを呟いている。スキューロの話では一度命令を下すと、しばらく——一ヶ月以上は他の命令を受け付けられない。しい。

自己が無いと言えるほど無機質な、史上最悪の幽紋^{スタンド}波使い。

使いやすいのだが扱いにくいと、あのスキューロが珍しく苦言を漏らしていた。もうその時点でただ者じゃないよ。

結局のところ、このDISCの処理には非常に困っているんだ。入れてもいいのだけれど、それが果たして私にとって良いものなのか分からない。なんか裏の関係者だから、見たくないもンガン積みされてそんな感じがするんだよ。

ていうか他人の記憶DISCを見ること自体が苦手なんだよ。記憶DISCって、一気に記憶全部ぶっこむんじゃなくて、記憶を持ち主の視点で見ていくものだから、意図しない視点の揺れとかで気持ち悪くなってくるんだよ。シーラの際は秘密裏に吐きそうになった。

妙な苦手意識が残っているんだよ。まあ誰も望んで気持ち悪くならないこうとしたりしないから、普通の反応なんだけど。誰のものか、どんな記憶が入っているのか分からないのが一番怖い。見始めた瞬間に、誰かの内臓が飛び散ったりする映像とかだったらトラウマ物になる。

スキューロかシーラに見させるか？いや、やっぱりシーラはやめておこう。私に関しての何かヤバいことが入っていたらちよつと都合の悪いことになる。その点スキューロならまだ何とかなるはず。ヤバいことがあったとしても、絶対に口を噤んでいてくれるはず。

そうと決めたらDISCは仕舞おう。こんな不吉な物をずっと視界に入れていたら、胃がやられてしまう——って、どうなっついていやがる!?

いやマジで本当に一体全体何が起こっているんだ!?!私はDISCを仕舞おうとして持ち上げたただけだ。なのに何故だ。何故DISCを持つ私の腕が、私にDISCを入れようとしている!?!

『『ホワイトスネイク』!』

『ホワイトスネイク』に私の腕を止めさせようとする。だが私の意思に反して出てきた『ホワイトスネイク』は何もしない。動かずに、じつとこちらを見据えている。

「何をしている『ホワイトスネイク』!?!早く私の腕を、このDISCを止めるんだ!?!」

『アナタハ 『シンジツ』ヲ シラナケレバ ナラナイ』

「な、何いいい!?!」

何ほざいてやがる!?マジで巫山戯るなよ、何が『真実』だ!!私を通じて意思あるお前は私の中で私を見てきたんだろう!?ならば分かっているはずだ!!私が『真実』への到達に怯えていることを!!自覚はあったさ!きつとこのDISCには私が直面したくない、到達したくない『真実』があるってな!だから避けてきたんだろ!『真実』はいつだって残酷なのだから!!

「クソつたれが!!『キング・クリムゾン』!!DISCが私の中に侵入するという『過程』を消し飛ばせ!!何も知らないという『真実』を作り上げる!!」

『ムダ デス。 スタンド ハ アナタジシンノ セイシン ノ ゲンカ。 DISC デ ムリヨクカ デキル』

「なんつ、だとおおお・・!?!?貴様がその手に持っているのは・・!?!?」
『ソウ デス。 アタノ シンジツ ノ イツタン キング・クリムゾン ノ DISC デス』

『ホワイトスネイク』が手に持っているのは見覚えのある『キング・クリムゾン』の幽波紋スタンドDISCで間違いない。コイツ、いつ私から抜き出した!?!前兆すら感じなかったぞ。それにコイツの自我、まさか成長しているのか・・!?!?

いいや、それよりもだ!

「この現象!まさか貴様、私にDISCを使ったな!?!命令を書き込んだんだな!?!私にこのDISCを挿し込むように!!」
『・・・・・』

「何も答えないということとは凶星だな!?!巫山戯たことをしてくれ——!!っ、ダメだ、これ以上は・・!?!」

私の腕力が思ったより強いのか、それともただ単に私に抵抗するほどの力がないだけか。会話しているうちにDISCはみるみる私の顔に進んでいく。なんとか時間を稼ごうと首を振るが、そんな行為になんの意味もなく、DISCは少しずつ私の頭に侵入してくる。

「やめろ・・!?!入ってくるな・・!?!」

『真実』に私を近寄せせるなあああああああ!!!!」

『モウシワケ ゴザイマセン』

『デスガ コレモスベテ アナタノタメ』

『アナタカラ アタエラレタ メイレイドオリ』

『ソレガ アナタノ ケシトバシタ アナタト アナタノ カゾクノ
シンジツ デス』

そして季節は過ぎ、関係は続き、怯えは続き、暗躍は続き、意思は重なり、悪意は蠢き、邪悪は完成し、物語の舞台は整い、出演者達は整列し、全員で一斉に運命の入り乱れる舞台へと飛び出した。

過去回想やるつてよ。あまりにも突然だけど

どこから話すべきか。いや、どこから話すと言うより思い出すか？ まあ必要のないことは省いていこう。何分長いし結構負荷があるからな。整理も必要になる。

そうだな・・始まりとして語るなら、私が自分自身の幽波紋スタントを初めて自覚した時だったな。特典として私が手に入れた『ホワイトスネイク』は、自我がある幽波紋スタント。精神の具現化である幽波紋スタントに、さらに自我があるのはどういう原理か、ちよいとだけ興味を持っていた頃だな。

まあ、結局分からずじまいだったけど。

それから、そうだと5歳頃だ。私の父親がギャングのボスだと知ったのは。前々からなんか怖いおじさん達が沢山家に入入りしてるな。なんて思ったら、物の見事にホームラン決められた。しかもイタリア中を占める麻薬組織というダンクまで。

5歳になるまで気づかなかったのは決定的に知る機会がなかったのと、多分だけど普段は優しくかったからな。ちゃんとした父親と呼べるようなことをしていた。遊んでと言ったら遊んでくれたし、確かにそこに愛情と呼べるものはあったのだろう。

鼻で笑つちまいたくなるほど、私の前の父親は人間臭かった。

まあギャングのボスの娘ってことで、生活に不自由を感じた事は一切なかった。服は全部ブランド物で、私に合うものを呼び出したデザイナーが直々に採寸してくれる。食事だってレストランがほとんど。

母親？さあ。私が生まれてすぐ死んだみたい。自分で言うのもなんだけれど、私は冷たいんだ。何も知らない人間に対して、微塵も情なんて抱けないんだ。結構いるだろ？酷い震災をテレビで目の当たりにして、うわあ大変だったんだなって反応しか出来ない人間が。

こんな薄情さが前世からの物か、それとも今世からか確かめようはない。いや、そもそも確かめるつもりすらなかった。私の幸せフェリシターには私の為ということが全てだった。

この頃は、まあ幸せだったんだよ。ギャングのボスの溺愛している娘という立場にいられた守られている状況。恐怖に怯えなくていい生活。一番気が休まっていた時間を過ごすことが出来たんだ。それが崩れたのは、5歳のある日、家に新しい家族が増えた日だろう。

その家族は少年で、私より6歳年上だった。まあ予想通り、父親が若気の至りでズギウウン!!してしまつて出来た子。どうやら母親の遺言で訪ねてきたらしい。そしてDNA検査は感動的なまでに一致。妾の子なんて知るか帰れ消えろつて言えば良かったものを、父親はギャングに相応しくない人間臭さが発揮された。

この時点では特に何も思わなかった。ああ、また装飾品が増えたなつて思うくらいにしか思えなかった。しかし、この時はまだ気付かなかったが、私と兄には決定的に相容れない、油と水がしつかりと分けられるほどの受け入れられない出来事があった。

私が、コイツを心底嫌いになつたのはすぐの話だった。

兄は俗に言う、笑顔が素敵で正義感溢れる少年だった。テレビで流れる戦争問題に本気で心痛め、ヒーローが敵を捕まえたことを本気で喜んでいる。将来は絶対にヒーローになるんだつて、くだらない夢を語つて父親を困らせている。

それを見て、バカだなと思う。

イタリアにまともなヒーローは少ない。大抵が金目当ての屑ばかり。賄賂を渡せば金額分の犯罪を見過ごしてもらえる。そんなのばっかりだった。兄が応援していたヒーローだつて、組織に金を渡されて闇取引の時間稼ぎをしていただけだ。

見れて良かったなヒーロー活動小銭稼ぎ。

12月頃だったな。ソレに気付いたのは、

「寒いな」

屋敷の中でも十分に寒い。手を擦つて温めながら、早足で階段を駆

け上る。急ぎの用事だった。外で活動してから、そろそろだと思って走って屋敷まで来たのだ。ここまで急ぐのに相応しい理由があったのだ。

この日、私の元に幽波紋^{スタンダード}DISCが届く日だった。この時の私はまだ全ての幽波紋^{スタンダード}があると思つて、希望に満ち溢れていた。だつてそうだろう？『ホワイトスネイク』を特典にすれば、大抵全ての幽波紋^{スタンダード}が手に入る。そう思うのはとても自然なことで、枚数制限があるという現実を知らない私はクリスマススの日にサンタから届いたプレゼントを心待ちにしている、精神的にも十分な子供だった。

急いでいたせいで、私は階段から足を滑らせてしまった。大変なことだ。滑らせた場所は踊り場の直後。このままでは後頭部から階段の角に頭を打ち付けながら転げ落ちてしまう。

だが私に焦りはない。当然だ、私には『ホワイトスネイク』がいる。私をありとあらゆる身の危険から守る存在が私の近くにいたので。自我がある『ホワイトスネイク』は私が出そうとするより早く出てきて、私の身体を抱きとめようとする。

「えっ。」

私は気付いた時には床に足をつけていた。『ホワイトスネイク』に抱きとめられて丁寧に下に降ろされるわけでもなく、『ホワイトスネイク』は既に私の中に戻っている。私はどうやって床に足をつけた？私はどうやって幽波紋^{スタンダード}を戻した？

何も繋がらない。私が『ホワイトスネイク』に助けられるという過程が消え、助けられたという結果だけが残っている。ブワツ、と音が出るほど冷たい汗が私の全身から吹き出る。

この現象を知っているから。現象として体感したのは初めてだが、言葉に表す限りは紛れもないものだったから。

『ホワイトスネイク』!!私を抱えて――

私は部屋の扉を勢いよく開けていた。まただ。また、起こっている。私は扉を開こうとはしていない。私を抱えて跳べと命令したんだ。誰が何故どうやって、時飛ばしを行っている？

丁寧に包装されている送り主不明のダンボールがあった。プチプ

チが巻きついている。それを『ホワイトスネイク』のパワーで引きちぎって、勢いよく蓋を開く。まず一番最初に目に入ったのは手紙だ。送り主は私を転生させた奴から。手紙の裏には入っている幽波紋スタンドの一覧表がある。一覧表を食い入るように見る。丁寧に部数ごとに分けられているがどうでもいい。

自分でもびつくりするほど、幽波紋スタンドの枚数が少ないことには驚かなかった。恐らく心のどこかで、その可能性を考えていたのかもしれない。もしくは今起こっている現象に夢中だったか。

どちらにせよ、答えは見つけた。

「ない、だと・・・？」

何度も何度も、目を血走らせながら確認する。だが何かの間違いなどでは全くなかった。どこか違う場所だったりとか、暗号的にあるわけでもなかった。真正正銘、そこには事実だけを物語っていた。

「キング・・・クリムゾンがない」

いや、ある。先程から私に起きた現象が物語っている。それは、確かに『ある』のだと。

「私以外に誰か・・・幽波紋スタンド使いがいる・・・？」

それは、何としても認めたくない現実だった。時間に関係する幽波紋スタンドは否応なく最強に分類される。特に『キング・クリムゾン』は補助能力の『エピタフ』と合わせて使えば、防御力に関しては無敵と言って間違いはない。

幽波紋スタンドという誰にも見ることの出来ない絶対アドバンテージの有利性は崩壊し、瓦礫から出てきたのは悪夢だった。

「誰が・・・誰が・・・私の『キング・クリムゾン』を使っている・・・」

誰があああああ、私の許可無く私の幽波紋スタンドを使っている!!!
!!!

この時、私に初めて『恐怖』が生まれた。一方的に殺されるかもしれないという恐怖が。そしてこの叫びは初めてマトモに自覚した恐怖を払拭したいが故の行動。

意されるモノ。物語として書き表せば、必ず一人はいる、聖人のごとく輝く精神。

状況も環境も私だけが特別なのではない。コイツもまた、特別だったんだ。

「どうした!?何があつたんだ!?!」

なあ、私の兄。なんとなくだが分かったよ。お前なんだから、幽波紋スタンド使いなのは。お前の幽波紋スタンドと私のDISC、

同時に出現したとしても何もおかしくない。それどころか当然だって思えちまうよなあ。お前がこの家に来たのだって幽波紋スタンド使いが引かれ合うのなら当然のこと。出来すぎてるほどにクソツタレな事じゃあないか。

ああ、お前が私の肩を掴んで改めて分かったよ。実に精神エネルギーに満ち溢れ、力が溢れてしようがなさそうだな。羨ましい限りだよ。

ああ、酷く不快だ、私の恐怖がこんな身近にあつただなんて。それもこないけ好かない奴が、だ。

コイツは私が思っている以上に良い奴なんだろう。状況が状況なら何処ぞの聖者のように自分の腕の肉を飢えている者に喰わせるくらい。誰からも好かれ尊敬され、未来を有望視される希望の子。身に宿る力を、正真正銘他者のために振るえる正義の味方。誰かに明るい明日を見せてあげられる人間なのだ。私なんかよりもよっぽど価値ある人間なのだ。

だが殺す。

尊厳を願いを想いを夢を希望を明日を尽く踏み潰して壊して砕いて陵辱し、理不尽な苦痛と涙と狂騒に染めてやる。理念も理想も理屈も理由も利害も、何もかもを知ったことか。私の世界は私で回っている。私の人生の主役は私なのだ。そして私の人生にお前という配役スタンドはいらない。

2年前、私の部屋で起こったあの惨劇は、私の個性の暴走ということで片がついた。元から、顔の変化の個性はほとんどあつてない様なもので、別に個性が現れたから褒められたいななんていう、子供の発想がない私は父親には報告していなかった。一般的に5歳までには個性が発現する、というのが役に立った。ギリギリまで潜んでいた個性が発現すると同時に暴走というのが、よくある話だったおかげだ。

あれから個性の暴走はほとんどしてないため、父親も兄も私が個性を制御していると思っっている。

私はアイツが幽波紋スタンド使用ということが分かってから、屋敷から外に出る機会が多くなった。理由は勿論、アイツと一緒に居続けられどんなボロを出すか分からないからだ。

アイツはくだらないことでもすぐに幽波紋スタンドを出す。まるであたかも個性があるかのように見せつけている。物を浮かしたりな。

しかし私の目に映る『キング・クリムゾン』が可愛らしい小物を持ち上げているようにしか見えないのが本当に辛い。涙すら出てきてしまう。

奴はやはり本気でヒーローになる気でいた。社会のゴミから生まれた穢れた存在がヒーローになるなど、笑えもしない話だ。いい加減自覚しろ、現実を見ろよ。

最近になってヒーローにマトモなものが増えてきたのか、賄賂が通じないのが増えているらしい。それで掃いて捨てるほどいる下っ端の連中が逮捕され続けているらしい。父親の機嫌が悪いのも、最近自由に動けなくなっているからだろう。

警察とヒーローがずっとマークしているのだ。自然と口も悪くなる。

殺そうと実行したことは無い。殺そうとしたところで補助能力の『エピタフ』が危険を察知する。そもそも殺す前に幽波紋スタンドを回収するのも必要だ。アレは本来私のために用意された幽波紋スタンド。必ず私の手元に戻さなくてはならない。

時間が無いのだ。アイツがいつ気づくか分からない。家のことも、私のことも、だ。『キング・クリムゾン』に敗北はない。レクイエム^カという想定外すらも通り越した、正真正銘の正体不明でもない限り、決して正面から勝つことは出来ない。

いつアイツが幽波紋^{スタンド}使いである私の気配に気づき出すか。時間との勝負になっっている。

アイツが幽波紋^{スタンド}使いということに気づくか、もしくは家の事を警察にでも告げてしまえば私の負けだ。前者は最早敗北に近く、後者は私が生きる限り永遠にギャングの子供というレッテルを貼られ、後ろ指をさされ続ける人生だ。

殺すタイミングがない。屋敷には常に誰かがいるし、殺されていようものなら私が疑われかねない。既に私は力の暴走という失態を犯している。

しかし、今日ようやく来たのだ。待ち焦がれたこの日が。2年間、恐怖という首輪に繋がれ、犬のように生きなければならぬ運命から解き放たれる日が。

一ヶ月前に手に入れた部下が優秀で、状況を用意してくれた。私がアイツを始末して、誰にも私という存在がバレることなく、この身に付き纏う『恐怖』から逃れ、一時とはいえ確実に手に取れる『平穏』を、ようやく手に入れられるチャンスが。

決してこの機会を逃がさない。確実に私の手で、始末を付けてやる。

手にした機会は夜だった。日付なんてとうに変わっている。時計の長針が二回ほど回った頃か。窓から差し込む月光は、明るく部屋を照らしている。素晴らしい満月だ。庭にある噴水から聞こえる流麗な水温が耳を癒してくれる。

「・・・来たか」

アイツが近づいてくる。階段を上って廊下を曲がった角のこの部

屋にまつすぐと進んでくる。既に準備は済んでいる。『キング・クリムゾン』の攻略は、既に出来ている。私に敗北はない。

コンコン、とノックしてくる。入ってくれと静かに言うと、まあ間抜け面を晒しながら入ってきた。

「こんな夜更けに、用事ってなんだよ」

「まあ座れよ。ワインでもどうだ？1960年の良い奴が入っている。きつと香りも最高だ。熱々のチーズを乗せたピッツアに良く合う一本だが、一杯どうだ？」

「遠慮する。ていうかお前はまだアルコール飲んじやだめだろ」

「当然だ。私は飲めない」

ジョークだバカ。そんな真面目に返すな、カッコつけたのがバカみたいで恥ずかしいだろうが。

「お前がここに来て、2年か？早いものだ。まるで全てが昨日の出来事のようにだ。それだけ、時の進みとは感覚としては遅いものなのかな・・・」

ああ、本当に遅い。というかマトモに進んでいないんだよ。恐怖の象徴と化したお前が存在することは、私の人生を進めていた歯車の妨げになっている。

「とりあえず、これを読んでみてはくれないか？」

「なんだ、ノート？」

机に置いてあったノートを渡し、コイツのことをじっと見つめる。私が見ていることに気付いてむず痒そうにしていたが、次第にその様子はなくなっていく、果てには顔色を変えて真っ青にしてガタガタと手を震わせる。

「う、嘘だ・・・そんな、ありえない」

その様子じゃ何も知らなかったらしい。どうよ、助走付きで叩きつけられた現実。中々痛快なものだろう？私も、部下に調べさせたソイツを知った時はビックリしたよ。組織のビジネスがどこまで進んでいるのか。麻薬をやっていることは知っていたが、まさかここまで手を広げていたとは。

「麻薬だけなら、私は前々から知っていた。遺伝子と個性ビジネスを

やっていると知った時は、まあ流石に驚いたが」

遺伝子ビジネスなら分かる。前世に何かの作品でそれに関連する物を読んだ覚えがある。だが個性ビジネス。これに関しては全くもって計算外だった。

「・・・警察に、言おう」

「いいのか？相手はお前を引き取ってくれた、産んでくれた恩人で実の親だぞ？それに麻薬なんて、別に珍しいものじゃあない。少し歩いてみれば証人なんてわんさかいるぞ？」

「それでも！誰かが苦しんでいる。父さんが！誰かを苦しめている。そして麻薬にも手を出してしまっている！麻薬は人の尊厳を踏み躪る最低の物だ！それを見て見ぬふりをするなんて、ヒーローじゃない・・・！いや、人としてもそうだ。だから、だから俺が・・・！」

「自分に火の粉が飛び散ると思わないのか？この事を世間に知られれば、お前は夢を、ヒーローになるという未来に永遠に辿り着けないぞ？」

「構わない。たとえヒーローになる資格が無くなっても、目の前で悪事が行われて、ソレをこれ以上広げられないように食い止められることが出来るなら、俺の未来なんていくらでも断ち切ってやる。心だけでも、ヒーローでいたいから」

「ところで、だ。お前が正義に燃えているところ悪いが、後ろは取ったぞ」

既に後ろには私の『ホワイトスネイク』がいて、拳を振りかざしている。避けることは、もう出来ない！

「え——！?!こ、これは、幽波紋?!?!どうしてこんな所に?!?!」

「簡単だよ。お前を、始末するためだ!!」

「なっ?!来てくれ、『キング・クリム——ゾんツ?!?!」

奴が幽波紋の名を叫ぶが、その前に拳は当たる。顔面にモロにクリーンヒットだ。顔が不思議に歪んでいるぞ？ああ、そうだよなあ？おかしいよなあ？だってお前は幽波紋を出して応戦したはずなのに、目の前にいる『ホワイトスネイク』を殴ったはずなのに、それはなんの感触もなくて、背後から痛みがあるんだもんア!?

頭を止めるには効果覲面だった。

「お前が幽波紋スタンド使いだと知った時、私は心底恐怖したよ。いつかお前が、私の前に立ち塞がるのではないかな。『キング・クリムゾン』は強力だ。無敵と言ってもおかしくない」

『ホワイトスネイク』が息を止めないように首を掴みながら持ち上げる。これなら、いつでも殺せる。少し力を込めるか、もしくは触れている手から記憶DISCを抜くだけで、コイツを完封することが出来る。

そんな絶体絶命のヒーロー志望を見上げながら、先程『ホワイトスネイク』が置いた、DISCを手取る。ああ、ようやく戻ってきた。『運命』はやはり私を選んだのだ。私が恐怖に怯えなくていいように、『運命』からの贈り物がようやく届いたのだ。

DISCを私の心臓に突き立てる。短剣を胸に押し付けて自殺するように、ゆつくりとだが正確に確実に、この幽波紋スタンドを刻み込むために。

「私は、『絶頂平穩』を手に入れる力を得た！」

DISCが私の中に入っていく。するとどうだ？精神力は溢れ出て、今までにない爽快感がある。これが恐怖を粉碎し、あらゆる試練を乗り越える為の力だ。

「パワーが溢れる。気分がいい。歌でも一つ歌いたくなるいい気分だ。これが、この世の全ての上に立つという感覚か。無闇に力を振るうことは好きではないが、ああコイツはいい。麻薬はやったことは無いが、きつと常用者はこんな気持ちになるんだろうなあ!!」

突然興奮してどうなっているのか分からないって顔だな。まあ当然か。第三者から見れば私は自分の心臓にDISCを突っ込んで、突然ハイになったヤバイやつに見えるからな。

だが仕方ないだろう。嬉しいんだよ。私を蝕んでいた恐怖の一つが完全に消えたことが。

「さあ見せてやる。私の『キング・クリムゾン』を」

ゆらぎと共に『キング・クリムゾン』が現れる。私の身体によく馴染む。大抵の幽波紋スタンドは私に適合しなかったが、やはりコイツは特別

だ。

「そんな・・・どうして『キング・クリムゾン』が・・・」
「察しの悪い鈍感君だな。私が、『ホワイトスネイク』の能力でお前から取り出したからだ」

コイツやっぱり6部を知らないか。もしかしてアニメ勢か？確か5部までは放送されていたはず。二巡目の世界である7部から読まないのはいいが、せめて6部までは読んでおけよ。

ああ、だから『キング・クリムゾン』だったのか。

「『キング・クリムゾン』は私の手元に、本来あるべき持ち主の元に戻った。さて、お前はどうかかな正義の味方」

『ホワイトスネイク』は手を緩めない。ギリギリと締めることもしない。ただ殺さず苦痛を与えている。

「殺すのが一番いいんだろう。ソレは何よりも確実に安易な方法だ。ディアボロも言っていた。血の繋がりというのは何よりも面倒なものだと。存在するだけで害悪と呼べるほどに。私はきつと、お前を殺すべきなんだろう」

「ぐっ——がああああああ!!」

「喚くなよ、煩いだろ」

そんなに心臓を直で触れるマッサージが気持ちよかったのか、煩いくらいに悲鳴を上げる。虐めすぎたか、と思つて止めれば、荒い息を吐きながら必死に酸素をかき集めている。

そこを、組み伏せる。

「2年間、恐怖の傍らでずっと考えていたよ。お前の殺し方、そしてお前という存在を最も貶める方法は何か。ただ殺して晒すだけなのはずまらぬか?」

組み伏せられて下に向けられている顔を、髪を無造作に掴んで持ち上げる。その視線には敵意と疑問、そして痛みが内包されていることを教えてくれるが私の心には響かない。暴力はあまり好きではない。だが、残念ながらこれは過去を乗り越える試練であつて暴力ではないのだ。

「お前も私と同じ転生者なんだろう? そうなら頷くんのだ」

涙と涎と鼻水、およそ顔から出せるもの全てを出し尽くしながら体液を振りまくように顔を縦に振る。それにかからないように、近くに捨てられていた、組織が行っていた犯罪について書かれたノートを盾にする。

「恥知らずのパープルヘイズを知っているか？これはジヨジヨ5部の後日談のようなものでね。フーゴを主体として進められる『贖罪の物語』なんだ。そしてこの作品の中には面白いものがあってな、

それは『麻薬』だ。パツシヨーネという組織が禁じていた麻薬を、ディアボロは大量に流通させていた。驚くことにパツシヨーネが麻薬売買を始めてから、被害者は20倍に増えたらしい。

ここで疑問だが、どこから麻薬を持ってきたと思う？

麻薬は輸入も輸出も難しいものだ。だがそれ故に莫大な金銭を得ることが出来る。パツシヨーネはそれを20倍にも伸ばすという奇跡を行った。作中では魔法のようにどこからともなく現れるって語られてたよ。なあどうやったと思う？どうやってそんな大量の麻薬を仕入れたと思う？

分からないわけないよなあ。だってそういつた訳の分からない不条理は、私達にはたった一言で片付いてしまうんだからさあ。

そう、^{スタンド}幽波紋だ。ディアボロは部下に、麻薬を作る^{スタンド}幽波紋使いを持つていたんだよ。麻薬チーム、と呼ばれるグループだ。そのグループの要であり、4部に出ていた『トニオ・トラサルディー』の弟、『マツシモ・ヴォルペ』の^{スタンド}幽波紋によって、岩塩だろうが海水だろうが麻薬になっていったんだよ」

正確には脳を刺激して麻薬の数十倍分の効果を引き出すというものだったが、それはどうでもいい。要は、これに麻薬としての性質があることこそが重要なのだ。

私は懐からD I S Cを取り出す。私が思う^{スタンド}幽波紋として最悪の、最強ではないが能力としての最悪を取り出す。

『ホワイトスネイク』は記憶や^{スタンド}幽波紋といったものをD I S Cにする能力がある。記憶を抜けば抜いた量によっては植物人間になるし、^{スタンド}幽波紋を抜けば今のお前みたいに無力になり、D I S Cに命令を書き

込んでいければ、書き込まれた命令は忠実に実行される。

ここに入っているのは記憶ではなく幽波紋^{スタンド}。今しがた説明した麻薬を生み出す幽波紋^{スタンド}『マニック・デプレッション』が入っている」

「ま、まさか・・・!?や、やめろー!やめてくれー!そんなことしたくない!!誰か!!誰か助けて!!助けてヒーロー!!助けてよ!!誰かああああああああああああ!!!」

私が何をするのか理解したのか、声を荒げて叫んで喚き散らす。こんなギャングの屋敷付近にヒーローが来るはずはないし、屋敷の者達は全員出払^{...}っている。助けは、来ない。

「おいおい、コッチは感謝して欲しい気分なんだよ?わざわざ生かすっていう面倒で危険な方を選んで、殺さないでやるんだからさ、ありがとうございます、つて涙しながら言うべきだろ?別にお前が生きなくて、誰に迷惑がかかることじゃあないんだからさ」

とある命令の書き込まれた幽波紋^{スタンド}DISCは既に半分以上が顔に挿入されている。これが全部入り切った時、コイツは命令通りに麻薬を生み出し続ける人形となる。

ヒーロー志望が転落を超えて墮落して麻薬作りにせつせと従事。なかなかの話になりそうじゃあないか。

「ああ、それと私がお前に新しい名前をやろう。メデイシー^薬ナだ。いい名前だろう?これからお前は消える。物理的にじゃあない。存在が消えるのだ。過去の経歴も、人間関係も、痕跡も。何もかもが忘れ去られる。お前という人間は、最初から存在しなかったことになる。だが喜べ。これは、お前を守ってやるためだ。涙して喜んでいいぞ。妹に、ここまで尽くしてもらえるんだからなあ。

じゃあな愚兄。ずっとお前のことが、嫌いだったよ」

残りを『キング・クリムゾン』にねじ込ませる。瞬間、コイツは喚いていたのが嘘のように静かになり、物言わぬ人形になった。取り押さえていたコイツから離れても動かない。まるで死体だ。息をしているだけの。

落ち着いて、私の行動を考える。振り返ることは大切だ。失敗を残して、そこから恐怖を生まないために。するとどうだ。顔は真っ赤を

ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ

「

この後めちやくちや恥ずかしくなつた。

!!!

原作のスタートを知らせよう。不安はいっぱいあるけど

入口に群がり、気合いの声を上げたりする人達から少しだけ離れてスマホを開く。開くのはゲームアプリやよく使う音楽アプリではない。確かにこの時間、試験前のリラックスには丁度いいかもしれないが、リラックスとして何かをするならSNSが一番だった。

中学のたくさんの友人が登録されたSNS。今この瞬間も更新されるグループではお互いを励ましあっている。みんな頑張つてヒーローになろう。今のご時世、個性を持つ人なら高校は記念受験か本命かでヒーロー科を受けるのが通例だ。

それを読み流しながらみんなどと同じように在り来りの言葉を投げる。中学のクラスメイトとは高校で会うことはほとんどないだろう。もしかしたらこれが最後のメッセージになるかもしれない。

グループから出て、両親からのメッセージを見る。頑張れ、思うようにやつてこい。ありがたい。

そろそろ会場に入った方がいいかもしれない。受験生達は続々と会場に入っていく。別に最後の方で構わないと思っっているからか、積極的に人の波に飲まれようとは思わない。

スマホの電源を落とそうとしたところで一通だけ通知が来る。

送り主はこの1年で最も親しかった人。少し年上のどこか抜けている人。今来た通知も朝ごはん何だった？である。普通は巫山戯ていると思われるが、これは巫山戯ている訳ではない。分かるのだ。これで緊張をほぐそうとしてくれているんだろう。

その人のそういう所が、好きだ。

今度こそ電源を落とし、ポケットにしまう。その直前に新たなメッセージが来ていたのに気付かず。

この日、耳郎響香はヒーローの登竜門、雄英高校の門を叩いた。

『はいスタート!!』

ヒーロー『プレゼントマイク』の大音量のアナウンスで生徒達が一齐に駆け出す、なんてことは無かった。まずあつたのは一瞬の戸惑い。まるで体育祭のリレーで、前振りも事前動作もなく、唐突にスターターピストルを鳴らし、開始を告げたときと同じような感じだ。

だが運良く考えさせられる機会があり、何を見られているのか大抵理解した彼女だけは、戸惑う集団の中から飛び出した。マイクは威勢のいいのがいるとかなんとか言ってるが、耳郎は雑音として処理している。意識は完全に、正面数十mにて待ち受けるロボット群。武装などに殺傷力はないとのことだが、それでも正面からでは、少しだけ恐ろしく見えてしまう。

一体一体は木偶の坊だが数が多い。数の差は戦闘では重要なファクターになってくる。そしてこの後雪崩のように駆け出し始めた受験生達が押し寄せてくるだろう。そうなれば混戦は必至。獲ろうとした獲物をほかの受験生に獲られるかもしれない。満足に動くことが出来ないのはいい事ではない。

逆に自分が受験生達の妨害をしてしまうかもしれない。英雄高校が求めるのは社会に貢献するヒーロー。そのヒーローが誰かを傷つけるのはどうしようもなく笑えない話だ。だから、

「大技を使うなら、誰もいない今しかないでしょ！」

ベルトにつけられている2種類4個のマイク型のサポートアイテムに耳郎の個性『イヤホンジャック』を挿して、マイクを手の甲にセットする。3ヶ月前にプレゼントとしてスクリーザから貰った専用サポートアイテム。当初は受け取れないと言って返そうとしたが、完全専用だから自分が持っているも埃を被るだけ、と押し切られて受け取った物。

この2種類のマイクの1つ。今耳郎が装備したのは耳郎の心臓音を個性で爆発的に増幅させ、増幅させた音を余すことなくマイクに通

して更に数倍増幅させて指向性を持たせて放出する広範囲制圧攻撃。「ハートビート・アンプリファイケーション！」

この世はいろいろな音に満ちている。早朝の鳥の鳴き声、朝の電車の音、街の喧騒などなど、朝目覚めてから眠りにつくまでの間、人は常に、意識するとしなないとに関わらず、何らかの『音』を耳にしている。音とはつまり空気の振動に他ならない。空気が細かく振動するとき、人の耳はそれを『音』として認識する。

『音響兵器』という物がある。軍やたまにだが裏社会でも使われている音を用いた制圧兵器。ある程度の指向性を求められるその兵器は、テロなどの事態に対して誰一人殺すことのなく鎮圧できる物である。

だがあくまでも『兵器』。本質は破壊でしかない。

人の発する声がガラスを破壊するというのは有名な話である。これを行うにはある程度のトレーニングや、破壊する対象の形状などの様々な条件が必要になるが重要なのは何の支援も無しに、人の声だけで物を破壊することが出来るという点である。

音は振動であり、振動は破壊を生み出せる。

サポ^{音響}ートアイ^{兵器}テム『デーヴァ』。

かつて米軍が使用していた音響兵器『ローレライ』の基礎設計を元にしてパッションオーネお抱えの開発会社が作り出したサポートアイテムである。

増幅された音を遮る物はなく、破壊の振動となって宙をかける。市街地を模して作られた試験会場のため、周りはずただの街である。その街が『音』によって破壊されていく。街灯は真ん中からへし折られ、ビルの窓は振動に耐えきれず粉碎され、落ちている瓦礫は更に細かく破壊される。

用意されたロボットは外見が大きいだけの中身がほとんどない人形である。経費削減のために空洞の部分も多い。音は空洞の、反響しやすい場所であるほど、自らを反射増幅させる。

内側にある中身がぐちゃぐちゃにかき乱される。機体内で暴れ回る振動が内部から容赦なく破壊していく。

体感時間ではほんの一瞬、ロボットからしてみれば時間の概念がないので唐突に。耳郎の正面にいたロボット、ポイントにして80ポイント超が一瞬で粉碎された。

瓦礫の山を作り上げた少女は、密かにしていた耳栓を取る。この必殺技は本当に限られた状況でしか使えないもの。人が少なく、対象が人間ではなく、耳栓が何かで自分の耳を塞いでいること。自分の音で鼓膜を破ってしまうことだ。もう少し修練を積めば制御は出来るのだが、まだ使い始めて三ヶ月しか経ってないので、下手な制御は命取りになりかねない。

諸刃の剣としては少々使い所に限られるが、それでも十分な効果は得られた。

「ポイントどれだけ溜まったか分からないけど、もう十分そうだよね・・・」

ふう、と軽く息を吐いて後ろを振り向けば起こった惨事に目を剥いている他の受験生達。彼らの反応は至極当然のものだ。何せ少しスタートが遅れて来てみれば、市街地がほとんど壊滅状態になっていたのだから。

「えつと・・・呆然としてるところ悪いんだけど」

完全に足が止まっている彼らに申し訳なさそうにしながら左右を指さす。彼らは耳郎に少しだけ怯えを見せているが、その反応を耳郎は仕方の無いことだと割り切る。学生にしてはあまりにもやり過ぎだし、何よりここまでの破壊は最早敵ライオンなのでは？と思うのも無理のないことだ。

「横から来てるよ?」

その何気ない言葉と共に、左右にいたロボット達が一斉に罵詈雑言を吐きながら襲いかかってくる。別にロボットは正面にいた物だけ

ではない。各所に散らばっている中で最も多かつたのが正面だっただけで、ロボットは他にもまだ沢山いる。

突然の奇襲にパニック状態になりながらも、遅れた分のポイントを稼ごうと戦闘を始める彼ら。そんな彼らを見ながらサポートアイテムを付け替えた耳郎は軽く笑いながら、

「じゃあもう一個のポイントも取ろっか」

そう呟いてロボットではなく受験生達目掛けて駆け出した。

「なあに、これえ？」

雄英高校実技試験会場より、半径4 km地点にあるカフェテリアのテラス席。テラスは貸切だから人はいない。甘くもなく苦くもなく、美味しいかと聞かれれば即答出来ないアイスコーヒーを飲みながら、スキューロと向かい合って白目になりかけている私。

思わず声が出るほど焦ったが、それを帳消しにするほどにこれは酷すぎる。なんだあの音波攻撃。市街地が一瞬で壊滅したぞ。いやいやおかしいだろヒーロー候補。制圧攻撃とかそういうチャチなレベルじゃない。あれは最早爆撃だろ。

いや、私はいたいけな中学生になんてもの渡しちゃったんだよ。サポートアイテムの形状的に、プレゼントマイクの増幅装置的な感じだと思つて駄菓子感覚であげたら、中身が思つていたものと真反対な方向に爆進してやがる。

「ん？どうした」

純粹無垢なスキューロ君は何も知らないらしい。いや、知っているけどソレを当然だと思つちやうんだらうな……。どこで教育を間違

えたのか。

でもまあヒーローだから実際に人間に使う訳でもないし、『類人猿にも分かる優しい説明書』には音量調節も出来るって書いてあったから、これはコレでいいのか？何らかのイレギュラーがあって彼女が落ちることだけは絶対に避けなきゃだからな。無理矢理にでも合格させるならこの位はしておくべきか？

ソレに他の会場も不安要素があれば事前に潰しておかなきゃだし。くそう、ニートの初仕事がこんなにも心労がかかるものだなんて聞いてないやい。しかも微妙に疲れるんだよ。視界が二つあるから目が痛いし。

一旦切ろう、流石に疲れた。

「スキューロ」

「目薬だな」

「ありがと」

ああ、酷使した目に染み渡るう。

バカみたいな遠距離、数km単位で^{スタンド}幽波紋を操作出来るのが私しかないのが辛いところだな。パワー・スピード・能力のあらゆる一切を封印して射程距離に極振りした『ホワイトスネイク』の射程距離は7km。

無理矢理なステータスの再振り分けは莫大な精神力がかなり必要になってくる。『ベイビー・フェイス』は誰にでも見えるので使えず、超長距離の^{スタンド}幽波紋はない。唯一ステータス再振り分けできる『ホワイトスネイク』のDISCを私以外の誰かに使わせることが出来ないため、必然的に見れるのは私しかない。

いや、例え私以外の誰かが見れたとしても、判断を下すのは私だから無意味なんだけどね。

疲れてもやる価値はあるのだ。というかやらなきゃ。異物が混じってないかの確認は絶対に必要な事だ。たった一つの見落としが命取りになるなんて笑えないからな。

「うん、もう大丈夫そう。だいぶマシンにはなった」

「あまり無理はするなよ。俺は替えが利くが、アンタの代わりは一人

としていないんだ」

嬉しい事を言ってくれるよ。別に一喜一憂するわけじゃないけど素直に頑張れそう。卑屈になるよりずっといい。さて、視界を再接続。

今度は違う会場。ここが最後の会場で、多分だけど緑谷出久がいる場所。何故よりもよって緑谷出久が最後なのか。いや、狙ってそうしたんだから文句ないんだけどね。

上空からじっくり見渡す。ホントに『ホワイトスネイク』って便利。原理とか分かんないけどとりあえず滞空することが出来る。この時点でかなり便利なのに、能力も豊富でステータスも最高値ときた。ホントにルール違反だよ。

異物はいなさそう。一応視力MAXで見下ろしてもそれっぽいのはいない。探してるのは一応めちやくちや顔のいい奴と、明らかに能力が個性の領域から逸脱しているの。見た限りでは誰もいないとは、なんと素晴らしいことか。

あ、0ポイント。知ってたけどここまで大きいのね。というか地下に格納されてたの？ホントに雄英の施設ってどうなってるんだろ。USJだったり、この試験会場だったり、明らかに街数個分は敷地にしてるよね。技術力だって周りよりも少しだけ進んでるように見えなくもないし。

ていうか出てくるタイミングがいいな。

迫力満点の大パワーで会場を壊して回ってる。アレ普通に怖くね？なんか体育祭の時になんでもないような事を誰かが言ってたけど、思ったより性能良いぞ？もう治安維持にはロボットの発展系使えよ。モビルス〇ツで十分だろ、こんなの。

いや、思えば全然足りないわ……。巨大化する奴とかジャイアントキラーとか普通にいるし、もしあつたらあつたで宇宙戦争とか起きそう。

お、主人公じゃん。ヒロイン助けるためにダッシュしてるよ。頑張れ頑張れ。やっぱり頑張らなくていいからペチャンコにでもなってるいいよ。いやなったらダメじゃん。それこそイレギュラーじゃん。

バカだな私。一人芝居アホみたい。

試験会場って案外音が響くんだなあ。必殺技？決め台詞？どっちでもいいけど結構響いたよ。視覚だけじゃなくて聴覚まで接続してたのが仇になったか。反響して耳が痛い。

うわあ、0ポイントぐちゃぐちゃになっちゃった。さっきの耳郎ちゃん以上にボコしてる。いや知ってたけどこれは酷い。ロボットも酷いんだけど、腕とかどうなってるの？筋肉の断裂じゃなくてアレはもう内部崩壊レベル。腕の内部にキラークイーンの爆弾を入れて破裂させたらあなるのかな？いやその前に爆散して塵も残らないか。

イレギュラーが存在しないことは確認できた。耳郎ちゃんだけなにか飛び抜けて凄かったけど、まあなんとかなる。そして緑谷出久。こちらは、まあ想定通りだった。

『ホワイトスネイク』に戻ってくるように命令して視界を戻す。やることを終えたと理解したスキューロは、劳いの視線を送ってくる。劳いの視線ってなんだよ。自分で言っても訳分からん。

「どうだった」

「想定通りだよ。決して警戒する程度の相手じゃあない。オールマイトの後継者らしい奴も、幽波紋スタンド使い一人でどうにかなる。それに力を使いこなしていかないんだ。一回使うだけで重症を負う。パワーだけの個性なんて怖くもないよ」

スキューロにはオールマイトの後継者のことを知られている。緑谷出久だということは知らないが、オールマイトが個性を引き継がせたということを知っている。

私は教えていない。自分でその真実に辿り着いたらしい。スキューロマジ規格外。オールマイトが必死こいて隠してきた真実を容易く見破るとか凄すぎる。

「所詮相手は人間だ。吸血鬼でも生物としての位階が違う生命体でも無い。心臓が全身に血を送り、脳で命令している人間だよ。人間が相手である限り、お前が負けることは無い」

「ふっ、それはボスもだろうか？ボスの幽波紋スタンドなら一方的に殺すこと

だって出来る。それに正面からの戦闘ならボスの方が圧倒的に上だ。俺は所詮、暗殺者でしかない」

いや『グレイトフル・デッド』とか分かってても防げないからな？『ビーチ・ボーイ』は捕えられれば終了。『マン・イン・ザ・ミラー』は引きずられれば抵抗出来ない。『ベイビー・フェイス』は良い個体を産み出せれば最強って言ってもおかしくないんだぞ？

「私達で張り合う理由はないだろう。敵対するであろうヒーローを始末できるか出来ないか。大切なのはそれだけだ」

「それが雄英高校A組に入る者達か？」

「そうだ。運命は彼らを選ぶ」

キンクリを見せつけるように傍に出す。うん、今日も絶好調。見事なまでのパワーだ。運命が私を選び、私に与えたコイツなら、油断なく全力で戦えばオールマイトだろうがAFOだろうが、緑谷出久だろうがぶち殺せる。

だが忘れるな、私よ。大切なのはいつだって私の『平穩』だ。例えば誰が死のうが結果が『平穩』であればどうでもいい。些事と言っても差し支えない。確実を手に入れる、絶対に。

「運命がアンタに幽波紋スタンドを与えたように、俺とアンタが巡り会ったように、彼らはアンタの前に立ち塞がるのか？」

「そうだ。そしてその一番前に立つのが緑谷出久。そして——」

スキューロが事前に用意した書類の一枚を取り出し、握り潰す。運命に立ち向かうのは緑谷出久だけではない。警戒するのは緑谷出久では無い。前にも言ったが、緑谷出久は警戒するに値しない。所詮はただの正しいヒーローでしかない。

本当に恐ろしいのは純粋なヒーローではない。ヒーローでありながら悪になれる素質を持つ者だ。

「爆豪勝己、だな」

幽波紋スタンドという物を抜きにしたら、間違いなくコイツは運命から愛されている。恵まれた身体能力にずば抜けた戦闘センス、吉良吉影を、『キラクイーン』を思わせる爆破の個性。

そう、『爆破』だ。爆豪勝己の代名詞とも言える個性。何故恐れるの

か？恐れるだろう、それが当然だ。

私はあらゆる可能性を考える。この世に都合の良いことなんてほんの少しだけで、後は都合の悪いことばかりだ。それはとても自然なことだ。世界は自分の思い通りになって動かない。

そうだ、世界は思い通りにならないんだ。もし爆豪勝己の個性が、精神が、成長でも何でもして幽波紋スタンドへと、『キラークイーン』に昇華したらどうなるか。吉良吉影が敗北したのは戦う術を知らなかったからだ。殺すことで芽生えた幽波紋スタンドには正面から殴り合う適性なんてなかった。本体が戦い方を知らないのだから当然だ。

だが爆豪勝己はどうだ？明らかに戦闘慣れをして、戦闘中に成長するという主人公属性を身に付けていそうなアイツがそれを持つだなんて考えるだけで恐ろしくなる。

幽波紋スタンドは才能の延長線上にあるものだ。爆破という才能の延長線上に『キラークイーン』があっても不思議はない。対策は常にしておかなくてはならない。

その対策の一つ。幽波紋スタンド使いが正面から爆豪勝己と戦わなければいい。要は成長する時間を与えず、戦わずに即殺すればいい。そう、世界は都合の良いように出来てなんていないんだ。私にも、スキューロにも、爆豪勝己にも、オールマイトにも、AFOにも。「なあスキューロ、私が命令すればお前は、子供を皆殺しにできるか？一切の容赦なく、慈悲なく情なく、ただ私からの命令というたった一つの理由だけで殺せるか？」

殺るのは私じゃないのかって？やだよ、なんで私が殺さなきゃならないんだよ。めんどくさいし危険だろ。殺せばなんでもいいんだよ。誰がやろうがどんな手段だろうが、私が『平穩』から動く理由はない。

ああでも、もし、だ。

「当然だ。アンタの命令は絶対だ。子供の命？比べることすら烏滸がましいだろう。俺にとってはアンタが全てだ。暗闇スキューロでしか生きられない俺にとっての、たった一つの幸福フェリシティであるアンタの命令ならば、喜んで従おう。例えば死ぬという命令でもな。たとえば何があるとも、俺

はボスを裏切らない」

「ああ、そうだな。そうだよなあ。考える必要なんてない。私にはスキューロがいる。私の全幅の信頼を与えられる私のスキューロがいる。だから考える必要なんてないんだ。」

爆豪勝己が、世界のどこかにいる才能を持っている誰かが幽波紋スタンドに覚醒して、シーラ・Eが、親衛隊が、スキューロが敗北して、私が戦わなければならなくなるなんてことは。

助手席に座るボスは、疲れで寝てしまっている。仕方の無いことだ。『ホワイトスネイク』でずっと共有した視界を維持し続けて、一人を見ていたのだ。幽波紋スタンドを何時間も維持し続けることは難しい。出し続けなければいくら俺と言えど、少しばかりの疲労はある。それをボスはずっと出し続けていた。

雄英高校の筆記入試が始まってから実技試験が終わるまでの数時間。4 kmも先の場所にだ。無理矢理なステータスの振り分け、そして4 km先まで飛ばして維持し続ける精神力。ボスと同じ幽波紋スタンド使いになったからこそ分かる。やはりボスの精神力は規格外だ。

だからこそ、悪いと思う。言いようのない罪悪感で胸が溢れてしまう。オールマイトの個性に対する疑いは、確信には至らなかった。俺

が独自に雄英高校に潜入して校長とオールマイトの会話を盗み聞いた時のことだ。時間的な問題もあり、それが確かなことなのかは分からなかった。

しかも聞き出せたのはオールマイトが自分の個性の後継者を見出したらしいというこののみ。

その時オールマイトは自分の個性を『ONE FOR ALL』といった。その名前は、約一年前にボスの『平穩』を脅かした憎き敵『ALL FOR ONE』の対義語だ。AFOは個性を奪うという話がある。ならばオールマイトも同様のことが出来るのではと、考えついたので。

その確証を得るために、ボスに頼み込んで後継者を探し出してもらうことにした。本当ならばこれは俺がやるべき事だ。確証のないことでボスに動いてもらうなど愚の骨頂。だが俺では、確かめようがないのは事実だった。

「・・・来るな・・・奪うな・・・私から・・・」

いつもの寝言をボスが呟く。俺はそれを長年ボスの傍で聞いてきた。ボスは眠るといつもこういった寝言を吐く。ボスの平穩への執着。奪われることの恐怖。俺には計り知れない恐怖をボスは常に感じ続けている。

その恐怖から抜け出させる方法を俺は持ち得ない。結局はボスの命令を実行することしか出来ないのだ。俺という存在は、肝心な所で役に立てない。

先程のボスの問い。子供を殺せるかどうか。その問いを投げかけられた時にまた思った。ボスは俺が死ぬか、命令に従わないことを想定している。それに対して思うことは俺自身への不甲斐なさしかない。敗北か裏切りの可能性をボスに思わせてしまう時点で、俺は未だ完璧にボスのための存在にはなれていないらしい。

俺がボスに言ったことは本心だ。子供だろうが容赦なく殺せるし、自殺することすら厭わない。ボスがどう思っているかは分からないが、俺はそれだけのものをボスから与えられたのだ。命程度では替えがきかない物を与えられたのだ。

恩義なんてレベルで済ませていいものでは無い。俺の全てでもまだ足りない。

偶に思ってしまった。今までボスのために行ってきたことが、本当に正しい事だったのか。ボスにパツシヨーネを捧げることが正しかったのか。ボスの父親を殺すことが正しかったのか。

ボスの為、ボスの為と思ってきた自分の行為が信じられなくなるこ
とが一番辛い。ボスは普通の、フェリシータとしての生き方が本当の
幸福だったのではないだろうか。シクリーザという人間を生み出さ
ず、フェリシータを消すことなく、父親と生きていくことが。

俺は、本当にボスの傍にいたべきなのだろうか。

私って主人公だよな。名前すら出てないけど

平和の象徴オールマイト。

アメコミ風な彼は世界最高と呼ばれるほどのヒーローであり、事件解決数と救助者数は群を抜いてトップ。ヒーローランキングでは彗星のように現れてから常に一位の座に居続けている。

正しくナンバーワンヒーロー。彼が存在するだけで世界の犯罪が五割減するとも言われている。

彼が人気なのは最も人に笑顔を与えているから。そして単純故に強力な個性を持っているから。だがやはり一番大きいのは勝つからだろう。

どれだけ強い敵でも、絶望的な状況でも、破滅が目の前にあってもオールマイトというヒーローはあらゆる障害をその拳で打ち砕いていく。その姿に子どもは惹かれていき、いつか自分もオールマイトみたいなヒーローになりたいと、大きく果てしない夢を語るのだ。

そんなオールマイトは雄英高校の教師を務め始めた。理由は自らの後継者、緑谷出久の近くにおいて、彼を育成すること。

オールマイトは五年前に、AFOという最悪の敵と戦い打ち勝った。だがその代償に呼吸器官をやられ、一分一秒と共に弱体化が始まった。怪我をした当初はまだマシだったかもしれない。脂汗を浮かべて痛みを我慢して、笑顔を見せるだけでよかった。

だが今は、もうそれすらも出来ない。

オールマイトは骸骨のように青褪め痩せ細るトウルーフォームという、とてもオールマイトだとは想像できない姿にまで弱体化してしまった。ヒーロー・オールマイトとしての姿であるマッスルフォームも、一日三時間ほどしか維持出来ず、変身後は吐血してしまう始末。

巨悪を撃退した代償は、あまりにも大きすぎた。

日々弱っていく自分の肉体。元相棒の予言では、五年前の段階で誤差はあれど、六、七年後に死ぬらしい。周りからは安静を、後を継ぐ者達に託して休めと言われたが、オールマイトはナチユラルボーンヒーロー。狂気とも称された彼の信念は、止まることを許さなかつ

た。

そして五年経った今、オールマイトは自らの個性、先人達によって受け継がれてきた『ONE FOR ALL』の9代目となるに値すると思つたヒーローを見つけたのだ。オールマイトと同じ無個性で、泣き虫で弱くて、けれど誰よりも心が強くヒーローとして満点のお節介さを持つ少年を選んだのだ。

数多の候補者達がいた。オールマイトの事情を知る数少ない者達を選び抜いた次代の平和の象徴に相応しい者達が沢山いた。強い個性に学生の段階でもプロヒーローに劣らない戦闘センス。そして何より笑顔とユーモア溢れる者。

沢山の候補者達を見たオールマイトは、しかし候補者どころか無個性ということ以外珍しさが何も無い、どこにでも居る中学生の少年を選んできました。

誰もが疑問に思つた。中には彼を深く思つたが故に憤慨して仲違ひした者もいた。

そんな数少ない意見を跳ね除けてでも、オールマイトは緑谷出久という少年を選び、緑谷出久を次代の平和の象徴、自分を超えるヒーローにすると決めたのだ。

故に、オールマイトが一番最初に選んだのは不自然なく教えられる立場、母校雄英高校で必ず入学するであろう緑谷出久のために教師になることであつた。

だがあくまでもオールマイトはヒーローであり、教師ではない。教鞭を執るためには必然的に教員免許が必要になり、この個性社会における教員免許はヒーロー活動の片手間で見られるほど簡単なものではない。

オールマイトが頼つたのは雄英高校の校長であり個性『ハイスベック』を持つ人間以外で唯一個性を持ったネズミ、根津であつた。根津はオールマイトの状況を知っている人間。候補者の数人を推薦したのも彼である。

根津も当初はオールマイトがただの無個性の中学生を選んだことに疑問を持つたが、柔軟な思考でオールマイトの考えを受け入れた。

根津を頼ったのは別に狡をするためではない。教員採用試験を受けるための勉強を手伝ってもらったためだ。

だが根津は雄英高校の校長という立場であり、何かと忙しい身。そしてオールマイトも根津も教師になることは絶対に必要だと考えているため、秘密がバレることを良しとした。

オールマイトは雄英高校に在籍する教員達、即ち教員免許を取ったプロヒーロー達に勉強を教えてもらうことにした。前述した通り、オールマイトはマッスルフォームには一日三時間程しか耐えられない。だから最初にトゥルーフォームで登場することによって、彼らの度肝を抜いた。それと同時にオールマイトの墜落が近いということをも、トップヒーローである彼らに伝えたのだ。

返ってきた彼らの反応はパニックと驚愕。当然のことだ。現代社会において中核を担っていたヒーローが折れるということは、最悪個性暗黒期が再び訪れるかもしれないという事だ。

個性の後継者のことは伝えていない。そもそも個性を他者に譲渡できるということ自体が前代未聞である。おいそれと知られる訳にはいかない。

都合のいいことに彼らはオールマイトが次代の社会を担うヒーロー達を育てていくと、当たらずとも遠からずな解釈をしてくれたおかげで、無事に協力を得ることが出来た。

久方ぶりの勉学に慣れない頭を回転させながらも、オールマイトは後継者を育てるという意地と、教えてくれた彼らに対する感謝の結果で表すという意志で、百点満点の結果で教員免許を取得できた。

オールマイトも来週の新年度から正式に雄英高校の教師の一人。既に諸々の準備を済ませて、後はヒーロー有精卵の新入生達を待つだけであった。

「ん？何をえているんだい相澤君」

相澤と呼ばれた男は薄汚い外見をしているが、その正体は抹消系ヒーロー『イレイザーヘッド』という、アングラ系ヒーロー。そして来年度のヒーロー科A組の担任となる男だ。

相澤はもうこの時点でとつくに資料などの準備は全て終えている

人間だと思っていたが、何やら難しそうな顔で沢山の資料を読んでいる。もしかしてA組の新入生になにか不満でもあったかな？と、若干一名非常に心当たりがあるオールマイトは、内心冷や汗をかく。

「ああ、去年のイタリアの事件関係ですよ」

相澤はどうぞ、と言つて見ていた資料をオールマイトに渡す。受け取った資料を見ると、そこには今年一月と去年の四月のヨーロッパの子供達の麻薬使用件数と犯罪件数のグラフやそれを説明する文章が書かれていた。

それを見てオールマイトは、相澤が一年前にイタリアを中心にヨーロッパで起きた、大規模検挙に参加していたことを思い出した。その検挙には世界中からヒーローが集結し、無事に組織のボスを捕まえた」と報道されていたので、鮮明に覚えている。

「凄いね。昨年から数十十分の一まで減っているじゃないか。確か、パッショーネだったっけ？ヨーロッパで麻薬を流していた組織は」

「ええ。十年くらい前に現れたギャングで、構成員はかなりの数がいいます。でも一年前の一斉検挙で幹部達含め、構成員のほとんどは捕まえて、残っているのも日が経つ毎に捕まっています。事実上の壊滅ですわね」

「ならどうして今この資料を？」

「・・・誰にも言わないでくださいよ」

相澤は資料を持ってオールマイトを引き連れながら応接室に入っていく。防音性に優れるこの部屋なら、誰に聞かれることも無い。つまりは、上層部から何かに対する口止めが入っているということ。

ソファに對面して腰を下ろし、相澤はため息を吐きながら語り出した。

「イタリア警察は隠したがつていますし、ヒーロー達も沽券に関わるので情報統制がされていたんです。パッショーネのボスが、捕まっていないということを」

「え？」

驚くのも無理はない。世間では大々的にボス逮捕！と語っていた。オールマイトもそれを信じていた。彼らヒーロー達ならやってくれ

る！と。だが世間に報道されていたものと事実は全くの真逆だった。「捕まえるどころか、何の手掛かりも得られませんでしたよ。一応記憶を読み取る個性や、言葉の真偽を見極める個性を持つ人達の協力を得ていましたが下っ端は勿論、捕まえた幹部の誰一人として顔どころか名前も知りませんでした」

怖いくらいの情報統制。パツシヨーネのボスは驚く程に自分を隠し通していた。そこに存在しない正体不明のボスという偶像を立てていたのだ。

「それに、実質的な問題は何も終わってないんですよ」

ホチキス止めされた資料を捲る。次のページは一面のグラフに記載された名前らしきもの。それらは全て、存在しているが逮捕されていないパツシヨーネの者達。

「パツシヨーネの組織構成は徹底したものでした。下っ端や縄張りを纏める幾つものチーム。その上に幹部がいて、それ以外には組織内にありながら独立したチーム。唯一ボスの手掛かりになりそうな親衛隊と呼ばれる連中も、ボス同様に誰一人として知りませんでした。」

そして組織に所属していた奴らは全員が親衛隊を恐れていた。事情聴取で幹部の一人から聞き出せたのですが、ボスの正体を探ることは組織において禁忌だったようで、もし探れば親衛隊が裏切り者ともなして殺しにくるらしいです」

「それは・・・まずいね」

真に賢しい悪は闇に潜む。ヒーローというこれまでの長く深い経験が、彼らに警鐘を鳴らしている。こんな状況になった場合、碌な事が起きないのだ。

「問題はもう一つ。捕らえた幹部達が一ヶ月後に、特殊刑務所内で皆殺しになっていました。死因は全部同一のものでしたけど、まるで鮫にでも喰い殺されたような傷口でした」

「鮫・・・幹部の始末の為に捕まっていない親衛隊が、刑務所内に侵入したということかい？」

「でしょうね。死体の全てにpunizione、『罰』と書かれた紙切れが乗っていました。まず殺つたのは親衛隊で間違いないと思

ます。ですが侵入経路も、個性も何一つ分かりませんでした。実質手掛かりは無しです」

「厳しいね、それは」

親衛隊か、組織お抱えの暗殺者か。どちらにせよ、組織は刑務所内の囚人達を暗殺することが出来る能力がある。それは個性によるものか、単純な技能によるものか、もしくは両方の組み合わせか。

「それでも一応は、問題解決になっているのが厄介なところですよ」

資料にあつた通り、ここ一年で麻薬使用者の数は激減している。最近では目を付けていた売人が真つ当な職に転職している。傾向としてはこの上なく良いことなのかもしれない。巨大組織は潰れ、取り扱っていた麻薬は無くなり、少年少女の犯罪件数は激減した。

「この結果に、警察上層部は満足したんですよ。もう麻薬が出回っていないなら追う必要は無いと。逮捕者達を殺した奴についても、傍らで捜査する様な杜撰なものに」

最早パツシヨーネという組織に対して、これ以上の人員を割くつもりがないのは明白だった。やるせないが、納得せざるを得ない。ヒーローと警察では見ている視点が違うのは事実だ。更には日本とイタリアでは方針などもまるで違う。日本のヒーローである彼らがイタリアのやり方に口を出すことは出来ない。

徹底して追う日本と、統計的な数字の回復があればそれでいいイタリア。

目的も込める思いも、差異は明確であった。

「でもまだこれを見ているってことは・・・」

「ええ。パツシヨーネは必ず蘇る。来年か再来年か、はたまた十年後か。それとも明日か今この瞬間か。ボスや親衛隊が捕まっていなくても、近いうちに必ず。そしたら、今度こそ刑務所に入れてやりませよ」

根拠なんてものは無い。このまま闇に潜み続けるかもしれない。だが相澤の見立てが間違っていないければ、いずれパツシヨーネは蘇る。

「分かったー」

ボンツ、という煙と共にマツスルフフォームへと変身する。スーツはピチピチになり、ボタンは千切れそうになる。ネクタイは今にも筋肉の壁に押し出されて破れそうだ。

オールマイトは巨腕に力こぶを溜めながら、快活に笑う。

「その時は私も手伝おうじゃないか！今度こそ引つ捕らえて刑務所にぶち込んでやろうぜ相澤君！」

「それは頼もしいですね」

NO.1ヒーローの協力を得られるのであれば、どれだけ心強いことか。少なくとも親衛隊の一人や二人は捕まえられることは間違いないだろう。

だが、それまでオールマイトが生きているかは分からない。いつか尽きるとも知れないこの身体。強靱な肉体の核となっていた『ONE FOR ALL』は既に無く、残った種火だけでどうにか誤魔化して生きている。

それにパッションネだけではなく、未来には山程の、大なり小なりの問題が跋扈しているのだ。一番大きいのが生きている可能性がある宿敵にして怨敵であるAFO、比較的小さめな目先の問題が、入試中にOPをぶっ飛ばした緑谷が落下している最中に目にした、宙から見下ろす謎の人型。

態々それを伝える必要なんてなかった。誰かの個性かもしれないし、もしかしたらただの見間違いかもしれない。だが緑谷はそれをオールマイトに伝えた。言わなければならぬと思ったからだそう
だ。

緑谷曰く、アレを見ている時「途轍もなく嫌な予感がした」らしい。似たような存在を知っている。AFOだ。オールマイトはAFOを見ているだけで同じような感覚に襲われる。絶対にかしななければいけないと心をつつかれる。

もし、緑谷の感じたものがオールマイトがAFOに対して感じるものと同種のものなら、その人型はきつと、最悪の存在なのかもしれない。

暖かな春の日差しに照らされ、美しい桜に囲まれる校舎。和気藹々とした真新しい新入生達と、自分の子供の入学に喜び泣く親御達。

はて、雄英高校から与えられた資料に、入学式に保護者を連れてきてもいいなんて書いてあつただろうか。

配属された教室はヒーロー科1年A組。ヒーロー科の教室は他と離れている。少し大きめに作られているのかもしれない。学校中の扉は異形個性向けに大きめに作られている。ヒーロー科も例外ではないそこは扉を開ければワイワイガヤガヤ。A組合計20人。現時点で半分ほどしか集まつていないのに、良くもまあここまで盛り上がるものだ。

いや、分からないでもない。その浮かれる気持ちは勿論自分も持っている。表に出していないだけ。

自分の座席と定められた場所に座る。窓側から2番目、前から2番目。中学生時代なら最悪と誰もが嘆く席だろう。教師達からは丸見えで、何をやってしているかバツチリ見られる。

けれど嘆く必要なんてない。ここに居られる者の中に、不真面目なっているはずもないし居られない。なんて言つたつてここは雄英高校。最先端のヒーロー育成校であり、自由が売りの学校なのだから。「よっ！オレ上鳴電気つてんだ！お前だろ！実技試験で初っ端からポイント取りまくつた女子って」

右隣の席に座っている、明らかにチャラそうな男。コイツ本当に筆記試験越えたのか？と一瞬失礼な疑問を持つてしまった。でも見ると不思議となんかバカそうと思えてくる。

「って、なんで知つてんの」

「結構有名だったぞ！入試一位のクール系の女子が一瞬でぶっ壊しまくつたつて」

一体どこから話が広まったのか。そもそもこういった話はおいそれと広まる様なものなのか。

「なあ！お前も知ってるよな！」

「ん？ああ、風の噂で耳にしたな」

上鳴が前に座っていた人物に話しかける。異形型で肩から伸びる触手？には膜がついていて翼みたいになっており、巨体。異形型のお手本みたいな人物だ。口元にはピッタリと覆うようにマスクをしている。

「ウチは耳郎響香。えつと・・・」

「障子目蔵だ。マスクは気にしないでくれ。トレードマークみたいなものと思って欲しい」

なんだかいぶし銀や、縁の下の力持ちを思わせる。上鳴より確実に真面目そうだ。

「そういえば噂と言えば――」

「机に足をかけるな！」

耳郎の左隣で、誰かが怒鳴った。それは間違いなく独り言ではない。もしそうだったら確実にヤバい人だ。明らかに第三者へ向けられたその言葉は、一体誰に向けられたものか。耳郎が左を見てみれば、初日から大胆に制服を着崩して、一目で不良だと分かる人物がいた。

足をかけるなど言ったのは彼か。莫迦な。外見からして明らかに足をかける側の人間だ。いや、もしかしたら不良なのは外見だけで言動は真面目かもしれないが、目付きがあそこまで最悪の人間に有り得るのか、そんなことが。

言ったのは明らかに斜め前に立っている、The真面目という言葉が良く似合う方だろう。挙動がキビキビしているし、制服も着崩していない。

「雄英の先輩方や机の製作者方に申し訳ないと思わないか!？」

「思わねーよ！テメーはどこ中だよ端役が!!」

見た目通りの会話だ。真面目と不良が相容れないのと同じ。どうか両者共に声大きい。周りから凄い注目を集めている。面白そうだったり興味無いといった様々な視線。

そんな周りを気にせずに、二人の口論は続いていく。元気いなあなんてすぐ隣で起こっていることを遠い目で眺める。

「おつ、確かあの爆発頭の方は入試次席だぜ。すげえ強個性でロボツトを壊し回ったらしいぜ。ていうか口悪いな。本当にヒーロー志望かよ」

「人は見た目によらないと言うべきなのか、見た目通りと言うべきなのか」

近くで起こっていることに障子も少し迷惑そうだ。まあ流石に真面目の方は硬すぎだろう。曲がらない一本の芯。見た目以上だ。

「そういえば障子は何を言おうと——」

「お友達ぶっこがしたいなら他所へ行け」

先程障子が言いかけた噂の話を聞こうとしたら、下から誰かの声が聞こえた。1m以上、普通人が声を発する時には必ず1m以上の高さになるはず。座っていて1mに届いていなくても、大体それくらいになるはずだ。

だが声が聞こえたのは明らかにそれより低い場所。地面と同じくらいだ。

全員の注目が声の方に行く。扉の前にいるもじやもじや髪の毛の少年の後ろの寝袋から、エネルギーゼリーを一瞬で啜りながら小汚い男が這い出てくる。無造作に伸ばされた髪、剃ってない髭。

「ハイ、静かになるまで8秒かかりました。時間は有限。合理性に欠くね君達は。担任の相澤消太だ、よろしくね」

いや、コイツが担任かよって一瞬心の底から思ったが、先程言っていた合理性を重視しているのならば納得がいく。雄英高校にいるということとはプロヒーローなのだろうが、見た覚えが全くない。恐らくは時間の無駄ということでテレビや雑誌の出演などを極力避けてい

るのだろうか。

所々に見える合理性。この人は徹底している人だ。

「とりあえずお前達・・・」

ゴソゴソと自分の入っていた寝袋を漁る。先程のエネルギーリリーを出した時もそうだが、私物をあの中に入れる癖でもあるのだろうか。そしたら体積比とか色々とおかしい気もするが。もしかして寝袋はサポートアイテムの技術を使っていた？

「体操服こに着替れえて外に出ろ」

もう私は主人公じゃないのかもしれない。主人公らしいことしてないんだけど

担任となった相澤消太に呼び出されて、始まったのは個性把握テストという想定外の物。オマケに誰かが、普段は法で規制されている個性の全力使用を楽しそうなんて言ったせいで、成績最下位の者は退学処分される。誰もが入学式やガイダンスを楽しみにしていた感情を裏切るようなことだが、学校の『自由』を売りにした校風が許さなかった。

雄英高校の語る『自由』には教員に対する自由も含まれている。しかもその範囲は思っていた以上に広いもの。教員の匙加減一つで生徒を退学処分に出来るなど、誰が想像できようか。

だが反論は許されなかった。雄英高校に入学してしまったことと、相澤からの正論が、緩んだ心を引き締めた。

耳郎はある程度、退学処分の予想はついていて。去年の生で見た雄英体育祭、不自然なことにヒーロー科A組だけはほとんど生徒がいなかったのを鮮明に覚えていたから。

教員全員がこうだとは思っていないが、たった少しの態度だけで雄英高校は、相澤消太という人間は退学処分を突きつける。プロヒーローからしたら、その些細な物さえも許されない。何故ならヒーローとして当然の事だから。雄英高校のヒーロー科であるのならば当然の事を出来なければ、ここにはいられないのだ。

個性把握テストといっても、やることは中学の頃もやっていた身体測定と同じ。それを個性を使ってやるだけのこと。誰にでもできる範囲の身体機能だけで望んでいた種目でも、個性ありだと突出したものが増えてくる。

「やっぱ……この個性じゃ速くはならないかな……」
「十分速いと思うがな」

50m走。走者は耳郎と障子。耳郎の個性『イヤホンジャック』では急激な身体能力の増加は見込めず、障子は異形型特有の高い身体能

力を遺憾無く発揮する。

「うわ、握力500kgってゴリラかよ！いやタコの方が似てるけど！」

「耳郎は耳の個性で握るのか。思ったより便利なんだな」

握力測定では、やはり並外れたパワーを持つ障子が万力の如きパワーで規格外の数値を叩き出す。耳郎は片方の耳を伸ばして持ち手に巻き付けて思い切り力を込める。伸縮自在なこの個性は個人的に行っていた特訓で自分の体を吊り上げられる程度には鍛えられている。

測定は順調に進んでいる。その中で耳郎の記録はあまり伸びていない。それもそのはず。耳郎の個性は純粋な身体能力の強化ではない。伸びている記録は全て本来の使い方からズレた個性の応用。実技試験のような破壊力はサポートアイテムありきのものだ。

アイテムがなければ無力と言われるかもしれないが、そんなことは本人が一番理解している。

「おいおい、もしかしたらもしかするんじゃないのか」

「うっさい。アンタの方が記録低いでしょ」

「あいつだあ！そこ目！普通目やるか!？」

煽ってきてプラグに眼をつつかれた上鳴もあまり変わりはない。彼の個性は電気を蓄積して放出するもの。個性把握テストで使えそうなものは耳郎よりも少ない。というか最早ない。推薦入学の一人である轟焦凍と同じシンプル且つ強力な個性だが、彼の個性ほど応用範囲は広くない。

総合的な成績では少しだけ突出した記録がある耳郎の方が上だ。偏に煽ってくるのは入試一位というのが理由だろう。

「でも緑谷はヤベえよな」

現在ボールを投げ、全く普通の、どこにでもある記録を出したクラスメイトを見る。始まってからずっと、彼だけは何の変哲もない普通の記録しか出していなかった。

個性を発動しようとしたらしいが、どうやら相澤に個性を消されたようだ。勿論それは一時的なものらしく、今は戻されて二回目の測定

に移っている。

「確か、アイツだ」

「緑谷？緑谷のこと何か知ってるの？」

「いや、詳しいことは知らない。だが——」

至近距離で小型の爆弾が起爆したような小さな暴風。それを人体が起こしたものは、到底信じられまい。いや、オールマイトのような超増強型ならば可能だろう。だがまだ子供の肉体で、この規模を出せるのは——

「緑谷が入試の時、OPを殴り壊したのは知っている」

小さな嵐の中心にいたのは緑谷。唇を、拳を一生懸命握り締めて、声を振り絞りながら相澤の前に出る。計測器から出た記録は705m。一番最初に行った、何かと緑谷に怒鳴り散らしている爆豪よりも1m多い記録。

「うわ、痛そ・・・」

上鳴が引いたように言うが、確かにあれは引く。なんだあの指は。人間の指は、あそこまでズタボロになるものなのか？酷い内出血によって指は青紫に変色している。形からしても間違いなく折れている。まるで内部から破裂したような酷い状況だ。

だがこのパワー、障子が言ったことはあながち間違いでもないのだろう。今回は指だけだったが、これをもし全力で、腕全体で使用すれば。いや、もしかしたら指だけでもOPのロボを破壊できたかもしれない。どちらにせよ、恐ろしい程、清々しくなるくらい強力な個性だ。肉体を内部から壊す。その代償として得られるのは一度きりの諸刃の剣。あの様子ではどこまで肉体が壊れるのか把握してなかったのではないのか？そんな状態で、死んでしまうかもしれないというのに、どうして使おうと思えるのか。

ヒーローになりたい。誰かを助けたい。純粹にこれだけを夢見て行ったのならば狂気だと素直に思う。人はそこまで綺麗じゃない。純粹ではいられない。普通でありたいのなら、いてはならない。

案の定、爆豪は緑谷に襲いかかった。騙していたのか、虚仮にしていたのかと。荒れてはいるが素直な性格だ。自分の心を隠そうとし

ていない。少なくとも緑谷よりは好感が持てる。いや、緑谷よりも明らかに人間味が見える。

爆豪の襲撃は指一本触れることなく終わった。相澤のマフラーだと思っていた捕縛布に捕えられたのだ。雁字搦めになつて動けなくなつた爆豪を他所に、緑谷は保健室へ向かつた。あの怪我で続けるのは苦でしかないし記録も何も残らないだろう。

幸いなことに、退学云々はなかったことになつたようだ。皆の落ち着きようはそれはもう凄いものだ。

中には当然だと胸を張っている子もいたが、それは違つたと反論しない。相澤は確実に、落とす時は落とす人間だ。入学したての今でも容赦なく慈悲なく。そこに優しさは一切ない。無慈悲な篩い落しは教師として、ヒーローを世に送り出す側の人間としての矜持などが関わってくるのかもしれない。他に比較対象がないのでよく分からないが。

「シクリーザさんってヒーローのこと嫌いなんですか？」

出会つて三週間程だつただろうか。出会い方としては最悪だったが、彼女との関係は不思議と続いていた。仲良くなつたと言つていいのだろう。少なくとも、こうして待ち合わせをして話をするくらいには。

どこにでもあるチェーン店のカフェ。呪文のように長い品名を言うのは慣れているが、シクリーザさんは何度か噛んでいた。どうやらこういった場所にはあまり来ないらしい。悪い事をしたかもしれない。

「私が、ヒーローを？どうしてそう思ったの？」

「いや、結構それっぽいこと言ってますよ」

「ああ、違うよ。私は別にヒーローが嫌いなわけじゃないんだ。まあ迷惑だとか色々言ってはいるが、それでもアレらのお陰で、今こうして平穩無事に居られるのも事実だ。私が嫌いなのは、オールマイトだよ」

オールマイトが嫌い。その言葉を聞いたのは初めてのことだった。今では誰もが尊敬し応援し敬愛するオールマイト。平和の象徴という肩書き通りの人物であり、日本の個性社会における抑止力となっている存在。

世が世ならその発言だけで袋叩きにされるかもしれない言葉を、彼女は公衆の中で堂々と、惜しげも無く言つてのけた。

「ヒーロー否定論者つて言うわけじゃないんだ、私は。というか、彼らも別にヒーローを否定している訳では無いのも多いんだよ。ヒーロー、というか口には出さないがオールマイトという存在に迷惑している人間つていうのは思ったよりも沢山いるんだ。私のように、先をしっかりと考えている人が」

「先？」

「オールマイトが引退、もしくは死亡したら。どのような形であれ彼がヒーローからリタイアするという未来を。さあ、考えてみるかい」

言われてみて、すぐに考えついてしまった。オールマイト。平和の象徴。絶対的なヒーロー。NO. 1。抑止力。

今の社会の安全は、オールマイトという強力なヒーローがトップに在るからこそ成り立っていると、言っても過言ではない。彼の超絶的な身体能力は全国を駆け巡ることなど造作もない。他のヒーローでは対処しきれない強力な敵が現れたとしても、彼ならばすぐに駆けつけられる。事実、オールマイトはそうして人を救ってきた。

オールマイトから零れ落ちる安全という甘い蜜。それを何の対価も払わずに吸い続けているのが今の自分達だ。

「分かったようだね。そう、オールマイトが死ねばこの社会は崩れ落ちる。NO. 2がどれだけ頑張ろうが焼け石に水なんだよ。1位と2位はたった一つの数字の差なんかじゃない。そこには越えられない

い絶対的な壁がそびえ立っている。さて、ここで質問だ。オールマイトは何年間戦い続けてきた？」

約20年程だろうか。詳しいことはあまり知らないのですが、大まかな数字しか言えない。だが、耳郎が生まれるよりずっと前からいるのは知っている。多分もう50近く。肉体の衰えが始まっても何もおかしくはない。

「不死身の存在なんていないんだよ。人はいつか死ぬ。そう、死ぬんだ。オールマイトだって人間だ。全身の血液が無くなれば干からびるし、心臓をぶち抜かれれば生きること出来ない。もしかしたら死なない個性があるのかもしれない。それをオールマイトが持っているのかもしれない。だとしても都合が良過ぎないか？あの身体能力に不死の個性なんて。」

いや、ありえないなんてありえない、なんてこともあるんだ。だが、世界はそこまで都合良くできてはいない」

そう言って彼女はカップに残った飲み物を全部ストローで吸い込んだ。直後、途端に顔が顰められた。どうやら甘すぎたらしい。珈琲好きのイタリア人からしたら、ここまで甘いものはもう珈琲じゃないのだろう。

「オールマイトの安心は、最も安心なんかじゃあないんだよ。今成り立っているものは全て砂上の楼閣。土台であるオールマイトが崩れれば一瞬で崩壊するよ。そうなれば世界は世紀末一直線さ。間違はなく隠れ潜んでいる連中や、こうなることを待っている奴らは動き出すよね。そうなればヒーローと敵の戦いじゃない。敵同士の縄張り争いでも起こるんじゃないのかな？」

まあどつちにしろ、モラルもルールも消えた暗黒時代の到来だよ。それで最も苦しむのは私達なんだ」

オールマイトはハードルを上げすぎたのだ。私達に与えている絶対的な安心は、同時に敵達にオールマイトが死ねばなんでも出来るという期待さえも持たせている。皮肉な話だ。平和の象徴として君臨していたヒーローが、崩れ去れば崩壊の象徴になるなんて。

「もし、もしですよ。オールマイトが不死身なんだとしたら、シクリー

ザさんはどう思います?」

これはきつとどうしようもなく、くだらない質問なんだろう。幾多にも重ね掛けたifを聞いているだけなのだ。意味なんてなく、理由なんてない。

それでも聞きたかった。学びたかった。他人からではなくこの人から。自分とは、人とは違う視点で物事を見続けているシクリーザという人間から。

「そうだね……。それはもう恐怖しかないよ。ほら? 考えてみなよ。ただでさえ平和の象徴なんていう、一人の人間に与えるべきではない肩書きを背負ってるんだよ?それを笑顔で背負えている時点で狂気さ。」

ねえ耳郎ちゃん。私は思うんだ。この世界で本当に狂気と見なされるのは、張り続ける正義だつて、さ」

これは在りし日に行われた何の意味もない蛇足の会話。私に、オーラマイトという存在について考えさせた会話だった。

あの日の会話を思い出す。あんな沢山の会話をこうして鮮明に思い出せるあたり、どうやら思った以上にシクリーザという女性のことを好んでいたらしい。それ以前に会話の内容が衝撃的だったというのもあるのだが。

あの日の話題の中心、オーラマイトが目の前にいる。シルバーエイジ^{銀時}のコスチュームを纏い、雄英高校の教師としてここにいる。教師になるのは知っていたが、やはり驚かさされるし緊張する。教師と生徒、なんて軽い感覚で接することは出来そうにない。

グラウンド? α?。市街地を模して作られた広大なグラウンドに、A組の面々は揃っている。昨日と違うのは全員が全員、コスチュームを纏っていること。雄英高校に入れば無料でコスチュームを要望通りに最新鋭の技術で作ってもらえるなんて、なんといいお得さだろう

か。

私のコスチュームは私の『イヤホンジャック』を最大限使える仕様になっている。ヘッドフォンにはコードはなくプラグを刺す穴だけ。足には小型のスピーカー。服の中には組み立て式ナイフが2本。そして腰には勿論、サポートアイテム『デIVER』。

近中遠と全距離対応のこの装備は思ったよりも軽い。もう少しごちやごちやするかと思ったけど、流石はプロ、動きやすさも完璧だ。

「核兵器って・・・設定がアメリカンすぎない・・・？」

「ヒーローの本場ならこれくらい日常茶飯事。・・・なんてあるわけないか」

そんなことがポンポンあつたらアメリカはきつと荒野になつていく。

行われるのはヒーローと敵の二対二。^{サイラン}前者は核兵器の確保か敵の捕獲、後者は制限時間まで核兵器の守護が勝利条件。オールマイトがかつてアメリカで活動していたならこんな設定になつてもおかしくないが、まるで映画のようだ。

チーム分けは迅速に行われた。耳郎はJチーム。パートナーは上鳴。対戦相手はDチームで障子と推薦入学の一人である轟焦凍。制圧力トップの轟が相手なのは不幸以外の何物でもない。

だが最も不幸なのは緑谷かもしれない。緑谷の対戦相手には爆豪がいる。既に昨日の段階で緑谷と爆豪に溝があるのは分かっている。なのに彼らは運命のように対戦相手となった。始まる前からいくらかの戸惑いが見えている。

一戦目から爆豪と緑谷の勝負なんて嫌な予感しかしない。グラウンドが崩壊するんじゃないのかと心配になつてくる。緑谷はともかくとして爆豪ならそれくらいやりかねない。既にそういった、嫌な信頼が爆豪に生まれていた。

「おいおい、爆豪の奴、緑谷のこと再起不能にしちまうんじゃないのか？」

「流石に分別はわきまえてるでしょ・・・多分」

既に緑谷チームと爆豪チームは各々の所定位置につき、オールマイ

トは開戦の合図を告げた。すると爆豪は飯田の静止を振り払って緑谷を探しに飛び出した。

カメラに映っていた爆豪の目は凶悪凶暴。完全な敵の顔サイランをしていった。あんなのが突撃して来たら流石に怖い。

「緑谷の心配もいいいけど、俺達も対策しとかねえとヤベえんじやねえの？」

障子はともかく、轟の対策はしておかなければならない。個性把握テストでは秒単位で超規模の氷を生み出していた。推薦入学者に相応しい強力な個性。しかも室内戦では無類の強さを誇る。

一応、対抗策がない訳では無い。だが結局はぶつつけ本番。第二第三の策で確実に捉える必要がある。

耳郎が考え事をしていると、一際大きな爆発音とグラウンド？α？全域が揺れる程の爆発。そしてオールマイトの怒鳴り声が聞こえた。

俺がタイトルを言うのは構わない。ところで語尾は必ず「けど」じゃなきやダメなのか？

廃ビル群の一つ。実戦訓練4戦目の舞台。フィールド。一つ目のビルは爆豪の大火力の特技で崩壊し、今では焦げ痕のある瓦礫の山と化していた。

主犯の爆豪は嘘のように沈黙している。まるで糸の切れた人形のように、ピクリとも動かない。その身体に傷はほとんどない。この場におらず、治療のために保健室に行っている緑谷の方が付いた傷は圧倒的に多い。

そう、負けたのだ。外見だけなら明らかに緑谷の方が敗北したと思えるが、これはチーム戦で勝利条件は敵を倒すことだけではない。

緑谷のパートナー・麗日お茶子と、爆豪のパートナー・飯田天哉。この両名の核の防衛戦で緑谷は己の個性を使用して、麗日を使うことで勝利に導いた。緑谷は爆豪の相手をしなかったのだ。

見下していた相手に負けた。それ以前に見られてすらいなかった。プライドの塊とも言える爆豪は余程ショックだったのか、俯き黙り込んでいる。負けたすぐ後よりはマシかもしれない。あの時は発作でも起きたかのように震えていたのだ。

4戦目は耳郎と上鳴、障子と轟。入試一位と推薦入学者が率いるチームということで、注目の一戦となっている。

「呼吸音は5階。多分核は最上階か、一つ下の5階にある。真ん中に構えてる」

「おー！耳郎の個性って便利だな！で、どうする？」

「多分あつちは轟の個性で攻めてくると思う。明らかに室内戦なら最強だし。障子の個性で何処かから入り込んでもすぐにバレる。そうすればそこに向かって轟の個性を使われたら詰む。だから、まずは耳を潰す」

そう言ってビルの外壁に手を付ける。既にその手の甲には出力調整が成された『ディーヴァ』が付けられている。

「ハートビート・サラウンド!!」

思い描き実行するのは立体音響。壁を壊し伝いながら、荒れ狂う暴音で耳を傾けているであろう障子を潰す。普通に聞けばただ五月蠅い程度でしかないだろうが、耳が良過ぎてしまえばその限りではない。

最悪障子の鼓膜は破れてしまっているかもしれない。

「いくよ上鳴ー！」

「おおー何言ってるか分かんねえけど分かった！」

音が漏れていたのか、上鳴は耳を押さえながら耳郎の背中に付いていく。このまま核がある階まで一気に駆け抜ける。近距離戦に持ち込んでしまえば轟相手でもまだ勝機がある。最悪限界まで接近して放電状態の上鳴を投げつければいい。

時間が勝負だ。轟の強力な個性を前に時間一杯まで戦い抜くのは不可能だ。サーチアンドデストロイ。見つければ多少の無茶をしても叩き伏せる。

「これ・・・もうこんなに氷が・・・」

ビルの中は罅割れた氷の世界だった。まるで業務用の大型冷蔵庫のように冷えた場所。肌寒さどころではなく単純に寒い。外からではまるで分からなかった。窓に氷は侵食していないので外からでは見えなかったのだ。

氷が引き裂かれたように割れているのは、恐らくは耳郎の音の影響だろう。氷が壁となったことで、耳郎の音は恐らく障子には届いていない。

「これってヤバいんじゃない!?」

「でも行くしかないでしょー！」

上鳴の不安を押し切る。地の利は握られた。轟の氷が氷の上から更に生み出せるのかは不明。もし出来るのならこの瞬間に部屋中が、360度からの攻撃となって迫ってくる。

読み違えた自分を戒めながら思案しても、やはり駆け上がる以外の選択肢はない。

「アンタの個性で電磁波とか感知出来ないの?!」

「オレの個性は電気をぶっ放すことしかできねえんだよー！」

「じゃあコスチュームに着いてないの?!」

「あるのは通信用のヘッドセットだけだよ!」

打開策はやはりなく、状況が変わることは無い。出来るのは変わらず全身の神経を張り巡らせながら1階2階と階段を駆け上がることだけ。

3階から4階に登ろうとした時、足が止まった。否、止められた。室内の急激な寒冷化によって体温は下がり、膝から下にかけては脚があるのか分からないほど寒くなる。

待ち伏せ、そして背後から奇襲された。耳郎がそう思った時には、もう終わっていた。

「背後から奇襲・・・!」

「障子からお前らの個性は大体聞いている。最初のデケエ音もとりあえずは想定してた。こんな勝ち方になっちまったが、今は敵サイランなんぞな」

達観したように言う轟。こんな単純な奇襲にハマった自分が恥ずかしくなる。轟は最初からここに、この部屋のどこかに潜んでいた。見えづらかったのは轟の左半身を覆う氷のようなコスチュームのせいだ。恐らく3階を中心に氷を発していたのだろう。自分の身体を隠すようにして。

スタートの段階で必ず核の部屋にいないかなんてルールはなく、また耳郎が想定していた正面から叩きに来る以外の可能性も十分あり得た。

勝つためには轟を抑えることを一番としていた。だが想定していたのは轟の強個性だけだ。轟の行動までは、訓練ルールの穴までは考えていなかった。

未熟も未熟。考えが甘すぎた。どこかでこれでいいと妥協していた。最高と最悪の状況を考えただけで考えることを止めた。その時点でこうなることは決定していたのだ。

だが、

「それだけで勝ったような気になってんなよ!!」

「・・・!」

室内に白煙が充満していく。次瞬、轟が上鳴に向かって氷を飛ばす。流石は推薦入学者。今何が起こっているのかを正確に把握したらしい。上鳴の個性は『帯電』。単純に電気を肉体に蓄え放出する個性だ。

生活の基盤と言ってもいいので広く知られていることだが、電気とは高温であり非常に危険なものである。水から伝わる電気で感電死するように、雷に当たった者が焼け焦げた焼死体になることから分かるように、電気は人を容易く殺せる現象なのだ。

「やらせるか！」

「こっちのセリフだよ！」

激しいスパークと共にものすごいスピードで上鳴の周りの氷が溶けていく。これ以上は拙いと轟が完全に上鳴を意識したことによって、轟の意識から消えた耳郎がフリーになった。

前にも言ったように耳郎の『イヤホンジャック』は数メートルまで伸びるのだ。あくまで氷が覆っているのは膝までだ。腰にある『ディーヴァ』までは覆われていない。耳郎は接続した『ディーヴァ』を手付けずに、そのまま地面に殴り付けるように叩き落とす。

「ハートビート・アンプリケーション!!」

心音は轟音へ増幅され、氷を振動で破壊しながらビル全体に伝っていく。氷が接触するよりも遥かに速く、文字通り音速で突き進む。追いついた音によって轟が上鳴に放っていた氷は到達する前に粉碎された。

ダイヤモンドダストのようにキラキラと砕かれた氷の破片が宙を舞う。

「ちっ！」

「氷より音の方が速い！」

装着した『ディーヴァ』は侵食してくる氷を破壊する。盾にもならず鎧にもならず。いくら出せようとも氷は所詮氷でしかない。対して耳郎のやっている事は規模の小さい地震である。ただの氷と大地すら引き裂ける振動とでは、どちらが強力かなど分かり切っている。

もし、轟が左を使っていれば結果は違うものになっていたはずだ。

轟の左は耳郎の音には影響されない。少なくとも右[※]だけしか使っていない今の状況とは比べるまでもないだろう。

だが、

「どれだけ長時間出し続けてられるの・・・!?」

絶え間なく氷は生み出され続け、氷の破壊に囚われて耳郎の動きは縛られる。『ディーヴァ』は片手で調整できるほど簡単な手順ではない。そして『ディーヴァ』の放出する音や振動は耳郎自身にも伝わっている。

例え出力調整され、最大出力からは程遠い音でも、連続稼働は腕に多大な負荷をかける。

正面から殴り合いの応酬をするかのように、氷と振動はぶつかり合う。両者一步も譲ることのないノーガードの打ち合い。

「んのやろっ!」

上鳴もバカではない。耳郎の顔に少しずつ焦りが見えていることくらいは察せる。故に援護に動こうとするが、耳郎との距離が近すぎて個性が使いづらい。『帯電』は確かに強力な個性だが、繊細な操作が出来ないという欠点は、周囲に味方がいる状況ではあまりに大きすぎた。それはたとえ、氷を伝って伝導させるという方法があっても、だ。

そして、

「なっ、障子!」

上鳴の背後から現れた障子。そう、この戦闘は二対二ではない。二対二なのだ。上階で待機していた障子が、このピンチの状況でここに降りてきた。恵まれた体躯から打ち込まれる拳は、容赦なく上鳴の身体に叩きつけられる。異形型特有の高い身体能力は、常人の枠から外れていない上鳴と比べるまでもない。

「個性を使っているのか?」ここで使えば、耳郎も巻き込むかもしれないぞ!」

「くっそお!」

碌な抵抗すら出来ずに上鳴は意識を刈り取られる。強力な力の代償とも言えるべきその無差別さは、弱点としてはあまりにも大きすぎた。気絶した上鳴は、念入りに轟に壁に磔にされる。

「もう耳はいいのか？」

「十分時間はあつたからな。あと7分、何もしないという訳にもいかないしな」

「そうか。ならさつきとケリをつけるぞ。流石に、長く使いすぎた」
「轟？」

轟が弱気な声を出す。開始前から自信満々な声をしていた轟が、いきなりこんな声音を出すとは障子は思いもしなかった。そして、そんな声を出させた元凶はと言うと。

「やつぱりね・・・！」

腕をプルプルと震わせ、寒冷化した気温に身体を蝕まれ、汗すらも凍りついてきた耳郎は、確信したようにそう言い放った。それは今の轟とは違う、正反対とも言える声音だった。パートナーは捕まり二対一、腕は限界が近く、身体感覚も消えかけてきているそんな耳郎が、まるで勝機を見出したとでも言うかのように。

「あんたは有り得ないほど莫大な量の氷を、高速で生み出し続けることが出来る。5分以上もね。でも温度が低下していく環境に耐えられないんでしょ。轟、あんた自身が」

「気付いたか・・・」

「顔の横に霜が付いてるよ。息も寒そうに白くなってるしね。それに少しずつ、氷の量も勢いも減ってきてる。個性だって身体機能の一部。氷を生み出し続ければ、その中心にいる轟の身体は冷えていく。凍りつくほどじゃないにしても、防寒に意味がなくなるくらいには」
「だからどうした。お前だってもう限界が近いだろ。それにこっちは2人で、障子には大した疲労はない」

冷徹に告げる轟の言葉は全て真実だ。耳郎の腕は限界に近い。いや、とつくに限界を迎えている。微細に続く振動に筋肉は耐えきれない。本来のペースならば押し切ることが出来ていた。だが、環境などの様々な要因が容赦なく耳郎を追い詰めていく。

そして耳郎以上に消耗している轟にも余裕はない。左半身を絶え間なく覆う冷気が全身に行き届いている。手足の感覚はかなり薄い。反射的に右を使おうとする衝動を、轟の中にある黒い氷が固く閉じ込

めていた。

「ピンチってだけで、両手を上げて降参って言うと思う?」

「だろうなっ」

耳郎が音を止めて横に転がるように走る。同時にイヤホンジャックは腕の『ディーヴァ』から外れ、腰にあるもう一組に突き刺さり、そのまま引き抜き、思い切り振り回す。

『ハートビート・エコーサウンド』!!」

「ぐおっ・・・!」

360度から爆音が鳴り渡り、鈍器で殴られたような痛みが近接戦に持ち込もうとしていた障子を襲う。だが指向性を持たない無差別な音にそこまでの威力はない。

耳郎の抵抗が一時的に弱まった。好機と見た轟の氷がこれで最後にすると言わんばかりに勢いを増し、氷柱は氷壁となって襲い来る。実は本気で殺す気なんじゃないかと思ってしまうほどの規模の攻撃を、両手の『ディーヴァ』を合わせて一点集中することで穴を作って回避する。

すると追撃として、穴から障子が飛んで来た。

「はやっ——」

ロケット砲のような凄まじい勢い。回避は間に合わず、障子の腕がラリアットのようになり、耳郎にぶち当たる。障子の頑強な肉体と、轟の氷柱による押し出しで速度上昇という咄嗟の連携。

「ゲホッ、ゲホッ・・・」

失神することは無かったが、痛みと息苦しさは相当なもの。だが失神せずに受身を取ることができたのは運が良かった。今の一撃は意識を刈り取られていてもおかしくなかったのだから。

しかし決着は既についていた。

「今度こそ捕らえたぞ」

耳郎の身体を氷が覆い尽くす。耳を初めとして耳郎の両手両足は完全に氷に埋め尽くされた。こうなっては無力化されたも同然だ。

「・・・さっきの連携・・・アンタら、中々いいペアじゃん・・・」

「そうなのかもな」

「ウチの負けだよ・・・でも・・・」

ここにきて、轟がようやく何か気づいた。オールマイトからの終了の放送がない。耳郎は凍らされて動けず、上鳴もとつくに捕らえているというのに。

「さっきの無差別反響。アレは攻撃なんかじゃない。ほら、探してみなよ。ウチが何をしたかったのか——」

「轟、後ろだ!!」

「——っ!?!」

冷える身体から震えた声をどうにか絞り出す程度にしか力が残っていないのに、妙に耳郎に自信があることに違和感を覚えた轟だったが、その違和感は障子の声により判明した。

そこに、忍ぶようにして轟の後ろに近寄ってきていたのは上鳴だ。コスチュームの各所に未だに氷塊を付けながら、ゾンビのような足取りで轟に近づいてきていた。咄嗟に氷で応戦しようとしたが、氷は出ない。耳郎とのラッシュで使い過ぎたのだ。冷える身体の動きは鈍く、反射的に氷を出そうとすれば脳のリミッターがそれを抑えつける。

「オレの個性はぶっぱなすだけで細かい制御は出来ねえけどよ——」
「・・・っ、マズッ——!」

上鳴がガシリ、と轟を両手で、全身でしがみつく。氷は既に出ている。だが間に合わない。これほどピンチな状況だというのにハッキリと分かるほど、その生成速度は明らかに遅過ぎた。それに対して相手は意識すれば一瞬だ。

「ゼロ距離なら関係ねえよなあッ!!」

「ガアッ——」

轟が保てた意識は一瞬だった。人間スタンガンと化した上鳴の電気は、後遺症を残さないように弱めてはいるが強力だ。弱まっている轟を一触りで倒せるほどに。

意識を飛ばしたことで轟は倒れた。ピクリとしか動かない。流石のバカでも手加減はできていたようで耳郎はホッとした。

(ああ・・・やば・・・)

最大の難関であった轟を沈められたと思つた途端に、一気に意識が溶けていく。障子のラリアットを食らつてからずつとこんな状態だ。元より気力だけで起きていたようなもの。腕は既に力はなく、そこに ついているのかさえも分からない。

(バカ・・・後ろ・・・)

意識が落ちる寸前に耳郎が見たのは、喜びに打ち震える上鳴が障子に意識を刈り取られる光景だった。

疲れた。とても疲れた。はじめての戦闘訓練が終わつた放課後。全国チエーンのレストランで疲れきつた体をテーブルに預ける。

あの後、やはりというか耳郎達は負けた。単純に2人がダウンしたからだ。その後の評価は散々なものだった。正論を遠慮容赦なくバシバシと言つてくるもう一人の推薦入学者。曰く連携が足りない。出会つて一日しか経つてないのに連携なんてあるか、と言いそうになつたがそんな体力さえもなかつた。最後の轟を倒せたのだから本当にマグレだ。運良く部屋中に響く氷が破壊される音で目覚めた上鳴が少しずつ氷を溶かし、完全に動けるようになったところで耳郎が派手に動いて意識を集中させる。ただのミスディレクション、手品ではない。

最後の技、『ハートビート・エコーサウンド』は部屋中に広がる氷を破壊し、上鳴が近づきやすくするための技だった。本来であればあの技の使いどころはない。

今回の敗因は耳郎自身が一番分かつていた。耳郎は轟に集中しすぎたのだ。勝利のためには必ず轟を抑えなければと言う思いが強すぎた。敗北覚悟で自分が単独で轟を相手取り、その間に上鳴と障子を戦わせていればまだ勝機はあつただろう。

考えるだけならいくらでも上手くいくが、現実では全て上手くいく

ことなんて無い。

考えが足りずに、いや意識の固まりが敗北の原因だ。この敗北は恥でもあり戒めにもなるだろう。

「まだダメだな．．ウチ」

未熟も未熟。それ自体は当然のことなのだが、耳郎は自分の目指すべき一歩目にすら辿り着けてないことを意識している。かつてシクリーザに語った安心を与えられるヒーローになる。『安心』の形を未だ明確に捉えきれていない耳郎は、スタートラインにすら立っていないとも言える。探す段階で足踏みしているのだ。

『安心』への到達までの道程は長いと、耳郎はため息を周りに聞こえるほど思いつきり吐いた。

「ここが日本ですか。なかなかいい場所じゃないですか。故郷のような風はなくとも、活気がある。貴方もそう思いませんか、メ・デイジーナ」

「．．．．．」

「沈黙は肯定、と捉えますね。では行きましょう。我らが偉大なるボスの下に」

一年A組の戦闘訓練開始時間に、極大の邪悪の手駒が2人、日本に入国した。雨傘を持った老人と、生きているのかすら不明なほど白い肌とすっかり色素を失った白い髪の男が、平和の波に入り込んだ。

ようやく私の出番が来たよ！なんか気付いたら増え
てるけど

昔から、夜の港のコンテナ街なんて薬や武器の闇取引の場として思
われる場所だ。ドラム缶にコンクリートと共に詰め込んで海の藻屑
を作る時もある。要は昔から印象が悪いのだ。

故に敵はヒーローが見回ると思つて近寄らないし、ヒーローはこん
な分かりやすい場所に敵が近寄るはずがないと思ひ、空白の地帯が生
まれる。いや、それっぽいこと言っただけだから実際の所は分かん
ないけど。

いやあ、コンテナ街近くのホテルから見てるけど、暗くて肉眼じゃ
よく分かんないや。あそこにいるであろうスキューロだつて豆粒に
も見えないし。灯りの一個くらいはつけて欲しい。どこにいるのか
非常に分かりづらい。

『ホワイトスネイク』を向かわせているんだが、暗闇が深すぎて見えな
さすぎる。

だから頼り辿るのは自分の感覚ただ一つ。私の『血』、それだけだ。
そう、ここには奴がいる。この世で唯一、私と同じ血が流れる忌ま
わしいあの男が。久しぶりに会うあの男の顔は、今も尚鮮明に思い出
せる。乗り越えた恐怖は、私の心に深く残り続けている。

私の素晴らしい優しさで今日まで生かしてやったんだ。なら、最後
にどう扱おうが私の勝手だよな。安心しろ、殺しはしない。が、会う
のは今日で最後だろう。故に最後の私の優しさを与えてやろう。お
前を道に乗せてやる。そしてお前の憧れ、目標、夢、希望に会わせて
やろう。

「ほお、組織の中でも名高い親衛隊の半数が居るとはなんとも素晴ら

しい歓迎だな。私のような老人にここまでの出迎えをくれるとは。ボスには感謝しなければな」

天候関係なく、雨傘を持った老人——ヴラディミール・コカキは、この場で自分とメデイジーナを待っていた三人の男達を見渡す。全員から溢れ出るパワーには、警戒心が含まれている。軽いジョークでさえも殺されかねない。

いや、実際に殺されるのはコカキではなく、コカキの後ろに佇んでいるメデイジーナだ。

対するのはボスの右腕のスキューロを筆頭に親衛隊が二人。白黒対照的な二人の男。警戒のためか、それとも能力の為か少し離れた位置にいる。

辺りは水浸し。雨が降った訳でもないので人為的な物だろう。態々濡らす理由は、おそらく濡れていることが能力の発動条件だからだとコカキは推測する。

随分と警戒されているが、それは仕方の無いことだ。ボスはメデイジーナに大層ご執心なのだから。そしてコカキの与えられた幽波紋^{スタンド}は、ボスの持つ幽波紋^{スタンド}の中でも曰く付きのもの。

その気になれば親衛隊二人は言わずもがな、状況によってはスキューロでさえも無抵抗に殺すことが出来る。

だがコカキが幽波紋^{スタンド}を見せるような動きをすれば、一瞬で殺されるだろう。ひしひしと伝わってくる感覚が、下手に動けば死ぬと歴戦のコカキに知らせてくる。

「ゆつくりとだ。ゆつくりとその雨傘を置いて跪け。勿論だが幽波紋^{スタンド}も出すなよ。ボスがお見えになる」

「ふむ、私の雨傘は武器ではなく、ネアポリスのパロットの店で作らせた特注品のただの雨傘なのだがな。ああ不満があるわけではない。ボスが来るのなら当然のことだ」

ゆつくりと雨傘を地べたに置き、自分も地面に膝を突く。ジリジリと近寄ってくるスキューロの射程距離に、コカキはもう入ってしまった。ここから幽波紋^{スタンド}を出して攻撃すれば、相打ち覚悟でなら一人は殺せるだろうか。

こういつた考えは悪い癖だ。長年裏社会に身を置きすぎたせいで、こういつた警戒心が強くなってしまう。身を委ねるべき組織のボスにさえ、こういつた不埒な考えが浮かんでしまう。

『壮健そうで何よりだよ、コカキ。お前の働きはスキューロから聞いている』

「お久しぶりです。ボスのお陰で、これ以上ないほど人生で最高にいい思いをさせてもらっています。私程度の働きでパツシヨネの、ボスの再起の足しになるのなら光栄です」

揺らぐ風景から姿を現すのはボスの現身『ホワイトスネイク』。恐ろしい迄の遠隔操作を可能とする幽波紋スタンドは、相も変わらずの存在感を示している。パツシヨネのボスの地位にいるのに、相応しいどころか過ぎる程の力を持っている者が、再びヴラディミール・コカキの前に降り立った。

スキューロは『ホワイトスネイク』の、ボスの登場にコカキの横に移動する。コカキはゆっくりと『ホワイトスネイク』に近づき、その手の甲に尊敬と敬愛の口付けをする。

「麻薬チーム、ヴラディミール・コカキ、そしてメデイジーナ。ボスの御命令のままに、参上いたしました」

麻薬チーム。パツシヨネ内で最大の利益を最悪の方法で生み出している、組織の中で親衛隊以上に謎に包まれたチーム。構成員は勿論、麻薬の生産方法、流通ルートも一切不明。彼らに対して何かを知っているのはボスとスキューロのみ。今回の件で初めて、コカキとメデイジーナのことを親衛隊の面々は知らされた。

『前置きはいいい。今お前に求めるのはただ一つ。代わりとなる者は見つかったのか？私が信頼に値する、幽波紋スタンドを与え、麻薬チームの中核となる者が見つかったのか。重要なのはそれだけだ』

「ええ、勿論です。ボスのご要望通り、決して組織を、ボスを裏切らず幽波紋スタンドを与え、麻薬チームの中核となれる者は見つかりました。こちらの資料に詳細が載っています」

『スキューロ』

コカキが懐より取り出した資料をスキューロが受け取り、流し読

む。細かく、だがボスを待たせないように素早く資料を読んでいく。経歴を、顔を、性格を、性能を、己の目でじっくりと、料理人が食材の鮮度に細かく拘るように確認していく。

「コカキの人は選は当たり前だ。性格も能力も経歴も申し分ない。コイツなら消すにはもってこいだ」

『決まりだな』

ボスの決定の意が下ると、スキューロの手にあった資料が一瞬で凍りつき、蒸発したかのように消えてなくなる。この瞬間、資料に記載されていた次の男は資料と同様に消えることになったのだ。

『良くやったよコカキ。次が馴染むまでは、しばらくは日本でゆっくりとバカンスでも楽しんでいい。良い国だぞ。我らが故郷イタリヤには劣るがな』

「おお、それはありがたい。日本のテラ、というものには以前から興味があったので。これを機会に観光を楽しませて貰いましょう」

『それと、ソレへ最後に何か言うことはあるかな？』

「お優しいですねボスは。ありませんよ、道具にかける言葉など」

そう言つてコカキは地面に落ちている雨傘を持ち上げ、杖の代わりにしながらこの場から立ち去ろうとする。スキューロは控えている二人に視線を送り、コカキを近隣まで見送るように命じる。

コカキの幽波紋スタンドの射程距離は広い。射程距離に特化した『ホワイトスネイク』程ではないにしろ、この場にいる幽波紋スタンド使いの中で断トツで広いのだ。

そして何度でも言うがコカキの能力は強い。コカキ自身に戦闘力がほとんどなくとも、その能力だけでコカキを無敵に近い位置に立たせている。

襲われればたまつたものではない。

完全にその姿が見えなくなるのを確認すると、『ホワイトスネイク』はスキューロに離れるように伝える。ここから先にスキューロは不要。あるのはメイジーナとボス、血の繋がった二人だけの時間である。

一応さ、私は元日本人なわけよ。日本人だったなんて感覚はほとんど消えちゃってるんだけど、それでも私がかつてそうだった、っていうのはあるんだよ。だからさ、ね。

老人のキスなんか嬉しくもなんともねえよ……。

一瞬怖気さえ走ってしまったぞ。いや、手の甲へのキスの意味はちゃんと分かっているんだよ？でもそれとこれとは違うでしょ。一応私も年頃の女性の訳でさ。誰が好き好んで老人の口付けなんか欲しがるよ。

私の護衛として、私と同じ部屋にいるシーラに濡れたタオルを持ってきてもらって思いつきり手の甲を拭く。幽波紋^{スタンド}越しても感覚が残っていないやがる。

ていうかパツシヨーネ再起って何？このままウダウダして適当に隠れ潜むんじゃないの？一応次の幽波紋^{スタンド}使いを探してたのは小遣い稼ぎ程度の感覚だったんだけど。いや、だっていつまでもメデイジーナを置いておきたくなかないし。

コカキなあ……。一応信頼は出来ると思うのよ。それでもアイツは、なんか奥底を見せなくて怖いんだよな。私の周りにミステリアスで何か隠し事してる奴なんか要らないから、この後、私の『ホワイトスネイク』とスキューロの『マン・イン・ザ・ミラー』で襲撃をかけて頭の中弄る予定だけど。日本に来てから『マン・イン・ザ・ミラー』大活躍だな。あれ実際便利オブ便利だもんな。室内で監視カメラとかあつたら使いにくいけど、屋外だつたら無敵にさえなれちゃうんだしな。

私は適正なかつたけど！畜生スキューロ羨ましすぎる。実はスキューロがチート主人公説あるぞコレ。

「それじゃあシーラ、今から集中するから何者をも私に近づけるなよ」

後ろで控えているシーラに言葉を残し、私の意識の全てを『ホワイトスネイク』に持つていく。これやると幽波紋スタンドのパワーが少しだけ上昇するけど、本体が肉人形になっちゃうしキンクリも使えないから全然メリツトないんだよな。パワーの上昇もほんの少し、1.5Lのペットボトルを一本多く持ち上げられるようになるだけだし。

『久しぶりだな、忌々しい我が兄。いや今はメデイジーナと呼んではうがいいかな?』

まっ答えられるわけねえよな。『キング・クリムゾン』を抜いたと同じ時に半分もぬけの殻になって、そこから私がメデイジーナとして生かすために与えてやった人類を凌駕する幽波紋の効果で、肉体もぶっ壊れちまつてるもんな。

「ヒー……ロー……オー……ルマイ……ト……父……さん……」
『報告にあつた通り受け答えは出来ず、同じような言葉を機械のように繰り返すだけか』

『キング・クリムゾン』を抜いた時、私はコイツから魂を抜こうとは意識しなかった。真実を知って自己防衛のために自壊した精神は半分、残った精神は『キング・クリムゾン』と共に私のDISCとなったらしい。まただよ『ホワイトスネイク』。この間の件で聞いたでしたらまた出てきたよ。本体に隠れてやりたい放題しすぎだろ。

精神が自己防衛のために自壊するって本当にあるんだな。噂話か適当な戯言だと思ってたけど、どうやら事実らしい。また一つ賢くなったね!いや……割とマジでどうでもいいな。

『まずは、私の物を返してもらおうか』

何かの拍子で死なれたら困る。『ホワイトスネイク』の腕で頭を横に、大振りで殴る。拳が当たった感触はなく、当たった音もない。本来であればダンプカーにはね飛ばされるほどの衝撃だが、それすらもない。

『『マニック・デプレッション』確かに返してもらったぞ』

『ホワイトスネイク』の手にあるのは最悪のDISC。その気になれば世界の財政をひっくり返すことさえできる。原作でも私のも、パツシヨーネは『マニック・デプレッション』の能力を塩に付加すること

で既存の麻薬がそれ以上の依存性を持たせていた。そして本来なら欲にまみれた者達が流通ルートを探ったり麻薬を隠し持っていたりするのを、^{スタンド}幽波紋能力が元という特殊さで乗り切った。

麻薬チームとは、本来はコカキのような管理兼護衛役すら必要ない。『マニツク・デプレッション』という^{スタンド}幽波紋一つあればそれでいいのだから。

『そういえば、大分姿が変わったじゃあないか。退廃的というかかなんというか。少なくとも、今のお前を見れば誰もマトモな人間なんて思わないだろうな』

今のメデイジーナは無造作に伸びた色素の抜けた枯れた白髪に、痩せ細り乾燥しきって割れた肌。

『まあ容姿的には満点だな。いかにもって感じがする』

これから行くところ、行くことを考えればピツタリだ。マトモでない方が好ましい。あとは時期を見るだけ。あとは折を見て、DISCを突っ込んでここから追い出すだけ。

『なあ、私ってやつぱり優しいとは思わないか？』

返答なんてあるはずがない。意識はさつき抜き取り空っぽなんだから。なんかゾンビっぽいけど、一応肉体は死んではないんだよな。

『お前の記憶を、ほんの少しだけ覗いたよ。物の見事に良い部分を見ることが出来たよ。夢だったであろう、この世界でオールマイトと共に教えを受け、緑谷出久と爆豪勝己と肩を並べ、雄英高校でクラスメイト達と切磋琢磨して最高のヒーローになるという光景を。』

だがそれは最初の一步目から打ち砕かれた。そもそもスタートラインが違うんだから一緒になれるはずがない。状況だってそうだ。ヒーローの価値観がイタリアと日本では違うのだからな』

可哀想だろうそんなこと。打ち砕かれた夢を、何とかして叶えてやろう。ああ、私はなんて兄想いの良い妹なんだ。うわ、自分で言ってる過去最高に気持ちわりい。

『会わせてやるよオールマイトに。肩を並べさせてやるよ緑谷出久と爆豪勝己に。切磋琢磨させてやるよ雄英高校と。夢だったんだろう？ 廃人となった今でも尚』

例え立場が違っても、言葉の上では同じこと。
『定まった未来に歓喜して感動の涙を流してくれよ』

『喜べよ、私がお前に与える最後の優しさなんだから』

「そういえばスキューロ、一つ聞きたいのですが」

ボスと親衛隊が麻薬チームと出会う数時間前。任務前にビリヤードを嗜んでいた日本に來航した親衛隊の一人、ティッツアーノはキューをチョークで擦り終えると、相棒で親友のスクアーロの後ろから、抱き着いているように見えるほど重なり、キューボールを弾く。弾かれたキューボールは他の玉を弾いていく。ポケットにボールは入らず、ただバラバラに散るだけに終わる。

「麻薬チームのヴラディミール・コカキという男、どのような男なので
すか？かなりの警戒を持っているようですが」

今度はキューをスクアーロに渡し今度は違う体勢で、しかし重なり
合いながら打つ。またもボールはポケットには入らずに、更にバラバ
ラに散らされただけで終わる。

スクアーロはそれで満足したように視線を対面でワインをボトル
で叩いていたシーラに投げる。どうやら今度はシーラの番らしく、
シーラは後ろに立てかけてあったキューをチョークで磨く。

「あの男は・・・そうだな、一言で言えば、俺の前任者だ」

ヴラディミール・コカキ。元はイタリアの軍人だったが、何故か唐

突に軍をやめて裏社会に小さな麻薬組織のボスとして現れた男。個性黎明期では比較的はまだ数が多かった無個性だが、裏社会はほとんどが力にモノを言わせるのが普通であり、いくら熟練の兵士だったとはいえ無個性のコカキでは生きていくのは難儀なことだった。

そのため金で用心棒を何人も雇い、周りを固めていた。

組織が大きくなる前に、コカキは自分のチームをパツシヨーネの前組織、つまりはボスの父親に売り渡した。溜め込んだ資金も麻薬も流通ルートも全てを使って。結果、得たのはボスの娘、つまりはフェリシータの護衛兼世話係。異例のことだ。外部からの、たとえば小さい組織とはいえボスという地位に就いていた男が、そんな役割を喜んで受け入れたのだ。

スキューロの言葉に、全員が目を剥く。ボスの幼少期から、あの男は誰よりも近くにいたのかと。いや、それにしても経歴が異常すぎる。

ちなみにだが、親衛隊の面々はボスが父親から組織を奪ったのを知っている。というのも、何気ないシーラの言葉でバレてしまったのだ。ボスの信頼を得て、近づいたが故の弊害だった。

少し考えれば簡単に分かることだ。今まではスキューロだけの秘密だったものが、信頼の代償として親衛隊に一部だけ公開されてしまった。しかし、だからといってボスの力を知る彼らがボスを裏切るわけがなく、元よりボスを裏切るつもりもない。

ボスには、返しきれない恩があるのだから。

「だけだよオ、それだけボスに近かったってなら、ボスが組織を立ち上げる時に殺されてても可笑しくないんじゃないかねえのか？」

スクアローの言うことは尤もだ。ボスはスキューロを使って組織の上層部、特に自分のことを知る人間を徹底的に皆殺しにしている。肉親だろうが例外ではなく、残ったのは残酷な殺戮現場だけと聞く。「コカキはボスが組織を立ち上げる四日前、つまりは殺される前に、アイツの故郷のシチリア島に身を潜めていた」

「ですがそれならボスの幽波紋スタンドか組織の力があれば簡単に追跡できたんじゃないませんか？」

ようやく狙いが付いたのか、シーラがボールを弾く。前の二人と同じようにボールが入ることは無かった。不自然なまでに入らないのは、もう想像出来るとおおり、最初から彼らに入れる気がないからだ。「ああ。渡航記録がはつきりと残っていた。隠す気はないと言いたげにな。そして居場所が判明し殺しに行こうと思った直後、奴は戻ってきた」

「態々殺されにですか？」

「いや・・・分からない・・・」

その頃にはボスはスキューロ以外は信用していなかった。既にその姿を奥に隠し、自分を何処にも存在しない人間としていた。だがそのボスが、スタンド幽波紋越しとはいえ会おうと言ったのだ。しかし、スタンド幽波紋とはボスがDISCを与えてはじめて見えるようになるもの。コカキはスタンド幽波紋を与えられた人間ではない。故に、ボスはスキューロを通してコカキにスタンド幽波紋を貸し与えた。それがどれだけ異例な事かは言うまでもない。

それだけならいい。まだスタンド幽波紋使いとしては完成していなかったとはいえ、その当時のスキューロのスタンド幽波紋はボスをして邪悪と言わせる程の能力を持っていた。いかにコカキに与えたスタンド幽波紋が強力とはいえ、完封することだって出来ただろう。だが、ボスはコカキと『ホワイトスネイク』越しとはいえ二人きりで会ったのだ。

あまりにも危険な行為だ。だが、スキューロがボスの決定に口出しすることは無い。ただ部屋の前に護衛として居ただけだ。

「何を話していたのかは分からない。だがその時に、コカキはスタンド幽波紋と麻薬チームをボスから与えられたのは確かだ」

スキューロがシーラから投げ渡されたキューを掴み取る。態々後ろに置いてあるキューを取るのが面倒だったからなのか、それとも取る前にシーラから投げ渡されたから受け取っただけなのか。

「もしかして、コカキはボスの弱みか何かでも握っていたのでしょうか？」

「そりゃあ有り得ねえだろティツア。そのコカキつつう男がどんな男なのかは知らねえけどよお、あのボスだぜ？脅したりなんかしたら

すぐにぶち殺されちまう」

スクアアロの言うことは尤もだった。ボスの幽波紋スタントは無敵だ。誰一人害することは出来ない能力に、ぶっちぎりのスタンドパワーは、ボスの持つ幽波紋スタントの中でもずば抜けている。

「結局のところ、ボスの考えは私達の知るところじゃないってことよ。コカキがどうしてボスに近づくことが出来たのかなんて、どうでもいいでしよう。結局、ボスに仇なすなら殺すだけ。そうでしょ、スクアアロ様」

「当然だ」

狙いすら定めず、スクアアロの打ったボールは全てのボールを弾いていき、それら全てをポケットに叩き落していく。親衛隊の三人はスクアアロがこれを行う為の前座。単純なビリヤードに飽きた彼らの遊びである。

「私達は組織内の不穏分子を消すためのチーム。もしコカキという男がボスに仇なすなら、私とスクアアロが率先して殺してあげますよ」
「まだ殺すと決まったわけじゃない。それを決めるのは俺達ではなくボスだ」

誰も異論を持つことは無い。何故ならそれはパッションネという組織における絶対の掟の一つ。逆らうことは親衛隊でも許されない。そんなことをすればスクアアロが率先して殺しにくるだろう。誰しも命は惜しいのだ。

出番がないってことは毎日が夏休みじゃないか。今までも毎日夏休みだけど

「そういえば・・・今日だったのか・・・」

誰かがカーテンの隙間から差し込む光で目を覚まし、中途半端な時間に起こされたことに苛立ちながら嫌なことを思い出し、二度寝した。

「そういえば、今日だったね」

一ヶ月以上ぶりに目を覚ました誰かは、教え子の巣立ちが始まるのを理解し、喜びに打ち震えながら再び眠りについた。

「そろそろいいかな・・・。お前ら、行くぞ」

待ちわびたと言わんばかりに、子供じみた無邪気な悪意を無造作にばら撒きながら、彼は駒達に声をかけた。

「うわ、広いなあ」

ウソの災害や事故ルームと名付けられた雄英の所有物である巨大施設。色々と権利的な問題でヤバいのではと一瞬思ってしまう場所に、A組の面々は集っていた。ここに来るまではバスを利用。凡そ30分ほどの移動の後、この施設について。

耳郎がボヤいたように、この施設は広すぎる。それこそ一見すれば本当のテーマパークと見間違えう程の広さがある。だがやはりヒーロー育成の為の特別施設であり、マップには土砂ゾーンや火災ゾーン、水難ゾーンなど、物騒な単語の羅列が並べられている。

雄英は国立高である。こここの予算も国が出しているに違いない。校内でも何度か思ったが、国の予算がどう降りているのか非常に気になるところだ。世間一般でいう雄英鼻屑と呼ばれる問題の一端を垣間見た気がする。

「こほん、えー始める前にお小言を一つ、二つ、三つ・・・」

浮かれた生徒達の気を引き締めてくれるのは、スペースヒーロー『13号』と呼ばれる宇宙服のような物を着たヒーロー。だが13号の言動は、何故だか一部の生徒を高揚させてしまう。

たった今、上鳴が耳郎に耳元でうるさいとぶっ叩かれた。

「皆さんご存知だと思いますが、僕の個性は『ブラックホール』。どんなものでも吸い込んで塵にしてしまうものです」

13号の個性は有名だ。ヒーロー界屈指の強力で凶悪な個性。そのあまりの凶悪さに、登場時はかなり話題になったらしい。当然だ。少しの力加減を失敗すれば、最悪都市一つ、ともすれば国一つ飲み込める可能性だってあるのだ。危険な個性を人助けのために使うのは素晴らしいことだが、それでも危険性は拭えない。

ちなみに今もネットの掲示板ではどれだけの規模のブラックホールが形成できるのかが、偶に盛り上がるのネタになるらしい。

「この個性は簡単に人を殺せる力です。そして、最悪の時は何も残さない残虐な力です」

ブラックホールは全てを吸い込んで塵にする。死体すら残らないのは、尊厳などの問題があるのだらう。それを最も理解しているの

は、それを長年扱ってきた13号。

「皆さんの中にもいるはずです。簡単に人を殺せる個性の持ち主が」
まさしく耳郎が当てはまる。耳郎のイヤホンジャックを相手の心臓に刺してそこから爆音を流せば、心臓を簡単に破裂させることが出来る。他にも手足でもどこでもいいが、部位の破壊すらも可能にする。

さつきまで高揚していた上鳴がこの場合は最先端と言うべきだろう。制御できず放出することしか出来ない電撃。死なせることはなくとも、言語障害や手足の麻痺などの後遺症を残す可能性が大いに高い。人によっては死んだ方がマシかもしれないという時もある。

「超人社会は個性の使用を資格制にして厳しく規制することで、一見成り立っているように見えます」

しかし、所詮は形のない言葉や文字でしかない。例えば違法に使った瞬間に、脳に埋め込まれたチップが電気を放って脳死させて止める訳でもなく、肉体が麻痺する訳でもない。

たった一つ、重要なのは意思なのだ。

一線を乗り越えるという意思。もしくは自制を覆すほどの強靭な無意識。

誰かがやった。だからオレも私もやろう、やっていいのだ。人は簡単に感化される。100万の中の1人は感化されてやるのだ。

「相澤さんの体力テストで自身の秘めている可能性を知り、オールマイトの対人戦闘でそれを人に向けてる危うさを体験したかと思えます。この授業では心機一転。人命の為に個性をどう活用するか学んでいきましょう」

順序よく立てられた道筋にA組は乗っている。沢山の先達が通り、そして補正してきた道を先達の導きで前へ進んでいく。更により良Plus Ultra!く、更に向こうへ。先達よりも高い場所へ、素晴らしい場所に辿り着けるように。

「それじゃまず——っ?!」

ずっと静聴していた相澤が生徒達にこれからの行動を伝えようとすると、USJ全体を何かが襲った。それは形あるものではなく、目

に見えるものでもなかった。もつと感覚的なもの。

生徒達は当然として、相澤や13号までもを硬直させるほどの何か。咄嗟のことに怯え固まる生徒達。相澤と13号は長年の経験から反射的に動いている。相澤が前に、13号が後ろに構え、より生徒を守りやすい立ち位置に。

「一塊になって動くな!!」

相澤の視線の先。全員が今いる入口から長い階段を降りた先にある、この施設の中央のセントラル広場。そこには黒い靄、いや霧があつた。その霧は小さかつたが、霧の中から誰かの手が出てきて、霧を振り払うと霧は爆発するように一斉に広がった。

広がる霧から、溢れるように出てくる集団。武器を構え、獰猛に敵意を滲みださせ、これからの行為に快楽を見出し、純粹に仕事だと割り切り。様々な反応を出す者達が、一斉に飛び出してきた。

「アレは・・・入試の時の様なもの・・・?」

ようやく硬直が解けたのか、各々が入試の時のように雄英からのサブライズを考える。だがそれは現実逃避でしかない。一番最初に当てられた極大の悪意が、生徒達を軽い恐慌状態に陥れたのだ。

「動くなーアレは敵だ!」^{サイラン}

相澤がゴーグルをかける。完全な戦闘態勢に入ったということの証明。侵入してきた敵^{サイラン}を見ようと、身を乗り出す生徒達を13号が引き止める。

「13号にイレイザーヘッド。先日頂いた教師側のカリキュラムによれば、オールマイトも来ると聞いたのですが。ふむ、死柄木弔。どうやら貴方の考察は当たったらしい」

「やはり先日のはクソ共の仕業か」

彼らが言うのは数日前、オールマイトが雄英の教師だと大々的に発表された次の日、大量のマスコミが雄英高校に押し寄せ、雄英バリアによつて塞がれた。だが何者かが雄英バリアを破壊し、マスコミ達が学園に入り込んで警報が鳴り、生徒達は一時的なパニックに陥った。

今回の授業は13号が来る予定はなかった。だが先日起こった問題から急遽13号が対策として来ることになったのだ。

だが今、オールマイトは活動限界でここには来れない。

敵の狙いは言動からオールマイト。オールマイトを殺し、社会を暗黒期に戻すことが目的の連中か、あるいは……。

「ここに来るまで調べといて良かったよ。状況から今は休憩中。なら頑張つて来てもらおうじゃないか。いや、絶対に来ないとだもんな」
顔に腕に、幾多もの白い腕を付けた、恐らくはリーダー格であろう若い男が頬をポリポリと搔きながら、その身に宿る悪意を放出する。先程生徒達を怯えさせた極大の悪意は、死柄木弔と呼ばれた男が放つた物。だが今放つたのはさつきよりも数段濃い。邪悪と称せるほどず黒かった。

この瞬間、相澤は死柄木弔を最優先捕獲対象と認定した。

「だってこれから、子供がたあくさん死んじやうんだからさあぁ」

「13号、生徒を守れ!!」

相澤が飛び出す。大量の敵が蔓延る中に、躊躇なく突っ込んでいく。その行為にイレイザーヘッドというヒーローをよく知る緑谷が心配を叫ぶが、その心配は杞憂だった。

個性を封じる個性と、爆豪を捕えた時にも使った捕縛布の組み合わせ。ゴーグルで瞳を隠してどこを誰を見ているのか分からせない。突然封じられ、突然使えるようになった個性はいつもと同じようにすぐには扱えない。

だが相澤の個性は異形型には通じない。しかし、そんな弱点をカバーできないはずがない。捕縛布を巧みに操り、頭を強打させて気絶させる。

まさに無双とも呼べるその活躍に、生徒達は目を輝かせて見ているが、飯田の避難を呼びかける言葉に我に返ってゲートを引き返す。だが、

「やせませんよ」

身体から黒い霧を出し続ける、バーテン服の人物が道を塞ぐ。瞬間移動のような霧の個性は彼らの道を塞ぐ。だがここには13号がいる。13号が人差し指を向けて、指先の穴の中に個性を使用。小型のブラックホールが出現して黒い霧を飲み込もうとするが、

「無駄ですよ。私と貴方では相性が悪すぎます」

「13号!!」

13号の背中が抉れた。宇宙服を飲み込みながら、小型のブラックホールは消滅していく。これで13号は再起不能。黒い霧の男は残りの役目を果たさんと、自分に襲いくる血気盛んな生徒達を見もせず、

「ここでの私の役目はこれで終わりです」

生徒達を飲み込んだ。一部飲み込めなかった生徒もいるが、それはそれで構わない。どの道彼の能力でなければ余程のことがない限りはここから出ることは出来ない。それにこの場に残った生徒は、13号のお守りから離れられないだろうから。

ヒーローの卵とはいえ所詮は子供。殺さずとも行動不能に追い込むことなど容易である。それに、実の所殺すことはどうでもいい。

ゆらりと霧はゆらめき、死柄木の元に戻る。その服装や口調は、この襲撃のブレインを思わせるが、そういった所は全部死柄木がやっている。彼の役割はただ一つ、死柄木の都合のいい駒である事。

「13号は再起不能、生徒達は内外に散らしました。特に足の速そうなのを」

「そうか。ならオールマイトが来るまで待機してろ」

「しかし、一番乗りで来ますかね」

彼らの目的はオールマイトただ一人。この施設を外と完全に遮断しては、この場にいないオールマイトが来ることは無い。ならば、増援として来させよう。愛すべき教え子達が死ぬかもしれないピンチに襲われている。恐怖に怯えている。平和の象徴が、そんなことを我慢出来るはずがない。

「来るよ、ああいう奴は来る、来るに決まってる。一番乗りで静止も何もかもを引きちぎってでも来るぞ。頭良くせに無駄に脳筋だから、他のヒーローを待つなんて出来ないだろうからな」

オールマイトを殺す手段は複数ある。まず死柄木が五指で触れれば接触時間にもよるが、間違いなく腕の一本は奪える。黒い霧――黒霧は座標移動で霧の中にオールマイトの身体を途中まで入れて、

ゲートを閉じれば肉体を寸断できる。更には、

「オールマイト専用のサンドバッグと、薬キメすぎて頭も身体も可笑しくなったゴミがいるからな」

死柄木の背後に控える二人の影。一人は脳ミソ丸出しのグロテスクな巨体で、肌は黒に限りなく近い紺色。明らかに人間とは思えない。

もう一人は白いロングコートを着て、フードで顔を隠している人物。隠していない手は隣に立つ大男と比べると真反対と思うほど真っ白で、フードから出ている伸び放題の髪は色素が完全に落ちていない。ブツブツと独り言を言っているが、聞き取れないし聞く気もない。

「脳無はともかくとして、その男は信用出来ますか？」

「信用？何言ってるんだよ黒霧。そんなもんする必要ないだろ。コイツはオールマイトを殺す、もしくは弱らせるための都合のいい駒でしかない」

こんな近くに置いて秘密兵器風になっているが、白い男はこの間拠点に突然来た不審者である。入ってきた時に雇って欲しいと繰り返し連呼して、あまりのしつこさに苛立った死柄木が脳無と戦わせ、彼は自分の力を見せつけた。

仲間にはしないが駒として扱う。普通なら拒否するであろうその言葉を、彼は即座に受け入れた。

「あー、無駄話してるうちに雑魚ども蹴散らされてるよ。やっぱり強いなヒーローは。イレイザーヘッドには異形型ぶつければ少しは足止め出来ると思ってたけど、それすら出来ないじゃん。やっぱゴミはゴミだな」

見れば相澤は周りの敵達を蹴散らしている。体力の消耗は凄まじいらしく、所々先程よりも動きは鈍り、技術の精度は落ちているも、決して止まることは無い。そのあまりの無双っぷりは周りに転がり気絶している敵達サイランがその身をもって示している。

「同僚がぐちやぐちやにされれば、もっともって頭に血が上ってくれるよな」

死柄木は相澤など眼中に無い。彼の目的は終始オールマイト。相澤はオールマイトを本気にさせて、怒りで思考を奪うためのステージアイテムに過ぎない。生徒を恐怖に陥れ、同僚二名をスタボロにする。オールマイトは何処までキレてくれるだろうか。何処まで、力加減を忘れてくれるだろうか……。

「じゃあそろそろ本命に動いてもらうか。いけ、メデイジーナ」

ゆらりゆらりと、まるで病人のような覚束無い足取りでメデイジーナと呼ばれた白い男がフードを取って、その真つ白な貌を晒して歩き出す。あまりのボロボロな顔に、死柄木は気持ち悪いとメデイジーナに聞こえるように言うが、反応は一切ない。

メデイジーナの目には、耳には相澤しか入らない。

(なんだ、コイツは……)

警戒なく、力なく歩み寄ってくるメデイジーナに、最後の雑魚を倒し終えた相澤は警戒する。戦闘しながらも会話を聞いて情報収集に努めていた。この男は今回の切札か、もしくはそれに近い何かか。

「イレ……イ……ザー……あい……ぎ……わ」

掠れ掠れの声を吐き出しながら、メデイジーナはポケットに忍ばせていた手から何かを引き抜き、思い切り自らの首に打ち込む。それは無針型の注射器。だが敵がこんなタイミン^{タイミング}グで使うものが、マトモなものであるはずがない。恐らくは個性をブーストさせる系統の薬。

動かれる前に捕らえる。捕縛布を巧みに操り、相澤はメデイジーナを捕らえようと駆け出す。

「な——」

だが気づいた時にはメデイジーナは目の前にいた。文字通り、顔前にメデイジーナの顔があったのだ。このままではぶつかってしまうと急ブレーキを掛けて避けようとするが、その必要はなかった。

「グウウツ——！」

殴られたと形容していいのか。それとも振り払われたと言った方がいいのか。無造作に振り回されたメデイジーナの腕が相澤の右肩に直撃した。まるでハンマーで殴られたような鈍痛に、骨が折れたことを実感する。

だが痛みを押し殺して吹き飛ばされながらも捕縛布でメデイーナを捕らえようとしているのは、流石としか言い様がない。それを折れた腕で行っているのだ。不屈すぎる。少しは悶えるなりして欲しい。

だが、相手が悪かった。

真上にジャンプする。誰でも出来るその行為だけで、メデイーナは10m以上空に浮かび、今まさに捕えんとした捕縛布から脱出した。

「なんだ、コイツは・・・！」

折れた腕を底いながら、相澤が息を切らせてよろめきながら立ち上がる。個性は間違いなく封じていた。しかし一撃でこのダメージを与えるほどの力。異形型ではないだろう。身体的特徴が見られない。そして先程打ち込んでいた薬らしきもの。個性を強化する系統のものだと思っていたが・・・。

「個性じゃないよ」

勝者は決まったと言わんばかりに、余裕の死柄木が説明する。相澤の敗北は既に決まっていた。メデイーナに薬を使わせた時点で、相澤は負けていたのだ。勝負は始まる前から決していた。

「あの薬も肉体を増強させるとか、昔あったやつじゃない。アレは、ただの麻薬だよ。なんでかは分かんないけど、薬やりすぎて脳ミソがイカれたらしい。火事場の馬鹿力って奴みたいなものだよ」

普通なら火事場の馬鹿力に耐えきれず、肉体が崩壊してしまうだろう。だがメデイーナの肉体は、異常なまでに鍛えられていた。ジャンプの世界にふさわしい程に。たかが薬の常用程度では、日常的に鍛えなくても衰えないほどに。

メデイーナが使う薬は脳の一部をぶち壊す。それは脳におけるリミッター。人間に100%の力を引き出させるのを食い止める部分。

メデイーナの80%は無個性にしては恐ろしい程に強い。その秘められたる20%を解放すればどれだけの力が手に入るか。結果はこのとおり。

反撃も許さぬ狂った連打。技術という概念が一切ない、ただ力技で連続で打ち込むこむだけの動き。効率よく力が入るわけでも、次の動作を行いやすい訳でもない。恐ろしいほどの効率の悪さは、異常な肉体によって補われていた。

「まあ、もう聞こえないよな」

死体のような程ではないが、動けない相澤が地に伏せている。死柄木が話している間も、メイジーナの拳を喰らい続けていたのだ。体のあちこちはボロボロで、個性の使用なんて出来そうにはないし、動くなんて以ての外だ。オマケにトドメとばかりに頭部を叩きつけられている。意識を保てというのは無理な話だ。

「思ったよりはやく終わっちゃったなあ。なあ黒霧、誰が一番乗りだと思う?」

「? オールマイトではないんですか?」

「子供達がいるだろう?」

「まだ学生ですよ?」

「来るだろ、ガキでも」

「まともに貴方の悪意の中で動けますかね?」

「やれば出来ると思うぜ。卵とはいえヒーローなんだからさあ」

「では私はオールマイトに」

「それじゃ俺はガキに」

役目を終えたメイジーナが戻ってくるのを見ることなく、死柄木と黒霧は呑気に話している。黒霧はどちらかと言えば付き合わされていると言った方がいいか。何せ、今ここに立っている者達の中で、マトモに会話が可能なのは死柄木と黒霧だけ。メイジーナは言わずもがな、脳無は発声器官が度重なる改造で消えている。それに、自律思考が出来ない。

賭ける方を互いに言うのと、死柄木はポケットに手をつ突っ込んだまま、散歩するように移動する。向かう先は水難ゾーン。その死角と なっている場所に。

「ざんねーん黒霧。賭けは俺の勝ちだな」

「最初から分かっていたのでは?」

「勝負つてのは始まる前から決まってるんだよ。今回みたいにな」

死角に隠れて相澤を救出するか、ここからゲートに走って逃げ出す算段でも整えていたのか、潜んでいた三人に、極大の笑顔向けながら上から見下ろす。その笑顔は顔に貼り付いている不気味な手によつて、恐ろしいと誰もが思う物になっている。

悠然と近づいてくる死柄木に、潜んでいた緑谷、蛙吹、峰田は動くことが出来ない。まるで蛇に睨まれた蛙のように、震え怯えることしか出来なくなる。

「大事な大事な教え子が目の前で死んだら、オールマイトはどんな顔をすると思う？」

死柄木の問いに返答なんて出来るはずはない。殺されるか人質にされるか。抗う気力が失われていく中で咄嗟に動いたのは緑谷だった。緑谷は去年の四月に、爆豪を敵から助け出すために恐怖を振り払って助けに行ったことがある。決して褒められたことではないが、他者の為に一線を踏み越えることが出来たその勇氣は、褒められて然るべきものだ。

緑谷出久はそういった場面において、蛙吹や峰田よりも、一步先にいた。故に、

「SMASH!!」

身体は自然に動いていた。控えていた諸刃の剣である個性の全力使用。右腕限定とはいえ、緑谷の一撃はオールマイトの一撃そのもの。喰らえばどんな敵であれ、たちまち再起不能になること間違いなし。

咄嗟の状況に力加減が成功したことなど微塵も考えず、ただ目の前の大切な友達に降りかかる魔の手を払うべく、拳を振るう。

「SMASHって、オールマイトのフォロワーかな？」

渾身の、過去最高とも呼べる拳は、死柄木の軽い掌によつて流れるように弾かれ逸れた。例えどれだけパワーがあろうとも、緑谷は拳の打ち込み方を知らない。どれだけ効率良く力を伝えるか、どこを狙えば相手を効率よく倒せるか。無我夢中に放っただけの拳では、悪で在れかすと、幼少期より高度な英才教育を受けた死柄木にとっては弾く

のは容易なこと。

右腕は完全に振り切った。引き戻すことはもう出来ないし、それが出来る程の体術を緑谷は持ち合わせていない。死柄木の五指が迫る。それは死を体現した指。その指が全て触れれば、万物を崩壊させる個性。

「それじゃあ——」

殺そうか、と言おうとした所で、天井が崩落した。否、崩落してきたのは骨組み等だけだ。芯となるものは崩れていない。施設が崩落して生徒達に危険がないように、最大限の安全が図られている。だが死柄木には分かる。その行動は怒りだ。

溢れんばかりの煙を引き裂いて、とうとう本命が来たことに死柄木は胸を踊らせ、緑谷を元いた場所に蹴り飛ばす。本命が来た以上緑谷という存在は必要なくなった。

「もう大丈夫

——私が来た！」

「ああ……はじめまして……オールマイト。さあ、ゲームを始めようか」

誰かが時間を消し飛ばした。キンクリは私が持つてるけど

　　雄英に入学してからも、入学する前からも、自分が他者よりも特別秀でていたと思っただけは無い。

　　試験時の実力はほとんどがサポートアイテムのおかげなのは、自分が一番理解している。サポートなしの自分の実力なんて、周りの『本物』と比べればたかが知れている。

　　個性も強力で本人の戦闘センスもずば抜けている爆豪。相反する二つの個性を併せ持つ轟。速度において他の追隨を許さない飯田。指先だけでも自壊する程のパワーを持つ緑谷。その他のクラスメイ卜達も、特筆出来るほどの優れた点を持っている。

　　それに比べて、自分はなんて器用貧乏なのか。身体能力や戦闘センスは平凡で、個性は中の上か中の中。『ディーヴァ』がなければ大規模な範囲攻撃も出来ず、出せる音も格段に低くなる。

　　物語の主人公でもないので成長限界は簡単に見えてくるし、戦闘中の劇的な成長も、短期間の修行での大幅なパワーアップもない。

　　突出性を持たない私が考え抜いて選んだ結果は、可能性を風潰しにするということだった。

「あああああ、疲れたあああ」

　　おっさんのような声を上げながら、身体のあちこちがボロボロの上鳴が地面に勢いよく座り込む。八百万も疲れているだろうに、一度座ったら次に立つ時に必要な気力が全て持っていられるのを防ぐためか、個性で創り出した鉄棒を支えに立っている。いや、耐えられなくて滑るように座り込んだ。

　　ウチも同じく、疲れきっていた。もう目を開いているのも憂鬱な

程。ここまで疲れたことがあっただろうか。いや、間違いなくない。一年前のあの時も、逃げる時にかなり疲れたが今ほどではなかった。何せあの時は、彼女が力になってくれていたから。

だが今は違う。ここにいるのはウチ達ヒーローの卵がたった三人。対するのは、三十を超える敵の集団^{サイラン}。

熱烈な歓迎だった。黒い霧に飲み込まれてワープした場所は山岳ゾーン。そこからわらわらと舌なめずりをしながら血気盛んな敵^{サイラン}達が、お預けから解放された動物のように襲いかかってきたのだから。「さつきはゴメンな。オレのせいで余計なダメージ負わせちゃって」

「いえ、もう気にしていませんわ・・・」

「いい課題になったじゃん。今度から開幕ブツパは控えて、相手のことよく見極めなよ。アンタアホになる寸前だったんだからさ」

敵の襲撃^{サイラン}、そしてワープさせられてから突然襲いかかってきた敵^{サイラン}に對して、焦りから上鳴のバカが八百万が近くにいるにも関わらず放電をしたのだ。ウチは咄嗟に伏せたが、八百万は出遅れ、放電を受けてしまった。

だがある意味で、周りに敵^{サイラン}達がいたのは幸運だった。本来であれば八百万への放電威力はもつと高く、一瞬で意識を刈りとるレベルのものだったのだから。

得意気に個性を自慢していた敵が、どうやら空気中にあるエネルギーを吸収、放出する個性の持ち主だったらしく、上鳴の開幕ブツパのほとんどは敵^{サイラン}に吸収された。その後派手にブツパされたが、吸収したエネルギーの放出は威力が下がるのか、思っていたほど強いものはなかった。

そこからは無我夢中で、何が起こっていたのかよく覚えていない。上鳴はショート寸前までの放電で個性を一時的に使用不能になり、八百万は身体が痺れてダウン。始まったのは防衛戦^{サイラン}。だが敵は四方八方から襲ってくる。

下手に『デイーヴァ』での大音量技を使えば、守らなければならぬ上鳴や八百万さえも傷つけてしまう。求められたのは放出せず、最低規模で最大の効果を出すための攻撃。

ウチには幸運にもそれを満たすための手段があり、不幸にも試したことのないものだった。

使ったのは『ディーヴァ』を拳に付けての近接戦。ただの近接戦ではもちろん無い。それでは『ディーヴァ』を使う意味が無い。拳が当たった瞬間に、音で脳を揺らして脳震盪を引き起こすという、机上の空論として考えていたもの。

だがまずいことに、この技は試したことがなかった。それもそのはず。これは対人技で人間の機能に干渉する技。人間が対象でなければ、実験なんて出来るはずもないし引き受けてくれる人もいない。

更にこの技は欠点が多い。まず扱う自分自身に接近戦の才能がなければいけないこと。どれだけ理論として完成しても、それを実行する状況に持ち込めなければ意味が無い。そしてもう一つは、対象の個性の種類によって調整が変わること。異形型は肉体が通常の個性持ちよりも頑丈である。そのため、必要になる音量も多くしなければならぬ。

前にも言ったが『ディーヴァ』の調整は時間がかかる。それは短いものなのかもしれないけれど、戦闘中の一分一秒が重要な場合においては致命的だ。

そう、本当に運が良かった。戦闘中の土壇場での適当な調整が、まさかの大当たりを引いたのだ。対象は異形型ではなく発現型などの、普通の人間と肉体強度が変わらない方へ調整が成功したのだ。

成功した時に一番驚いたのは自分自身だ。調整は下手をして人体を壊してしまわないように最低限の出力にしていたにも関わらず、一撃顔にぶつけるだけで脳震盪を引き起こしたのだ。

改めて実感した。やはり自分の実力は『ディーヴァ』に依存している。

だがこの調整では異形型は倒せない。敵の集団の中に異形型がないなんて都合のいい事はなく、一方的な攻撃がはじまった。本来ならそこで倒れていてもおかしくなかったのに、今こうして居られるのは、上鳴のお陰だ。少しだけ回復した上鳴が、接触の瞬間だけ個性を使い人間スタンガンとなることで助けてくれた。

「縛るの、手伝うよ」

「いえ、耳郎さんは休んでいてください。捕縛は私がやりますので……」

痛みの残る身体を立ち上がらせ、敵を縛る八百万の手伝いを申し出ると、呆気なく断られた。八百万の言葉には、心なしか羞恥が混じっているように思える。悔しいのだろう。何せ彼女は、最後まで何も出来なかったのだから。

上鳴の人間スタンガンのおかげで、思いの外早く片付けることが出来た。二度三度、ヤバめのを貰ったけどそれだけ。長引いていれば蓄積した痛みが足を引っ張って、今以上に痛めつけられていたのは目に見えている。

入学してから短いけれど、少しくらいなら為人は知ることが出来る。彼女は誇り高い人間だ。栄えある雄英高校の推薦枠の一つを勝ち取った者として、次代の平和を担うことになる者として、思想も理想も高い位置にある。

故に、今の戦闘は彼女を精神的に傷付けた。

気絶しているならばまだ良かった。だが彼女には意識があり続けた。

足搔こうとしてもままならない身体。助力しようとしても抗えない。別に彼女は何も悪くない。私達の誰も悪くない。

上鳴の初撃の放電だって、仕方のないものだ。普通であれば突っ走りワープして殺気立つ敵に囲まれれば反射的に個性を全力使用する。敵にどのような個性持ちがいるかなど確かめようもない。まさか吸収、放出なんて便利極まる個性がいることなんて滅多にない。

彼女が電撃を浴びたのも、彼女自身のコスチューム、個性を最大限に利用するためだ。『創造』という八百万の個性は、素肌から直接出てくるもの。素肌を晒していればいるほど、大きな物が創れる。

コスチュームというヒーローを最大限にサポートする道具として、最たる力である個性の使用を最大限にするのは当然の機能設計。

「そんなに気にすることじゃ——」

彼女に声を掛けようとしたその時、天井が外側から破壊された。新

たな敵の襲撃かと思ひ、警戒を高める。上鳴も頭を抱え込んでいないで警戒してほしい。

「援軍が来た、のでしようか?」

「多分このパワー・・・オールマイトが来たんだと思う。この集団ならワープの個性があるから、派手な演出なんて必要ないと思うし」

「え?マジで?!?ってことはオレ達助かるのか!?!」

「だといいいけど・・・」

先日の雄英バリアが破壊された一件に、間違いなくこの敵ワイラン集団は関わっているだろう。その時にカリキュラムを持ち出ししているのなら、ここにオールマイトが来ることは知っているはず。

ああ、いや違う。こんなこと考える必要も無い。初めから分かりきっていたことだ。13号や相澤を、生徒を殺したとしても彼らには大した旨みがない。初志貫徹。目的はオールマイトただ一人。

オールマイト一人で動いていく社会。狙われる雄英。ああ、全く以って、迷惑極まりない。歪だよ、本当に。

死柄木が持ち合わせるオールマイトと唯一マトモに戦える手札である脳無。死柄木の先生であるAFOからショック吸収と再生の個性を与えられ、ドクターによってオールマイトと素の状態で殴りあえるパワーを与えられた改人。両者曰く、数多に量産されている改人中では間違いなく現時点での最高傑作。そしてオールマイトを倒す上でこの上ない手札。少なくとも死柄木はそう聞かされていた。

目の前で行われているオールマイトと脳無の戦闘は拮抗していた。いくら殴られても衝撃を全て吸収する脳無と、いくら殴られても不屈の意志によって倒れないオールマイト。世界最高のヒーローと、考えうる限り最高の個性の集合体。

しかし蓄積される疲労や古傷に痛み続けるオールマイトと、改造を施され痛みを感じるこの無い脳無では明らかに脳無の方が有利。

「頃合だな。殺ってこい、メデイジーナ」

ブスリ、と肉を抉るような音が出るほど乱雑に注射器が刺され、液状麻薬が注入される。自我が極端に薄いメデイジーナが、自分の肉体を丁寧に扱うはずがなく、駒の一つでしかないメデイジーナを、死柄杓が止めることはない。血管の位置などを完全に無視して、首から麻薬が入り込み、脳へ到達する。

「新手か！だがそんな身体で本当に戦えるのかい?!」

「そっちこそ、元氣に見えて実は限界なんじゃないのか?」

一見すればやせ細った不健康そうな男。運動なんてしたことがないので、と思うほど脆弱に見えるその姿は、薬の乱用によって作り上げられたもの。

「……す……」

掠れた声で呟きながら、まるで獣のように走り出す。限界まで身を屈め、オールマイト目掛けて疾走する。その速さは一年生ながらもプロでも中々いない速度を出せる『エンジン』の個性を持つ飯田よりも速かった。

「身体強化系の個性。なるほど、さっきのは個性増幅剤か」

相澤と同じく、オールマイトがこの考えに辿り着いてしまうのは当然のこと。時代の流れと共に闇市場等では凶悪な副作用を持つ劣悪な個性増幅剤が際限なく売りさばかれ、個性犯罪には大抵使われる。

薬の種類も様々で、薬ごとに効果は違うが全てに一貫して副作用が存在する。廃人のような姿も、副作用だと言われれば納得してしまう。

「なかなかの速度だが、今の私には通用しない!」

肉体を壊さない程度の力で拳を振るう。無論、気を使われているのは明らかにメデイジーナだ。

「むっ……これは……不味いな!」

振るった拳は、メデイジーナが受け止めていた。肉が削がれたような細腕で、全力ではないとはいえオールマイトの腕を絡めとり、規格外のパワーで圧壊させようとしていた。振りほどこうにもどこからか湧いて出てくるパワーで阻害される。やむなし、と思い、メデイ

ジーナごと絡まれている腕を振り上げ、

「ニュージア・スマッシュユ!!」

思いつきり地面に叩きつけるべく振り下ろした。本来であれば囲まれたときなどに地面を粉碎して動きを限定させるための技だが、腕に絡みつく相手には十分な効果を期待できる。

だが地面に拳は当たらない。黒い霧がオールマイトの腕を肘まで飲み込み、飲み込んだ腕をオールマイトの背中に排出していた。

「ぐうつ・・・ワープによる、攻撃の転換・・・!」

「危ない危ない。一応ソレは便利だからさ、まだ壊してほしくないんだよなあ」

自らの拳に苦悶の声を上げるオールマイトを見て、死柄木は愉快に嗤う。目の前にある正義の苦悶は、これまでの人生において一度も味わったことがないほどの愉悦を感じることが出来た。

「それに勘違いするなよ。お前の相手はまだいるだろう」

「——ぬううう!」

脳無の太い拳を察して、力任せに腕をクロスさせてガードする。ガードの上からでも響く脳無の力は、メデイジーナ以上。踏ん張りながらも数m押し出される。脳無の攻撃はメデイジーナを引き剥がした。だが状況は変わらない。

顔を上げれば、脳無^{改人}の横でゾンビのように起き上がってこちらを静かに見ているメデイジーナ^超。対してオールマイトは既に軽くないダメージを受けている。オマケに活動限界も近く、いつマッスル・フォームが解かれるか分からない。

酷い状況だ。メデイジーナは痛みを感じず、脳無は再生とショック吸収によってあらゆる物理ダメージを無にすることが出来る。

故に、オールマイトの敗北は濃厚——否。

オールマイトは見た。こちらを見ている緑谷を、大切な教え子達を。燃える闘志が更に燃える。平和の象徴は奮い立つ。守らなければいけない者達がいる。穢してはならない未来がある。求めるのは誰もが笑って暮らせる明るい未来。かつて師匠に語った絵空事にも聞こえる夢。

「ああ、そうだよなあ」

「・・・ようやく本番か」

その身には残り火しかなくとも、まだ火は残っている。覚悟ならとつくに出来ている。一年前のあの日、与えた自分の一部に全てを込めて。

「私は平和の象徴。ここで倒れるわけにはいかないんだよなあ!!」

「待ってたよ、お前を。さあ行け！アイツを殺せ脳無！メデイジーナ！」

切って落とされた幕は、あっけなく潰えてしまった。一発一発が100%を上回る、もはや技とも言えない究極の脳筋技『PLUS ULTRA』は、ショック吸収という物理攻撃に対して究極の耐性を持つ脳無を空の彼方、黒霧の個性が届かない場所にまで殴り飛ばし、残るメデイジーナも最初の頃が嘘のように倒された。

「まあそうなるよな」

死柄木はポリポリと腕を掻きながら、仁王立ちするオールマイトを見据える。切り札、というより唯一の対抗札はどこかに行つて、メデイジーナには最初から期待していない。もとよりメデイジーナの力量は脳無に追従する程度。確かに上位ランキングに入るヒーローのほとんどを殺すことが出来るだろうが、脳無が倒された時点で、オールマイトに勝てるなんて考えは吹き飛んだ。

蛇足のように戦わせてみたけれど、結果は惨敗。圧倒的な力の前には無力だった。

この結果は死柄木には容易に予想出来ていた。例えどれだけ戦力を持つていこうと、敵である死柄木でもオールマイトが倒れる姿を幻視するのは難しい。肉体や個性だけでなく、意志が強すぎる程に強

あゝあゝあゝ!!」

「ちっ、壊れかけのガラクタが！こんな時になってバグってんじやねえよ。黒霧！」

「心得ています！」

(不味い・・・！)

静止していたメイジーナが突如、獣のような雄叫びを上げ、生徒達目掛けて走り出す。暴風のような疾走に、限界のオールマイトがついていけるはずがない。その背に手を伸ばすことも出来ず、生徒達への接近を許してしまった。

対する死柄木も焦っていた。メイジーナは確かにガラクタで、壊れかけの廃棄寸前だが、ここで本当に壊れてしまつては困る。己に忠実で力ある都合のいい存在を、こんなチュートリアルクソイベントで失うなど、たまつたものではない。

咄嗟に黒霧に声をかけ、先回りするようにゲートを展開させる。

接近された生徒に行われるのは、その凶手を用いた攻撃だろう。オールマイトの唯一の弱点である心臓下を穿ったその攻撃は、拳のように硬く握るのではなく、鉤爪のように鋭くする訳でもない。膨大な力を叩きつけるように振るう。それだけでいとも容易く人体を破壊できる。

赫怒か憎悪か、感情の分からぬ絶叫を上げながら突き進む。気色の悪い叫びを払い、爆豪の至近距離での爆破が、轟の氷が足を凍らせて止めようとするが、止まらない。ベリベリと肌を剥がし、血に濡れ肉が見えるグロテスクな脚を曝け出しながら、生徒の眼前にまで接近し、とうとうその凶手は振り下ろされ――

――ようとしたその時に、その身体は黒い霧によって消えていく。死柄木の命令通り、黒霧がメイジーナをゲートで飛ばしたのだ。一見すれば死柄木達がメイジーナから生徒を守つたように見える構図。生徒達が安堵する一方で、死柄木の機嫌は明らかに低下していた。

身体を搔く指にはだんだんと力が籠もり、肌の表面を傷つけてい

く。

「ああ、イライラするよ。せつかく何もかもがいい感じで終わるはずだったのに、余計なことしやがって。ここでこんな事言うのも雑魚キャラみたいだけど、とりあえず。オールマイト、次は殺す」

捨て台詞を吐きながら、黒霧の生み出したゲートに死柄木が飲み込まれていく。完全にその姿が見えなくなると、生徒達からは歓喜の声^{が聞こえるが}、オールマイトはそれどころでは無い。真正正銘の限界が訪れている。マッスルフォームへの維持だけでも相当に辛い現状。変身解除の時に出る煙がオールマイトを囲い始め、身体も少しずつ萎みはじめている。

「大丈夫ですか、オールマイト?」

最悪のピンチを救ってくれたのは、同じ雄英高校で教員をしているセメントスだった。彼は地面に手をつけて、オールマイトと生徒たちの間に巨大なコンクリートの壁を創る。

「遅れてしまって申し訳ありません。ここに来る最中、何度も敵^{サイラン}達の襲撃にあいまして」

「いや、素晴らしいタイミングだよセメントス」

これで気兼ねなく力を抜ける。オールマイトの身体が完全に萎み、残ったのはトゥルーフォームとなった骸骨人間。セメントス——雄英高校の教員達もまた、オールマイトの秘密の守り手。

「ああ、そういえば北西の方向に脳無という敵^{サイラン}を殴り飛ばしたんだ。再生とショック吸収という個性を持ち、私と同等のパワーがあるから、注意して欲しいと伝えておいてくれ」

「分かりました」

『どうだった、オールマイト——平和の象徴は?』

襲撃から戻ってきた死柄木と黒霧は、バー風の内装のアジトの中の、いつもの所定の位置にいた。死柄木はカウンターに、黒霧はその服装通りカウンターの内側に。

帰ってきた彼らを待っていたのは、普段滅多に起動することの無い部屋の隅に置かれたモニター。画面は真つ暗で殆ど何も見えないが、微かに人がいるように見える。

「脳無、メデイジーナとぶつけてみたけど、予想の範疇だったよ先生。脳無は計算通り力任せの連打でぶっ飛ばされて、メデイジーナは先生の言った場所に良い一撃を喰らわせたけどそれが限界。結果はご覧の有様だ」

『つまり君と黒霧は無傷で、脳無を含む駒達は全滅。唯一帰ってこれたメデイジーナは半壊——ああ、違ったね。彼は成長だったね』

「全く、アイツの特性は便利なんだが、面倒が過ぎる」

『素晴らしい成果じゃないか弔。与えた脳無は玩具同然。捕まった敵は使い捨てのゴロツキばかり。主犯格である君らは大きな成長をして、メデイジーナは更に強くなった!』

教え子の成長を喜ぶように、画面の向こうにいるAFOは歓喜の声を上げると同時に思う。やはり成長期の子には相応しい試練を与えなければいけないと。

『では次の課題を与えよう。仲間を増やすんだ、弔。駒でも玩具でもない、黒霧のような忠実な部下でもなく、志を共に出来る仲間を。そうすれば君はもつと凄くなれる。もつと君は高みに到れる。次の時代の悪の象徴にまで』

「言われなくてもそのつもりだよ。先生」

狂人の相手なんてしたくない。呼んだのは私だけけど

いつもと同じく、暗い路地裏で贗作のヒーローの粛清を終える。呻き声を上げて地面に倒れる血濡れのヒーローに対して、なんの感慨も抱かない。彼からしてみればそこにいるのはヒーローとは名ばかりの、純粹であるべきその名を汚す塵でしかない。

胸に秘めるのは社会が良くなれという純粹な正義感。

自分の行いは間違っていない。無数の贗作が蔓延るこの世の中、ヒーローという名の重さを、意味を忘れた者達への粛清。

過剰なまでに神聖視されている彼のヒーロー像から呼び起こされた凶行を、誰も止めることが出来なかった。倒れるヒーローも、凶行を止めようとした果てにその身を血に濡らし、無力に地に伏せたのだ。

「はア・・・愚かな贗作・・・ヒーローを名乗る贗作は・・・はア・・・
粛清を与えなければ」

「赤黒血染。いや、今はヒーロー殺しステインだったな」

「誰だ・・・！」

声が出た方へ、振り向きざまに納刀しようとしていた軍用ナイフを投げる。殺すのではなく流血させることを目的に鍛え上げられた技能だが、その技は既に必殺の領域にまで到達している。並のヒーローでさえ目で追えないほどの速度で振り投げられたナイフに、しかし手応えは存在しない。

「中々の技能だ。そこら辺のチンピラやヒーローなら即殺されるだろう。だが残念だったな。刃物を使う以上、俺との相性は最悪だ」

闇より出てきた男の右手には、ステインが投げたナイフの柄の部分が握られている。高速で飛来するナイフをブレードごと掴むのは理解できる。だが柄を掴んで止めるのは、明らかに異常である。

ナイフを掴んだのは純粹な技量か、それとも個性か。

間違いなく個性であると考えられるが、そうではない、技量の可能性も捨てない。もしそんなことを個性なしでできるとすれば、目の前の男は相当な手練。油断すれば一瞬で殺られるかもしれない。

その考えが脳裏に過った瞬間、本来の武器である刀を抜刀する。逃げるという道はない。目の前の男はそんなことを許しはしない。

「別に殺しに来たんじゃあない。話があつてきたんだ」

掴み取ったナイフを軽く放り投げる。投げられたナイフは速度は遅いがやはり刃物。取り損なえば大怪我を負ってしまう可能性もあるが、ステインは軽く掴み取る。

「敵……いや自警団ヴァイザンテの方か……？どちらにしろ、悪しき者達と話すことなど——」

「人の話は最後までよく聞くんだな。俺はそのどちらでもない」

「ならば何者だ……？はア……何が目的で接触してきた」

返答によつては切り刻むこともやむなしと、血に濡れた刃を舐める。一目見るだけでゾツとするほどの姿。その姿形から為された行為は、明らかにマトモな人間ではないと教えてくる。

「ボスがお前と話をしたいと言っている。俺はお前をボスの場所に連れていくために来た」

「……俺がついて行く理由がないな」

「その刃物、大分傷んでるんじゃあないか？刃こぼれが酷い。そんなんじゃあ碌な手入れもしてないだろう。それにお前自身にも疲れが見える。当然だな。お前が活動を始めたのは三ヶ月前。その間に15人を殺害、19人を再起不能にまでしている」

「……それがどうした」

「警察はバカじゃあない。既に再起不能になったヒーロー達から聴取を終えているだろう。お前はお喋りみたいだからな。お前の持つその思想を元に、捜査をしているだろう。勿論、お前の使う金縛りの様な個性も含めてな」

過去にステインとはある地方の高校のヒーロー科に所属していた。だが現状のヒーローの体制に異議を唱え『英雄回帰』という主張をしたが、たった一人の学生の声が社会に届くはずがなく、波紋一つ起こすことなく消えていった。正攻法を捨てた彼はどんなヒーローよりも過酷な修練を積み重ねると同時に、その思考を絶対のものとした。

「それがなんだと——ッ?!」

これ以上は聞く必要は無いと、その肉体を切り刻もうと動こうとした時、自らの異変に気付いた。肉体が思うように動かない。痛みはなく、氷か何かで動きを妨げられているわけでもない。肉体そのものがステインの意識についていけない。

『ザ・グレイトフル・デッド偉大なる死』。安心していい。ボスからは殺すなど指示を受けている」

「か、身体が・・・重い・・・」

「まだそこまで動けるのか。これ以上は殺しかねないが、まあそれだけ動けるなら構わないだろう」

「ぐおっ・・・!」

更なる負荷が身体にかかり、自重に耐えられなくなり地面に四つん這いになる。先程までヒーローを追いつめていた者とは思えない無様な姿だった。見下ろす者と見下ろされる者がはつきりと分かれたる。

「お、俺の腕が・・・?!」

身体をなんとか支える腕は、まるで枯れ果てた老人のようにしわくちゃだった。ステインはまだ若い。それこそ未だに20代真っ盛りで、身体にはエネルギーが満ち溢れている。なのに自分の腕はどうだろうか？一目で戦えないと分かるほどにまで枯れ果てている。

視界に映り込んでくる、伸ばしっぱなしのバンダナで押し上げただけの髪も元の色など忘れて真っ白になり、元々ほとんどなかった艶もゼロになっている。

「肉体を・・・老化させる個性・・・!それも周りだけを巻き込み・・・自分には害無し・・・!」

「半分だ。半分だけ正解だ。肉体を老化させる、その見解は正しい。いや、こんなことは分かかって当然だ。答えに入れることですらない」まるでステインを審査しているような口調。力関係は明確だった。ステインに勝ち目はない。今の肉体の状態ならば無造作な蹴りの一発でさえ肋は折れて臓器が傷つき致命傷となるだろう。だが見下ろす彼はソレをしない。

「この能力は無差別でな。人間だろうが植物だろうが、『命』があるの

なら巻き込んでしまう。制御を手放せば使っている俺でさえ老化させる。老化に抗う方法は明確な物として存在するが、まだお前に教えるわけにはいかないな」

「ハア・・・何を・・・言っている・・・」

「ああ、落とす前にこれは言っておかないとな」

何か、ステインの知らないルールに抵触したが故の制裁を与えられるのか。だがそれならば何故、自分の個性を話すなどと言う無駄なことをするのか。問答無用で黙らせて、彼の語るボスとやらの目の前に引きずり出してしまえばいいのに。それくらいの覚悟は常に出来ている。ただ相手が違うだけで。

「俺は個性など使っていない。次の選択は、間違えるなよ」

頭に強い衝撃を受けて、ステインの意識はそこを境に落ちた。

「お疲れ様ですスキューロ。それが噂のヒーロー殺しですか」

今は形無きパツシヨーネの保有するアジトの一つ。室内に物はほとんど無く、また窓もない。あるのは親衛隊4人分の椅子と、スキューロの釣り竿『ビーチ・ボーイ』の糸で簀巻きにされて部屋に運び込まれたステインの分の椅子。そして簡素な机。ステインの椅子が部屋の真ん中にあり、他の椅子はステインを取り囲むように配置されている。

ステインの拘束を一度解き、椅子に座らせてからもう一度拘束する。椅子の脚に手足を縛り付け、なるべく動きにくいように。そんな面倒なことを、釣り竿で行うのは面倒なことだが、この釣り竿は幽紋波スタンダードであり、使用者のスキューロはボス曰く10億に一人の幽紋波スタンダード

使い。ソレが真実であれ嘘であれ、ボスがそう言うのならそうなのだ。

拘束されたステインの身体は、先程の戦闘時と比べて血色も良く、枯れ木の如く老化した肉体は元に戻っている。心做しか、より健康的になったようにも見える。

「世間を騒がす有名犯罪者様が普通の奴らには見えないとはいえ、釣り竿で引きずられてくるなんてな」

「普通の縄なら逃げられていただろう。個性の都合上、こいつはどこに武器を隠しているかは分からないからな。そろそろ起こす。スクアールはシーラの側に寄れ」

「ふん、個性ね」

座席位置は変わった。いつも彼らが集まるときの位置ではなく、このような異例の状況下でより効率良く、より安全な位置へ。彼らは当然のことながら、全員が幽紋波使い^{スタンド}。ボスの力の一端をその身に秘めた者達。すなわち彼らはボスの所有物に他ならない。

親衛隊に、幽紋波使い^{スタンド}に勝手な死は許されない。

シーラが床に落ちていているホースを手に取り、大量の水をステインの顔にかける。いや、水の勢い的にはかけるよりも直撃させると言った方が正しいだろう。しかも嫌らしいことに、口と鼻の間を狙っている。顔に当たって弾けた水が鼻に侵入して刺激を引き起こしてくれらるだろう。

一瞬にして部屋は水浸し。室内でホースを使って放水するなど、日本でも世界でもあり得ないことだ。

「ぐおっ・・・ハアハア・・・ここは・・・そうか、ボスとやらの居場所か・・・」

相当に理解力が早いらしい。手足を括り付けられた状況と、いつでも自分を殺せる位置にいる親衛隊達。誰も彼もが手練だということ、簡単に感じ取れる。逃げようにも武装が一つもない。隠していた暗器も無くなっている。

スピードが人並外れていようと、筋力は常人の枠に収まっている。手足を頑丈に縛る縄を、椅子の足という頼りない柱を率いたとしても

千切る事は出来ない。分かりやすいほど詰みである。

「それで・・・はア・・・ボスとやらは来ないのか？」

「もういる。お前の前にな」

「はア・・・そういう事か・・・」

ステインから少し離れた所にある机には、一台のPCがポツンと置かれていた。真つ暗だった画面には薄い光が灯り、緑色の文字が黒に刻まれる。

「はア・・・マトモに姿を現さない臆病者か・・・なるほど、確かにボスに相応しい」

『君のことを私が評価しているから。評価できるほど君のことを知っているから。だからこそ私は君の前に姿を現さないのだよ』

くだらない挑発に乗るほど短気というわけでは決してないが、流石にボスのことを言われては座して黙しているわけにはいかない。ボスからの直接の命令だったから、殺すわけにはいかないが腕の一本を奪いたくなるくらいには苛ついた。親衛隊の中で最も血気盛んなスクアアローが、己の幽紋波スタンドで攻撃しようとしたその時、機械による変声による男とも女とも付かない、だがどちらかと言えば男性の声に近い機械音声が、スクアアローの動きを寸でのところで止めた。

『おいおい何も驚くことじゃあないだろう。別に画面に文字が出たからといって、こんな方法で言葉を交わすのは不便でしかないだろう。会話に遅れをとってしまえば、そこから生じる齟齬で会話がまともに成り立たないだろう。ああ、あまり好みではないのだが、効率、というものだよ』

この場の空気に似合わず、ここにはいない誰かは気の向くままに話を進めていく。その言葉の対象は果たしてステインなのか。ステインにはまるで愚痴のように聞こえた。

『はじめまして、ヒーロー殺し。私はパツシヨーネのボス。早速なのだが、まずは私と『友達』にならないかな？』

「・・・何を言っている」

『それともこういった方が好みかな？協力関係を結ぼう。メリットデメリットは・・・まあ言わなくても理解しているか』

協力関係Ⅱ友達。随分と愉快的な考え方をしているようだ、鼻で笑う。恐らく相手の目的はステインを手駒とすることだろう。ステインにはそれだけの価値があるという、確固とした自覚がある。

有象無象のヒーロー達に、自分を殺すことは出来ない。自分を殺すのは敵でも贗作でもなく、オールマイトサイランただ一人。彼を除いて有り得ないと、ステインは本気で思っている。

確かに、世の中にはオールマイト程ではないとはいえ、強力なヒーロー達は確かに存在する。だが固定観念というのは恐ろしいもので、ステインにとつてのヒーローとはただ一人だけなのだ。それは何が起ころうと変えることの出来ない虚構。

「断——『断らないよ、君は。ああ、まずは私の話を聞いてくれないかな。無駄話はしないし時間はたっぷりある。逃げようとしても今の君はロクに抵抗できないし、彼らが許さないだろう。それに君もここで死ぬのは本望じゃあないだろう?——ちっ」

確かに、ステインにはやらねばならないことがある。ここで万が一にも激しい抵抗をすれば、自分がどうなるかなど簡単に想像がつく。ステインをここに連れてきたであろう『老化』の個性を持つ明らかな実力者に、彼に追従するほどの者達が三人。武装もない今の状態では、一人として殺すことは出来まい。

ここで無為に散らす命を自分は持つていない。不本意ながら、大人しく話を聞くしかない。

『君は、今を変えたいんだろう?』

ソレは突き詰めればステインの行動理由であった。ステインは自分の評価にそぐわないヒーローを『粛清』している。オールマイトという完璧なヒーローを元に作り上げられた彼の評価基準はヒーローとして確かに素晴らしいものだ。理想的なものと言える。

だが人間は万人が綺麗な生き物ではない。彼が認めるヒーローになれるものなど、探すだけで半年はかかる。

その粛清の果てには、完璧なヒーローだけが残る。オールマイト程ではなくともヒーローを名乗るに相応しい者達が光を掲げている。贗作のない本物の世界。そんな世界を作るのは、ボスの言う通り今を

変える行為に他ならない。

ヒーローに対する高い意識を持つが故にヒーローに絶望し、辿り着いた姿は真贋の審判者。

『君の思想は理解出来るとも。無意味な欲に溺れてヒーローという栄名を汚す者達は数えきれない。増えすぎた彼らに審判を与える者が必要だ。なんだかんだ言つて、世間はヒーローという存在に甘い。彼らに対して真に厳しい態度を向けられる者こそが、今の社会に必要なと思うよ』

「・・・何が目的だ」

『恒久的な安寧』

躊躇いなく告げられたその言葉には、ステインのヒーローに対する想い以上の感情が込められていた。

『ヒーローも敵も、究極的に考えれば邪魔でしかない。ヒーローは確かに若い者達にとって綺麗な光景に映るだろう。華麗に敵を薙ぎ倒し、手遅れ以外の死者は一人も出さず鮮やかに全てを助け出す。そんな姿を見せられ、聞かせられ続ければ、ヒーローを目指すものが多くなるのは当然のことだろう。まあ、私には微塵も理解できないんだがね。』

だが光輝ある者を汚そうとするのもまた人だ。輝き放つその存在を、自らの手で壊してみたい。単純な理由なんていらぬ、ただそうしたいから。理由信念理念理屈矜持願望渴望羨望一切切関係なし。こういった手合いが最も面倒なんだ。一度定めた目的に突き進むその行動に一切の手加減がない。被害なんて知ったことかと行動する。まだ泥棒なんかの方が優しいよ。知っているかい？個性出現前と現在に比べると、大きな犯行では無い、コンビニ強盗なんかの今となつては小規模事件として扱われるモノは、出現前の方が頻度が多かつたんだ。厄介事しか運び込まなかつた個性唯一の良点と言える。すまない、話を戻すよ。

要は、ヒーローに憧れてヒーローを目指す者もいるようにヒーローがいるから犯罪者になる者達がいる。ヒーローも敵も大差はない。私からすれば災厄の種に過ぎない。だってそうだろう？ヒーロー活

動をする度に周りに被害が出るんじゃないやあたまつたものじゃない。

まず社会が、ヒーロー達が考えるべきはどうやって敵の出現を防ぐ
かだ。^{ヴァイラン}

そこでヒーロー殺しステイン、君の話だ。

私は君になって欲しいんだよ。ヒーローが越えるべき最後の壁に力ある者がヒーローに就くのは大変結構なことだ。事実彼らのお陰で、ある程度は私の平穩は守られている。だが、足りない。圧倒的に統率者足り得る者達が少ない。いや、中には素質ある者もいるのだろうが、このヒーロー飽和社会の中ではその才能は贋作によって埋もれていく。それは、とても悲しいことだ。

そう、私もある意味では君と同じく、今を変えたいんだ。ヒーローという名前があらゆる抑止力になる世界。私が欲しいのはそれだよ』
狂氣的なまで熱望するその言葉に、ステインは味わったことの無い感情を覚えた。その正体は怯え。

「お前は・・・ヒーローを暴力装置に変えるつもりか・・・?!」

『それを選ぶのは私じゃあないよ。あくまでも選ぶのはヒーローと民衆。私はただ私の望む形の一例を言っただけに過ぎない。現在の情勢でも、各国が持つ核弾頭は確かに抑止力になってはいるだろう。

だが、そもそも傷付けようとする奴がいなくなればヒーローも必要なくなるよ、君だって思わないか。ステイン。いや、赤黒血染』

まるで、悪魔の囁きだ。^{彼女}彼の言葉には形容しがたい魔力がある。言葉が心に溶け込んでくる。激しい言葉を投げかけているはずなのに、その言葉はまるで怯えるステインの心を優しく包んでくる。

狂氣的だが、正しい答えを持つ彼の言葉はステインの思想に入り込んでくる。

「考える・・・時間をくれ」

『構わないとも。こんな重大な、ともすれば未来を変えるようなことを早急に答えさせるつもりは無い。ゆっくりと考えるといい。出る時は私の大切な部下のスキューロに着いて行ってくれ。ああそれと』

思い出したかのように、彼は優しく言葉を投げた。

『もし君が私の元に来てくれるなら、その時は君の大好きなオールマイトの秘密と、彼の後継者について教えてあげるよ』

最後に、誰もが驚く特大の発言を残した。

『よかったですか、彼を協力者に選んで』

いいわけないよ……。正直あんな狂人、相手にするのも嫌だよ。でもしようがないじゃないか。入学編、USJ編、林間合宿編、爆豪奪還編から見て、使えそうに単体で動いている、唯一まともに過去知ってて付け込めそうなネームドヴィランがアイツしかいねえんだよ!!

基本的に他の奴らは敵^{ヴィラン}連合で動いているし、荼毘はステインの思想を受け継いで、意味ありげな発言する位しか知らねえし、渡我被身子に關しては知る度に関わりたくなるんだよ!!

・・・侮つてたかもなジャンプワールド。やべえ奴はとことんやべえ。

「それだけ、今はあまり派手に親衛隊を動かしたくないんだよ」

今回のステインに関しては、正直危ない橋を渡ったという自覚はある。

というのも今回なぜステインを協力者にしようと思ったのか。それは私達を取り巻く状況にある。端的に言うとな、世界各地でパッショーネ探しが始まった。それをスキューロから告げられた時、は？と言ったよちやんと。ヒーロー達が最近パッショーネを、というか私

を探し始めたって。

いや、おかしいことなんて何も無い。振り返れば当然のことだ。世間にはボスは捕まったと公表したけど、現状は捕まっていない。だって私はここにいるから。だけど辿る宛もないはずだ。麻薬はしばらく市場には出回ってないし、関係者は全員処分した。

そこまで捜査が広がっているわけでもなく、探しているのも一部の、掃討に参加していたヒーローだけらしい。それなら別にいいんだ。適当に殺っちまえばいいんだから。戦う前に殺るのは十八番だしね。

だけど、相澤消太……。あのなんちゃって不死身の男が秘密裏に探っているという報告をスキューロから受けた時は、思わずソファから転げ……。落ちなかつたな。そもそも人をダメにするソファだから転げ落ちれないや……。

普通にスキューロ達に殺らせればいいんだが、何故か成功する予感が一切しない。こんな予感がしているのに、成功するのかどうかは不明であり、最悪相澤の大進撃で返り討ちにあう可能性もある。

何度も繰り返し繰り返し、飽きるほどに言うが幽波紋スタンドは取り返しがつかないのだ。真正銘命よりも重たい代物を、相澤などの勝てなような奴においてそれと使って手元から離す訳にはいかない。

ならば、答えはヒトオツ！

原作キャラをぶつけよう！

この世界で私が知っている原作キャラ達は大まかに二つ。ヒーローサイランか敵か。ヒーローなんて以ての外なわけで、頼るのは敵サイランになるのだが、残念ながら私の原作知識では、そのほとんどが連合に属している。例外はただ一人。参加を約束しておきながら物の見事に返り討ちにあつたステインだけ。

正直、悩んだ。ステインの立ち位置は確かに敵サイランなのだけれど、その思想はヒーロー万歳オールマイトヒャッハー！汚物ヒーローは消毒じゃあ！である。第一の世紀末患者である。

何度も悩み考え直した。使うべきか使わないべきか。ステインが私を殺りに来る可能性もあるのだ。他にも使えるのがあるんじゃないかな

いか？と。

でもステインの戦闘能力は悩みをぶち壊した。

圧倒的個性強者の轟と、友情パワー全開の飯田と、主人公を相手にして負けていないのだ。エンデヴァーという介入で潰れたが。個性が機能しなくても、技術は最高クラス。限りなく少ない相澤特攻である。

決断してからの準備行動は早かった。遅かれ早かれステインは連合に勧誘を受けてそれを承諾する。早めの方が良いことは確か。

連れてくればあとは簡単。彼の欲しい言葉をかけてあげればいい。ステインは死柄木の今を変えろという点に賛同した。同じように、そしてよりステインの思想に近くすれば後はチヨロイチヨロイ。

：：嘘です、内心ビビりまくってました。普通に怖いよアイツ。目とかギンギンに血走ってるし。鼻もなんか出っ張ってないし。もしかしたらホラー映画に出ても違和感なかったりしてな。

結果として、答えをここで聞くことはなかった。承諾するかは五分五分。もしこちらの申し出を断り、連合に加わるのならそれで構わない。その時は多分原作通り負けるだろうし、連合にパッションネのことがバレようが今更である。既にスポンサーにはバレてるし。

そうなれば、相澤を殺すのはスキューロか・・・スクアーロだな。シーラでも構わないけど、彼女は色々で大雑把だからなあ・・・。ていうかヒーローなんかいつまでも構っている時間なんてねえや。

私は私で、探さなければならぬからな。たとえあろうとなかろうと――

――『運命からの贈り物』は、なんとしてもこの手に収めるか、壊さなくてはならない。

『それとボス、オールマイトの秘密、後継者というのは？よろしければ我々にも教えて欲しいのですが』

「ん？ああ、構わない。オールマイトが元々は無個性で、別のヒーローから個性を受け継いだということと、今年の雄英の新入生に、次代のオールマイトの個性を受け継ぐ後継者がいること。そして個性を渡したオールマイトは日々弱体化が進んでいることかな？」

『・・・?!?どこでそんな情報を、なんてことは聞きません。流石はボスです』

「まさか・・・あのオールマイトが弱体化していたとはな・・・」

「ええ。そしてその個性が受け継がれるものであり、今代の後継者が雄英にいるとは。ですがこれで合点がきました。オールマイトは後継者を育てるために雄英高校で教師となった」

最後のボスとティッツアーンの会話を聞いていたスクアアロが、驚愕を露にしながら呟く。ティッツアーンは貰った情報をもとに、自らの中でパズルのピースをはめるように補填していく。

「ボスにかかればスリーサイズまで筒抜けになったりしてな」

「それはそれで恐ろしいですが、ボスならばとは思ってしまいますよ。常識で捉えることが決して出来ない人。わたしたちの誰一人、ボスを測ることが出来ないなんて、今に始まったことではない。何であれ、わたし達はボスの命令に従っていればいい」

魂燃える雄英体育祭の時間だア!!私はお出ないけど

『宣誓・我々生徒一同は——!!』

パツシヨーネの親衛隊は基本的に暇である。巨大組織としての体を保っていた頃は、毎日のように各地を奔走していたのが嘘のように。だが彼らが動かなくても良いということは、Ⅱボスの身の安全が最低限は保証されているということ。

かといって、彼らが無闇矢鱈に動き回っていいかと聞かれればNOである。そういった行動に関する制限はあまりないのだが、出来る限りは最低限に留めておいた方がいいのは自明の理。鮫と舌は二人でよく出かけているが。

「へえ、この主席の子がボスのお気に入りなのか。見た感じ普通に弱そうだけどな。まだNO. 2の息子の方が強そうだぜ」

「個性自体は強力ではないですが、サポート兵器により引き上げられた能力は恐ろしいものですよ。音の放出で人体を軽く弾けさせる。ヒーロー候補とはいえ、子供に持たせるものではないと思いますけどね」

「ボスが渡したアレ、確かスキューロの奴が作ったんだって?それも三日で。ボスも規格外だがスキューロも大概だぜ」

「スタン波紋を七枚も同時に入れられるだけで充分です。まあこのような事が出来るからこそ、ボスも彼に全幅の信頼を置けるんでしょうが」
むしろこの程度出来なくてどうすると、スキューロならば軽く言っ
てしまいうのだが。待機中の鮫と舌は戻ってきたシーラが顔を顰めるほど、友情の枠を確実に超えたイチヤツキを繰り広げていた!

わあーわあー!と煩い歓声が会場を包み込む。ドーム内に溢れか

えるほどの人の群れ。ギラギラと肌を焦がす太陽の熱だけではなく、異常な人口密度が更に暑さを増幅させて苦しめてくる。灼熱地獄と見紛う程の熱気は、少しは改善されたとはいえ半年程前まで引きこもりだった私にはキツイ。ドームの構造的に、影のある場所がない。あつたとしても時間の経過と共に影は移動して日向になる。

私フエリシータは、今現在雄英高校が行う日本でのオリンピックと言われる雄英体育祭会場に来ております。去年とは違い幽波紋スタンドではなく本体で。なんか前にもこんなくだりなかったか？

違うんだ・・・最初は耳郎ちゃんに誘われていたんだ・・・。電話でめちやくちや艶のある声で言ってくるんだよ？いや国营テレビで放送するんだし、入場にはチケットがいるからと言ってやんわり断ろうとしたのだが：スキューロが「チケットならある」と言って「え、あるの？」と反射的に返したのを聞かれていたらしく、強く誘われて断りきれなかった。

全部私が悪いですね。

いや、バカ正直にギャングのボスがヒーローの跋扈する場所に行けるわけないじゃん何言ってるのワロスなんて言ってみろ。頭おかしい奴だと思われるでしょうが。

結局流されるままに時間が経って、この窮屈な場所に押し込められています。特等席というわけではないけど結構いい感じの席というところで、少し位は気分を変えようと思ったが・・・ヒーロー多すぎ・・・。スカウトのためとかでなるべく近い席で見たいんだろうけど・・・お前ら仕事はどうした？

久しぶりにスキューロに負の感情を抱いたぞ。こんなことなら普通席で良かった・・・。周りとかめちやくちや熱心なヒーローファンばかりなのに一人だけギャングのボス（笑）。場違いにも程がある。こうなったらさっさと終わってくれることを祈るしかない。

そういえばどうしてスキューロはチケットなんか持っていたのだろうか。ヒーローを見るのが趣味？ははは、だったら笑えねえや・・・。

オリンピックの代わりとも言われるほど、栄えある雄英体育祭での選手宣誓を行った耳郎は未だ競技が始まっていないうのに疲れが見えていた。

後ろ姿から滲み出る程の哀愁はクラスメイトに感じさせないようにしても無駄である。何故なら彼らは既に耳郎の事を心から可哀想だと思っているからだ。

始まりはヒーロー科B組からだった。物間という、非常に人の神経を逆撫でするのが得意な少年が、A組全員に喧嘩を吹っ掛けた。A組は何かと目立つ対象であるのが通例だが、今年は敵の襲撃サイランを乗り切ったということがあり、例年以上に絡んできた。主に物間が。

そのB組の流れに乗って、普通科の生徒達も続々参戦。普通科の中にはヒーロー科を受験したが、落ちたことによつて滑り止めとして普通科に入った生徒もいる。未だ若い彼らからすれば、ヒーロー科は妬みの対象に他ならない。高校生といえども数ヶ月前までは中学生だった身。そういった感情を抱くことは普通である。

こうしてB組物間が火を付けて普通科の生徒が少しずつ油を注いでいく中、A組は最悪の状況の訪れを感じた。

火中への二ト口爆豪の投下である。

人一倍どころか数十数百倍。プライドが高く、己を一番、周りは石ころだと豪語する彼。そんな彼は常日頃から耳郎に次ぐ二番として扱われている。そのことを日々限界ストレスで我慢している彼が、単純な位置付けでは格下の彼らに好き放題言われる状況を我慢できるは

ずがない。怒りはすぐに爆発した。そしてそれを狙ったかのようにバカが今度は核を落とそうとした所で、同じクラスの拳藤一佳が強制的に止めに入った。

だがそんなことで爆豪が止まるはずがない。噴火するストレスを抑えようと切島が必死に宥めていたが当然のごとく不可能である。

なんとか理性が残っていたのか、それとも本能が一線を越えるのを止めたのか。個性の不正使用などの問題を起こすことはなく、騒ぎすぎだと咎められるだけに終わったが、爆豪の気が収まるはずがない。

文句すら言わせないほど完膚無きまでに雄英体育祭で一位を取ろうと躍起になる。具体的には目を血走らせながら耳郎と轟を交互に睨んで。

非常に心労が溜まる。耳郎は轟のような性格はしていないため、爆豪の熱意を諸に受けていた。選手宣誓の時でさえも、背中にそこはオレの場所だ、と言う殺意混じりのありがたい視線を受け取っていた。「選手宣誓ってこんなに疲れるものだけ……？」

第一種目のスタート地点に立つ一年生達。みなこれからの競技のためにやる気満々といった様子だが、彼らとは反対に耳郎響香は疲れきっていた。こんな時に爆豪のような精神的強さや轟のように物事をいなす心が欲しい。耳郎の疲れは尤もである。何せ全国放送されているのだ。そう思うだけで胃がキリキリしてくる。

「まあ爆豪の視線が凄かったからな」
「背中から今にも飛び掛りそうな位血走った目してたぜ」

入試首席のみが許される雄英体育祭での選手宣誓。それは爆豪にとってでは後一步だった場所であり、半年ほど前ならば自分が行っていない。だが残念ながら爆豪は首席ではない。一つ後ろの次席である。これがもう少し離れていれば少しはマシだったかもしれないが、たった一つ違いだと我慢できるものは無い。

射殺さんばかりの眼光は、耳郎も背中から感じとっていたし、それが爆豪のものだと理解するまでに時間はかからなかった。というか時折グルル、といった飢えた獣の声が聞こえていたような気もした。

「まあでもよ、耳郎が選手宣誓で良かったと思うぜ。だって、なあ?」
「まあ確かにな。爆豪がしていればどうなっていたことか」

同意を求める上鳴に、障子もしんみりと頷く。まず間違はなく余計なことを一言は言う。そして煽りに煽る。最悪カメラの前で中指を立てかねない。ヒーロー候補が衆人環視どころか全世界の人達が見ている中で中指を立てるなど、放送事故レベルである。きっと翌日にはニュースにでもなるだろう。

『第一種目は障害物競走!!』

ルール説明は勿論ながら事前に何度もされている。個性の使用を許可されている雄英体育祭。基本的には使用不可の個性を使うということで、安全性の為にルール確認と共に。

第一種目の障害物競走は個性の使用はありだが、危険のある他選手の妨害は禁止。無論、怪我などさせたら即失格である。

誰もがスタートラインギリギリに立って構える。ここにいる者達は推薦入学を除き、入試の実技試験を受けている。よいドンで始まらないことを知っている。そして推薦入学者達も、入学したてのクラスメイトが実技でどれだけすごい活躍をしたかなどを話し合っているのを、何度も耳に入れている。

目先の問題は少し先にあるゲート。約160人がいつせいに入るには、かなり小さいものだ。単純に、前に立つものほど有利になる。

『スタート!!』

18禁ヒーローミッドナイト(高校教師に18禁ヒーローの採用はいかがなものかと思うが)の装備でもある鞭が振り下ろされるのを合図に、生徒達が一斉に走り出す。すぐにゲートは一杯になり、誰もが早く早くと抜け出そうとするが、ゲートを出た生徒たちがいつせいに転び出す。

「悪いな」

彼らの行動を留めたのは氷によって氷結した道であり、その氷が誰から出たのかなどは言うまでもない。氷の道を作り出した轟が、滑る

ように走っていく。考えられる限りでは最高の滑り出しだろう。もつとも彼らがいなければの話ではあるが。

「待ちやがれえええええ!!」

「その程度は想定内だから……!……スケートやったことあって良かった」

A組の面々が他の誰よりも先に轟の背中を追い始めた。爆豪は開始と同時に連続で爆破を繰り返して飛翔してゲートを上から潜り抜け、切島は高い身体能力をふんだんに使って飛び越え、耳郎は優雅に滑りながら。

「だろっな」

轟は決して彼らを低く見ていない。寧ろ高く評価している。故に、轟にとつても彼らの動きは想定内。寧ろB組の生徒の動き出しが予想よりも遙かにいい。もしかしたら本当に警戒するのは彼らなのかもしれないと思案する轟を影が覆った。

「……ッ、おせえ」

影は轟の足より創造された氷によって分断される。宙を舞う影は、鉄板の破片や中身であるネジやケーブルを吐き出しながら地面に落ちる。その影の正体はロボット。それも実技試験において最も難解だった壁であり、緑谷が殴り飛ばし、耳郎が出てくる前に破壊したOP ワイラン 敵。

実技試験で一万もの人間を振るい落とさんと猛威を奮ったソレは、まるで紙屑のように引き裂かれて機能を停止した。

これこそ一つ目の障害。OPのロボット ワイラン 敵の群れ。通称ロボ・インフェルノ。

先頭を独走する轟を妨害しようとロボットが動くが、轟の繰り出す氷塊による圧倒的な質量がそれらを押し潰す。OP ワイラン 敵は凶体が大きいだけの木偶の坊である。今の彼らであれば倒すことも避けることも容易な相手だ。更には中身は思ったほど頑丈ではない。それなりの攻撃を与えれば壊すことは容易い。

実は試験でも使われていたこのロボットは、少し工夫をすれば受験生達の半数は倒すことが可能であったのだが、その時はあまりの大き

さに腰を抜かしてしまったり、倒さなくていい敵だった、という心理が彼らの交戦意欲を挫いた。

だが実際に倒すべき敵としてみれば、面白いほどに弱い。単調な行動に軽い装甲。言わばヌルゲーである。

故に、彼らがこの程度で足を止めることは無い。

ロボットに対して致命的な電気で攻撃する上鳴は言わずもがな。三次元的移動で立ち塞がる全てを爆破する爆豪。強力な影の個性とのコンビネーションで確実に躲していく常闇。戦うつもりが更々ない耳郎は、イヤホンジャックをロボットに刺して跳び、まるでターザンのような動きをしている。

他のA組の面々も、思い思いの方法で乗り越えていく。試練として見るならば、彼らにとつてはもうこの程度では壁にはならない。

(問題はB組。ちよつと舐めすぎてたかも。多分轟もそう思ってる)

ロボ・インフェルノを一度も攻撃することなく軽やかに乗り越えた耳郎は、走りながら少し前を走る生徒に目を向ける。頭から茨が生えた、茨の個性を持つ塩崎茨というB組の生徒。他にも何人かが耳郎の前にいたり、追従してきている。

これは耳郎にとつては予想外だった。A組という花形に目を奪われていたが故の失態。考えが足りなさ過ぎた。

A組という狭い箱庭は、全員が全員ではないが優秀過ぎたのだ。No.2の息子に、業界最多数のサイドキックを持つヒーローを兄に持つヒーロー一族の弟。暴力的だが圧倒的才能マン。アホだけど強個性。そしてオールマイトに匹敵するパワー。

例を挙げれば、単純故に強力。強大な力に対して圧倒的な力で押し潰すことの出来る、正しく生まれながらの強者は、必然的に彼女達その他へ対する脅威レベルを引き上げていた。

「自業自得だけどさ……」

心のどこかで低く見ていたのは確かだ。少し大人びていようがやはり子供なのだ、耳郎も。

レベル高えなおい。

観客席から見てて普通にそう思うわ。特にヒーロー科A組とB組。A組知ってたけど、B組は思ったよりレベル高いぞ。確かにA組に負けず劣らずの優秀な面子が何人かいるのは知ってたけど、ここまだったか？緑谷轟爆豪から下、何人か続いてB組だし。もつと圧倒的だと思ってたんだけどな、A組。

ていうか学校側も学校側だろ。なんだよ、最後の地雷って。怪我しない程度の火薬とか、最後の緑谷の起こした奇跡的な追い抜き、普通なら明らかに四肢欠損じゃすまないぞ。だけど観客達も大盛り上がり。私はドン引きだけだな。

あんな考え、思いつく方がどうかしてる。最悪死ぬかもしれないというのに、躊躇わずにやってたぞ。

耳郎ちゃんは35位。いやあ、良かった良かった。途中の追い抜きでちよつとおっ？ってなったけど、無事に突破してくれてよかったよ。彼女が落ちたら私は即帰らなきゃだったからさ。いや、今からでも帰りたいんだけども。あれ、私は何を言ってるんだ？

第二種目までのインターバル。売りにポップコーンを頼む。私の席には20を超えるポップコーンの空ゴミが。なんだかんだ言っで楽しんでいるのかもしれない。傍から見ればずっと無表情でポップコーンを口に放り込んでただけなんだけど。

「隣、失礼させてもらう」

「あ、どうぞ」

隣に座ったのはスキューロと同じ位かそれ以上の身長を持つ大男。重々しい声には聞くだけで、こいつなんか強そうって思える声してる。

暑つついな。まだ五月だろ。照り輝く太陽も鬱陶しいが人の多さか？一気に気温が上がった気がする。

暑いなら一枚脱ごうか、と思うがきつと目立つ。脱いだら間違いなく目立ってしまう。ああ、意識したらまた暑くなってきた。なんという悪循環だ。第三種目まで持つか・・・私の身体・・・。

第一種目の熱が冷めない観客席。その熱は雄英高校の体育祭の難易度、そしてそれを踏破してみせた生徒達が生み出したものだ。

人間は圧倒的な強者の蹂躪を好み、泥臭い弱者の逆転を好む。轟焦凍と爆豪勝己による、強者同士の圧倒的な争い。勝ち組と称される個性を持ち、才気溢れる彼等によるトップ争いはそれは見物だったことだろう。

初めから首位を独走する轟をお世辞にも口が良いとは言えない爆豪が、それでも常にその後ろを追従し、果てには超えんと加速した。多大な番狂わせを起こしたのが緑谷出久だ。個性を一度も使わず、一つ目の障害のロボットの鉄板を使ってロボットの波を抜け、二つ目の障害である綱渡りは鉄板を背中に背負いながら、綱に巻き付いて少しずつ前進していく。

ここまでの成績なら、間違いなく下位だったはずだ。最後の最後まで個性を使用する素振りを全く見せなかった。

だが緑谷出久は逆転した。轟と爆豪を差し置いて一位を掴み取った。最後の障害である地雷の草原。緑谷は誰かが掘り出した地雷を自分で掘った穴に詰め、その上から思い切り自分を乗せた鉄板を叩きつけたのだ。

起こったのは大爆発。それもトップを争っていた二人の気を引くほどのもの。いくら学校側が用意した、怪我をしない地雷とはいえ、それは使用方を正しく守った場合の話だ。つまり、一度に大量に踏むことは全く想定されていないのである。

地雷の脅威は、広く知れ渡っている。時折発見される不発弾。これの処理のために1km四方を封鎖するなど当たり前。映画などでも、地雷を踏んだ男が奇跡の生還などといった作品があるが、そういった作品では例外なく、地雷で誰かが死んでいる。

銃火器ほどでなくとも爆弾、それも手榴弾などのように咄嗟には逃げられない兵器なのだ。いくら安全とはいえ、そんなものを集めて軽々しく爆破させるなど、狂気の沙汰としか思えない。

この体育祭はヒーロー科にとっては、ヒーロー事務所のインターンに誘われるかどうかの最初の登竜門だと聞く。スキューロにはよく分からないが、それほど将来に影響するものなのだろう。

だとしても、
「狂っている。ボスが生まれながらのカリスマなら、アレは生まれながらの狂気だ」

理性では大丈夫だと分かっている、生存本能による一線というものが存在する。決して進んでは行けないラインというものがあるのだ。地雷と聞いて咄嗟に足が止まるように、銃口を向けられれば思考が停止するように、必ず生物として当然備わっている機能が体を引き止める。

だが緑谷出久には、まるでそれが感じられない。躊躇いなく行われた凶行には、流石のスキューロも目を見開いた。

「そうか・・・お前は・・・」

緑谷出久。身長166cm血液型O型右利き右投げ日本国静岡県折寺中学出身現在雄英高校一年A組所属父親は単身赴任中で母親と二人暮らし通学には電車を利用去年までは無個性だったがある時期に市役所に個性届が出された個性の内容は身体増強系で一度の使用で肉体が自壊する程の増強約一年前のヘッドロヴィラン事件というオールマイトが解決した事件に幼馴染である爆豪勝己を助けようという行動。

特筆すべきは、周りの子ども達よりも一層強いヒーロー願望を持っていたということ。

目立った経歴はそれだけだ。人が死ぬような大きな事件に巻き込

まれた訳でも、親に見捨てられるような暗い過去があるという訳でもない、ごく普通の少年。

ボスやスキューロとは似ても似つかない普通の子ども。寧ろスキューロから見れば、普通に人生を生きていくのであればこれ以上ないほど恵まれているだろう。

湧き上がるのは今まで味わったことの無い感情。誰とも共有されることなく、味わうことなく心の底に沈んでいた感情。その名は――

「今度は私の方が早かったな。いや、お前は流石に遅すぎる」

スキューロの思考を現実に戻したのは観客席の角に座っている蝙蝠傘の男、ヴラディミール・コカキだった。隣にはロシア帽のようなものを被っている大柄な男がいる。

「お前から席の変更を申し出しておきながら、ここまで遅れるとはな。見ろ、既に二種目目に入ろうとしている」

「相変わらず、あの人がいなければ取り繕わないんだな」

「当然だ。私はあの人には敬意を持っている。恐れを持っている。なぜならあの方は我々とは違い、生まれながらの帝王だからだ。そしてこんな老人に似つかわしくない大役を与えてくださった。お前とは付き従った年季が違う」

コカキはパツシヨーネの前代、つまりはボスの父親が支配していた代からの強者であり、前代においてボスと父親に近しかった者達の中で唯一の生き残りである。そんな彼に与えられていた役は幼きボスの世話係と護衛役。パツシヨーネという組織の人間で、最も長くボスを見てきたのはコカキで間違いないだろう。

自分という存在をひた隠しにするボスが、自分をよく知るコカキを生かしている時点で、その信頼度は計り知れない。与えられた役目はスキューロとは違い裏方だが、長年に渡る裏社会への影響力はスキューロと同等以上。

「しかし唐突な席変更。……ふむ、どうやらあの人が見に来ているらしいな。後継者か、もしくはご友人でも見に来たのだろうか」

「何故それを・・・」

「後継者については両者を見ていれば分かる。最も注目がいく人物なのだぞ？あらゆる動向に注意を向けていれば自ずと答えは見えてくる。ご友人は・・・勘だな」

ステインの勧誘にボスが発した最大の衝撃であったオールマイトの弱体化とその後継者。弱体化はともかくとして後継者など誰が予想出来ようか。

「なあ、ボスがいるというなら、挨拶にでも行った方がいいのか？」

それまで黙り込んでいたロシア帽の男がここに来てようやく声を上げる。その声には不思議と退廃的な匂いが含まれていた。

「いや、まだやめておけ。お前はまだ信頼を勝ち取っていない。今のお前をあの人に会わせれば、私はお前を処刑して贖罪のために私も自死しなければならない。お前はようやく見つけた次なのだ。無駄にはしたくない」

「了解した」

男——マツシモ・ヴォルペはパツシヨーネの財産の半数以上を占める麻薬チームのトップでもある。彼らの関係を見れば実質的にはコカキが彼らの指揮を執っているが、コカキはあくまで麻薬チームの相談役というスタンスであった。なぜならパツシヨーネが売り捌く麻薬は、現時点ではヴォルペしか作れないのだから。

「さて、前座は終わりだ。さあ聞かせて貰おう。ボスからの伝言を」

コカキの目が鋭くなるのと同じく、スキューロは懐から一枚のD I S Cを取り出した。

お前達、メリークリスマスだ！ん、なんだスキューロ？え、まだ5月？何を言ってるんだ、カレンダーをよく見・・・

「肅清・・・はア・・・贗作は要らない・・・」

今日も今日とてと言えるほど、己の定義に反したヒーローを廃する。肅清を終えた自分の姿を見た瞬間、倒れる同僚を助けようともせず、一目散に背を向けて逃げていくヒーローを切り刻む。

両の手に持つ刀は前に使っていた時よりも明らかに洗練されているものである以前に、全く違う武器だった。

どういう原理を使っているのかは分からないが、コンクリートでも刃を合わせれば斬り貫くことが可能な刃は誰の目から見ても明らかに異常であった。更には刃は滑らかに作られておらず、注視すれば血が吹き出やすくなるように細工をされている事がわかる。恐らくは、ステインの個性を考えてのことなのだろう。

要らぬ世話と言いたくなるが、思った以上に便利過ぎてぐうの音も出ない。武器と戦闘スタイルの相性が抜群に噛み合っている。

他にも身体の各所に隠されている仕込み武器なども、どれもパツシヨーネから与えられた新品である。

これだけのものを施されておきながら、ステインは未だにパツシヨーネに返事を出せていない。彼の葛藤は終わらずに続いたままなのだ。

自らの理想の一つ先に行く思想を教えられ、その現実味に気圧されてしまったが故にキツパリとは断れない。それはとても無謀なこと。ステインが負けてしまえば全く以って意味の無いことなのに、何故だろうか。その思想を叶えてみたいと思ってしまう。

憧れたヒーロー。美麗なる正義。それらの前に血だけが流れる川を作る。ソレがどれだけおぞましい事なのか。頭ではしっかりと理解出来ている。この思想は狂っていると。だというのに、ステインの心は収まらないのだ。まるで世界最高の美味を知ったかのように。

狂ったように心は未来を見たくて仕方がない。

まるで盲目。今のステインはそれになりかかっている。かつてヒーロー殺しになる以外にも、道はたくさん広がっていた。それは活動している今もそうだ。だが今は、道が見えない。必死に見つけたとしてもいつの間に行き先が変わっている。意味の無い分かれ道を歩いている気分になる。

迷いは晴れず。心は陰り続ける。今のステインの刃は、どうしようもなく曇っていた。

「ダメだわ、あれじゃ。全然ダメダメ。やっぱあんなの要らないや」
「どうしてですか？彼はかなりの使い手だと思いますが。倒す動きの滑らかさ、そこから予想される実力はそこらの敵にも劣らないとは思うんですが」

そんなステインの様子を、ビルの上から見下ろしていた死柄木は後ろにいる黒霧に話しかけるように、そして独り言でも呟くように言い放った。死柄木の言葉が自らにかけられたものだと判断した黒霧は、顎の部分を触りながら死柄木に問いかける。

「別に力とかどうでもいいんだよ。そんなのやる事やってれば勝手についてくるしな。俺がアイツを欲しがったのはその思想が面白かったから。カスのヒーローを認められないからヒーローを殺すって、矛盾してんじゃん、マジで笑えてくる」

バカみてえと笑いながら、首をガリガリとかく。死柄木が彼を見つけたのはたまたまだった。無造作に付けられていたテレビの特集であった敵特集という番組で、最近話題の敵達が報道されていた。そこで見つけたのが彼だった。明らかな思想犯。しかもその思想は

ヒーロー寄りと来た。サイン 敵 連合と銘打ってはいるが所詮そんなのは肩書きだけで、要は今を気に食わない人間こそを集めている。正しくステインこそが相応しいじゃあないか。気に入ったから勧誘をかけようと様子を見ていたが、なんだこのザマは。

「帰るぞ黒霧」

「いいのですか？せめて誘いだけでもかけてみては？」

「俺が要らないって言ったなら要らないんだよ」

生半可は要らない。今を許容できない者達こそが、最も必要なのだ。組織として強い結束はいらない。向かうべき方向性が束ねられなければいい。貧弱な思想で途中離脱など、一番つまらない。

「あ、でもその知名度だけは貰っていくかあ」

良くも悪くも有名になったのなら、広告塔の代理程度には使えるだろう。所属してない？知るかよそんなの。もし本人が直接否定するなら脳無でも使って始末すればいい。どうせ大衆はより悪意ある方に話を勝手に進めるんだから。

第二種目、騎馬戦。

第一種目の上位42名で行われるこの種目に競技前から決まっていることなど何も無い。即席でルールを説明されて即席で騎馬を組む。

騎馬戦に使われるハチマキには第一種目での順位に依じてのポイントが与えられる。そのポイントを取り合って15分間、騎馬が崩れようが争い合う。大きなポイントを持つ騎馬は守勢に転じていけばいいが、残念ながら一年生には我の強いのが何人かいる。

上昇志向が強い二人組に、A組潰すぜの物間。

この三人は確実にぶつかり合うだろう。緑谷出久を中心として。

一位であった緑谷の獲得したポイントは1000万ポイント。破格も破格だからこそ、それさえ持つていけばハチマキの数が一つであっても確実に決勝に進むことが出来る。

だが緑谷である。爆豪に酷く敵対視されている緑谷である。今でさえ爆豪は緑谷を殺すのではと思わせる眼光をしている。そんな爆豪から狙われ続けるのは誰だつてごめんこうむりたい。

必然的に周りから外れるが、それを可哀想だと思ふことはなく手を貸してやろうとも思わない。勝利故の代償というやつなので、甘んじて受け入れて欲しい。そして爆豪と轟と物間を引き寄せ続けていて欲しい。どれだけ持つかは分からないけど。

自分はどうしても勝ちたいから。

「ねえ」

死んでるような目をしている男子生徒に話しかける。彼は上位42名の中で唯一の普通科。死んでいるように見えて、かなりの熱意が感じられる。勝利するためなら手段を選ばない、そんな感じがする。分かる、彼は強い。

「アンタが心操でしょ。ウチと組まない？」

「俺、もう騎馬あるんだけど」

「洗脳したんでしょ、つて、そんな目で見ないですよ。だから話しかけたんだし」

「は？」

勝利とは絶対である。周りに逆らうことを許さない。汚く卑怯だろうが勝利だけは肯定される。手段が否定されても結果だけは肯定されるのだ。彼は勝ち、他は負けたと。納得出来ずに噛み付いてくるのなら問えばいい。何故手段を尽くさないと。持てる手札を最大限に有効利用するのは、全力で挑む上で大切なことだ。まさか、余裕を残して勝てると思っていた、などとは言わせない。

やったもん勝ち、言ったもん勝ち、勝ったもん勝ち。

「卑怯だとか、拒絶しないんだな」

「なんで？だつてそれは、正しいじゃん」

正々堂々じゃないやいけないうんて言わせない。勝ちを狙つて何

が悪い。だってこれは自分の未来に影響を与えるかもしれないのだ。見栄えを気にして負けるなど、たまったものじゃない。

「よし、行くっか」

右下から聞こえてくる少女の声。その目は正面と左下にいるのと違って生気がある。当然だ。なぜなら彼女は、俺の個性である『洗脳』を使っていないのだから。彼女は見抜いていた。俺の個性のことを。明らかにヒーロー向きではない、忌まわしい力を。

何らかの個性かと思ったけど、発動条件は見抜かれてない。完全な予測で当てたのだろう。それに耳から個性が見えてるし。

彼女のことは知っている。雄英高校の実技試験で、OP 仮想敵を出てくる前に粉碎するというとんでもない事をやってのけたという、規格外の中の規格外。それだけなら殴り飛ばした緑谷ももつと有名になるのだが、彼女には普通科では悪評が立っていた。

「サポートアイテムがなかったら没個性」

同じ会場だった奴が見ていたらしい。会場にマイク型のアイテムを持ち込んで使用していたのを。影でイカサマだと騒ぎ出した。卑怯だと罵った。アイテムがなければ没個性なのに、と。

心操も聞きながらそう思った。アイテムのおかげで勝てた、試験方式が個性に合っていただけ。自分だって対人だったなら。無駄だと分かっているも、何度悔やんだことか。だが今はもう、終わったことにやり直しを求めるつもりなんてない。今は前に進む、ヒーロー科に転科するために、なんとしても勝ちに行こう。

『スタート!!』

第一種目と同じく、ミッドナイトの鞭が振り下ろされて開始の合図が響く。開始と同時に各々の騎馬が標的目指して動き出す。騎馬戦のルールは普通の騎馬戦と何の変わりもない。シンプルなルール故に素の実力などが良く発揮される。雄英の狙いはそれだ。この体育祭は後のプロヒーロー達からのインターンに繋がる。下手にルールをややこしくして、戦闘向けのヒーローからサポート向けの生徒に勧誘が来るなどの齟齬を無くしたい。

それに何より、ふるい落とすはもう終わったのだ。

様子を見る為に守勢になる騎馬、大量ポイント目当てに攻勢に出る騎馬の中で、やはりというかこの男が一際飛び出ていた。

「どけええええええええええ!!」

既に沸点など超えてブチ切れている爆豪が、緑谷を確実にその手で倒さんと自分の騎馬から連続爆破で飛び上がる。騎手が地面に着かなければ騎馬から離れようが失格ではない。爆豪のように空中飛行が出来るものはかなりのアドバンテージが得られる。

「うわっ、爆豪かなり荒れてるなー」

誰彼構わずか一点集中のどちらかだと想定していた。3位という爆豪にとつての屈辱の烙印は既に押され、全国に報道されている。己こそが最強だと憚らない。故に起こるのは完全な自暴自棄。確実に、圧倒的に、完膚なきまでの完全無欠の勝利を求める修羅となった。会場は大盛り上がりだが、選手達は修羅の形相にドン引きである。

「混戦に近づくのは不味いな。衝撃で洗脳が解ける」

「おっけー。なら狙うのははぐれと・・・」

「ああ、ヒーロー科の外れだ」

誰も彼もが優秀なわけではなく、金の卵ということはない。あまりこういうことを言うのは良いことではないが、峰田や青山等は、はっきり言ってしまうに弱い。今はまだ、という言葉が付くが、その今が大切なのだ。確かに時間が経てば強くなる。だが今強い人だっているのだ。

人は平等じゃない。力も、潜在能力も何もかも。

「耳郎か」

「そっちは・・・考えてきたね」

はじめに相對したのは障子。だが障子の頭に鉢巻はなく、コウモリの翼のような膜の付いた腕で背中をテントのように覆って、変な感じになっている。そこから顔を覗かせる二つの影。四つの瞳。

障子の背中に隠れられる者など決まっている。開始前から姿が見えなくて簡単に予想も付いた。クラス内でも特に小柄な峰田と蛙吹。彼らを狙ったのは一番やりやすいというものもあるが、思っていたより峰田のポイントが高かったのだ。あとで見たが、八百万の背中に個性でひつついていたからだ。その時は・・・とても見せられる顔ではなかった。人が三大欲求に忠実に従うとあなるのかと、全国の人恐怖しただろう。

「悪いが、容赦はしない！」

二人を背中に乗せているので速度は落ちるが、それでも騎馬の自由度と速度は群を抜いている。一人だけ連携すら無く気ままに動き回れるのだ。背中から排出される紫色のボールのような個性の玉と、カエルのような長い舌。峰田と蛙吹の個性。

舌はともかく、玉に触れるのは非常に不味い。あの玉は粘着性が非常に強く、一度くっつけば時間経過以外で離れることがまずない。もしかしたら峰田だけは何らかの方法での取り方を知っているのかも知れないが。

「はっ、軽そうだなその背中」

心操が鼻で笑う。掌で持ち上げている足がまだか、と動くが、残念ながらまだまだである。仕込みはずっとしているが、効果が出るにはまだ早すぎる。ならば、と心操は手法を変える、というよりは戻す。本来のあるべき彼の戦い方に。

「よく頑張るよな。そんな役立たずを抱えてさ」

「何だ・・・」

「ちよろ」

心操人使。個性『洗脳』。会話した相手を自分の洗脳下に置くことができる、強力で凶悪な個性。対人戦では問答無用とはいかずとも、並以上の相手でも負けることはまず無いであろうこの個性。

会話という簡単な発動条件を満たす一番の方法は、怒りである。相手の心を読んだ的確な一言をぶつけるだけで、相手は簡単に口を割る。

だが強力ゆえに、乱用するつもりは無い。発動条件は会話というとても簡単なものだが、それさえ分かっただけでしまえば後は黙りこくっていれば簡単に封殺できる。

「おい障子い！どうしちまったんだよ障子！」

「峰田ちゃんダメー！」

「はいゲット」

突然停止した障子を心配して、蛙吹の制止も空しく愚かにも峰田は障子の背中より顔を出してしまう。その一瞬で、心操は峰田の額の鉢巻を奪い取る。

「思ったより簡単じゃん。これならヒーロー科全員いけそうかな？」

「調子乗るのもそこまで。ほら見てみなよ。あんな奴らとまともにやろうと思える？言っちゃ悪いけどさ、レベルが違うよ」

爆豪と物間が激しい攻防を繰り広げ、数多のB組の騎馬の魔の手から轟が逃れ出んと力を振るう。爆発が頻発し、氷が乱立する。今の騎馬のメンバーであの中を潜り抜けて鉢巻をとるのは不可能に近い。

「ならマトモにやらなきゃいいだろ」

「気をつけて。今から来るよ」

「・・・っ」

心操の顔が強ばると同時に、会場中の全ての騎馬の動きが鈍る。激戦を繰り広げていた爆豪や物間は突然の肉体の不調に顔色を青くし、他の騎手も同様に頭を押さえる。騎馬も騎手も、全ての動きがほとんど停止する。騎馬となっっているものは崩れぬように体を踏ん張らせながら、しかし効果は薄い。肉体の不調の高まりは、気合だけで消えることは無い。

「・・・思ったより、いけんじゃん」

痛む頭を押さえながら心操は騎馬を操って停止する騎馬に近寄らせる。全ての騎馬が愚鈍に落ちた今がチャンスなのは間違いない。幸いなことに心操が操っている間は、騎馬は痛みを超えて活動ができ

る。悪いとは思うが、勝たせてやるから許して欲しい。

「まずはお前からだ……！」

「ちっ、耳郎の騎馬か……！」

まず狙いをつけたのは轟。八百万や飯田といった、機動力や万能性に富んだメンバーを揃えるこの騎馬は、正しく最強と言える。だが八百万は集中力が切れたことよって個性を使えなくなり、飯田の『エンジン』はこの状況で無理に使えば自滅しかねない。

「いいよなあ、No. 2の息子つて。生まれながらのエリート様じゃん。羨ましいよ本当に」

（確かコイツの個性は……他者を操る個性。発動条件は恐らく対象との会話）

（やっぱりコイツにはバレてるか。だけどここで落とせば関係ない）

戦場を俯瞰していた轟は障子が操られていたのを見ていた。何らかの動作をした訳でもないのに、まるで人形のように突然大人しくなる障子を見て、心操が強敵だと理解した。そして彼を強敵たらしめる個性の発動条件は、何らかの行為だと推察した。もし無条件発動が可能なら、とつくに自分達は洗脳されている。

騎馬の上で繰り出される攻防は互角だった。轟の強力な個性故にルールに抵触しかねない威力という欠点があるが、轟の個性使用を最低限に控えさせている。それにこの距離と騎馬上という条件下では、轟の氷は意味を成さない。両者の力量は互角。弱っていなければどちらに天秤が傾くか分からないほどに。

（埒が明かない。ていうかヤバくないか？）

徐々にギアが上がっていくかのようになり、轟の調子が戻り始めている。少しずつ少しずつ、心操の手が防御にのめり込み、やがては防戦一方に。彼らにあった見えない力の差は時が経ち拡大してしまえば、こうして目に見えるものとなった。

（あー、そうだ言われてたこと忘れてた）

彼らを襲う不調は、長く続けることが出来ない。それに人によっては想定よりも早く回復されることがある、と。何でだ、と問い詰めれば簡単に理由を言われて、大人しく引き下がってしまう。それだけ

不調を招いたものは、もつと深いということだ。

(しゃーないか。一旦退ご。それに拘り過ぎれば負けが近くなるし、割のいい獲物は沢山いる)

「足止めよろしく」

二組の騎馬の間に割って入るように乱入してきたのは峰田の騎馬とB組の騎馬。彼らの目に正気と呼べるようなものはなく、意のままに操られる人形ということを証明している。といっても、彼らは本当に適当な足止めである。衝撃を与えれば個性が解けるという仕様上、戦闘させるには全く向いていない。

「ウチの役目は終わりかな?」

「ああ。後は任せろ」

完璧な連携は完璧な指揮者の下で。洗脳という形で完璧な連携を取るができる心操は、他の意思が介在しない方がよっぽど強い。耳郎の役割は弱らせることと、弱らせたことよって多量の時間を消費させること。心操は定まった時間内で洗脳をかけて奪うだけいい。

故に、耳郎はもう邪魔なのだ。後は心操に任せた方が勝率は圧倒的に良い。

勝利を狙うと決めたのだ。手段や勝ち方など二の次で良い。

洗脳の影響下に入ったことにより意識が眠りにつく。次目を覚ましたときは騎馬戦が終わり、第三種目への出場が決定した時だろう。

「ちっ、焦凍め。左を使えばそんな奴らに手こずらんと言うのに。反抗しているつもりか」

ズギユウウウ口たずげでええええ!!このおっさん独り言多い

と思って良く聞いたらエンデヴァーだったよおおお。そりやあ熱くなるわけだわ。だってこいつこんなバカ熱いの周りの迷惑を考えないでずつと炎出してんだもん。No.2の隣の席に座るギャングのボスワロス。そりやあんな度を超えた育て方してたら反骨心くらい湧くだろうよ。お手本みたいに最低な親父さん。ここはヒーローになることをまだ喜ぶべきだぞ。もしかしたら革ジャン着たスキンヘッドで鎖振り回すガチの不良になってたかもしれないんだから。

いやあ、心身共に健康に育ってくれて良かった（白目）。

ていうか一時期みんな動き止まってたけど、何があつたのだろうか。凄い体調悪そうだったし。もしかしたら私の干渉でウルトラパワーアップされた耳郎ちゃんが引き起こしてたりして。前に、いつだったか教えたんだよな。人間にとつて音は癒やしにも兵器にもなる。不調の一つや二つ、特定の音や振動が分かるなら簡単にひきおこせるって・・・まさかな。

いやいや、だってそれは『デীব』があること前提だよ？耳郎ちゃんの『イヤホンジャック』はそもそもの使い道が違うじゃん。そういった確固とした周波数を出せるわけなんてないじゃん。

ダメだ、わっかんね。そもそも個性なんて専門外もいいところだし。幽波紋スタンドならそれなりに理解はあるけど個性なんて知るか。こちらら『シンデレラ』がいなかったら殆ど無個性みたいなものだぞ。個性を育てることも諦めてるんだよって・・・育てる？

まさか、それこそありえない。だってそれは全く別物になることだぜ？『ホワイトスネイク』が『C—MOON』になるのと同じくらい奇妙なことなんだぜ？いや、幽波紋スタンドならまだ分かる。何せこちらは精神のビジョン。広瀬康一の『エコーズ』やジョニイの『タスク』のような育つ実例がある。それに対して、個性は身体能力。身体の成長と同じなのだ。寝て起きたら突然身長が50cm伸びてましたー！なんてあるわけねえだろ。

もしかして耳郎ちゃんって・・・私にとつて結構ヤバ目な存在になつたりしてない？嫌だよ、私は。せつかく出来た初めての友人を、殺さなきゃなんて。ああお願いします神様仏様DIO様〜どうか私に

とつての明るい道を作ってくださいませ。
その為なら部下の手を汚させても構いませんから！

あけましておめでとうってね。年明けから二ヶ月経ってるけど

「おや？もう帰ってしまうのか？種目はまだ残っているが。若い卵達の活躍を見ていかないのか？」

「これ以上見る必要は無い。俺にはこういった物を生で見えて喜ぶ趣味などはない。必要なことがあれば後から録画してある映像を見返せばいい」

「くっ、つれないな。もつと同じ相手に仕える者同士、親交を深めようとは思わないのか？」

「お前と親交を深めるよりも、もつと有意義なことがあるのでな」

「・・・ふっ、分かりやすい男だな」

「ん、終わったのかな」

眠っていたような薄らとした意識が覚めれば、競技は終わって選手達の視線は壇上のミッドナイトに向いている。彼らの表情は五種類に分けられていた。第三種目への道を開いて喜ぶ者、逆にここで敗退して哀切に暮れる者、結果を当然だと受け入れる者、結果に不満があり憤慨する者、そして何が起こっていたのか理解していない者。

当然だと受け入れているのは心操と轟。悪人のようなニヒルな笑みを浮かべてA組に完全敗北したB組を見ている。彼からしたらB組は思っていた以上に掌で踊ってくれたんだろう。手に持っているハチマキは殆どがB組の物だった。

憤慨しているのは爆豪。順位としては轟に次ぐ二位。だが爆豪からしてみれば最下位にも等しいのかもしれない。普段の爆豪を見て

いれば嫌でも分かる。妄言だと軽く笑われることでも爆豪は決して否定しない。オールマイイトすらも超えるNO.1ヒーローになる。子供の夢想の様なそれに対して爆豪は決して曲がらない。

その夢を叶えられる位置に爆豪はいるし、実際にその夢に手が届いても爆豪のポテンシャルであれば全然おかしいことはない。

だが一位ではない。一番ではない。いつだって目が届くのは一番だけだ。二番三番、ああ確かに凄いと。でも一番が一番凄いやないか。

順位が決められる争いで、明確な勝利を決めるのであれば特定の順位に入るのではなく、一位であることこそが勝利なのは間違いではない。よく言うじゃないか。1か0だと。

この理論は間違っていない。故にこの理論に沿えば、爆豪は最下位であり、敗者である。

聳え立つ一位の壁。そしてその上にいるのは入学以来、目の敵にしている緑谷と爆豪以上の存在と言える轟。

爆豪については置いておこう。そこまで考えることじゃない。確かに爆豪は凄いと思うが、だからといってどうこうする訳では無い。他人のことを考えている余裕が無いのはウチだって同じなのだから。

ちなみにウチの所属している心操チームは安定して三位。予定通り、洗脳で手駒を増やしながら順調にハチマキを奪い去っていったらしい。安心して勝利を任せられるというウチの勘は、どうやら大当たりを引いてくれたようだ。

「お疲れ様。凄いじゃん、一網打尽って感じ」
「別に。ただアイツらが単純なだけだよ」

係の人にハチマキを渡した心操に労いの言葉をかける。紛うことなきチームのMVPは彼だ。ウチはただ少し集中力を阻害しただけだし、他の二人、尾白とB組の人は何が起きたのか分かってない。

使い過ぎればバレる危険性が高まり、バレれば意識してれば簡単に食い止められる発動条件をこの順位になるまでの確に使ってきたということは間違いなく賞賛に値する。

更には敵を嵌めてハチマキを取るだけでなく、洗脳したウチ達の制御までやらなければならぬのだ。並列処理というのだろうか。処理能力が段違いにあると思える。

「じゃ、次は敵同士だから」

ミッドナイトから昼休憩を伝えられると、そそくさとゲートの方へと心操は背を向ける。やはり普通科が一人もいないこの場は居心地が悪いのだろうか。

普通科がヒーロー科に良い感情を持っていないのは勿論知っている。

確かに彼等からしたら、私達A組は気に入らない存在なのだろう。主に爆豪の影響が一番大きいと思うが。

兎にも角にも自分のことも考えなければ。爆豪や轟、心操だけでない。今ウチのことを手を振ってお昼に誘ってきた麗日やヤオモモだって十分な強敵なのだから。麗日はマトモに触れられれば重力を奪われるし、ヤオモモは万能過ぎる。まだ三種目目の競技は発表されていないが、まあ簡単に予想はつく。

簡単に予想がついてしまったから、その難度に対して余計に悩むのだ。

スキューロという男は有能に有能を重ねても尚言い足りない程有能な男である。類まれなる彼の脳はあらゆる物事を瞬時に記憶するだけでなく、回転も恐ろしいほどに早い。そしてスキューロはあらゆる物事に精通した知識を持ちえている。

例えば経済学。例えば薬学。例えば機械工学。例えば物理学。例えば生物学。例えば個性学。

この世のあらゆる知識を網羅しているのではないかと思える程の

彼の知識は当然ながら自分の為でもなくたつた一人のために活かされている。言うまでもなくシクリーザ・フェリシータの為である。

そんな彼が、根本はシクリーザの為とはいえ間接的に他者の為になるように、彼が持ち得る全ての知識を総動員して作られたのが耳郎響香に与えられた専用兵装『ディーヴァ』である。

機械工学や物理をベースとして、そこに異端となる個性学を混じえていく。同じ音を攻撃手段として使用するプレゼント・マイクの使用するスピーカーとは訳が違う。プレゼント・マイクはより彼にかかる負担を軽減する為に音の大小を操作する機能しかないが、スキューロの造り出した『ディーヴァ』は違う。

耳郎響香の個性『イヤホンジャック』を最大効率であらゆる局面で発揮出来るように、様々な機能が追加されている。

例えば耳郎が入試で使用したのもそうだ。本来であれば耳郎のイヤホンジャックの『放出』には自らの心音を利用する。それしか使用できない。心音には定まったりリズムがあり、緊張の度合いによって設定次第で威力が大きく変わってくる。

そんな不安定な出力では、兵器は兵器足り得ない。

故にスキューロは『ディーヴァ』が完全に音量や音程音階の主導権を握れるように設計した。無論、その機能を追加するためには当初の予定よりも追加パーツがかなり増えてしまったが、スキューロが秘密裏に日本のとある大企業と米軍より入手した技術で圧縮することに成功した。

スキューロは知っていたのだ。耳郎響香が己の個性からでは心音しか放出出来ないことを。そして放出した所で増加できる音量は『ディーヴァ』と比べれば塵にも等しいことも。

スキューロは普段よりも冷静さが欠如していた。それをちゃんと自覚出来てもない。別にイラついている訳では無い。ただ早急にやるべき事を、調べるべき事を徹底的に調べあげなければという焦りが生まれているだけだ。

いつもよりも荒々しく車のドアを閉めてエンジンを蒸す。法定速

度ギリギリではなく明らかに超えているが、この一帯を取り締まるヒーローは雄英体育祭の方に夢中らしい。普段よりも数があまりにも少ない。

急ぎながらも器用にスキューロは住居と言えいいのかアジトと呼べばいいのか分からないが、いつもの場所に連絡を入れる。

『はい、私です』

「俺だ、ティッツアーン」

電話に出たのは家で待機しているティッツアーン。彼がいるということはスクアアロもいるということだ。もしかすればシーラもいるかもしれない。ならば僥倖。なるべく人手は多い方がいい。

『どうしました、貴方らしくもない。声に焦りが出ていますよ。麻薬チームとの密談は終わったのですか?』

「そんなことはどうでもいい。今から戻るが、すぐに個性学に関する資料を用意しろ。本でも埋もれた論文でもオカルト話でもなんでもいい。ありつたけを掻き集めろ」

『・・・何かあったのですか?』

「ああ。何かがあった」

返答としてはかなり曖昧なものだ。何かという問いに具体的でない答えを返しているのだから。だがそのことをすぐに悟ったのかティッツアーンの気配が遠くなり、小さくスクアアロとシーラを呼ぶ彼の声が聞こえた。

運がいいことに、三人とも揃っていたらしい。

『貴方が戻るまでに出来る限りは集めておきます。ですが戻ってきた時に私達にも教えてください。それがボスからの密命でないのなら』
「分かった」

ならばいいです、と言ってブツリと切れる。端末を助手席へと放り投げたスキューロは、更にアクセルを強く深く押し込んだ。

もうすぐこの雄英体育祭一年生の部の大目玉が始まる。昼休みからこれまでにかけて様々な競技があった。決勝に進めなかった者たちは繋ぎの競技に参加し、各々が今日という日を謳歌していた。

時には煽られ爆音を鳴らし、時には観客達を笑わせ、時には大胆にチア服というサービスを見せながら。

観客達もそれに応じる。笑い喜び楽しむ。普段は見られない個性を使つての競技に、若かりし頃の夢やこれからの将来への希望を思い出していく。

観客も、選手も楽しんでる。まず間違いなく雄英体育祭は大成功と呼べるだろう。

そんな喜怒哀楽が飛び交うこの日の最後の種目の開戦を告げるべく、相も変わらず露出多めなミッドナイトが壇上に立つ。掲げる鞭を振り下ろすと共に、最後の種目を言い放った。

「最終種目は進出4チーム16名からなるトーナメント形式！一対一のガチンコバトルよ!!」

控え室で興奮に滾る心を落ち着けながら、電子音声で流れてくるミッドナイトの開幕宣言を聞く。

先程まで上鳴のバカと峰田のスケベに騙されて着ていたチア服ではなく、今日に限つての戦闘服とも言える雄英高校の体操服。

昼休み終わりのレクリエーション前に行われたチーム決め。そこでウチの騎馬戦のチームはウチと心操以外の二人。尾白と庄田・・・なんかインパクトが凄い名前のB組の生徒は三種目目への出場を辞退した。

彼ら曰く、騎馬戦で何もしていない自分達が出るのは大会の趣旨に反するし、個人的にも認められない。

彼ら二人は騎馬戦の時に心操に洗脳され、意識を奪われていた。だから、ただ洗脳されていただけの自分達が出場することが許せなかったのだろう。ウチにも理解出来る。もし立場が違えばウチもそうしていただろう。

雄英体育祭始まって以来の前代未聞のことかもしれない。決勝を目前にしながらの辞退。ヒーローを目指す者にとって最大の見せ場となる雄英体育祭を自らの意思で降りたのだ。聞かされた観客も選手も酷く動揺した。

だがそれでも彼らは棄権という意志を貫き、ミッドナイトはソレを認めた。曰く、青臭いのは好きだと。

異例の事態だがどうやら全ての采配はミッドナイトに任されているらしい。

一回戦目のウチの相手は芦戸。彼女は会場の反対側の対戦表の左側に位置されている選手の控え室にいる。試合には関係ないけどできればウチと対戦表の位置は変わって欲しかった。

「.....」

ウチの近くに座っている爆豪が備え付けのモニターを射殺さんばかりに睨んでいる。

一回戦目の対戦カードは緑谷と心操。これまで個性を全く使わなという異端の記録を残した緑谷と決勝に進んだ選手達の中で唯一の普通科生徒。色々な意味で注目を集めるこの試合だが、爆豪は何を思ってみているのだろうか。

緑谷が敗れるかと思っているのか。それとも勝ち上がってもらい決勝で叩き潰すかと思っているのか。奇運なことに対戦表の真反対に位置する、性格も真反対の二人の関係はライバル関係と言うべきか。それとも一方的な敵対視か。未だによく分からない。

意識を爆豪からモニターに移す。心操と緑谷の相性は両者共に最高と言える。心操は緑谷のことをよく知っている訳では無いと思うけど、心操の洗脳の発動条件はあまりに簡単。ただ一言でも会話を成立させればいいのだ。例え暴言であっても。

その点でいけば緑谷の相性は最悪に見える。緑谷は凄く優しい人

間だ。心操が突いてくるだろう箇所を分かっていたとしても無視することができないだろう。

だが、幾ら心操の個性が強くとも心操本人は常人でしかない。超パワーの増強型個性を持つ緑谷なら開幕直後に白線の外に追い出すことなど容易いことだろう。

しかし、緑谷は果たして個性を使うだろうか。ウチが知っている中で、緑谷が個性を使った時はどうしようもない程の怪我を負っていた。

試験の時は片腕と片脚、体力測定の際は指、屋内訓練の時は右腕。使う度に肉体を酷く損傷している。幾らリカバリーガールのお陰で即興の治療ができるとはいえ、緑谷の次の相手は確実に轟だ。瀬呂には悪いけど。

指一本でも完璧な状態にしておきたいはず。万全の状態でもまともにも勝ち目があるかどうか分からないのだ。屋内訓練の時に一応戦ったから分かる。轟がその気になれば緑谷との勝負など速攻でケリをつけることも持久戦に持ち込むことも出来る。

あくまでウチが轟とマトモに戦えたのは氷しか使わなかったからだ。氷が物体だったからだ。だが轟の左側、炎を使われていたら間違はなく瞬殺されていた。音で炎は止められない。

使わないから、まだ轟はここにいる。一見すれば同じような位置にいる。ならもし炎を使えば、轟はどこまで強くなるのだろうか。

「ちっ、デクの奴・・・あんな雑魚に・・・」

ああ。どうやら爆豪は緑谷を叩き潰したいらしい。別に応援している訳では無いようだけど。いや、もしかしたら意外と応援していたりとか？俺のライバルだろ、お前的な。てことは、爆豪ってツンデレ？

「おい、クソ耳。テメエなんか変なこと考えてねえか？」

「爆豪って案外緑谷思いなんだな。ライバル視してたりとかしてるのかもって」

「んなわけあるかクソ耳!!」

突然耳元で怒鳴るなよ！ただでさえ個性の影響で意識してなくて

も聴覚は鋭いんだよ。

ていうか緑谷、洗脳思いつきり嵌ったじゃん。やっぱり心操の方が一枚上手だったのかな。もしかしたら開始する前から少しだけ口撃していたのかもしれない。

もう緑谷はここで終わりだ。尾白が騎馬戦の終盤で少しだけ意識を取り戻したのだって、第三者が衝撃を与えたからだ。心操の洗脳解除の為には何らかの外的刺激が必要。だがこの試合は一对一。フィールドにいるのは心操と緑谷のみ。間違いなく詰みである。

誰もが確信した。緑谷出久という個性を使わないイレギュラーな生徒はここで敗北すると。既に心操の洗脳に嵌り、操られた体は白線のすぐ前まで歩いている。あと一歩だけで一人目の敗北者が決まる。選手たちも観客も、そしてウチも敗北を確信した。心操の洗脳は意識を奪う。抵抗する意思さえ生まれえない。

人は奇跡が大好きだ。逆転劇が大好きだ。野球の最終回での逆転サヨナラホームランのように、オールマイトが窮地に現れて燃え上がるように。

絶対的なピンチ。確実となった敗北。それがくつがえる瞬間に人は至高の喜びを味わうのだ。

だが世の中にはそういうことを嫌う人もいる。

奇跡や逆転劇などは当事者達からしてみれば心を折られかけ、絶望に状況も心も瀕しなければならぬのだ。それでも奇跡が起こるかは分からない。希望が生まれるかなんて分からない。

奇跡や逆転劇なんて必要ない。当たり前のように真っ直ぐに起伏ない道こそが至高なのだ。深い絶望から高い希望に昇る必要なんてない。そのままがいいし、そのままがいいのだ。

きつとあの人は、シクリーザさんはこの展開が嫌いだろう。反吐が出るど吐き捨てるだろう。当たり前前だという常識を突き破るように、心操がコンクリートで作られたフィールドの上に背を付けて、緑谷が

心操を見下ろすように立っている。

間違いなく逆転劇と呼べるこの展開に、彼女は何を思うのだろうか。

マツシモ・ヴォルペはヴラディミール・コカキに拾われた男である。別に育てられたという訳では無いし、マツシモ自身も捨て子という訳では無い。裕福な家庭で人並みの生活をし人並みの愛を受けていた。きっかけは父親の墮落だった。十年のうちにヨーロッパの各地は個性優遇社会に変化した。優秀な個性を持つ者には圧倒的な優遇を。優秀ならざる、もしくは持たざる者にはそれなりの待遇を。

優秀な子供がいればそれだけで援助は良くなるし、周りからの対応も変わってくる。

しかしマツシモの父親は没個性と呼ばれるものであり、母とマツシモに関しては全くの無個性であった。無能と結婚し無能を生み出した無能の父親。それでもそれでも精一杯会社に貢献してきた父親は、個性という存在の前に切り捨てられた。

後は、察することができだろう。酒に溺れ暴力に溺れ、妻からも見捨てられた男の末路としては当然のものだった。

故にマツシモが父親を見限るのも当然の事だと言えた。父親も家も、持っている何もかもをマツシモは組織に売り出した。他でもないパッショーネという大組織に。それと引き換えにしてマツシモは組織へ入った。

マツシモとコカキが出会ったのはその頃だ。コカキはマツシモの何を見てどう判断したのかは分からないが、マツシモは気付けばコカキの管理している『麻薬チーム』で薬の運び屋をやる事になっていた。

下っ端から『麻薬チーム』の関係者になるまで上り詰めるという異例の事態である。まあ運び屋の名の通り、薬の製造方法も何も知らさ

れることはなかったが。

事が変わったのはマツシモの人生からだとい最近と呼べる程最近である。突然呼び出されたマツシモは、コカキに告げられた。

「製造係が消えることになった。予定通り、次はお前だマツシモ」

最初は何を言っているのかは分からなかった。言葉の真意など無論のこと。だがその疑問は直ぐに晴らされることになった。

パツシヨーネのボスの正体に次ぐ最大の秘密。個性とは違う超常の力。精神の具現たる幽波紋^{スタン}能力。これを聞かされた時は、流石のマツシモも驚いたが今は身近に感じている。

『マニック・デプレツション』。前任の製造係も使っていたパツシヨーネ最大の収入源である麻薬の製造を一手に引き受ける幽波紋^{スタン}。人類史を鑑みれば最低最悪とも呼べるその能力こそが、現在マツシモに与えられている幽波紋^{スタン}であった。

幽波紋^{スタン}を仕込まれる時は流石のマツシモもおっかなびっくりだった。何せ人体の中に異物であるDISCがするりと入り込んでいくのだ。光景として見ても不気味であった。

父の墮落、コカキとの出会い、幽波紋^{スタン}使いになったこと。これら全てがマツシモの人生の大きな転換期であった。最後の一つに關しては、彼に拒否権などなかったが。

件の男、ヴラディミール・コカキはマツシモをしてもよく分からない男であった。ボスの正体を知り、長年パツシヨーネに貢献しているのは知っている。そのお陰でボスから麻薬チームの管理を任されるほどに信頼されていることも。

マツシモは思う。自分が運び屋として麻薬チームに選ばれたのは、いずれ前任が消されることをコカキが予見、いや確信していたからなのだ。

普段は温厚そうな老人だが、その本性はどこまで黒いのか。深淵のように黒いのか、それとも黒と認識できないほどに黒いのか。

十年程共にいれば、長い付き合いだと言えるだろう。少なくとも十

年分程度は、マツシモはコカキのことを理解しているのではないかと思う。毎年この時期になるとコカキは日本に来る。雄英体育祭を見るために。二年前に一度だけマツシモも見に来たが、正直何が面白いのか分からなかった。

コカキが言うには未来溢れる青少年の努力は好ましいと言うが、果たして本当なのかどうか。

そもそも、仮にもコカキはギャングの幹部であり、ヨーロッパの裏社会では蝙蝠と呼ばれる程の男だ。敵地とも呼べるこの場所によく毎回来ようと思えるものだ。大体、見ようと思えば雄英体育祭などテレビ中継がされるというのに。こういうった事に熱がないマツシモからしてみれば、コカキはサッカーの自国の代表の試合を見に世界中を飛び回る熱心なサポーターのようにも思える。

そんなこんなでボスの右腕と密談し、なあなあにコカキに付き合ってから既に5時間以上が経過している。全てが退屈という訳では無いが、流石にこれ程の長時間だと億劫になってくる。だがようやく最後の競技に入った。無駄とも思える長い時間もじきに終わる。

「ほう、やはり面白い個性を持っている」

コカキのようにオペラグラスを使っている訳でもないのに、観客席の一番上部にいるマツシモからでは粒よりも大きめのサイズの人が動いているようにしか見えない。巨大なモニターに目を向ければ、虚ろな顔で自ら敗北をしようとしている少年がいる。

「ボスの劣化か」

「比べてやるなよ。あの方とはそもそもその下地が違う。あの方にも少年にも失礼というものだぞ」

敵対している少年の個性が洗脳だということは既に理解している。まるでボスの『ホワイトスネイク』のDISCのようにも思える。だが応用性は明らかにDISCの方が広い。ソレは身をもって体験している。

何せある程度の無茶でも実行できてしまうのだ。

「二年前のとは比べたら随分と呆気ないな。いや、あの時は別にインパクトが強すぎたと——」

なんだ？

この不快感は。

言いようがない程の不快感。

ただ気持ちが悪い。

まるで、掴まれているような。

気付けば試合は終わっていた。いつ終わったのか、どのように終わったのかは全く分からない。自分の身に何が起きていたのかさえも。何も理解出来ていない。ただ荒れる熱狂の中でガラスケースに隔離された様な気分である。

「コカキ、アンタもさっきの——」

「この後の予定は変更だ。お前はすぐに帰れ。理由は聞くな。何も聞くな。聞けば殺す」

裏社会の重鎮に相応しい冷たすぎる声。本当に理由を聞けば間違いないと殺される。今のコカキはそういう雰囲気を出している。先程の感覚に何か思う所があったのか。

マツシモとしてはここでコカキに殺されるのは御免こうむるし、コカキの命令に逆らうつもりは無い。大人しく立ち上がり、この場を後にすることにした。

「これはまた、面倒なことになりましたな。すぐにそちらに向かいます。私のボス」

残ったコカキの瞳がオペラグラスを通して見た景色には、自分が唯一頭を垂れ、犬のように従順に従うと決心した人が倒れていた。

確信していた最悪の出現を見た。勝つのは私だけけど

隣のエンデヴァー超不機嫌ワロタ。

なんてふざけたことを言っていられるかよ。目が真っ赤に充血し始めてるし心なしか炎の勢いが強くなってないか？感情制御ちゃんとしてろよ。

いや、そりゃあ大嫌い？なオールマイトに陽気に話しかけられたのが気に食わないのは分かるけど。

ほら、周りの人も暑そうに手を団扇代わりにしてるぞ。

私か？ふっ暑さなどこれっぽっちも感じないね。この全身に透き通る清涼感。んっんゝ実にいい気分だ。快適にエアコンの効いた部屋にいるのと変わらないこの感じ、最っ高だねえ。

エンデヴァー、お前の身体から発せられる炎の熱への対策など既に済ませてあるのだ！『ホワイトスネイク』がな！適当な時間に席を外した時、人目につかないところでD I S Cを挿し込んだのだよ。肉体温度を適温に感じるようにな。急激な温度変化で身体が少し怠くなったけど想定内である。さっきまでのぜーはー言ってた私とは違うのだ。

『一回戦!!成績の割に何だその顔！ヒーロー科緑谷出久!!』

対！ごめんまだ目立つ活躍なし！だが唯一の普通科心操人使!!』

紹介と共にコンクリートで作られた舞台の上に登場する主人公と哀れな敗者。個性は強いし確実に勝つことが出来るのにね。あんなクソチートが相手なせいで可哀想な心操君。ていうか緑谷、こっち側の控え室にいたのかよ。

おつ、もう心操の挑発始まつてるじゃん。流石、口がはやいでございますね。言ってる内容はよく覚えてないけど、確かかなりの正論をぶちまけてたはず。まあ私からしてみればチャンスをドブに捨てるなんてアホの極みみたいなものだよな。雄英に入れたからって余裕になつてるのかねえ。

うはっ、開幕直後からかかってやがる。尾白？が事前に対策を教え
てくれたって言うのに。冷静に頭を働かせるくせしてなんの仕掛け
もない馬鹿パワーキャラなのに、そんなにカツとなるなよ。心操が
言っていることは限りなく正論なのにな。

ていうか心操も心操だよ。歩かせんなよ走らせろよ。もしくは降
参するって宣言させればいいのに。やはり彼は典型的な運命を辿る
敗者ですね。哀れ極まりない。いや、何気に親近感が湧いてくるか
も。私も一步でも間違えれば心操と同じ轍を踏むかもしれないし
なあ……。まっ、そうならない為にスキューロやら親衛隊がいる訳
だし。

よし、そこだイケ！そのまま負けちまえ！負けるって分かっても
心操を応援してしまう！もうグラントリノの目に入らないくらいの
惨敗を……。いや継承者ならどの道目に付くか。ええい、だが知った
ことか！負ける負ける負けてしまえ!!緑谷出久が何者かに勝つこと
その物が癪に障るんだ!!

別に緑谷が負けることによつて私に何か影響があるわけじゃあな
いのだが、嫌いな奴の不幸というのはいいい味なのだ！今宵のワインの
相方に貴様の敗北を添えさせてくれ!!

よし!!あと一つ……

それは如何なる恐怖にも屈しない勇氣である。

それは弱者を思いやる優しさである。

それは如何なる困難も跳ねのける精神力である。

それは矜持と責任に殉じようとする覚悟である。

それは自身の宿命をありのままに受け入れる潔さである。

それは如何なる悪徳も批判する誇り高い意志である。

人はそれを、黄金の精神と呼んだ。

私は、それを見た。

視点が変わっていることなど気にならない。緑谷出久が私の正面に
いることなど全く以って気にならなかった。常時の思考ならば焦
燥でこの瞬間にもぶっ倒れていただろう。もしくは冷静な判断力を
失って問答無用で殺しに行くか。

何故自分がここにいるのかも、何故緑谷出久が私のことを微塵も気
にしていなかったか、それら全てがどうでもよかった。諸々の重大な
こと、考えるべきことを些事と断定する程に、私は目を引かれていた。
私の目がいったのはたった一つ。緑谷出久の胸で鬱陶しいほどに
輝きを放つ黄金の光、その中心と言うべきか奥と言うべきか。深淵な
どを軽く通り越すであろうその場所に、否、そこに、目の前に、それ
は存在していたのだ。

私はずっと探してきたもの。たった一抹の可能性すら拭えず、不安

と共にいつか私の前に現れるという恐怖の一つ。好ましくはないが運命を強く信じる私にとって、運命を辿ってきたかのようにそこにある。あらゆる行動、あらゆる思想、何もかもが敷かれたレールの上を走っていることは、私はずっと考えていた。

私達は誰しもが、運命のレールを辿っている。勝つ者負ける者、得る者失う者、それら全ては定められた運命によって決められる。

だが私だけは、『キング・クリムゾン』を保有する私だけは違う。完全に逃げられる訳では無いが、私ならばあらゆる運命を、非道を悲劇を回避することが出来る。運命に縛られないで生きることが出来る。

だが運命は決して逃がさない。運命を掴む者以外、必ず運命は引き摺りこんでくる。悪が正義に負けるように、敵が主人公にどう抗おうとも勝てないように。

だからずっと探していたのだ、運命の中心点を。運命が収束する場所を。世界各地の遺跡を掘り起こさせ、美術館を探し回らせ、コレクターを調べさせた。時が来るまで決して姿を見せぬと言うかのようには、尻尾すら掴めなかった。そのまま存在しないという結果に辿り着ければ良かった。見つからないから無いのだという、楽観的な思考が出来ればどれだけ良かった事か。

だがそれは出来ない。先も言ったが、私は決して好きではないが運命を信じている。幽波紋使いが幽波紋使いに惹かれ合うように、吐き気を催す邪悪が黄金の精神とぶつかり合うように。

この幽波紋を使う私には、必ずそれが現れるのだと確信していた。たとえそれが壊れかけ、半分しか残っていないかつたとしても、在ることには変わらない。運命を掴み取る為の唯一にして絶対の一手。私はそれがどうしようもなく怖く、恐ろしい。

やりたくなんてない。泣いて今すぐにも国外へ逃げ出したい。また教会に引きこもっていたい。ああだけど分かるのだ。無駄なのだ。決して逃げることは出来ない。死神のようにそれはやってくる。私が死ぬまで、私を引き摺り込むまで。何度でも何度でも、どこへ行こうともやってくるだろう。

ましてやそれが、緑谷出久の元にあるのだ。

やらなければならぬ。やらなければきっと殺られるか、私にとつて限りなく最悪なことが起こる。成功するビジョンなんて1mmも見えないし、逆にこちらが全滅する未来しか見えない。あらゆる不条理あらゆる災難あらゆる絶望がこちらを襲ってくるのだろう。

ああ、ダメだもう諦めよう。諦めて部屋の隅で縮こまってこっちに來ないことを祈ろう。ただでさえAFOとかいう最悪と鉢合わせているんだ。これ以上悪いことなど抱えたくない。それでも何時まで逃げ切れるだろうな。何時まで平穩を手にしていられるだろうな。何をして追われるのだろう、何をして敵として現れるのだろう、何処まで逃げ切れるのだろう。

あるのは恐怖と絶望のみ。明日など來ない。希望は潰えた。未來は廢れた。力など無意味。唯一の力である幽波紋スタンドなどゴミの様に扱われる。理不尽の人型に全てを蹂躪され尽くされる。確定された未來である。それこそが定められた運命である。何処までも追っていく。逃れることなど出来はしない。

震えて眠れ。否眠る時間など与えない。震える余力など必要ない。ただ絶望しろ、死ね。

それこそが運命の与えし結果である。

巫山戯るな。

それが既に所有されているから諦めろと？敵が主人公だから諦めろと？ああ確かに絶望的だ。涙を流して嗚咽を上げて神に祈り救いを求めたい気分になるのは当然だろう。

何を弱気になっていったんだよ。バカじゃないのか私。最近の行動を振り返ると自分のことをちよつと頭のネジ緩んできたかなあ？つて思っていたが、全く以てその通りじゃないか。情けない情けない。何時までもこんなくだらな事で悩んでいるんだ。全く成長してないじゃないか。

最初から、生まれたその日から考えていたことじゃないか。

常に人生における落とし穴を探し、無窮の平穩を過ごすのが私の人生の基本的な行動であり絶対のルール。それを阻む者は誰であろうと容赦しないと昔から考えていたじゃないか。

なら一度や二度どころか百や二百、それどころか万を超える程にその可能性を考えなかったはずがないだろうが。

ああ確かに。想定していたのと実際に直面するのであれば心にかかる負荷も違う。聞いた瞬間に心臓が停止してしまっそうだ。想定していた時も必ず勝てるなんて思わなかった。

だが、まだマシだろう？

想定の内にはもつと最悪な事態があつたはずだ。憑依緑谷強化緑谷、クラスになんか増えてるオリ主に敵サイラン連合に参加してる系オリ主。ほら、考えてみればバカみたいに出てくるぞ。

だから、なあ。それに比べたらまだ可愛いとは思わないか、この程度。

むしろ相手がジョースター家だと思えばどうだろうか。緑谷出久よりもほんの少しだけ年上、東方仗助に關しては同い年であるというのに完成された肉体、完成された精神、なおも成長を続ける幽波紋スタンドがある。

彼らの肉体はたとえ瀕死の重傷を負っても敵を倒すまで止まらず、その気高き精神は周りの者をたとえ敵であろうと引き寄せる。昨日の敵は今日の友。これを地で行く相手がどれほど恐ろしいことか。

それに対して緑谷出久はやりやすい。ヒーローになりたいと言いつつながら一年前まで何もしてこなかった肉体は未だハリボテであり完成は見えない。未だ幼い精神はショッキングな光景に対しても怒りを燃やして動くことは出来ない。いや、憤怒で動けるかもしれないが。だがその能力はたとえ先が読めなかったとしても、最初にして本命が十全に使えない。

超パワー、確かに恐ろしい。近づけば風圧だけで殺られてしまう。だがパワーだけで戦うのが幽波紋スタンドではない。他者に見えないというアドバンテージがある以上、たとえ使いづらい能力でも土俵に上げれば戦える。

そして最悪、最も下衆な手段を取ればいい。

簡単とはいかないが、簡単でないだけだ。あらゆる手段の悉くが踏み潰される訳では無い。ああー心配して損した。いや、ちゃんと今も心配はしてるんだけどね。脅威認定は依然としてオールマイトやAFOの方が高い。だってほら、完成されたオールマイトが所有してみるよ。ゲロ吐くくらい怖いぜ、きつと。

はっはー！今夜はヤケ酒だあ！吐くまで飲んでやろうじゃないか
あああああああああ——！！

「おい、大丈夫かお前!? くっ、まさか脱水症状か!? おいそのヒーロー、担架を持ってきてくれ! お前はリカバリーガールに連絡を取れ!」

どこかの会場どこかの席で突然倒れた女性に、興奮のあまり自分の炎の威力が強すぎたのかもしれないと、非常に申し訳ない気持ちになった強面大男のNo. 2ヒーローがいた。

『次が一回戦の折り返しの試合だああ!! 何でも溶かしちまう凶悪な酸の使い手エ! 芦戸三奈VS! 入試の成績は文句なしの首席! 俺と個性が少し被ってる耳郎響香!』

何度も補強されたコンクリートで作られたフィールドにて、楽しそうにこちらを見ってくる芦戸に應えるように、こちらも楽しく見る。何度か授業の演習で組んだことはある。だが大抵はペア同士での演習だったり、ウチはサポートアイテムがありだった。

これから始まるのは一対一のタイマン。武器もアイテムも遮蔽物も何一つ存在しない、真正正銘のガチバトル。

勿論緊張している。これまでの二回の競技は戦う必要が無いのと、他者のサポートがあった。それ故にマトモに個性を使わなくても良かった。だがこの競技だけは、ほんの少しの油断もできない。切り札の出し惜しみはするが、幾つも手札を隠してはおけない。いや、『ディーヴァ』のない状況での手札はそこまでは多くないのだけれど。『スタート!!』

「覚悟してね、耳郎ちゃん!」

開始と共に芦戸の手が振り払われる。既に分泌されていた酸が撒

き散らされる。当然そんなことは計算内。寧ろ初手でこうして来なければおかしい。

正直、今のウチと芦戸の相性はかなり悪い。いや、そもそも『ディーヴア』のない状況で相性がいい相手は多くない。身体能力では障子に負け、純粋な火力では爆豪に負け、手数が多さでは轟に負ける。一撃の強さもそうだ。芦戸の酸は何もかもを溶かせる。素で受ければ痛みでマトモに動けなくなる。それに対してウチがマトモに出来るのはイヤホンジャックを振り回しての鞭のような打撃。そして肉体に音を直接打ち込む位。

後ろに思い切り跳んで酸を避ける。芦戸も直接人間に向けて振るうのは少し躊躇いがあるのか、振りまく酸は首より下を確実に狙っている。そして恐らくは酸の濃度も下げているだろう。

手加減をされているとは思わない。そうするのは当然である。

幾ら今の人間が個性を得る前よりも些か頑強になったとはいえ、人間は人間でしかない。芦戸の酸の前では意味が無い。本能的な他者を害する事への抵抗。そこを狙うのが最善だろう。コレは、第二候補だ。

第一候補は既に決まっているし行っている。ついさっきやったばかりの奴だ。ただこれには時間がある。だから、

「うう、素早いなあ！」

「走り込みは欠かさなかったから、ね！」

回避をただ続ける。無論、イヤホンジャックでの乱打による牽制も行う。だが効果は薄い。芦戸が酸で他者を害することを本能的に抑えるように、ウチも傷つくことを恐れている。ただ殴る蹴るではなく、溶かす。未知の感覚、未知の痛み。当然、恐れる。

マトモに近づけない訳では無いが、近づくことのリスクが大きい。やはり『ディーヴア』は申請しておくべきだったかな？

「なら、これでどうだっ！」

行動が変わった。さっきまではウチに向かって只管に酸を放出するだけだったのに、今度は違う。横ではなく下から上へ。まるで天高く振り上げるように手を動かした。

一度ではなく、水辺で水を掬って振り上げるように何度も何度も。「不味っ——」

当然だが行動の意味がわからないことなんてない。ウチの集中を芦戸本人から上空へ振り上げられた酸へ向けただけ。さつきまでは酸を直接射ってくる芦戸に注意を向けていれば良かった。そうすれば自然と手の動きで何処へ『銃口』が向けられているか分かるからだ。だが上へ向かって放たれたことで、酸への本能的な恐怖によって上空へ意識が向けられた。

完璧な回避を行いたいが、そうすれば芦戸本体がこちらへ向かってくる。芦戸は恐らくは自分の個性故に酸に対する強力な耐性がついてるだろう。かと言って芦戸に注意を向ければ上空からの回避が疎かになる。

「ギリッギリ、セーフッ！」

イヤホンジャックを思い切り伸ばす。十メートル程離れたコンクリートの地面に全力の振動で採掘機のようにコンクリートを破壊してプラグをアンカーのように突き刺す。

突き刺したプラグを起点にウチの身体を引き戻す。本来であればウチの方へとプラグは戻っていくのだが、訓練と応用で強い起点があり幾つかの条件を満たせば、ほんの短い間ならウチの身体を引っ張ることが出来る。と言っても一回二回しか使えない技だけど。

「むう、流石だね。でももう一度〜！それっ！」

再び芦戸の両手が下へ沈み込み、溜め込まれる。この技は単純だが強い。爆豪や轟のようなぶっちぎりの強個性や一定以上の増強型個性相手では分が悪いが、ウチのようなタイプには滅法強い。

触れれば溶ける有害な酸。避ける為に意識は上へ向けられる。意識を上へ向ければ正面から芦戸本人が襲い来る。

だがさつきも言ったように、芦戸は恐れているのである。それは大きな隙であり、故にそこを突くのが最も効率的な勝算を得られる。

「えっ、来るの!？」

芦戸は沈み込み打ち上げる前に、必ず動作が止まる。芦戸の個性で出る酸は当然ながら液体である。液体は固有の形が無い故に飛び散

り易い。それこそ無闇矢鱈に放ってしまえば目などの危険な場所に当たり、最悪失明だつて有り得る。

だから絶対に上に飛ばすように、横に飛び散らないように動作を止めて丁寧確実に放つ。だつて彼女は優しいから。

更にこの技は必ず手で打ち出す必要がある。芦戸の酸は全身から放出することが出来るが、前述の理由で飛び散りを避けるために。普段から意識して使っている横の動きではなく上空への動き。腕全体からの放出時は無意識的に出来ていたことでも、方向を変えれば別である。

予想通り、方向転換して芦戸の方に全力で向かったことよつて、芦戸は酸の打ち上げを止めてコチラへ放とうとしてくるがもう遅い。当然だが基礎的な身体能力も伸ばしている。特に脚力はどんな場面でも必須となつてくる。戦場では足を止めた奴から死ぬつて言われる程だし。

姿勢を低くしたプロレスラーが行うような力強いのは出来ないけれど、それでも十分なレベルでのタックルをお見舞する。それで倒れてくれれば御の字なのだが、素人のタックル一つで倒れるほど優しくはない。

それに芦戸はその外見からも分かるように異形型。普通の人間よりも僅かとはいえ、目に見えるほどには力強い。

でも大丈夫。もう勝ちが決まつたから。

「え……？」

喧騒に掠れて消える一瞬の雑音と共に、芦戸の身体が力をなくしたように地面に落ちていく。静かな音の着地音。芦戸の視線は自然にウチを見上げる形になる。酸を放つことの出来る掌は地面に置かれている。

観客席から見ても、審判から見ても、ウチから見ても芦戸は自分から座り込んだ。糸が切れたように唐突に。なんの脈絡もなく。

けどウチだけが知っている。何故芦戸が自分から座りにいったのか。知っているということは当然、ウチが仕組んだからだ。

今の芦戸には平衡感覚がマトモに機能していない。気付いていな

かったようだけれど、芦戸の耳はウチの個性で発し続けていた『音』が原因で眩暈状態にもなっている。

人間にはそれぞれ、行動に応じて適した音というものがある。例えば動画サイトにあるリラックス出来る音楽であったり、脳を活性化させることでの眠気覚ましであったり。

逆に言えば適さない音というのもある。聞けば頭が痛くなる、気分が悪くなる。黒板を徒に引つ掻いた時なんかはそれである。

だからウチは同じ効果を持つ似たような音を少音ながらも放出して、近づいた時に一気に、一瞬の内に音を爆発させた。少しづつ頭を慣れさせて、中途半端に爆発する形にした。

この技はウチが偶然見つけ出したものである。個性の訓練をしていると、いつも聞いている音とは違う音が流れていたことに気づいたのだ。その音は発しているウチでも、聞いていて不快になったり聞きすぎれば体調不良や目眩などの症状が出てきたりした。

人体に作用する類の音。『イヤホンジャック』に秘められていた可能性の一つ。ようやく見つけた自分だけで使える武器。それがこの技。

『ハートビート・ディスプレイス』。

何にも頼らずにようやく踏み出せた第一歩としては上々のものだった。個人的には満点花丸だ。

「うう、なんか頭がガンガンする〜」

「手、貸すよ」

座っている芦戸に手を差し伸べる。差し伸べられた手を芦戸は嬉しそうに掴み、同時に引き上げられる。負けたというのに清々しい笑顔をしている。ありきたりなことだが、彼女の人格の良さが垣間見える。

「ああ〜負けちゃったか〜。私の分まで頑張つてね、耳郎ちゃん！」
「任せといて。絶対に勝つかから」

そう言う耳郎の視線は芦戸からゲートへ向けられる。そこにいるのは待機している爆豪。フィールドからでも分かるほど、獰猛に勝利に飢えた目をしている。だが耳郎から向けられる視線と合うことは

無く、爆豪の視線は耳郎の後ろへ向けられている。そこにいる敵麗日お茶子に向けられている。

耳郎が眼中に無い訳では無い。ただ今は、目の前の強敵麗日お茶子に勝つことに意識を割いているのだ。

絶対に優勝すると周りを見下しながら豪語しているが、それは決して余裕で勝てると思っている訳では無い。余裕をかまして勝てる程、雄英高校ヒーロー科は甘くない。

故に爆豪勝己は麗日お茶子を油断せず、容赦なく叩き潰す。

「この少女、覚醒させていますね。いや、完璧という訳では無い。今も尚成長途中だ。どちらにせよ興味深い」

「何度も見直してようやく見つけた、そして理解した。耳郎響香の個性は、覚醒という進化を経ている！だが何故だ？何を以て先へ進んだ？」

「脱水症状だね。あとはストレス・・・日頃の疲れかの？まあ軽い症状だし、じき目を覚ますよ。それとねエンデヴァー、

息子の活躍が嬉しくて周囲の温度を上げるのは構わないんだが、倒れちまう程上げるのはどうかと思うよ？」

「・・・すまない」

今日一最高の盛り上がりが訪れる。私は帰るけど

微塵の狂いもなく、最初から定まっていたかのように爆豪は麗日を叩き潰した。正面から堂々と。麗日の用意したあらゆる策を爆破して。

最高峰の雄英の中でも群を抜いている個性と才能。そして普段の荒々しさからは、知ったばかりの者では想定できないほどの戦闘時の頭のキレ。単純な爆破による力押しから小回りまで自由自在。

それだけではなく続く二回戦。連続した爆破による力押しで麗日よりも頑丈でより正面戦闘特化の切島さえもを下してみせた。圧倒的、単純なまでの強さは、強者でありながらも互角の戦いを演じた轟と同等な程に観客達を魅せていた。

ほぼ無傷で二戦を勝利した爆豪は、そのまま用意された客席には戻らず、荒々しい歩幅で急ぐように会場の放送室へ向かっていた。

一応は礼儀正しく、扉をノックして開ける。中にいるのはUSJの怪我が治りきっていないため包帯でほぼ全身を覆っている相澤とブレゼントマイクの二人。相澤が先ず気付き、それに釣られてマイクも気付くも、相澤が対応することを察したマイクは実況の方へ専念する。

「何の用だ。お前はまだ試合が残っているから客席の方に——」

「こういうのはオレから申請すんのは出来んのか？」

「何言って・・・」

爆豪が持つて来ていた物を相澤に突きつける。そこに書かされていたのは体育祭でのサポートアイテムの申請書類。主に青山等の何らかの媒体を使用することでようやく完璧な形で個性を扱える生徒への救済の意味を持つ書類。

だが爆豪の突きつけた申請書には爆豪の名前は書かれていない。そもそも爆豪の個性にはサポートアイテム等ほとんど必要ない。名前が書かれていたのは次の爆豪の対戦相手である耳郎のもの。だがその字は爆豪のもの。そう、爆豪は耳郎のサポートアイテムの使用を申請しに来たのだ。

「あのクソメガネは試合前に申請したからさっきの試合で使用出来た。ならクソ耳だって今から申請しても遅くねえだろ」

「まあ、な。だが飯田の時とは違って色々状況が変わっている。飯田は一回戦目に、アレつきりとして申請していた。だが耳郎は一、二回戦目は無しで行った。三回戦目から使うなんてことは——」

「だからわざわざオレが出しに来たんだろうが」

「・・・確かに対戦相手であるお前が納得しているなら特に問題は無いが、耳郎はこの事を知っているのか？許可は出せるがそれだけだ。土壇場だし受けるも受けないもアイツ次第だぞ？」

「要は説得すりゃアいいんだろ」

内側に秘められた怒りが極小規模の爆破となつて掌で爆ぜる。怒り心頭。爆豪の思考にあるのは勝つことだけ。完璧な状態といえる相手を、完膚なきまでに叩き潰すことだけ。正面から、堂々と。誰にも文句を言わせずに。

爆豪を見て、相澤は溜息を吐く。要は我慢の限界が来たのだ。これまでの経歴、一番でなければ全てが負けと言える程優秀だった爆豪。そんな爆豪は雄英に入学して連続した敗北を与えられ続けてきた。

入試次席。因縁ある緑谷とのチーム戦に敗北。etc・・・。
彼が弱い訳では無い。なのに勝てない。なのに一番になれない。

求めている理想の高さ。即ちオールマイトすらも超える。オールマイトの経歴は謎が多いが、それでもあらゆる場面において一番だったことを予想するのは容易い。理想に指すら掛かっていない事への焦燥。

「はあ・・・とりあえず、用意はしておいてやる。だが耳郎が納得しないようなら使うことは出来ないからな」

教師としての血が騒ぐ、なんてことは無く。あくまでルールに則つて、両者の合意の上で話を進める。それなら問題ないと申請書には受領のサインを書いて放送室を出ていく。

目覚めは思っていたよりも早かった。と言うよりも、無理矢理目を覚まさせられたと言うべきか。目が覚めて意識が明瞭になり、そして飛び起きる。まるでテストの日に遅刻ギリギリの高校生のように、反射的に体は動いた。

一息に靴を潰し履き籠に入れられた携帯や財布を無造作に掴み取り蹴破るように部屋から出る。入れられていた部屋は会場の救護室。私は逃げるように小走りに離れていく。

「ああ、助かったよ。もう少しで相当まずいことになっていた」

安全地帯にまで来たと思ったら、ずるりと壁に背を預けながら滑り座り込む。呼吸を忘れかけていた訳では無いが、過呼吸の様に無造作に空気を肺に取り込んでいく。

きつとあと少し遅ければ、『ホワイトスネイク』が自我を持つタイプスタンドの幽波紋でなければ、決意を固めた私は早々に、宿敵であり強敵であり難敵である緑谷と相対することになっていたかもしれない。覚悟を決めたとしても流石に早過ぎる。

「大丈夫だ。今ようやく運び込まれたばかりだ」

原作記憶通り、轟との試合での無茶な個性の使用によって弾丸の様に指を、そして果てには両腕を狂気に取り憑かれたかのように使い潰すという頭のイカれた戦法を取った緑谷は、可及的速やかに救護室に運び込まれたらしい。SNSを更新してみれば、A組の生徒が搬送されたということが表記されている。

そのまま腕が永遠に使い物にならないという現実を思いながら立ち上がる。理想と、それが叶うことがないという現実を思いながら立ち上がる。「いい経験になったよ、ありがとうよクソツタレの炎野郎」

私がつぶつ倒れた原因は単純明快、熱中症と脱水症状だ。重大な事実を知ったことによる精神的な負荷もソレに拍車をかけているが、根本的な原因はこれだろう。

予兆すらなくこうなった原因は、恐らくDISCによる命令のミスだ。『ホワイトスネイク』のDISCは万能だ。人間を時限式に破裂させることなど、普通に考えてもありえない事だつてできる。用途が広いからこそ解釈も広がってくる。恐らくは私が命令を作る時に大雑把な設定にしたからだろう。

私は涼しさを感ずるように命令を書き込んだDISCを使った。結果としてあったのは、私の精神が清涼感を得ていたこと。そう、精神は何ともなかったが肉体自体は涼しくならず暑さにやられてしまっていたのだ。

今回書き込むべきだった命令は体温の維持だったり、体内の水分量の調整だったりしたのだろう。

これが分かったのは緑谷以外のことで大きな成果となる。戦闘時などは親衛隊達にはDISCによる支援を行っているが、それらのDISCも更新、ないしは見直しの必要があると気づくことができた。複数の命令による競合など、改めて検証する必要があるだろう。またスキューロに何人か見繕わせる必要があるな。やることはいっぱいだあ。

決して気分がいいわけではないが、悪いわけでもない。過ちやミスをこうして少しでも余裕のあるうちに見つけられるのはとてもいい事だ。ぶっ倒れたということ差し引けばプラマイゼロ。

いや、でも緑谷のこともあるからマイナスだな。まあいいや。こういった日は潰れるまで飲んで騒ぐのが一番いい。健康？知るか。晩酌の準備をしておくようにスキューロに連絡を・・・ええ・・・。

「お久しぶりです、ボス。このような場でこそありますが、お会い出来たことを嬉しく思います」

なんでお前がこんな所にいるんだよ・・・コカキい・・・。

相も変わらずいつてであろうと、ボスは存在感が他とは隔離していた。いや、それを理解し認識できるのはボスとしての側面や風格を知っている者のみ。一見すれば海外からの旅行者等にしか見えないのだが、真実を知るものからすれば一人だけ周りから浮いている。

人混みに紛れていたとしても、自然とその人混みが彼女を際立たせる素材となってしまうのだ。

「お久しぶりです、ボス。相変わらずお綺麗だ。このような場でこそありますが、お会い出来たことを嬉しく思います」

コカキがその言葉を発すると同時に、怒気も殺意もあらゆる感情の揺れすらなく、前触れすらも存在せずにコカキの喉が潰されかけた。周りには見えなくても、無論ながら幽波紋スタンド使いであるコカキには見えている。だが圧倒的だった。

ボスより現れた『ホワイトスネイク』の速度は目にも止まらぬ速度だった。動きの軌跡も追うことすら出来ずにコカキの喉を、圧迫されているのを誰にも見えないように皮からではなく気道を実に掴んでいる。

痛覚を与えぬように、違和感を覚えさせぬように、そして一言も話せないように、壊れ物を扱うように繊細に。そしてほんの少しでも力を込めれば、それだけでコカキが失声ないし、絶命できるように。

速度、そして精密性。この二つが極限まで高められているのが理解出来る。

心臓を掴まれているのにも等しい状況下で、しかしコカキはニコニコとした笑いを崩さない。忠誠を誓うボスの前での下手な行動は不敬にあたる。

先程の台詞についてを聞かれたら、まあ癖としか答えることは出来ないのだが。

『ああ、久しぶりで忘れていたよ。常にお前が私をそう呼びたがっていたことを。だがこれで懲りただろう？これで終わりに・・・いや、もっと強めに言い聞かせないといけないよなあ。このような場所で、私のことをボスと呼ぶな。次呼んだら殺す』

『ふっ、ふふふ．．．以後善処します』

幽波紋越しの会話であっさりと行われた絶対強者からの死刑宣告を表情一つ変えることなく返答できるコカキも只者ではないことも間違いない。それともこのような人のいる場所で下手な殺しはしないとボスが知っているが故か。

『まあいい。出会ったついでだ。車を出せ。少しだけ走らせるんだ』

「中々良い車じゃあないか。車に対して興味はない私から見ても分かったよ。しかしお前の好みとは随分と外れているようだがな」

「今の相棒製造役の車ですよ、これは。私の愛車はヨーロッパに置いてきました。日本の街並みに馴染まないんですよ、残念なことに」

黒く低車体のスポーツカーは速度に似合わぬ轟音の如きエンジン音を鳴らしながら市街を走る。ボスを運ぶのに相応しい丁寧な運転をしているが、エンジン音が全てを台無しにしている。

頼いと口に出して言わないし表情にも何の変化もないが、エンジン音が聞こえてから一瞬だけ不機嫌さを表した。それはとてもいけない事だ。ボスが不快になるなどあってはならない。この車はボスを運んだ後、スクラップにするかエンジンをもつと静かな物に取り替えるかしなければ。

「そういうえば意外でしたよ。貴方がまさか雄英体育祭というイベントに参加しているなんて。ヒーロー側の最も危ない場所に足を踏み入れるとは。イタリヤにいた頃は考えられなかった。変わりましたな」
「そんなに変わったように思えるか？たかだか人並みに私が動いているだけだろう。それともお前にとっての私は、塔の上に監禁されたお姫様というイメージだったのかな？」

「さて、どうでしょうね」

軽口のような会話だが、傍から見ればそれは異様な雰囲気満ちていた。上下に揺れ動くボスの威圧と、それをなんともないように、ともすれば楽しむかのように流していくコカキ。

「ふん、まあいい。私自身も自覚がある事だ。ああそうだな、確かに私は少し変わった。少なくとも気を引き締めなければならぬという事を自身に命じなければならぬ程にはな」

「変わった・・・もしかしたら変えられたと言わなければならないのでは？」
「変えられた？・・・あの子にか・・・」

「中々興味深い少女でしたよ。成長度合いなどを予測してみました。が、中々に恐ろしい。そして底が見えない。個性の成長というのは専門ではない私にはよく分かりませんが、彼女は明らかに異様ですよ」

成長と言うよりは進化という言葉が相応しい。まるで別物に変わってしまったている。本来進んでいたレールを力づくで無理矢理進路変更しているようにも見える。たった一年で人は、身体はそこまで変わることは出来るのか。超人溢れる世界になっても、その様は異様であるのは間違いない。

「で、だからなんだ？成長が凄まじいから、力が大きくなってきたから、目に見えて異様だから。だから殺すと？私の判断を、私の友人という事を無視してでも殺した方が良くと？」

舐めるなよ、そして忘れるな。私は常に最善を尽くしている。彼女については、アレが最善だと判断したからそうしているんだ。少し合わない内に耄碌しちまったんじゃないか？」

「出過ぎたことを言いました。やはり、貴方は変わらない」

その言葉は一聞すれば友を、耳郎響香を信用してのことにも聞こえる。だがコカキからすれば全くの別。強くなろうがどうでもいいのだ。そこに対して警戒を抱くのは、果てに妨げになる可能性があるということ警戒しているから。だが強くなろうが邪魔な存在にならなければ、自分達に対して何の害も無いのであれば、放っておいても構わない。そしてもし邪魔になるのであれば即座に・・・。

「そういえばお前、こっちに来てからどこに住んでるんだ？ああ別に言わなくていい。お前の許可なんて必要ないのだからな」

「ええその通りです。私はボスの命に犬のように従うのみ。それが私が望むことであり、貴方が私に求める唯一のことだ」

「分かっているなら良い。引越した。拠点を変えろ。場所は後でスキューロに聞か自分で調べろ。言い方を変えれば、潜入か？」

「ターゲット
目標は？」

「緑谷。緑谷引子。あのクソツタレをこの世に産み落とした最悪の女だよ。ああ、だがまだ殺すなよ。というより、殺さないで人質にしておけ。悟られないようにな。アイツのようなタイプは失くせば失くすほど迷惑極まりないからな。程々でいいんだよ」

それは未来を見据えた数少ない自分たちから与える一手。基本的に干渉を良しとしないボスにとつて、己の命運を決めうるかもしれない一手を、ボスはコカキに預けたのだ。

無論、言われずとも分かっている。ボスが求めるのはその先にあるものであると。緑谷引子を選んだことによる旨みを最大限に引き出すのだと。

コカキは正しく、ボスの言を理解した。

ちよつと来い。

常闇との試合に心身共に削りながらも苦渋の果てに勝利し次の試合相手、即ち優勝候補筆頭である爆豪への対抗策を考えている時に、ウチは爆豪に呼び出された。行き着いた場所はフィールドへ行き着く関係者以外立ち入り禁止の通路。ウチと爆豪、次の対戦カードの選手達が密談しているのを見られるのは不味いため、この場所選びは正解だ。

「なんの用？ウチもアンタも暇じゃないはずでしょ？」

そもそもとして、こうしている状況も不味いのは互いに明白である

のは間違いない。そもそも爆豪の入場ゲートは反対側だ。全力で走ればまだ間に合うが、話が長引くようであればどうなるか。遅れたことを誰かが疑問視するのは間違いなく、ここに来るまでに二人で歩いているのを雄英生何人かに見られている。爆豪は言わずもがな、ウチにも首席という肩書きがある以上、顔は多少は知られている。

それがもし、下手な人達に伝わればどうなるか。

体育祭前に他クラスとも色々あり、今ではA組の立ち位置は比較的悪い。そもそもA組ということさえ、嫉妬の対象として見られ、更に今年は輪をかけている。

A組という肩書き、学生ながら敵の襲撃を跳ね除けたという社会的な実績、爆豪というガソリン、そしてオールマイト。

オールマイトが教えるのはヒーロー学。つまりはヒーローとして必要な訓練実技である。そして雄英高校においてヒーロー学を取れるのはA組とB組のヒーロー科のみ。ほら、言うまでもなく明瞭になった。

嫉妬が溢ればどうなるかなど言うまでもなく、実際にそういった雰囲気は広まっている。そして何より、この場にいる二人、爆豪はともかくとしてウチも問題があるのは知っているし、周りの空気から察していた。

百万歩譲って、彼らが爆豪を認めたとしよう。何せ単純すぎる程に爆豪の『爆破』は強力だ。近中高速空戦対応可能。威力連射持久に關しても同様に優秀。そして何より、分かりやすく強いのだ。視覚聴覚、この二つの感覚を含めると、詳細なスペックを知らなくても強力だということは馬鹿でも分かる。派手というのはそれだけで強いのだ。

対して自分はどうか。『ディーヴァ』込の戦闘力は近中遠対応可能。音による高速攻撃。ソナーでの索敵。威力連射持久に監視で爆豪以上に優秀である。では、『ディーヴァ』抜きなら？

近距離での対応は攻撃の威力不足のため不可能。対応できるのは身体能力がそれなりの相手だけ。遠距離不可能。単身では音がバラける。威力は条件を満たせば絶大。満たせなければ皆無に等しい。

連射、威力がなければ無意味。持久も同様に。

ほら、見たことか。たった一つの要素を抜ければ雑魚の完成。
観客向けとは言い難い。芦戸との試合でやった技。ああいった
目に見えない技もあるし、決して弱い訳では無いが、彼らにとって重
要なのは分かりやすさなのである。

故にウチは周りから「アイテムがないとろくに戦えない」という印
象を持たれているのだ。だから当然、そんな首席がいることが彼らに
は面白いはずもない。

ウチがやったのは彼らの中で例えるなら、みんなが真面目に難関校
への入試勉強をして万全の態勢で挑んでいるというのに、一人だけ教
材やネットなどでカンニングをして試験を受けているようなもの。
そして試験者側がそれを容認している、と思われているのだろう。

返す言葉などない。全くもってその通りだ。青山のように個性を
まともに発動するために必要だからではなく、明らかに過剰の域にい
る。最早これでは『サポート』ですらない。武器兵器の領域にまで踏
み込んでいる。

それが許されるのなら自分にだって……。そう思うのは自然な事
だ。

ああ……。分かっているとも。彼らが言っていることは正当であり、
邪道なのは自身であると理解している。でもこれだって、こんなやり
方でもちゃんと認められたやり方なんだよ。

サポートアイテムを、特にこんなモノを扱うというのなら入試前に
然るべき場所に話を通しておかなければならぬだろう。そして
ウチは適正に試験を通ったのだ。勝つために手を尽くした。先へ進
むために、理想を得るために。

だから彼らの言葉を、感情を気にするつもりは毛頭ない。なぜなら
それは自分で認識しているから、確かめ予測していたことだから。時
として手を尽くすとは成功した代償として、自分の名誉を陥れること
に繋がるのだ。それを理解しているのなら、怖くはない。

だからウチは……

「次のオレとの試合、コイツを使え」

きつと勝つために、許される限り、外道でない限り、進むべき正道からそれない限りはどんな手段も取ってしまうのかもしれない。たった一つ、叶えたいことのために。大切な約束を守るために。

爆豪が耳郎へと渡したものは最早言うまでもなく耳郎の持つ最大の利点であり、他者を蹴落とし輝く王冠を手に入れるためには絶対に必要になるだろう物だった。

サポ^{音響}ートアイテム^{兵器}『デーヴァ』。

普段はコスチュームのケースと一緒に収められているはずのそのアイテムが今は爆豪の手の中にあり、それを耳郎に突きつけていた。先の彼の言葉とこの行動で、要件というのは一目瞭然。

今回の体育祭では使わないと、他者との公平性を保つ為に使うという選択肢を入れていなかったのだが、何故それがこんな所にあるのか。

「テメエの許可はもう取ってきた。だから遠慮しないでさっさと受け取りやがれ」

その言葉に嘘はないだろう。ここで虚言を言うのなら爆豪は次の試合、許可の出されていないアイテムを耳郎に使わせて、ルール違反での敗北を狙っているということになる。

そんな狡い真似を爆豪がするなどプライドが許さないだろうし、何よりそんなことをする必要も無い。

普通に戦えば爆豪と耳郎の勝負など論ずるまでもない。芦戸、常闇とこれまでの相手達とは違い、弱点らしい弱点が爆豪には存在していない。芦戸に対してはヒーローとしての精神への揺さぶり、常闇には個性の欠点を突いて勝つことが出来たが、残念ながら爆豪につけ入る隙はない。

「一応聞くけど、なんで？」

この言葉をどう受け止めるのかは爆豪次第だろう。受け取り方によつては複数あり、言葉の善し悪しまでも別れていく。人によつては傲慢に聞こえることもあるだろう。そういうった方向の場合、面白いはずもなく。

「んなことオレが完膚なきまでに、全部の負けを覆す為に、テメエよりも強いって事を証明するために決まってるだろうが！オレはもう誰にも負けねエ全部ぶつ潰す！！半分野郎も、テメエもだ！！そんでまずはテメエだ！だけど本気を叩き潰さなきゃ意味ねえだろうが！入試の時のテメエを、普段を超えなきゃ意味ねえだろ！！

そんで見てるヤツらに分からせてやる！オレの方が断然強えって！」

捲し立てるように早口で、だが確かに言いたいことは理解出来た。やっぱり、爆豪は予想通りだった。粗暴なくせに誰よりもこだわりが強い。

こうして全力で場の障害なく真つ向から戦う機会というのは中々ない。規定された戦場から出てはいけないという一つのルールを破らなければ、正真正銘誰も邪魔しない一対一。更にはこの結果は勝利であれ敗北であれ、世界へと報じられていく。強弱の順列が明確に広まり、そして固定される。

逃す手はないだろう。

(参ったな・・・もつと粘ろうと思ったのに・・・)

こうなることも、想定していた。爆豪という男は分かりやすい。いつも吐いている暴言を読み解いていけば、その真実は自然に浮び上がる。だからこうして命令してくる可能性は考慮していたのだし、断る言い訳も考えていたのだが。

如何せん、断る為に用意していた言葉が出てこない。他者に情熱をこうして正面からぶつけられることが、こんなにも逃れられないことだとは、考えてはいなかった。現実には常に想定よりも上回るもの。想定よりも耳郎は押しに弱かった。

正直なところ、こんな我儘と言えることに付き合う利点はほとんど

ない。確かに勝つことは重要だ。限られた人数で優位に立ちながら世界に自分をアピールできる機会は3回しかないのだ。ならばこそ、インパクトとは重要なもの。

去年との比較、成長応用。無論、結果も付き纏ってくる。

だが耳郎にとつては飛躍がすぎる。それを行えば雄英内だった耳郎への悪態が際限なく広がるということ。

「一応聞くけどさ……ウチの噂とか聞いたことあるでしょ？」

聞こえていないはずがない。爆豪への批判も強いが、耳郎も相応の数があるのだ。上述したように爆豪は純粋な実力だが、耳郎は張りぼて。明らかとして両者へ与えられる評価は性格暴言抜きにしても歴然となるだろう。

「んなモブ共のこと知るかア!! テメエは黙って全力で俺と戦って負けりやアいいんだよ!!」

勝利を当たり前としているが故。唯我独尊を地で進む爆豪にとつては妬み嫉みなど自分を讃える声でしかない。他者の嫉妬とは同時に自分を認める声に他ならない。

だから、本当に凄くと思える。他人の声を無視するのは得意だが、真っ向から跳ね除けるといいうのはなかなか出来ないことだ。だから素直にすごいと思う。自分に出来ないことを出来る人は、どうしようもなく凄く見えるから。

「分かった。でも余計なことしたって後悔するよ。皆の前で大恥かかせてあげるから」

「言ってるボケが」

ディーヴァを渡して爆豪はここから全速で走り去る。流石に不味いと思っただろうし、何より全力で走ることに意味がある。あちらもこちらとも万全と呼べる状況でぶつかり合っただけ。

さあ、思考を変えて考えよう。今までの案は全てが撤廃。方向性を変えていくのだ。素の状態の戦法を頭から追い出して、いつもの状態へシフトする。浮かび上がるのは夥しい程の対応策。爆破に対して有効となり得る技法が頭に浮かんで消えて、留められていく。

そして待ちに待った準決勝二回戦が始まる。対戦カードは首席と次席。盛り上がらないはずがなく、今日一の興奮を届けてくれるだろう。

拍手しそうな程素晴らしい試合だ。周りは引いてるけど

ずっと牙を研ぎ続けてきた。

爆豪勝己の人生を彩るのは勝利である。世界的に見ても優秀極まる個性。人の外見でありながらそれなりの異形型にも届く身体能力。鋭い勘を備えながらも頭の巡りも優秀で、それら2つを合わせた戦闘技術。

他人が持っていないものを持っていた。他人が優れている物よりも優れて持っていた。故に爆豪勝己にとっては勝利とは当然のことなのだ。だって自分は凄いから。周りは自分を引き立たせる石ころでしかないのだから。

だから、我慢ならなかった。自分が誰かの下に位置付けられていることが。近い誰かよりも劣っているということが。

流石にエンデヴァーやオールマイトといった傑物達とはまだ比べるまでもなくとも、同年代であれば抜き出ているのが当然だと思っていたし、そうだと確信していたのだ。才能だけに頼るのではなく、弛まぬ努力を文句も言わずに行なってきた。だからこそ堪らない。

屈辱は晴らさなければならぬ。正々堂々正面から木っ端微塵に見せつける。爆豪勝己こそが雄英高校で最も強いということ。

彼らには聞こえていなかった。プレゼントマイクの実況も、耳郎の変化によって惑う観客ギャフリンの喧騒も。見えるのはただ一人、目の前の強敵のみ。周りなど微塵も視野に入れず、彼らは彼らの世界を築いている。

西部劇のガンマンのように全神経を集中させている。その二人の漏れ出た熱は会場中に更なる期待を膨らませている。

直立の体勢など取っていない。爆豪は左手を顔前に、右手を身体で隠すように身体を横にする。対して耳郎はいつでも猛威を振るえるように『デーヴア』への接続を済ませている。共に意欲は十分であり、後は合図を待つだけだ。

そして待ちに待った時が来た。満足するほど実況したプレゼントマイクが準決勝第二試合の開始を告げた瞬間、地を砕く音と同時に爆豪の腹に耳郎の拳が突き刺さっていた。

「ガッ、ツアッ・・・!?!」

決して目を離していたわけではないし、耳郎が何をしたか分からなかったわけではない。見えていたし理解出来ている。やったことは単純だ。開始の合図を拾ったと同時に全速力で走って爆豪に拳を打ち込んだだけだ。ただ、強化系の個性と見紛うほどに。

「離・・・れるオっ!!」

幸いなことに、クリーンヒットしたとはいえダメージはそれ程ではない。痛みや息のしにくさで動きにくくなることは無かった。想定外の行動に戸惑いながらも、身体は自然と動いている。払い上げるように爆破を行い攻撃と同時に煙幕を張り、爆破で身体をとばして反対側へと着地する。

(どうなってやがる・・・コイツは・・・)

着地した地点にあったのは、人の足ほどの大きさに砕けた地面だった。コンクリート製の大地は大きく崩れており、足首ほどまで埋まりそうだ。

見れば分かる。これは度を越えた力を込めた踏み込みによって砕けた地面であり、先程の不可解な耳郎の移動の際に生じたものだろうことを。耳郎がこれを行ったのか、俄には信じ難い。確かに超人社会になってから女性であっても規格外の力を持てるようになったが、彼女の個性ではこのような足跡は作れない。

「・・・っ、ちっ!!」

煙が晴れる間もなく、引き裂きながら耳郎が突進してくる。その速

さはやはり今までの比ではなく。しかし逃げるつもりは爆豪にはない。避けに徹するのも戦法の一つだし、不用意に踏み込まない事も策であるが、爆豪には算段がある。

「驚いたがよオ——」

獣の如き敏捷さで地を砕きながら進行してくる耳郎。その速度はやはり二度目でも目で追うのがやっとだが——。

「んなぼつと出で、オレに勝てるわけねえだろうがアツ!!」

瞬時、拳の射程距離から逃れるように身を屈め先程の仕返しとばかりにカウンターをお見舞いする。腹部へ穿たれた拳撃は先程耳郎が与えたダメージの比ではなく、同時に殺意高めに爆破をお見舞する。爆破が当たった感触がすると、直ぐに感触は消える。どうやら逃げたらしい。

「ふざけてんのか、テメエは」

煙が晴れた先にいる耳郎を睨む。感触は言うまでもなく確実。たとえ一瞬とはいえほぼゼロ距離の爆破を無防備に撃ち込んだのだ。耳郎の身に如何な変化が起きたとはいえ、あの爆破ではかなりのダメージが入っているのは間違いない。

「ふざけてると思う？」

「ああ思うね。ふざけてなかったら何なんだよ、テメエのそのザマはよオ!?!」

静止している耳郎の姿は控えめに言ってボロボロだった。爆破された腹部は頑丈な作りをしているため破れていない体操服の上からでも分かるほど痛々しい焦げを見せている。爆破時に生じた熱は間違なく腹部を熱しているだろう。事実、痛みで顔が少しだけ歪んでいる。

一回戦目の麗日は直接的な爆破を回避していたし、二回戦目の切島は肉体硬化系の個性であったため、目立った外傷は見受けられなかった。ガードがあってもこれなのだ。爆破による強力さが簡単に伺える。

「いやいや、普通に考えなよ。コレがあったところで、ウチとアンタの相性は最悪だって分かるでしょ? コツチはほら、そもそも対人用に作

られてないからさ」

両腕に付けられている『ディーヴァ』を見せて、次に腰に付けられている『ディーヴァ』を軽く小突く。色は同じだが形状に少しだけ差異がある。手の甲に付けているのと腰の予備のように備え付けられているのは別物だということだ。

対人用と銘打っているが、出力を引き上げれば轟を相手にしたように物理的破壊が行える。寧ろそちらが正しい規格なのだが、それは耳郎にとってはいけない事だ。手を出せない領域にある。

よって対人用は欠点として、対象を人か物に分ける必要がある。故に轟のような者を相手にするのなら、個性を破壊できても本体を攻撃出来ないため、千日手による持久戦に持ち込むことになる。攻撃するには調節の為に一瞬のラグが要り、その隙は致命。

対して対物用は見境がない。物だろうが人だろうが、容赦なく破壊する。対象の強弱なんて関係なく、射程内出力内になれば無造作に。この場でそんなことをしてみれば答えは簡単だ。爆豪に当たろうが当たらなかりうが、背後にある客席は地獄となり、耳郎は最新の虐殺者として名を残すだろう。正しく兵器として猛威を奮う。

ならば騎馬戦や芦戸の時に使った『不協和音』^{デイスネンス}はどうか。騎馬戦の時は心操に気を使っていた。芦戸の時は『ディーヴァ』がなかった。一対一で状態としては完全と言える今ならば平衡感覚を奪うのではなく、相手の体調そのものを乱してしまえばいいのではないのか、と。その案も勿論考えた。だが今回ばかりは相手が悪い。正直、爆豪には効きが悪いのだ。いや、効き自体は問題ない。『不協和音』^{デイスネンス}は人体であれば問答無用で作用する正しい音響兵器としての発展形だ。爆豪であれ異形系であれ、容赦なくその身を蝕んでいく。

ならば何が悪いかと言えば、爆破という個性だ。爆発は思うよりも瞬間的な音が大きすぎるのだ。音波という波をほんの一瞬程度だが強引に相殺できる。思えば開始時の爆豪は既にソレを警戒していた。左手を顔まで上げていたのは盾としてではなく、音波を警戒してのことだろう。肉体が硬直した瞬間に爆破する為に。

爆豪と相性が悪いのもさることながら、そもそも耳郎と『ディー

ヴア』は対人戦闘においては未だに強者とは言えるレベルではない。少しはマシになったとはいえ接近戦でできるのは嗜んだ程度の我流。技術差すら圧倒的であり、且つ遠距離は大技が使用不能な上に爆豪は爆破による縦横無尽の移動法もある。

耳郎と『ディーヴア』。確かに手札は多いし、強力な物が数多く揃っている。ルール無用ならば爆豪にすら手間取ることは無いだろう。だが彼らは枷の多いヒーローの卵としてここに在る者であり、更には手札を現状使いこなせるかどうかは別である。

基本的に物理攻撃が少ない耳郎にも物理攻撃の手札は少ないが持たえているが、残念ながら現在はソレを使いこなすことが出来ないのだ。

「ぶつちやけ今のウチじゃ逆立ちしなきゃマトモに戦うことすら出来ないだろうしき」

「だから、テメエは逆立ちしたってのか・・・？マトモに使ったことがねえ物で、このオレに勝てると思ってたのか？」

「やつぱ・・・バレたか・・・」

「当たり前だろボケが。どう考えても一撃目、マトモに入ったとは思えねえほど軽すぎる。ソレに移動も不自然だ。テメエの作った足跡、穴の深さがバラバラだし、最後は歩幅が変わって、勢いが完全に死んでやがる。こんなんでもマトモに殴れるわけがねえ」

耳郎が取れる手段は少ない。遠距離攻撃は耳郎自身の精度と合わせれば爆豪相手では拙すぎる。ギャング・オルカのような音波攻撃による全身麻痺などは気楽に引き起こすことが出来るが、そもそも爆豪相手に当てられるかと聞かれれば否と答える。優れた身体能力にセンス、何もかもが足りていない。

如何に『ディーヴア』の性能が優れているとはいえ、所有者が未熟ではこのザマである。製作者に申し訳が立たない。スペック上は圧倒出来ても可笑しくないのに。

「テメエ、一体何しやがった？」

爆豪のその声が発せられた直後、生温かい赤が冷たいコンクリートを濡らした。

試合中にも拘わらず、問答を行っている爆豪と耳郎に観客達は戸惑いながらもやはり醒めない熱を抱えていた。耳郎の超絶した身体強化、それに瞬時に対応してみせた爆豪。短い攻防とはいえ、この時に行われた試合は盛り上がりを維持するのには十分だった。

そんな彼らとは反対に、A組の彼らは沈黙している。理由は言うまでもなく耳郎の不自然な程の強化、それ一点。

「おいおい、何だよアレ．．明らかに個性違うだろ。走るだけでコンクリートに穴空けるとかオールマイトみてえじゃねえか」

いの一番に戸惑いを上げたのは何だかんだつるんでいる上鳴。上鳴はUSJの時と言い、耳郎の戦闘に居合わせることが多い。だからアホ寸前になっていたとしても、その戦闘スタイルは忘れるものか。

果たして記憶にある耳郎は、この様な身体能力を有していたか。間違いない否である。だが手を抜いていたかと聞かれてもそれも否。あの時は間違いなく必死だったし、それは疑うまでもない。

ああ、だけど。こんな隠し玉があるのならあの時に使っていて良かったのでは？と思うしかないのだ。未だに彼らは『ディーヴァ』の全容を知り得ていない。だからアレがあればこんなことも欠伸びながらも出来てしまうのではと思つてならないのだ。

それでないのなら、やはり轟のように個性がもう一つあるということなのだろうか。だがそれだと体力測定の時も屋内訓練の時も、そしてUSJの時も誰よりも手を抜いていたということになる。

そんな彼らの不安な思考を遮るように、耳郎は変化を起こしていた。いや、耳郎に変化が起こっていた。

端的に言つて、雄英高校の青生地と白のラインのジャージが赤混じりのドス黒い色に徐々に変色していつているのだ。

「なっ?!」

「おい、アレって血だろ?!どうなってやがんだよ!」

「いや、待て。血と言ってもそんなに多いというわけじゃない。だが・・・」

出血箇所は両手両足。流れる血が衣服の内から手に伝う。腕ならば手に、足ならば靴に赤が伝っていく。そしてモニターを見てみれば唇の端からも少量の吐血が見受けられる。明らかに異常事態であるのは誰の目から見ても明白だ。審判のミッドナイトが即座に介入して止めに入ろうとするが、耳郎は彼女を片手で制する。まるでなんともないかのように。

「おいおいおいおい、耳郎の奴何考えてんだよ!?!明らかに大丈夫なんかじゃねえだろ!?!」

「ああ。まるでアレは・・・」

焦り散らす上鳴を抑え込みながら、障子は個性によって目を増やして耳郎を、そして壊れたフィールドを観察して思案する。0から100までの爆発的な身体強化、そして使用後に身体が傷つく。

その痛々しい様は壊れ方の種類は違えど、それは彼らのよく知る光景で。

駆けつけようとしているミッドナイトを手で制しながら、平気ですと会釈して鉄臭い口元を袖で拭う。やはり内臓が潰れかけたらしい。更には袖で拭った時に微かに見えた腕部にも血が付着している。流石にアレはやり過ぎたと自覚しているが、急加速にも程があった。肉体の悲鳴が個性を通じてよく聞こえる。

ここでレフエリーストップが来ても可笑しくないのだが、止めることなど出来やしない。なぜなら既に、学校側は緑谷という特大を限界

まで見逃してしまったのだ。流血の差はあれども、負傷の度合いは桁違いだ。全身満遍なくでは無く一箇所を集中的に、そして時には重ねがけで破壊していく様と比べれば、この程度は普通である。

「ウチがやっていることは、アンタのよく知る緑谷と変わらないよ。肉体の許容量を超えるほどの身体能力で移動する。使えば使うだけ身体がぶっ壊れていく。まあウチは緑谷と違って制御はそれなりに利くんだけど。やっぱりマトモに二回しか使ったことない技じゃ加減がまだ掴めない」

打つ手が壊滅的だからこそ、取れる手段は究極の一手、最後の切り札。即ち自壊前提で自身を振動させる事によって身体能力を圧縮しての決死の特攻。前に練習で使った時は、マトモに動くことさえ出来なかった。事前の覚悟の問題もあったのだろうが、最初からフルパワーで使おうとしたのが間違っていた。その時は一週間にも及ぶ全身への激痛と筋肉痛でマトモに動くことさえも出来なかった。あの時は痛みのあまり涙を流して芋虫のように這いずり回った。シクリーザさんが来てくれなかったら行方不明で警察沙汰になっていたかもしれない。

無論、習得を諦めたことは無い。毎日少しずつ弱め弱めに身体を慣らしたりすることで少しずつだが順応していくようになった。だがそれだけ。年単位で行なっていたわけではなく、半年にも満たない期間では使いこなせるなどという上手い話があるわけが無い。事実、今こうして肉体が自壊を始めようとしている。緑谷以上に、肉体が潰れている。

そもそも緑谷と耳郎では自壊に差が生まれるのは当然。耳郎は知らないが、緑谷は一年間にも及ぶ期間、集中的に肉体を虐め抜いて師であるオールマイトの想定以上のことを成し遂げていた。それに対して耳郎は入試の三ヶ月前に『ディーヴァ』を使い始めたのだ。それまでは集中的な特訓は何一つしていない、基礎鍛錬ばかりである。

男女の肉体の差はあれど、鍛えている年季が違う。僅か九ヶ月の間に一つを貫いた緑谷に対して、耳郎はオールマイティに満遍なく鍛えた。

「ふざけやがって・・・！」

「それだけ本気って事だよ。ぶっ壊れても勝つっていう心意気があるってこと。それに、別に一発限りの大博打って訳じゃない。要は、下げて調整して最後まで我慢すればいいだけ。心が持てばイける」

緑谷と耳郎に違いがあるとすればここだ。緑谷は未だ100%しか扱えない。十分の一でも明らかに十分な状況でも、調整が出来ないために障害を乗り越えるために肉体の一部を破壊しなければならぬのだ。

対して耳郎は調整が可能であり、それは耳郎側からも『ディーヴァ』側からも可能である。強すぎるというのなら弱くすればいいし、これ以上は肉体がもたないと言うのなら予めラインを設定していればいい。これでも多いのなら更に弱くすればいいと。足りないのなら一瞬でも強く。

「上等じゃねえか・・・!!ならテメエの望み通り、完膚なきまでにぶっ潰してやるよオ!!!」

何を思ったのか、もしかしたら緑谷を出されてイラついたのかもしれないが、さつきよりも戦意が上がったのは間違いなかった。その様子を見て耳郎が地雷を踏んだかと思案するのも無理はない。

制限時間がある中でこれ以上無駄な会話で時間は取らないと考えるのは当然であり、必然的に今度こそ両者は合図すらく爆音を鳴らしながらぶつかった。

再度行われたぶつかり合いは速さによる不意打ちでもなく、真つ向からのぶつかり合いで始まった。そして続くは正面戦闘。個性を混

じえて派手になっているとはいえ泥臭い肉弾戦は、従来の雄英体育祭の生徒同士の戦闘からはかけ離れていた。

泥臭いというのに、見ている者達は心を奪われたように嘘のように静かになっていた。

爆豪による爆撃混じりの高速戦闘。

耳郎による調整の緩急が入った高速戦闘。

間に入る細かい技の駆け引きなど、凡そその筋であれば学生レベルから大きくかけ離れている、現段階でも戦闘という分野においては下手なプロにさえも手が届く彼らの戦闘は、一般の観客達では単に凄いい、速いという単調な感想しか出ず、ヒーローであつても舌を巻くほど。

この戦闘が始まつて、更には前準備とでも言うような試合開始から会話の終わりまでが合わせて十三分。終了までの残り二分、時間経過の感覚が曖昧になっている選手は更にギアを上げていく。

眼前で急加速する耳郎に付いて行こうと爆破で無理矢理身体を捻り、無茶な方向転換を行う。当然無茶した分の負荷は小さくはなく、苦悶の声漏れ出るが知ったことかと吐き捨てる。無理をした代償に傷を負い、対価を払ったことにより爆豪は耳郎へ追いついた。横から不意を打つような薙ぐような爆破だが、これすらも更に急加速した耳郎に避けられる。

あちらがやったからこちらもと、先程から千日手の様に繰り返される無茶の応酬。それは見るものが見れば明らかな程の無謀であり、同時に危険なものでもあつた。

耳郎は言わずもがな観客の前で流血沙汰を起こしてしまっている。これは耳郎の申告と審判であるミッドナイトの判断により続行が下されたが、今はどうか。初手は明らかにこれまでと違いがあつたが、今も大概である。突然行われる急加速に急ブレーキ。人体の構造を度外視しているかのような動きは、危険極まりないものだ。今はまだ骨折などの目立つ傷はないようだが、無理な動きで出血した箇所から更に血が溢れている。危険と呼べるほどの量では無いが、それでも軽く見ることは出来ない。

「ようやく開いた!!」

決死の連続攻撃と、避けるつもりのないノーガード戦法。それらを繰り返し、時には自壊する痛みで止まりそうになりながらも辿り着いた一つの光明。即ち出力調整が一定レベルまで成功し、爆豪の背後を取ることに。

きつと爆豪のことだから、有り得ない身体能力で振り返って来るだろう。でももう間に合わない。相手を倒す必要なんてない。相手に地に着ければ、それで勝ちなのだから。

狙うは足。如何に爆豪と言えど、今の耳郎が相手では耐えきることが不可能なはず。高い身体能力に全てを込めた最後の攻撃。狙い続けた勝利をもぎ取らんと、全力の一步目を踏み出した瞬間に、耳郎の勘が最大限に警鐘を鳴らす。駄目だ失敗する、取り返しがつかなくなる前に今すぐ引くのだと。

「開いたんじゃねえ。開けたんだよオツ!!」

その警鐘は直ぐに実を生じた。耳郎が勝機を見出したと同時に、爆豪も己の勝利を見出し、確信していた。

耳郎は一つだけ、致命的に間違えていた。爆豪に備えられた天賦の才は、天才などという軽い言葉で済ませていいものではなかったというところ。正面から、傲慢に、不遜に、誰の想定をも爆散させながら躍進飛躍するのだと。何より彼もまた、運命より寵愛を受けているのだと。

そんな爆豪を耳郎程度の想定規格内に入るなどとは、よく言った。ならばその身で味わうといい。自らの判断の間違いを。

ぐりん、と爆破によって捻じ曲げられる爆豪の肉体。そのまま流れに逆らわず、足を地面から離して宙に浮く。そして勢いを利用して錐揉み回転で後ろに飛び退く耳郎目掛けてミサイルの如く突っ込んでいく。

「榴弾砲着弾オオツ!!!」
ハウザーインパクト

耳郎に着弾寸前で引き起こる特大の爆発。素手の爆豪の持つ最強

の手札。その威力は最早優秀な学生の範疇を優に超えている。間違っても少女一人に放つていいものではない。いや、そもそも対人技ですらない。

確かに今年は例年以上に才能に溢れた生徒達が多かったが、これは流石に有り得ない。個性もそうだが肉體操作、更には容赦の無さも群を抜いている。狙っていたとはいえ、あの体勢から無理矢理錐揉み回転でこの爆破を起こすなど。

勝負はついた。流石に四肢欠損や、ましてや死亡などという最悪の事態はないだろう。そこは爆豪も理解できているはずだ。盾となるものが何も無いのに、あの爆発を正面からマトモに食らって無事でいられるわけが無い。もしアレが自分に向けられたと思うとゾツとする。それほどの火力。

だと言うのに、だ。

「榴弾砲——！」

どうして爆豪は既に二発目を放とうとしているのか。自分の強さアピールか？それならばまだいい。だがなぜよりもよつて、爆煙の中の耳郎がいるであろう場所に目掛けて再度突っ込んでいくのだ。再度言うがアピールするのならば別にいい。良くはないが、まあいい。だが敗者に鞭打つように攻撃を仕掛けるのは。

誰かが過剰攻撃だと叫んだ。ミッドナイトが、セメントスが直ぐに止めようと動き出した。クラスメイト達も、特に神経の細い者達は目を覆って、背けている。

そして今まさに、誰の制止も間に合わずに二発目が着弾しようとした刹那。

「負け、るかアっ!!!」

空気を引き裂き、ボロボロの姿となった耳郎が躍り出る。見るに堪えぬほどのズタボロ状態という訳では無いが、大技を受ける前と今では明らかにダメージ量の桁が違う。ガードしたか、それとも逸らしたか。あの火力を考えると食らったダメージは軽いほうだろう。だがそれでも、自壊を含めたダメージが蓄積されている。背中を押せばそのまま倒れてしまいそうだ。

爆破を重ねて錐揉み回転しながらこちらへ向けて再度突っ込んでくる爆豪に対し、耳郎は今度こそ逃げることなく立ち向かう。相手が何をしてくるか、どのような技が来るのかは理解出来た。あれだけの大技、途中の瞬時の切り替えは流石の爆豪も不可能だ。ならば何をされるか分からない状況で迫る時間と戦うよりも、今この時、手札を切れない状態で迎え撃つことが得策。

既に準備は済ませている。後はぶつかり合うだけだ。

インパクト
「着弾オオツ!!!」

ハートビート レジナンス
「心音、共鳴ッ!!」

最後の勝負に出た耳郎は、次なんて考えていない。既に身体はボロボロで疲労は限界値へと達している。もしここで決めきれなければ緊張の糸が切れて倒れることだって有り得るだろう。

そも、この時点で耳郎は次への道を自らで絶っている。ここを乗り越えたとしても、轟と相對することなど不可能だ。ただでさえ轟の氷の性能を一度体感しているというのに、ましてや今の轟は炎さえも使いかねない。まず間違はなく勝てない。

故に耳郎は余力を端から、それこそ試合開始時点で爆豪の正面に立った時に捨てていた。

耳郎と爆豪の激突の瞬間、ふと爆豪は疑問を抱いた。耳郎の行動があまりにも遅すぎると。先程までの無茶苦茶とも言える身体能力の動きと比べれば今の耳郎は平時と何ら変わらない。爆豪からしたら遅すぎてむしろ痒くなるほどだ。

耳郎が何を狙っているのか、爆豪には分からなかった。身体能力の超上昇ならば非常時に備えて逃走を選ぶことだって可能はずだ。だと言うのに、どうして正面から向かってくるのだ。爆豪の榴弾砲着弾は爆豪本体は接触しない技だ。既に一度受けている耳郎がそんなことを察せないはずがない。

ならば有り得るのは固定砲台の如く、音波による砲撃か。ならば同じ砲弾技同士、正面から打ち破ってやろう。

そう思っていたし、想定していた。耳郎のこれまでの手札を考えて、最も勝率が高い攻撃がそれだと判断した。事実、間違っていない。耳郎の個性で現状最も適している攻撃は砲撃だ。それは厳然たる事実。

真つ向から迎え撃つ。耳郎の狙いは爆豪の推測とは違い固定砲台として砲撃を行うつもりは微塵もない。その選択肢はとうの昔に切り捨てられている。爆豪を倒すのであれば、物理接触からの撃破しかないハウザーインパクトと断定している。そして無論だが、榴弾砲デューッア着弾が自分の拳よりもはやく着弾するなど当然理解している。

故に狙いは一つだけ。着弾前に攻撃を当てるか、同時に当て合うか。足りないのは拳一つ分。きつと速いとか遅いとかではタイミングをずらす事は出来まい。爆豪のことだ。この大技は理性ではなく感覚で撃っているだろう。それで本当に強いから手が付けられない。

拳一つ分という絶対の壁。踏み越えるべきその壁の破り方を、既に耳郎は知っている。気まぐれ程度の雑談で、かつて教えてもらったから。

やり方は至って簡単だ。くつついて縮小している分を、予め伸ばせば外せるほど個性で離す。ただそれだけ。字面にすれば簡単な事だ。それが、腕の関節の話じゃなかったらだが。聞いた話では特殊な呼吸法で関節を外す痛みを和らげている事でマトモに使える技らしいが、当たり前だが耳郎はそんなものは使えない。

そも関節を外す痛みに耐えられるのかどうかすらも分からないが、まあ今ならば問題ないだろう。何せ、積み重なった重度の痛みで全身の感覚が鈍くなっているのだ。今更関節を外した程度の苦痛、涼しげに流せてしまう。

さあ来るぞ。当たるのは顔か、肩か、腕か。いやどこでもいい。相手に合わせようとするな。確実に先手を打つことを考える。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

雄叫びを上げながら錐揉み回転してくる爆豪目掛けて、渾身の拳を振るう。そして同時に、脳裏に強く伝わる違和感。重なる苦痛とはま

た違う、体感したことのないような痛みが意識の断絶を許さない。

(いつけええええええええええ!!)

声すらまともに出ないので、心の中で祈るように叫ぶ。爆豪にギリギリで届かない予想通りの拳が痛みを代価に伸びていく。折りたたまれた関節分の拳が伸長される。

伸び行く拳は『ディーヴァ』によって必殺の拳と化し、爆豪の予想を狂わせてその鼻っ面へ——。

いつの間にか体育祭が終わってた。もう次にいるけど

目が覚める。開いた傍から差し込んでくる目を細めなければまともにも開くことも出来ないほどに鮮烈な光。当たり前だけれど生きている。ピツ、ピツ、ピツ、ピツ、という規則正しい電子音だけが聞こえるかと思えばそうでもなく、薄くだが歓声らしき声が聞こえてくる。

「ツッ——」

起き上がろうと上体に力を込めてみれば、ダムが決壊したように全身に酷い激痛が走る。燃え上がるような烈火のごとき苦痛が、代価を払えと当然の如く全身を駆け巡る。無茶した分の代償が、今この時も苦痛となって払われる。

流星に起き上がることも出来ないとは想定外——でもなかった。

「起きたか」

「相澤、先生……」

ベッドを囲むように掛けられている白いカーテンの内側に、相変わらず包帯だらけの相澤先生が座っていた。ここにいるということはおそらくは実況の仕事は終わったのだろう。そして、ということやはり自分は。

「結果は、やっぱり……」

「ああ。爆豪との戦いは引き分けだったが、爆豪は線の内側、耳郎は外側だったから、勝ったのは爆豪だ。三位決定戦もこの有様だから不戦敗。ベスト4だな。今丁度閉会式やってるよ」

最後の激突は一度目の爆豪の技でライン際に追い込まれていた。二度目で何とか押し返せたと思ったけれど、そう甘くはなかったらしい。いや、引き分けだった時点で負けは決まっていただろう。負傷度が何より物語っているし、こうしてベッドの上にいるのだから。

「勝ったのは、轟ですか？」

「いや、爆豪だ」

驚いた。最後の攻撃で爆豪もそれなりに負傷はしていたはず。少

なくとも過度な動きは出来なくなっていると思ったのだが、まさか爆豪が勝つとは。予想外もあったものだ。それだけ爆豪がウチの想定を上回っていたか、もしくは轟に問題があったのか。

もし後者なら、きつと爆豪は大荒れだろうな。叫び散らしているかも。

「はあ・・・お前の身体の事だが、婆さん、リカバリーガールと他の治療系の個性を持つヒーロー達が協力して治療した。緑谷程重い負傷はなかったから後遺症とかの問題は無いらしい。ただ少なくとも向こう二週間は絶対安静。完治するまでの間は婆さんの所に通院とのことだ」

それは、運が良かったと言うべきなのか。告げられた診断を疑ってしまいそうだが多種多様な重傷患者を見てきたリカバリーガールお墨付きなのだからまちがいないだろう。アレだけの怪我を負って僅か二週間で済ませてしまうとは。予想だと一ヶ月は安静と言われると思っていたし、覚悟もしていたがリカバリーガールをはじめとした治療系の個性持ちは強力らしい。

「正直、お前には悪いことをしたと思ってるよ」

思案に耽っていると、相澤先生が頭を掻きながらボヤク。

「最初からサポートアイテムを使うつもりが無かったのは分かっている。いや、お前のことだから使う可能性も考慮していたんだろうな。だが結局は本人が持ってきてない書類に許可を出して、怪我を負わせた俺の責任だ。すまなかった」

そう言つて、頭を下げられた。確かに相澤先生の言葉通りかもしれない。爆豪が勝手に記名して提出した書類なのだ。事後承諾とはいえ本来であればサインを出すなど以ての外である。問題行動だと言われても何ら可笑しくない。

だがその言い分が通るのであれば自身こそが最も罪深い。許可を出そうが書類が受理されようが、最終的な選択肢は自分に与えられていたのだ。当たり前だがこんなことになったのは自業自得。

サポートアイテムを使うこと自体は何も問題ないのだ。要はどのように使ったかが問題なのだ。そして使ったのは自分であり、使い方

を選択したのも自分である。確かに爆豪や相澤先生にも非はあるだろうが、それでも根本的に悪いのは自分である。

「親御さんには連絡しておいた。直に来るはずだから、じつとしてい
ろよ。まあ治療の反動やらでマトモに動けないらしいが。ああ、帰る
時はそこにある車椅子を使うといい。返すのはいつでもいいぞ」

そう言つて相澤先生は立ち上がって出口へと向かう。恐らくこれ
から事後処理等が待っているのだろう。本当に悪いことをしてし
まった。

その後入れ違いにリカバリーガールがやって来たが、どうやら相澤
先生から伝えられた通りの内容で、しばらくは松葉杖生活になるらし
い。

「悔しいな」

枕は涙で濡れていた。

「んっぐ、ぷはあく！ああああ癒されるううう」

風呂上がり、バスローブに身を包みながらソファにどっかりと腰掛
け、一本数十数万はするワインをグラスに注がず、ボトルごと呷る。
今日は色々忙しいらしく、スキューロが珍しく部屋にいない。どう
やら隠れ家の一つでシーラ達と共に何かをしているらしい。

コカキとのドライブ中にツマミの用意をしておくように言ってお
いたので、テーブル上に生ハムとチーズが盛り合わせられていた。

とにかく喉を潤したくて仕方がない。手当り次第にワインボトル
を保管庫から持ってこさせて、開けて開けて開けて開けて開けて開けて
ら逃避する為に酒に逃げるのは正直どうかとこうしている今でも思
うが、こうしなければやっていられる筈もない。

「やあて、どう調理してやるべきかあ」

こうして幸福な時間を謳歌している途中でも、嫌なことを考えるのはやめられない。最早習性みたいなものだ。脅威が明確化している今、考えずにはいられない。思考停止が死に繋がることだってある。このタイミングにも最善の行動への糸口を逃してしまってもいいのだ。

「さしあたってはステインだけど、さてどつちに動員するか」

当初の予定では個性無効化が可能な相澤を始末しようと引き入れたのだが、緑谷に直接ぶつけるべきかもしれないという考えも生まれてきた。ステインの個性は性能や発動条件等の問題もあり、個性全体として見れば中の下程度だが真に重要なのは個性ではなくその戦闘技巧。功績として残ったのは飯田の身体に痺れが残ったということ。これは非常に素晴らしい。

原作では飯田だったが、緑谷のような一瞬の制御ミスも許されない奴相手ならば、手足のいずれかに恒常的に痺れが残るというのはあらゆる動作を一瞬とはいえ遅らせることが出来るということ。

その遅延をつけられるかは別として、そういった明らかな欠点は非常に嬉しい。

「でもなあーステイン雑魚だしなあ」

個性を威力控えめで殺傷しないようにぶっぱする以外捻りも何も無い轟と、復讐から少しは冷めたとはいえ負傷していた飯田、ギリギリ常時5パーセントの緑谷。今思えばなぜ負けたか分からない。あんなに強キャラ感出しすぎていたのに。

緑谷達にぶつけても、どうせ敗北するのだから相澤を相手にさせれば勝率もつと高いのではと思ったが、これが無駄な一手になる可能性が高い。相澤は正直言ってどこまで出来るのか分からない。私の知る相澤の戦闘は多対一や守護ばかりなので直接的な一対一の戦力が読みづらい。

分かっているのはドライアイによる戦闘継続時間の短縮と、豊富な経験から上位の相手にもそれなりには食い下がれるということ。攻撃方法は捕縛布か素手の打撃のみ。個性による強化はなし。

捕縛布の硬度は測定不能。少なくとも単純な力技や燃焼での破壊

は不可能と予測。

「無理じゃん」

決まった。ステインは原作通り緑谷にぶつけることにしよう。どうせ勝てないだろうけど、一縷の望みにワンチャンやり合って貰うとする。本当に有能なら手足の一本は奪えるだろうし、ただの踏み台になるならそれでもいい。当初の予定通りに殺す。

正直ステインという手札に優位性は無い。アイツが有名になれたのは戦った相手がそれなりでしか無かったからだ。そもそも得意のフィールドにいたくせに餓鬼の拙い攻撃に殺られるような奴が強いはずがない。

裏切られるのは御免だし、アチラも私の言葉を振り返っていつ不信感を抱くかも分からない。相澤以外を出来るだけ掃除してもらった後、即座に処分させてもらおう。

ステインの処理ついでもしかしたら緑谷も殺れるか・・・？いや二兎を追う者は一兎をも得ずと言うし、それに従って・・・いやでも案外殺れるかもしれない・・・。うわ、悩ましい。どうせだったら一緒に殺してやりたいのに、緑谷は面倒臭すぎる。

まあどうせいつかはやらなきゃなのだ。一度だけアプローチを仕掛けさせて、そこで殺せれば万々歳。殺せなければそれはそれとして別の手を打てばいい。主導権を握っているのはコチラだ。直接戦闘も暗殺も、専用の幽波紋スタンドならある。ステインには文字通りの命懸けで頑張ってもらおうとしよう。

「後で処分方法はしっかりと話し合っておかないとな」

体育祭という一大イベントが終わってから、表には市民の不安を増長させぬ為にもあまり出されぬが、裏では血で血を洗うかのごとき事

件がたった一人の犯罪者により多発していた。それはサイドキックでも例外なく。補助とはいえ彼らはヒーローを名乗る身だ。ならば彼らにも裁定は下されるべきだ。

「はア・・・これは愚か者への・・・はア・・・肅正だ・・・。そして・・・はア・・・あるべき未来への道標だ・・・。」

「このッ・・・イカれた層がッ・・・！」

パツシヨ―ネの支援を受けて、彼にとつての穢れたヒーロー達に肅正という名の殺害を行うヒーロー殺し、ステイン。その凶行の効率は今までの比ではなく、細かく定められた期間ごとに各地を移動することで場所を攪乱しながら、次々とパツシヨ―ネに害ある存在——パツシヨ―ネ掃討作戦に参加したヒーロー達を始末している。

どんなヒーローでも人間であるのならば汚点はあるし欲はある。ヒーローならば清廉潔白であるのは当然のことだと思っているステインからしてみれば、そんな連中は世に蔓延る贗作。パツシヨ―ネから送られてくる肅清対象の資料を読んで、しかしただ受け入れるつもりはなく、自らが納得して私刑を執行する。

少しは脚色もされているのだろうが、証拠となるものまで見せられずには是非もなし。速やかな肅正を、厳肅たる征伐を。同じ現場にいた敵にも裁きを与え、ステインは闇へと身を隠す。

骨伝導のインカムにより送られてくる支援者達との合流ポイント。命じられるがままに向かった場所には派手な黄色の車。周りに人がいないことを警戒しながら乗車する。

車内には二名の先客が運転席と助手席に座り、何やら囁きあっていた。

「どうでした？」

「はア・・・問題は、何もない・・・。」

「当たり前だろうが。下手に問題なんて起こしてみろ。お前終わるぜ？そうじゃなくて、そいつの着心地の話を聞いてんだよ」

「そういうった報告も私達の役目ですのよ」

先客の一人、スクア―ロが指差すのはステインだが、その対象はステインに装備されている装備の数々。ステインの為だけに用意され

たパツシヨーネ製の特別装備。ステインの戦闘スタイルや注文に従って何度も改良を重ねたため、今回の一件でのお披露目が初になる。

「切れ味に関しては……はア……上々だ。技量さえ加えれば……はア……コンクリートさえも切断可能とはな」

抜いた刃の鋼の輝きに目を細める。先程まで赤い命に濡れていた刃は、納刀と同時に綺麗に拭き取られている。

刃を納め、次に首まですっぽり隠す黒い装甲のようなチョッキを指差す。

「だがどうにもこれだけは……はア……少々重い。いや、重さとしては……はア……大したことは無いが前のと比べるとな……」
「そいつに関しちや仕方ねえだろうよ。俺らみたいな防御面が能無しだと、最悪一発でお陀仏なんだぜ？だからテメエは黙ってそれ着てりやあいんだよ」

これは死なれたら困るからなのか、それとも実験的な意味合いを込めてなのかはステインには判断できない。だが少なくとも役に立っていないわけではないし、実際に害が出ているということも無い。これに慣れることが出来れば違和感は消えることだろう。

「すみません、スクアア口は貴方のことが気に入らないみたいで。私自身としては貴方に死なれては困ります。それに貴方だって夢半ばで死ぬなんて御免でしょう？だからどうか、命を守るという意味で」
「……はア……言われずとも外すつもりは無い。実際……はア……こういうのがあって困りはしない」

「それは良かった」

マトモに相手にされずに心の中で閉じ込めていた疑問が、まるで心を読んでいるかのようにティツツアアノの口から答えられる。だがそれはティツツアアノからの言葉であり、彼らのボスの真意なのかは分からない。

世間が未だに雄英体育祭の熱に浮かされていた時、ステインは自ら

の今後に答えを出して彼らに付くことを決めた。無論、部下や駒になるつもりなど毛頭なく、あくまでも契約上の同盟相手としてだが。

彼らはステインに様々なサポートを施す代償として、特定のヒーロー達へ粛正を与えることを依頼してきた。私怨でもあるのか、もしくは別の意図があるのかは分からないが、ステインがヒーローへ粛正を与える対象は、その強さが、精神性がヒーローと呼べる基準に満ちていない者達。

滅私奉公の理念を当たり前として自分に課している者だけが真のヒーローである。

ステインはそれを社会へ示す。ヒーローとはこういう存在なのだと、こうでなければならぬのだと。より良き明日を、一つの涙も流れない世界を作り出そうと声高らかに禍津の刃を血に染めながら高らかに叫びあげる。

故に今は雌伏の時だ。気に入らないがパツシヨーネの下で従い続けよう。与えられた任務は可能な限りこなしてみせよう。だがいつか、禁を破る日が来れば……。

「はっ、言いたい放題言ってるねえ。今から適当な所に突っ立って街頭演説でもしてみるか？ 具体的にどんな思想なのかってさ」

車を走らせるスクアアロはカーモニターに映る番組を見ながらカラカラと笑っている。映されているチャンネルには堅物そうな身なりをした壮年の男女が議論を行っている。コメンテーター、専門家、芸能人など様々なジャンルから取り集められている。

彼らが議題として話し合っているのは今まさにこの場にいるヒーロー殺しについて。正確にはヒーロー殺しが掲げる理想について。

「幾つか前の仕事で派手に曝け出しましたからね。その思想は今や注目の的、時の人です。専門家やコメンテーター達が議論の題材にするには困りませんよ」

肯定や否定、疑念だったり交互に交わされていく。中には的外れなことを言ったり、時として核心に近いことを言う者もいる。だが誰

も深くまでは掘り下げない、と言うよりもそこまで考えが及ぶことがない。

なぜならステインの思想は紛れもない狂人のソレ。元がそうであるのに、ボスによって小さくとも歪められている。

「どうよ時の人とやら。俺としてはやっぱり目的つてのはハッキリと言った方がいいと思うぜ。ちゃんと頭は可笑しいですよって応援してくれる皆さんに認識してもらおう為にさ」

「無駄口は……はア……いい」

この男達は気に入らない。が、目的の為に支援を施してくれるのはありがたい。どの道一人つきりでは出来ることに明確な限界がある。逃走や拠点の調達だって楽ではない。変装系の個性を持っていればまだ簡単だったかもしれないが、残念ながらその手の物も持っていない。

しかしそれとこれとは別。この男達は唾棄すべき悪である。排除されるべき層に他ならない。行動を起こしておらず、あくまでも推測の域を出ないが、上が上である。下についているこの男達だってマトモなはずがない。

どれだけの実力があるのかは分からない。だがどうしようもない程に警鐘が鳴り響くのだ。コイツらを相手にした場合、命はないという警告が。

正直に言えば、こんな奴らと組むなどはゴメンである。曲がりなりにも敵ライバルに属するであろう者達。即ち社会の敵である。だがそれでも、この身は既に罪人であり、この男達と同じ社会の敵。ならばこそ、いざれヒーロー達によって裁かれるのが定めである。

ならば構わない。己が裁くべきは偽りの名を騙る者たちのみ。悪は己の認めた本物が打ち砕くだろう。故に受け入れる。この男達がこの世にのさばることを。

「と、こんな感じの思考を植え付けた」

ただ一人のために特別に用意された地下空間で、シクリーザではなくフェリシータと呼ばれる女性が、独り言のように呟いた。彼女の周りには幾百枚ものDISCが乱雑にばらまかれている。いや、地面だけではない。

幾つもの人間を横したような置物や、高速で動き続ける的にも何十枚も突き刺さっている。それらには幾つもの傷があったり、他の場所には壊れたであろう同じ物が積み重ねられている。

そんな彼女の様子を影から見守り続けるスキューロ。彼は何も返さない。何故なら彼女が、自分に対して何かを言っている訳では無いから。その言葉を遮らないように、ただそこにいる。

「言葉だけで惑わせると思うほど、ステインは私の言葉に共鳴できない。そもそも考えてみる。アイツは曲がりなりにも正義なんて謳っている。名乗った覚えはないが、コチラは間違いなく悪だろう」

静謐に語りながら両手に展開される左右三枚ずつ、合計六枚のDISC。熟練した手つきで振り抜き、DISCを弾くように投げ飛ばす。その有様は最早射出や射撃の領域だ。

この動作だけで、彼女がどれだけ修練を積んでいたかが読み取れる。恐らく果てしない数を繰り返し返していたのだろう。何度も何度も、いつか来る未来のために。

「まず間違いなく、何らかの抵抗はされるだろう。裏で情報を流されるとかな。そういった所までコチラで全て管理しようとするれば、敵意が増幅されるのは明白だ。悪による完全管理など、決して受け入れることなどしないだろう」

放たれたDISCは的とは見当違いの方向に飛翔していくが、その勢いを緩めずに壁にぶつかり、そこからまた弾かれる。一見すれば失敗したと思えるソレは、しかし次へ繋げるための布石である。

「だから事前に少しだけ心と思考、いや、この場合は思想か。まあどちらでもいいが、緩めてやるのさ。私の言葉と決して齟齬を起こさないように。適度にコチラを警戒しながら、それでいて指示をちゃんと聞

いてくれるように」

壁に弾かれたDISC達は尚も勢いを衰えさせず、互いを四方に弾き合う。ぶつかり合う音が何度も響き、縦横無尽に空間を切り裂くように宙を駆ける。

「何度か適度に実験をして時間をかけたが、成功した。奴の思想を都合のいい方向に変えることができた。よって、今のステインは純然たる悪の一人。ヒーロー達の登竜門の最後にいる存在だ。自分を倒さなければ数多い敵は倒せないぞってな」

DISCは急激に停止する。そういう風に命令が施されていたかのように、一斉にその軌跡を閉ざしていく。DISCが止まった場所には六枚のDISCが深くまで突き刺さった的がある。人間であれば明らかに死んでいるであろう場所に。

「いつか私達を殺してくれる存在が現れるだろうって、本気で信じているよ。別に笑うつもりはない。夢は誰だって見るだろう？何も可笑しい事はない」

「まあ私の夢と違って、ステインの夢は夢のままにしてもらおうけどね」

もうタイトル思いつかないよ。それでも捻り出すけど

体育祭が終わってから、やらねばならないことが山のように雪崩込んできている。これまでの教師生活でも体育祭が終われば職場体験があるため、各生徒へ来たオフアール等を纏めたり、逆にオフアールが来なかった生徒への斡旋など。教師としての仕事の他にもヒーローとしての警邏などもある為、何らかの行事の後の仕事は正しく激務。

今年はそれに加えて、二つの仕事が課せられている。

一つは飯田についてだ。体育祭の日、飯田の兄であるプロヒーロー『インゲニウム』が、ヒーロー殺しステインによって、ヒーローとして再起不能の傷を負わされた。

入学時の志望動機にも書かれていた兄の様なヒーローに。飯田にとってインゲニウムとは、オールライトよりも尊敬出来るヒーローなのは容易に想像出来る。

普段の学校生活を見て、無理をして取り繕っているのは明白だ。何より動きの機微が以前より激しくなっているため余計に分かりやすい。

だからこそ、今の飯田の状況というのが危う過ぎる。何をするか分からないのではなく、何をするのか分かってしまう。ステインは同じ地域のヒーローを最低でも4人以上を再起不能にする。インゲニウムが害された保須市では、未だインゲニウム一人のみ。

神出鬼没のステインは、必ず保須市へ戻ってくる。

そして保須市へ戻ってくるのが分かっている以上、飯田の行動は予測が着く。

「復讐か・・・」

ヒーローとしては落第だが、個人としてその動機は理解出来ないこともない。相澤がかってヒーロー志望の学生だった頃、大切な親友を失った。その事は今も相澤と、その頃からの付き合いのプレゼント・マイクの心に棘となって刺さっている。

あの時の敵への黒い感情は薄れてはいるが消えていない。それでもヒーローとして、復讐という手段は選ばなかった。何よりあの時、相澤がその敵を捕らえた時はまだ親友が死んでいることを知らなかった。

生きているのと死んでいるのでは重みが違う、なんて言うつもりは無い。報告によればインゲニウムは脚の感覚が全くないらしい。飯田の一家は代々、脚にエンジンの個性を宿しているため、脚も個性も奪われた状態だ。

飯田は職場体験で、保須市を活動範囲としているヒーロー事務所へと体験を申し込んでいる。曲がりなりにも体育祭で好成績を残していた飯田にはまだ選択肢だって数多にあったが、それでも飯田はそこを選んだ。恐らくは自分で見つけだして、倒すつもりだろう。

既にこのことは懸念事項として校長へと報告してある。職場体験の日までに、何かしらの決定が下されるだろう。

それに何より、ステインに対する問題は飯田だけのものでは無い。「やあ、待たせてしまったね」

前に使用した時と同じ応接室。そこへ訪れたのは骸骨の様に痩せ細ったNo. 1。相変わらずスーツのサイズがマッスルフォーム用でダボついているのは触れないでおく。流石のNo. 1も、公衆の面前で半裸、最悪全裸などになってしまえば目も当てられない。だらしなく見えてしまうが、仕方がないと割り切っている。

「すみません、そちらも色々大変でしょうにお呼び立てしてしまつて」

「いや、謝るのは私の方だ。すまないね、突然振じ込むように職場体験を入れてしまつて」

それは職場体験についての話で、さらに深く切りこめば別の意味で問題児である緑谷についてなのだが、今は割愛しておく。

互いに向かい合うようにソファアに座ると、相澤が深刻な顔で告げた。

「職場体験の日、ヒーロー殺しを追って保須市へ入ろうと思います」「なっ!?!」

ヒーロー殺しの件は勿論オールマイトも耳にしている。故にその狂信とも呼べるヒーローへの思想については、心中で誰よりも重く受け止めている。

もう何度目になるか分からない犯行で、ステインは大衆の前で己の思想を語った。その言葉は大衆に向けられたものではなく、標的としていたヒーローへ向けたものだったが、その言葉は拾われ、瞬く間に広まっていった。犯行が起これば連日の如く論議されるその題材。善悪などは語るまでもないが、凶行によって良くなった部分は確かにある。

恐らくだがステインの思想は、オールマイトという存在によって齎されたものであると、ステインの言動より薄々予感はしていた。オールマイトは自分のことを良く知っている。自身の言動一つがこの社会にどこまで影響を与えてしまうか。

平和の象徴となった以上、あらゆる行動に気を付けてきた。そもそも自然体で聖人の如きヒーローな為、特段変えるような行動はなかったが、それでもあるべき己の姿を、今は亡き師の教えと共に心に刻んできた。

オールマイトは完璧なヒーローだった。完璧なヒーローになれてしまった。だからそれを求めるものが、他のヒーロー達にも強要することを求める者が現れるのは自然なことだろう。

誰だつて綺麗なものを見ていたい。望むものを見ていたい。ある種の潔癖が混ざったのだろう。結果として、望むもの以外は見たくない、存在してはならないという思想になった。

故に贗作。唾棄すべき異物。

「・・・飯田少年の件かい？」

曲がりなりにも雄英教師。生徒のことは良く見ている。訓練時の飯田の様子がおかしいことは既に把握済みである。たとえ担任ではなくとも、庇護すべき若者であることには変わりない。

「ええ、まあ、それもあります。本題は別です」

用意していた資料を渡す。表紙にはかつて聞き、確保に協力すると約束した組織の名前と、その調査記録と銘打たれている。それは前に

見たものと同じであるはずだったのだが、表紙にはもう一文、別の文字が刻まれている。表紙を見てオールマイトの顔色が変わる。

手つきを急がせながら紙をめくり、何度も文字を読み返していく。

「なんてことだ……」

その紙に載せられていたのは世界各地のヒーロー達の写真や名前。そして彼らの遺体が見つかった時の情報がキメ細やかに記されている。その数は最早数えきれない程の夥しい数。

そして目を見張る点はもう一つ。

「ステインはパッシュョーネに所属していた……!?!」

日本に存在していた相澤と共にパッシュョーネの件に参加していたヒーロー達。その殆ど——相澤を除いた全員がステインの手によって始末されていた。それは即ち、ステインがパッシュョーネと何らかの関係を持っているということであり、ステインを使ってパッシュョーネ事件の関係者を始末させていることに他ならない。

だが、しかしだ。

「可笑しいだろ……これは」

「やっぱり、貴方もそう思いますか」

いくら何でも、派手に動きすぎだ。まるでパッシュョーネだということとを隠すつもりが感じられない。寧ろこうも立て続けに関係者を始末していれば、自らの存在を誇示しているだけだ。これまでの事前情報などから照らし合わせれば、この件に関わっていることを疑いたくなる程、余りにも行動がお粗末すぎる。

「厄介な……」

考えられることは幾らでもあるが、幾らでもありすぎるのが厄介だ。知らぬ間にボスが替わって行動が変化したか。もしくは残党だったりの類か。それとも独断の暴走か。誰も実態を知らない組織。ボスも幹部も、思想行動ともに不明のまま。

チグハグ過ぎる行動が更に混乱させるのだ。言いたくはないがこれまでと同じように隠れ潜んでいれば、ずっと闇の中に自分達の存在を隠し続けることが出来たはずだ。だというのにこの場に来て突然の攻勢。関係していたヒーロー達を殺すという、無駄な事を繰り返し

ている。

こんなことが無駄だということとは理解しているはずだ。たとえばヒーロー達を殺したところで、捜査の手が止まることはなく、寧ろ本腰を入れて苛烈になるだろう。警告にすらなっていない、火に油を注ぐ行為に他ならない。

「唯一の尻尾はステインです。知っているかもしれないし知らないかもしれない。それでも行動を見て、動かないなんてことは有り得ない。幸いなことに俺は奴のターゲットです。それに保須は今、No. 2を中心にステインの捜索が進んでいます」

「今回の件ならステインへの囮として、相澤君を振り込むことも出来る、か」

動けるならば自分も動きたいが、オールマイトとて教師の一人。二年生やインターンに行っていない三年生の授業を受け持つ身である。時と場合によるが今はもう、事件があれば何もかもを放り出して駆けつけていい立場ではない。

(いかな．．．これでは)

何もかもを自分で解決する。こんなことはもう何時までも続けないはられない。既にその身に残った個性の篝火はあと僅か。これまでの無茶を清算させるかのように刻一刻と消えている。完全に消えれば残るのは死にかけの病人。No. 1という座は次へと受け渡される。

その時はすぐそこまで迫っている。ならばこそ、いつまでも自分が出しやばる訳にはいかない。ヒーローはオールマイトだけではないのだから。

「分かった。気を付けてくれよ、相澤君」

「そうか・・・漸く今日が来たのか・・・」

運命に対して私が打つ第一手。今日は雄英高校の一年生が職場体験を行う。つまり緑谷出久とステインが戦闘を行う日でもある。

「ボス」

「ステインの奴に報酬を覚えてやれ。探さずとも会えるだろうが、最初から本腰を入れて貰わなきゃな」

手抜きなどさせない。害させないなんて有り得ない。見逃すなど許さない。ちゃんと最初から最後まで殺しあってもらおう。ステインにとっては本望だし構わないだろう。何せ自分にとっての頂点が後継者だと認めたのだ。なら大人しく殺し合うだろう。

「スキューロ、二人に伝えておけ。終わつたと判断したら——」

「既に伝えてある。問題ない。完璧にやる」

「それでいい。あと、信頼している、と」

今日は保須には近づかない。私が手を下すのが一番確実だが、緑谷という危険を前にして直接私が動くつもりは今はない。それに今私があ動いても成功しないという確信がある。それに今日は死柄木のバカが脳無を暴れさせる日でもある。下手に保須に入って態々危険に身を晒す必要は無い。

私から遠いところで殺しあつて、どうか関係ないところで死んでくれ。

「なあ、ドクター」

『どうした死柄木』

雄英襲撃以来、一向に動きを見せない敵サイラン連合は隠れて動いているのではなく全くと言っていいほど活動していなかった。というのも

今は人材集めの最中。

　　雄英襲撃では考え無しと言えるほど殆どの手駒を投入し、残ったのは死柄木と黒霧だけで後は塀の中にいる。虎の子の脳無も確保されたと報告が来ている。流石の脳無も死柄木の命令がなければ動けず、また脳無の搬送先はタルタロスという曰く付きの収容所なため、手が出せない。

　　別の場所であれば憂き晴らしついでに奪還をしていたのだが、場所が場所である。たかがオールマイト相手に疲弊させられる程度の脳無一体に、大博打を打つつもりは無い。

　　しかし困ったことに、現在の連合の戦力は二人のみ。他の脳無は未だにドクターの下で調整中で手元にならない。如何に死柄木と黒霧が強力とはいえ、たった二人ではやれることには限界がある。今を壊すためにはもつと力がある。ということ、馴染みの情報屋を使って連合に敵を勧誘している最中であり、動くつもりは微塵もなかった。

　　だが、

「無理矢理でもいい。今動かせる脳無、何体いる？」

　　死柄木の気分は移ろいだ。じつとしているのも別に構わないし、必要な事だと理解しているのだが、それはそれとして衝動的に壊したくなった。時折起こる破壊衝動を抑えるつもりは微塵もなく、この衝動が起こる度にヒーローも敵も関係なく壊してきた。

　　どうやら今の気分は自分でやるよりも、壊れるのを見ていたい気分らしい。故に脳無。暴力装置の出番である。本来ならばドクターの前に先生へと話を通すのだが、今は眠っているし、どうせ起きていても脳無を与えるだろう。

『動かせる脳無は六体いるが・・・安定して動かせるのは』

『どうでもいいよ。ならさつきと六体寄せ』

　　安定？不安定？どうでもいい。どうせ玩具だ。使えなければゴミだ。

『・・・まあ別に構わんが。一体何に使うつもりじゃ？』

　　「悪党の先輩が保須にいたみたいだからさ。ヒーロー達のついでに、ぶっ壊れてもらおうと思って。あれだよ。後輩からのプレゼントっ

てやつ」

ドクターが映されていたモニターの隣。テレビに映るのはステインを追ってエンデヴアーを中心としたヒーロー達が保須に入るという文面だった。

「スキューロ口から連絡がありました。今回の仕事で契約は終了です」

特殊な細工を施された携帯から耳を離れたティツツアーノが、後ろと隣にいる男達に告げる。一月程の短い期間とはいえ、かなりの仕事をこなしてきたが、ティツツアーノ達とステインの関係が良い方向に進むことなどは微塵もなかった。

ステインにとっては彼らは排除すべき悪以外に何者でもなく、彼らからは何れ始末される予定の一次的な道具でしかない。

「はっ、漸くこれで子守りも終わりか。怠い仕事だったな」

「ハア・・・それはこちらのセリフだ。貴様らのような屑共と共にいるなど・・・反吐が出そうだ」

「相変わらずですね、貴方達は。まあ最後なので別に構いませんが。それからステイン。ボスからの報酬です」

嘆息しながら、懐に忍ばせてあった封筒を渡す。最初は電子端末にするか迷ったが、処分の問題で情報機器を使うと、万が一という可能性が高くなる。逆に紙ならば処分も容易く、何より細工も簡単だ。完全に無いというわけではないので、より可能性が少ない方を使用した。

それにたとえバレたところで組織に、ボスに害になることは決してない。

「報酬だと・・・？」

「おや、もう忘れてしまいましたか？最初にあった時、ボスが仰ってい

たではありませんか。貴方の大好きなヒーローのことを」

ティツツアーンの言葉で、すぐにステインの記憶は彼らの元へ連れていかれた日へも遡る。確かに、オールマイトの後継者や秘密についてコイツらは言っていた。しかし所詮は自分の興味を引くための虚言だと思っていた。

まさか、本当に……。

「ソレの処分はすぐにお願ひしますよ。分かるでしょうがバレたら不味いことなのは、確かですから。ああ、勿論私達ではありませんよ。オールマイトがです」

「ハア……分かってる」

余計なお節介だと吐き捨てて車から降りる。そのまま鍛え上げた身体能力と磨いた技術でビル窓枠に飛び移りながら贗作を求めに動き出す。

すぐに見えなくなったその姿を見ながら、スクアア口とティツツアアノは改めて仕事を始める。

「そんじやつ、予定通り」

「ええ。最後まで見届けましょう。ボスの信頼に応える為に」

「ハア……出来ない贗作が。貴様のような……ハア……己を勘違いした者がいるから、本物が少なくなる」

保須市の路地裏。パツシヨナーネの伝手でインターバルを終え、再び街へと戻ってきたステインは、早速己に目をつけたインディアン風のヒーローを蹂躪する。既に刃を突きつけ、血を舐めたことよって個性は発動している。傷口すら押さえることは出来ず、後は贗作らしく無為に壊されるのを待つのみである。

そしてステインは決して逃がさない。会話や思案にかまけて時間

経過、個性の効果切れなんてことにはさせない。元より個性には型によって効果時間の違いがある。最も早いものは数分すれば効果切れになる。

「クソ……このクソ 敵が……!!」

「やはりお前は贗作だよ」

倒れたヒーローが呻きを漏らしながらステインを睨みつけるが、だからなんだとばかりに一瞥するのみ。我欲に溺れ、自らを跳ねのける力もない。こんな様ではこの先、生き残ることは出来ないだろう。

ヒーローとして相応しくないその在り方。そして足りない力では彼らに勝つことは出来ない。よってステインは己に課した役目がため、処断の刃を振り下ろす。

願わくば、この犠牲で他のヒーロー達がより高潔に、より強く目覚めんことを。

とどめを刺すために突き立てようとしていた刃を、刺さずに背後に向けて振り返るように振るう。耳に残る残響と、手に残る感触は鋼の物。そして視界に映るのはステインによってメットを弾かれた、ヒーロースーツを着た子供。

「スーツを着た子供……候補生か。消えろ、この領域はまだ貴様の場所ではない」

それは優しさではない。慈悲などでは微塵もない。

「血のように赤い巻物と、全身に携帯した刃物……ヒーロー殺しステインだな! そうだな!?!」

超スピードを体勢を崩すことで無理矢理に痛めつけた身体に鞭打ちながら、どこか見覚えのある鎧のようなスーツを着た子供——飯田天哉は立ち上がる。メットと共に眼鏡も弾かれたが、しかしあろうとなかろうと、そのキラついた血気に染まる目は誤魔化せない。

ここにいるのはヒーローの卵で、復讐を誓った一人の男。

「お前を追ってきた……! まさかこんなにはやく見つかるとはな!!」

「その目は仇討ちか」

叫ぶ決意など知らぬとばかりに、ステインは倒れるヒーローを捨て

おいて、飯田へと刃先を向ける。穢れた身だが虐殺者では無い。だがそれでも、ヒーローの卵を名乗るといふのなら、その時点で高潔であらねばならない。よって場合によっては、粛清対象となる。

「そのスーツ。そしてさっきの気配からして高速移動に関する個性。この間粛清した奴の関係者か」

「僕は、お前にやられたヒーローの弟だ……！兄の代わりに、お前を止めに来た!!」

「僕は……インゲニウムツ。お前を倒すヒーローの名だ!!」

「そうか、死ね」

「はは……いいぞいいぞ。その意気でもっと壊しまくれ。この程度じゃまだ満足しないんだよ。人形ならご主人様が満足するまで踊り続けるよ」

「ご機嫌ですね、死柄木弔」

眼下で起こる破壊の数々。暴れるのは六体の改造人間。たった六体、それも安定した状態でないのにも拘わらずこれなのだ。壊すことを主体とした教育を受けてきた死柄木からすれば、この光景は中々のものである。

が、所詮は中々のものでしかない。もっと深くまで胸に来ることはなく、最大にスカツとすることは無い。

だが我慢していた分を放出していると思えば、少しはマシに思えるだろう。

嫌いなものが慌てふためいて壊れていく姿は爽快なもので、実に人間らしいといえる。

「なあ見ろよ。たった六体だぞ？あんな量産品の廃棄物をちよつと道端に捨てただけでこうなるんだ。流石に上位陣達には敵わないけど、ここはクズが飽和する世界だから、上から下までそうであるはずがない」

詳しく見えている訳では無いが、分かる。市民を守ろうとしたヒーローが、脳無によって殴られ蹴られ、応援のヒーローが来るまで壊されるのを。その姿の何がヒーローか。涙しながら逃げ続ける市民達と何も変わらない。

「でもやっぱ弱いよなあ・・・」

「仕方ありません。この間のレベルの脳無はそこまで揃えられません。それに全てが全て、戦闘に向いているわけではありません。何より、強い力は更に強い力に簡単に潰される」

保須の街に劫火が迸る。灼熱は街や人を決して燃やさず、悪である脳無のみを焼き尽くす。逃げようとしてもどこまでも執拗に追い続けるその炎は正しく原因であるヒーローの意志の如く。

骨まで溶かし尽くさんとするその炎はしかし中途に止まり、焼き焦げた脳無のみが残される。

「ああ・・・エンデヴァーか。まあ流石にアレは無理だわ。だって俺も今は勝てそうにねえもん」

ケラケラと笑うが、しかしもし戦うようなことになれば、そも死柄木はエンデヴァーを相手にしないだろう。恐らくだが見向きもせず、関係のない者たちに対してのみの暴力を振り翳すだろう。誇りも名誉も踏み潰し、死体の上で今のように笑うのだろう。

「でもアイツ以外にもやる奴がいるじゃん」

各所ではチラホラと、撃破はされていないが動きを封じ込まれていたりなどされている。こうしてみると哀れである。思考機能を残していないため、できることは力技のみという筋金入りの脳筋。罨や駆け引きなどを知ることすらなく、ただ愚直に嵌められる。

「脳無は残り半分でしょうか。どうしますか？」

「回収？それとも処分？どうでもいいから帰るぞ」

死柄木自身は何もしない。ただ死柄木は闇雲に何かを壊したくなっただけだ。だから脳無を放り込んだ。ステインへのプレゼントと言いながら、やったことはただの憂さ晴らし混じりの暇潰しの類。

よって何もしない。先程までと同じように、勧誘されてくる塵共の待ちに徹する。

霧が展開された瞬間、保須市へ集った思惑の内、思惑とも呼べぬ子供のような暴虐の意思が一つ消えた。

「ハア……奴と同じく、やはり貴様もヒーローを名乗るだけの贗作だ」
「グウっ……！」

一分にも満たない攻防の末に、当たり前のように順当に飯田は敗北した。復讐を誓った青年の叫びと思いは、しかしより重い目的と強大な決意の前に押し潰された。なんの抵抗も出来ず、一撃すら与えることすら出来ず。

確かに飯田は強い。だがそれは同年代に比べてはであり、上には上があるのは当然である。そも同年代の者達からして今年は黄金と呼べる才能が揃っている。彼らを前にすれば飯田は数ランクは下に格付けされるだろう。

血統書付きなど知らぬと驕らず重ねてきた弛まぬ努力は、しかしステインというスペシャリストを前に儂く砕けた。

ステインの個性は既に発動されている。発動されたからこそ勝負がついた。動かなくなった身体を懸命に振りながら、しかし動かない身体。それでも決して許さぬと、黒い激情の宿った視線を見下ろすステインへ向けるが、所詮は視線。そこには何の力もない。

だがそんなことは知るものか。心に宿る激情を、憧れの兄の背中を

思いに乗せて頭上のステインへと叫ぶ。どれだけ立派な人だったか。どれだけ素晴らしい人だったか。どれだけ人を助けることができる人だったか。

「殺してやる!!」

「まずはアイツを助けろよ」

生まれて初めてかもしれない。最も心を込めて言っただけでもない言葉と言ったのは。だがその言葉はステインの冷やかな言葉で流される。ステインの見下ろす瞳が、一層冷たさを増す。

やはり貴様もか、と言外に告げているようだった。その淡い期待のような思いは、未だ若い少年が相手であるからか。まだ救いようがあると感じたのか。

「自らを顧みず他を救い出せ。己の為に力を振るうな。目先の憎しみに囚われ私欲を満たそうなど・・・ヒーローから最も遠い行いだ」

復讐自体を否定はしない。それも立派な理由の一つであるからだ。だが動機はなんであれ、そこからヒーローへと繋がるのならば過程で復讐心などは心奥に抑え込み続けなければならない。

そのままヒーローになるなど言語道断。

「じゃあな、名も無き贗作。いや、贗作の紛い物」

個性で動けぬ飯田を踏み付ける力が強まり、決して逃がさないという意思が伝わる。逆手に持ち替えた数多の血を吸ってきた刃に、新たに飯田が加わろうとする。

何も出来ぬ己に涙を流し、地べたに這いつくばって死を待つのみ自分に、そしてステインに激怒するがそれだけだ。この体勢では逃げること、個性を使うことも出来ない。場所が場所で、更にいえば飯田やステインは知らぬが、保須では死柄木により解き放たれた脳無が暴れ回っている。そちらの対応に手を割いているため、まず来ない。よって、これで飯田天哉は詰み。

「——ッ!?!」

まるで車にでも激突したかの如く、飯田の息の根を止めようとしていたステインが弾き飛ばされる。

死の窮地より救われた、首から上しか動けぬ飯田が目を上げればそこにはヒーロースーツを新調した同級生の姿があった。

「緑谷……君……!?!」

「助けに来たよ、飯田君!」

吹き飛びながらも急停止をかけて睨みつけてくるステインから、飯田を庇うように立ち塞がるのは緑谷出久。万事滞りなく、予定通り彼はここに来た。

私はお前を応援している。どうせ勝てないけど

突然出現した六体の脳無の暴走にオールマイトの師であり個性の秘密を共有する老人、グラントリノのもとへとインターンを受けに来ていた緑谷は巻き込まれた。

新しい技、ワン・フォー・オール・フルカウル。個性の常時5%発動。完全に物にしたというつもりはないが、それでも技としての出来は実戦でそれなりに通用するレベルに仕上がっている為、ここで緑谷は一つの壁を乗り越えたといえよう。

よってさあヒーローらしい活動をしに行くぞと、人の多い都会へ行く為にグラントリノに連れられて新幹線で県を越えての移動をしていた時だった。ヒーローを叩きつける様に、かつてUSJで見た脳みそ丸出しの人型が新幹線へ突っ込んできた。

停止した新幹線。脳無を新幹線より引き剥がすべく個性を使用しての高速移動でグラントリノは突進して自分共々彼方へと飛翔する。去り際に座っていると言われたが、それでも反射的に脳無によって作られた穴から身を乗り出す。その時目に映ったのは各所で爆発などを繰り返している街。明らかに普通ではないことが起こっている。

嫌な予感がして、咄嗟に携帯を取り出して地図アプリを開き、ここが何処なのかを調べる。悪い予感というのはよく当たるもので、新幹線が止まったのは保須市。現在ヒーロー殺しの再びの行動が最も予測される街で、連絡の返信が無い飯田がインターンとしてきていた街。

増幅していく嫌な未来。確証のないその予感に、突き動かされるように新幹線より飛び降りる。後で怒られるかもしれないが、それでも今はと習得したばかりのフルカウルを発動。街に向かって飛び出していく。

街に降りれば、そこは狂乱したような市民の悲鳴が溢れていた。無理もない。他の敵とは明らかに毛色が違う脳ミソ丸出しの敵が、一度

に六体も出ていたのだ。複数体いるという事実を知らなかった緑谷は、街中で暴れ回る複数の脳無を見て戦慄する。

USJの時に送り込まれていた時程の危険性は感じられないとはいえ、それでも脳無、改造人間なのは変わりない。まだ分からぬ敵連合の全容を考えようとした刹那、知っている人間を呼ぶ声が聞こえた。

飯田の名前を呼びながら市民達を誘導しているのはノーマルヒーロー・マニユアル。飯田のインターン先のヒーローでそれを知ってから自分でも調べたヒーローだ。彼のことを見た瞬間に予測が最悪へと近づいていく。飯田はもしかすればステインを探している、もしくは既に接敵しているのではないのかと。

その考えが増幅する。無意識に発動されるフルカウル。安易な考えだと言うのは理解しているが、それでも分かった上で見過ごすことなど出来やしない。街を跳ねるように飛び回りながら、ステインの出没が多いとされる裏路地を徹底的に探し出す。

これだけの騒ぎだ。活動するのであれば今が絶好の機会だろう。そして――。

「助けに来たよ、飯田君！」

風潰しに探し回った結果、予想通りステインは飯田と接触していた。それどころか既にプロヒーローが一人倒れ、飯田に止めを刺そうとしている。本当にギリギリだった。きつとあと一つ裏路地があれば間に合わなかっただろう。

「ハア・・・仲間・・・コイツも候補生か・・・」

（感覚が浅い、直前で身体を逸らして衝撃を逃している。これじゃあ大したダメージにはなっていない）

殴られて曲がった上体を揺らめかせるステイン。自らが行った不意打ちが大したダメージになっていない。完璧な不意打ちであったと思っただが、曲がりなりにも悪名高きヒーロー殺し。甘い相手で

はないらしい。

「緑谷・・・君、手を出すんじゃない、これは僕の問題だ・・・！君には、関係ない・・・！！」

事前報道されていた通り、ステインの個性によって体が動かなくなっている為、身を振ることしかできていない。しかし今も尚、こんな状況になっけていても冷静さなど欠片も取り戻してはいない。復讐心はなおも黒く燃えている。

「仲間が、助けに来た・・・。ハア・・・いい台詞じゃないか。だが俺にはコイツらを殺す義務がある・・・お前は俺を止めて・・・コイツらを守りたい。ならば必然として、弱い方が淘汰される。そして――」

完全に立ち直ったステインが、射抜くように緑谷を見詰める。殺気、憧憬、様々な視線が混じった視線に思わずたじろいでしまう。その視線に飯田も気付く。今のステインが緑谷に向ける視線には、先程まで自分に向けていた物が殆ど混ざっていないということに。

「お前には、俺を認めさせる義務がある。そうだろう、緑谷出久」
(なんで僕の名前を・・・!?)

瞬間、二刀抜刀。風のように鋭く速く、水のように流れる自然な動作で二刀を手にしたステインが緑谷の心の疑問を置き去りに高速で接近する。

問答無用。余計なことを考えさせず、ただ目の前の、自分にだけ集中しろと言うように。

「ッ・・・!!」

先程まで心中でステインに対する疑問や、飯田に対する憤りを募らせていたというのに、頭の中は至極冷静で、ステインの攻撃を回避する。こちらは素手で相手は刃物。それも切断力はどれほどのものか分からない。グローブやスーツの申し訳程度の耐刃性能は役に立たないと見てもいい。

生じる問題は二つ。

「疾っ!!」

積み重ねてきた戦闘経験もあるのだろうが、獲物の違いによって射

程距離が常にステインへと有利に働いている。緑谷の拳も当たれば相応のダメージは通るだろうが、一発で倒せることはないだろう。対してステインの攻撃はどれもが致命を秘めている。リスクを冒して突貫に出るのはまだ早い。

そしてもう一つ。

「いいんだ、緑谷君!!これは僕の、僕だけの戦いなんだ!!」

後ろにいる守るべき存在である。ステインの第一目標が何故だか緑谷に変わったとはいえ、ステインは一向に緑谷の背後にいる二人の処刑を諦めてはいない。見過ごせぬほどの大きな隙を緑谷が作れば、すぐにでも殺しに行くだろう。

よって、攻勢に転じることが全く出来ていない。防戦一方で擦り潰される。

風の如く靱帯の急所に向けて繰り出される斬撃。心臓首頭は当然として、そこに繋げるまでの過程も完璧だ。隠し持った小型の刃物による投擲に、わざと大きく刃を振るうことによる視線誘導^{ミステイクン}。どれもが仕上げられていて、無駄など一つもありはしない。恐らく純粋な殺人技術であれば、ステインは間違いなく国内最上に位するだろう。

ヒーローを、^{ヴィラン}敵の血を吸ってきた技術に狂いは微塵もありはしない。加えてコンディションは最高だ。何せ最上の相手なのだから。故に――

「・・・どういうことだ」

曲がりなりにも戦えている。防戦一方とはいえその現実疑問が漏れる。一通りの動きは既に見ているし、見切っている。所々ステインですら思い付かぬ意外性を秘めていたが、動きはまだまだ学生の域、素人でしかない。だからといって手を弛めるつもりなどは欠けらも無い。そんなことに意味など一つもありはしない。

だから可笑しい。必殺だと思って落胆と共に放った斬撃が、予定調和の如く失敗している。何度も何度も。一や十などでは無い。少なくともこの時点で三十は超えている。つまり緑谷は三十回死んでいなければ可笑しいのだ。

オマケにだ。

「ハア・・・まさか、無傷とはな」

明らかに異常である。既にステインの個性が『血』に関係した何かであると広まっているのは報道を通じて確認済みである。戦っていれば大なり小なり傷を負う物であり、傷を負えば血が流れ、そして血が流れればステインの個性は経口摂取によつて発動する。一つの最大の必殺。動けなくなった相手に一方的に振るう処断の刃。それが全く機能していない。

ステインの武器は全てが刃物に属している。僅かな攻撃でも掠るだけでも流血はするというのに、それらが一切存在しない。これは一体、どういうことか。

「戦闘経験から来る勘にしては、実力がまるで見合っていない。ならばそういった個性かと考えたが、それではここに来た時の辻褄が合わなくなる」

血に濡れぬ刃を口元にやる。いつもならば既に赤く染まっているはずなのに依然として色は鋼の光沢のみで、既に慣れ親しんだ血を舐めとる動作もしない。

「緑谷出久・・・お前のことは詳細に経歴含めて知っている。その中にはお前が決して口外できない、してならないことも含まれている」

一体何を、なんて疑問さえ出ない程の衝撃が緑谷に走る。そしてその衝撃はステインと交戦を開始した時に名前を呼ばれた時以上。確かに緑谷の名前は世界に知られることになった。だがそれはあくまでも雄英体育祭でそれなりに頑張っていた生徒の一人でしか無かった。認知度で比べれば轟や爆豪とは雲泥の差があるだろう。

もしステインがキメ細やかに雄英体育祭のことを記憶していたとして、だ。どうしてそこで緑谷の経歴等を知ることになるのか。更にいえば経歴などよりもっと大切な、口外出来ない秘密のことを知っているような口ぶりまで。

「お前は、何を——」

「知っているとも。全て」

知っているのか。その問いを全て言うまでもなく、ステインは是と言った。何をどこまでとは言っていないが、それでも悪寒と同時に理

解してしまう。この男は全てを知っているのだと。

「ハア・・・見当は直ぐにつくだろう。皆まで言う必要は俺には無い。だが――」

同時に十字に振り抜かれる両腕。勢いの付いた刃が二本、回転しながら飛来する。狭い路地裏で先行する一つは地面と平行に、もう一つは両脇のビルと平行に。避けることは容易いが――。

「この程度をどうにか出来ないのであれば、お前ではダメだ」

ただ見ているだけのつもりは無い。刃を放つと同時に短刀を抜いたステイン自身も急加速。速度は投擲した刃に劣っているとはいえず、ステインには高い身体能力や反応速度がある。緑谷がフルカウルで避けたとしても、そこから次へ繋げようとする間に、軽くても確実に一撃ダメージを与えることが出来る。そうなればあるのは詰み。

（上に垂直に跳ぶか?! いやダメだ! 跳んでいたら次の動作に移れない・・・! なら壁を蹴って避けるか?! これもダメだ、それじゃあステインに追い付かれる・・・!）

頭の中で何度も何度も、次の展開が繰り返される。どうすれば正解なのか、どうすれば次へ繋げられるのか。どうすれば次を凌げるのか。普段の倍以上に回転する頭だが、正解には辿り着けない。

知を巡らせて今を乗りきったとしても、次に迫るステインが厄介すぎる。まず先行する刃を避けなければならぬ緑谷を、ステインはその行動を見てから対処することが出来る。

「これしか・・・ない・・・!」

弓を番えるように、左手の指を一本だけ構える。正直やるべきでは無い。奇跡的に無傷だったからいいとして、痛みというものは行動を、思考を蝕んでいく。ステインという一瞬の必殺を放つものには、たとえ指一本だとしても危険となる。

前方、まとめて吹き飛ばす。

番えられた指が解き放たれる。5%など比ではない、正真正銘の全力100%。拳一つで雲を晴らせるオールマイトのように、凝縮された空気が不可視にして巨大な砲弾となる。

狭い路地裏で、逃げ場はない。轟のように氷壁などを生み出して盾

にすることはステインには不可能だ。爆風は埃を巻き上げながら前方一帯を吹き飛ばす。勝った、なんてことは言えないが、それでも撤退までの時間を稼ぐことは出来る。先程の砲弾で程よい煙幕も出来ている。指が使えなくなつた痛みを堪えながら、倒れているヒーローと飯田の元に向かおうとし――

「はア・・・中々いい判断だ。だが次からは仕留めたと思つて油断はするな、そして確実に敵を殺せる方法を取るといい」

「え？」

駆け寄ろうとした刹那、耳元で聞こえたステインの声。そしてその言葉が聞こえ終わると同時に、ヒュツ、と何かが風を斬る。刹那、激しい痛み燃えたような熱を伴う緑谷の背中。激痛に耐えきれなかつたのか、それともステインの個性なのか。力が抜けて膝を屈して倒れ込む。

「がっ・・・あぐうっ・・・いつ・・・いつだい・・・どうやって・・・」
動かず痛む身体。激痛で妨害される思考を必死に回しながら、緑谷を見下ろし漸く血の付いた刃を舐めるステイン。緑谷の問いを予想していたのか、ステインは緑谷が見えるように腰についていた道具を外してみせる。

「はア・・・こいつはアンカーになつていてな。全く使う機会がなかつたから、今の今まで忘れていたが役に立った。あまり褒めたくはないが、未熟な俺ではさっきの攻撃で詰んでいた可能性だつてあつた」

逃げ場は一つ。路地裏の露出した上空。間に合うかは賭けだったが、どうやら上手くいったらしい。そしてステインの言葉には欠片も嘘はない。

だから――

「未だ測れぬものも多いが・・・今は及第点だが認めよう、緑谷出久。お前は後継者に、彼の後を継ぐに相応しいヒーローだ。まだ若い、それでも成長速度は目まぐるしいものがある。だから、お前は次に持ち越しだ。そして・・・はア・・・今回はこれで終わりだ」

「ま・・・て・・・！」

吹き飛ばされて壁面に刺さっていた刃を引き抜く。その矛先がどこに向かうかなど、容易に想像が付いてしまう。だから止めるために、痛み動かぬ身体に力を入れるが、その姿は自己犠牲を善とするステインを喜ばせるだけである。

しかし何も出来ず、ステインは易々と飯田へ到達する。そしてその顔面の上で刃を両手に構え、

「忘れるな、緑谷出久。俺が起こすこの悲劇を。心に刻み、業火の薪とするのだ。そして重ねて、忘れるな。たとえ悲劇を刻もうと、その素晴らしいヒーローとしての心を」

迷える子羊の相談に乗る神父のように、邪悪にして善良な行いをしているステインは、いざ新たな社会へ次の生贄を捧げんと――。

「わりい、遅くなった」

氷と炎。二つの力を併せ持った少年が、新たにこの場に踏みこんだ。絶対の窮地で、強力な助っ人。それが作為的な、物語のようであると誰も気づかぬまま、全てが順調に進んでいく。

逐次送られてくる報告によると、ステインの方は予定通りに進んでいる。その過程で緑谷出久の明らかな異常が露見したのは幸いだっただ。ステインが言っていた通り、あの回避率はどうかしていた。

しかし大きな成果だ。緑谷が実際に戦闘の際にどれだけ判断力があるのか、どれだけ動くことが出来るのか。ありとあらゆる能力値を徹底的に探し出している最中だ。それこそ、あの驚異的な回避率は『幽波紋』^{スタン}の能力によるものの可能性だっただけ有り得る。

緑谷はこのままデータ収集ついでにステインの処理を良い感じに

手伝ってくれるだろう。問題はもう一つ。

「・・・脳無の数が多いな」

保須で暴れ回っている脳無は原作では四体だったが、実際に暴れているのは六体。AFOの協力者だろうドクターとやらが調整等を素早く終わらせたのか、それとも中途半端なものを癩癩のように死柄木が持ち出したのか。

どちらにせよ、死柄木の行動や思想がどうなっているのかは皆目見当がつかない。本来であればステインを接触させた後、可能であれば殺すようにDISCに書き込んでいたのだが、どうやら接触した様子はない。

緑谷出久がオール^{怪物}マイトの後継者であるように、死柄木弔もまたAFO^{怪物}の後継者。警戒するのは当然だ。

「可能ならどさくさに紛れて一体欲しいんだけどな・・・」

連合の主要戦力になるだろう脳無。この段階で確保して、スキューロを通して生態やら設計やらを解剖するなりして調べ尽くして何かしらの弱点などを知りたいところだ。もしこのまま進むのであれば、連合を直接潰すことを視野に入れなければいけない以上、その為の努力を怠るつもりは無い。

しかしあれだけの巨体であれだけの怪物的外見。あそこから持ち出すのは苦勞する。たとえ鏡の世界に入れたとしても、大人しく言うことを聞くはずがない。暴れ回って始末しなければならなくなるのがオチだ。そして私が知る限り、神野までに脳無が使われるのは今回で最後だ。しかし仕掛けることが出来ない。

ならば原作でステインが収容されていた刑務所を襲撃するか。確かあそこには対オールマイト用の脳無が捕らえられていたはず。・・・いや、流石にあそこには仕掛ける気にはなれないな。脳無程の怪物を収容する施設だ。警備も厳重でヒーローも手練が十人以上は常にいるだろう。

ヒーローや警備など塵殺すれば関係ないが、あそここの警備を破綻させすぎると連合に攻め入る隙を与える。どんな犯罪者が収容されているかは分からないが、あまりイレギュラーな戦力の加入は見過ごせ

ない。

期日までに打てる手が限りなく少ない。下手に仕掛けてしまえば致命を曝け出す予感がする。具体的にどうとは分からないが、そういう運命に繋がりそうだと。

メデイジーナは既に手元から離れている。一応は嚴重な安全策を仕込んでいるが、肉体は既にボロボロだ。薬物の乱用による毒、弱った肉体に追い打ちをかける数多の病。肉体を無理矢理生かし、人格をDISCで固定していなければ、既に発狂して死んでいる。虚ろな自我ではスパイの真似事などできるはずもない。真正正銘ただの人形。

緑谷の情報は欠伸をしていても入ってくるが、死柄木の方はさっぱりだ。やはりヒーロー達からずっと潜んでいられるだけある。情報が殆ど漏れてこない。何とかという情報屋？だったか？そこから辿りつこうと考えたが、巧みに避けられている。

先も言ったが緑谷がオールマイトに選ばれたように、死柄木もその正反対の存在であるAFOに選ばれた。ならばただの餓鬼であるはずもない。純粋な力か、それとも心の方か。はたまた両方か。必ず何かがあるはずだ。

そして後継者の意味を考えろ。ただ脅威的な敵サイランとなる者では後継者には成り得ない筈だ。それでは弟子といった方が正しいし、あくまでAFOに育てられ、世に送り出された程度の脅威にしかならない。そこに後継者という言葉は確かに介在するが、AFOの後継者と言えるかは微妙である。

よって、妥当な結論に自然と伸びていく。

死柄木弔は個性としてのAFOの後継者でもある。

奪い、与えるという個性。その個性が自分にだけは作用しない、なんていう描写は記憶にない。ならば出来てもおかしくないはずで、事実OFAという前例がある以上、できると考えるのが普通だろう。

「……はあ。ヤバイ」

思い至り、夢想して、呆れるようにため息を吐く。私は緑谷出久の成長度合いがどれほどになるかは知らない。少なくとも神野事件まででは、今とそう大差ない。フルカウルが使えるだけだ。

何が言いたいかと言うと、些か遅すぎる。いや、私が対峙する場合は今のままでもいいのだろうか、できることなら死柄木の相手を任せたい。

上述した予測が正しいのなら、いつかは分らないが死柄木はAFOに匹敵する怪物となる。個性時代の新たな超越者が誕生する。

神野事件でAFOは破れ、捕まった。それはAFOとオールマイトの長い因縁にケリがついたことや次の世代へ移行したというだけでなく、AFOが死柄木に先生として教えられること、与えられる物を全て与え終えた。即ち死柄木がAFOにとっての完成を終えた、もしくは完成に至るまでが最早自分がいなくてもいい程の目前に近づいていたということなのだろう。

AFO程の存在が、胸を張って自分の全てを与えても構わないほどの完成度。考えるだけでも頭痛ものだ。まずマトモな方法では殺せなくなる。攻撃力は言わずもがな、防御力は異形系の個性やショック吸収や高速回復などの補助系の個性があるだろう。

一撃で天地を引き裂き、殺すには爆撃レベルが必要で、殺し損ねれば多少の時間で回復される。

これでは迂闊に緑谷を殺せない。緑谷は死柄木を殺せる、恐らくは唯一の存在だ。私もできないことはないだろうが、完成した死柄木の相手なんていう危険な綱渡りはゴメンである。賭けの要素が多すぎる。

よって、確実に勝てるのは緑谷だけであり、緑谷を殺すことは出来ても簡単に出来なくなる。

その後、死柄木を倒した緑谷は正しく完成した主人公だ。三部終了の旅を終えた承太郎だ。そんな時に挑むなど間違っている。

よって私が緑谷を相手に、挑むのであれば――。

勝敗は着いた。結果は言うまでもないけど

お世辞にも広いとは言えない路地裏で、膨大な量の氷が埋め尽くさんとばかりに侵食していく。速度、威力共に強大。僅かにでも飲まれてしまえばその瞬間に全身へ食らいついてくる。

小手先を使うまでもなく、ただただ強大な個性。特に制圧力に関しては現存する個性の中でも上位に位置するのだが、しかし使用者である轟の顔に余裕は欠片もみられない。

「どうした、これで終わりか？単調過ぎるぞ、芸がない」

圧倒的な制圧力を前にしても、しかしステインを捕らえることが出来ていない。触れることさえも叶わない。それどころか磨き上げられた絶技を流血しないように避けるか防ぐことに意識を向けることで精一杯である。

たった一回の負傷で瓦解するバランス。ギリギリを見極めながら対処しなければ、ステインは数多ある勝利条件の一つを掴んでしまう。

「ぐっ・・・！」

特異にして強大な氷壁は、時に移動先を狭めてしまい轟自身を追い詰めていく。普段は決してしないような些細なミスを、ステインの凶念が引き起こす。更には氷壁の展開と同時に生じる一瞬の間隙。ステインはそこを見逃さない。飲み込まれないよう逃げるのと同時に、小型のナイフが轟に投げ立てられる。

狙われたナイフは顔面と頸動脈を狙うものだ。どこを狙ったのかは投げたか定かでなくとも本能が身体を突き動かし、盾にするように腕を上げる。この腕に氷を纏うことが出来れば弾くことも出来ただろうが、しかし轟の肉体が低温に耐えることが出来なくなるし、低温に耐えたとしても、その後今と同じように動かせるか定かではない。故に、覚悟を決める。

鋭い刃が腕の肉を突き破り、痛みに顔を顰めて耐える。意識をほんの少しでも削がれてステインを見失ってしまったえば、格好の的である。轟を仕留める、もしくは刺さっているナイフを抜き取り個性を発動せ

んと一息での急接近。

「させるか！」

近づかせまいと、今度は氷ではなく忌まわしき己の左、父より受け継ぎし憎悪の炎を燃え散らす。未だ過去を克服したとはいえない。今使っているのだってクラスメイトの危機ゆえに、己の理由をかなぐり捨てているだけだ。使っている今も不快感が胸を締め付ける。しかし流石は現No.2の継嗣と言うべきか。炎の使用にはブランクがありながら、辺りの氷を一瞬にして溶かし、反動で冷えきっていた己の身体に温もりを即座に取り戻す。

だがそれでも、ステインを退けることは出来ない。

炎という生物の本能へと働きかける現象を使用したとしても、ステインは距離を取るだけで大して危険視している様子はない。寧ろそう来るだろうと分かっていたというような挙動をしている。

「ちっ、これでもダメか……」

今度は威嚇するかのよう^{*}に、炎を迸らせる、やはりあまりいい気はしないが、右よりも強力なのは間違いない。物理的な攻撃よりも、こうした非物理な純粋な攻撃の方が接近戦を挑んでくる相手には有効のはずなのだ。

「はア……確かに炎という現象は強力だ。そしてこの威力。成程、流石はNo.2の血を引いている。当たればタダではすまないだろう」
ゆらりと姿勢を落としながら、しかしその姿が掻き消える。姿勢が落ちる瞬間に、百足のように地面スレスレに身を落としながら疾走する。急激な緩急によって戸惑いはあったものの、咄嗟ながらも右手を払いながら氷河を率いて対処する。

「ソレだ」

「なっ!？」

疾走するステインが一気に急停止してしまう。氷が突き上がった場所はステインの丁度手前。突き上げによる攻撃を行おうとしたため、外してしまった。いや、そうなる様に外されたのか。前方の視界は自らの氷で塞がれ、溶かそうとした時にはもう遅く。

「デメエ……!!」

「未だに左右のバランスが取れていないな。はア：さつきから炎を使用する時、表情と身体が力んでいる。簡単に分かるほど悪い癖だ」

氷と壁を足場に跳躍し、背後へ回り込んでいたステインに氷壁に頭を叩きつけるように抑えつけられる。苦悶の声と共に意識が一瞬肉体と切り離され、個性の発動が止まってしまふ。

指摘通り轟は個性の使用に慣れていない。いや、幼少の頃よりの厳しい訓練で肉体には染み付いている。しかし如何に体に染み付かせていようとも、心が身体に未だ追いついていない。埋め込まれた拒絶と精神的重圧、頭に過ぎる母の顔が阻害する。

そして攻撃の瞬間に混ざる雑念をステインは決して見逃さない。

「ここで殺しはしない。お前がここに来た時にも言ったが、お前は『いい』ヒーローだ。お前や、緑谷出久のような者こそが真にヒーローの資格がある。はア・・・自己を省みず、善行を行う者にこそ、その名は与えられるべきものだ。断じてあそこの子供と、贋作が名乗っていないものではない」

「だから、テメエが裁くのか?」

「そうだ。はア・・・悲しいことだが、真実のヒーローの姿を知り、声をあげる者は今は俺しかないからな。だがいつか、鍍金が剥がれて世間は気付く。数多のヒーロー達の間違いに。だから俺が正すのだ。いつか、巨悪を討てるヒーローが現れるまで」

「はっ、そうかよ。とんだ自己中野郎が!!」

ステインの語る事が、マトモなどとは欠片も思っていない。吐き出される全てを妄言だと一蹴する。

見方を変えてしまえばその理屈は間違っではないのだろう。ステインの語る理想はつまりは、滅私奉公こそを至上とする者だけがヒーローであるということなのだから。実例としてオールマイトのような素晴らしいヒーローが存在している。自らの危険など欠片も顧みず、いつだって誰かの為に立ち上がる無敵のヒーロー。その在り方に好感を覚えない筈がないし、正しく生き方の理想と言えるだろう。

だが、果たしてオールマイトのようなことを実践できるヒーローは

どれだけいる？

どんな状況に陥ろうとも、決して希望を捨てず、挫けず諦めず前へと進める人間が、一体どれだけいるという。

断言出来る。自分には無理だ。そも今の自分だって、目的の中に己の為というものが入っている。言うは易し、行うは難し。純白で純粋な理論は、人間の脆い心には厳しすぎる。

オマケに心だけではなく、ステインは力も求めている。清き心を持つ真なるヒーローが、誰しも強者であるなどという理屈はない。現実はいつだって上手くいかないことばかりで、天は誰にでも二物を与えらるわけではない。

そして何より、人は腐りやすい。ステインの理想のヒーローになるということは、その分だけ誘惑が膨れ上がる。金や名声、人を狂わせる要素は世界にはあまりにも多すぎる。

もしステインの理想が実現したとしてだ。果たして、ステインの語る理想に適合して、最後まで貫けるヒーローは何人なのだろうか？

「無駄だ。お前は既に見切られている」

感情を炎の如く昂らせて疑問を捨てる。自分、そして周囲に展開されていた氷壁を巻き込むように暴発していく炎の嵐。鉄すら溶かしてしまう灼熱だがしかしやはり、ステインの言葉通り見切られている。変わらず個性使用の際に現れる一瞬の合間を読んで回避する。

ステインが先程から言うように、既に轟を殺すつもりなどない。ステインにとって轟とは、この先の社会において必要となる本当のヒーローだ。自分の理想を認識しているからこそ、そんな者を態々壊してしまうほど、ステインは向こう見ずではない。それにこの場合で殺すことになれば、大なり小なり被弾を覚悟しなければいけない。

接敵時の緑谷の拳程度ならまだいいだろう。伴う威力を鑑みれば十分な凶器になり得るが、確実な殺傷性においては銃や刃物、そして炎に比べれば格段と落ちる。対して炎は語った通り殺傷性は本物。人間が生来より恐れる現象を武器とするのだ。無理をすれば代償に、相応しい手傷を負うことになってしまうだろう。手負いの獣を追い詰めて、逆に窮地に追いやられるつもりはない。

程度がどれほどかわからぬ以上、無駄な被弾による負傷は褒められるものではない。よってステインは当たり前前に回避を選択する。

「見切ってるのはテメエだけじゃねえぞ・・・！」

いい加減避けられるのもウンザリだと、華麗に避けていくステインの気配を追いながら個性の発動。炎を突き破りながら、幾多の水槍が殺しかねない速度と威力を込めて飛来する。あまりこういった類の攻撃は褒められるものではないため、普段は氷を壁や単純な重量の暴力として使用しているが、相手が相手。油断して生き残れるはずがない。

槍はより鋭利に、より硬く、より素早く、よりの確に。人を殺せる形へ変化させる。

「成程。確実に、終わらせに来たか・・・！」

その攻撃、容赦の無さにステインはこれまでの狂気を含んだ物ではなく、優しく微笑むように笑う。その笑みはまるで、出来のいい生徒を見るような教師の如く。これは期待できる、安心だと語りかけるように。

そして、

「その決断——やはりお前は、いい!!」

どちらにとっても完璧だった。初めての攻撃方法だったが、形成した氷は発射速度や威力、判断までもが完璧だった。この一瞬だけでいえば轟はプロヒーロー上位の領域へと足を踏み入れていただろう。

故にこそ、轟の失敗はたった一つだけだった。

轟は幼少の頃より、父であるエンデヴァーにオールマイトを超え、NO.1ヒーローになるために厳しい訓練を課されてきた。殴られる蹴られなどの暴力行為はなかったが、怒鳴られたことなど幾多もある。その厳しさは血の繋がった兄妹たちを、失敗作の他人と思えと言いつつ聞かせるほど。

その過程であつたあらゆる事をこの場は無視して、結果だけ言うとなら轟は今の形として完成した。母より受け継いだ氷、父より受け継いだ炎。圧倒的な個性を使いこなす轟が作り上げられた。

この時も、父から与えられた訓練の成果はよく出ていた。特に最後

の氷槍は、一発本番ながらもステインを確実に落とせる出来をしている。よってそれが失敗となっていた。

ステインの理想とするラインを、轟は初めの時点で乗り越えていた。友を助けに来た時の言動や、その後の行動までもが、緑谷出久に並ぶほどのものだった。加えて場数と言うべきか、戦闘に対しての鍛え方は轟の方に軍配が上がっていた。そしてオマケとばかりに、必要であれば躊躇わずに躊躇を捨てて殺傷へ辿り着ける。轟からすれば迷惑極まりないが、ステインにとっては感涙ものだ。

轟の攻撃は正確すぎたのだ。攻撃は全て急所を狙っていた。心臓、頸動脈、頭、肺、腱。倒せなくても確実に致命傷が残る箇所へと攻撃を加えようとしていた。それは殺し殺されという世界に慣れていない者からすれば、素晴らしい判断だった。しかしそれ故に、慣れているものからすれば分かりやすい。

全ての氷槍が砕かれる。どれ一つとして命中していない。急所を狙ったことなど全て見抜かれ、その全てに対処されてしまう。皮肉なことに、磨き上げられた精度の個性が仇となっていた。

そして、詰みへと手がかかる。

「はア・・・」

「——っ、いつの間に・・・!?!」

ステインが舌で刃を舐めとっている。いや、正確には刃に付着した血液を。ならばその血液は誰のものか。答えは言うまでもなかった。興奮し、アドレナリンが大量に発されていたのか、それとも氷の影響で痛覚が麻痺していたのか。気付かぬうちに流れる血で赤く染る右腕。意思に反して動かぬ轟の肉体。

「直に応援のヒーローが来るだろう。大人しくそこで見ているがいい」

「言うに事欠いて、見ていろっつか・・・!」

「そうだ。はア・・・お前はヒーローになる資格がある。だからこそ、ここで終わるべきではない」

「そんなにヒーローが大好きなら、知ってるだろうが教えてやるよ——」

諦め悪く足掻くその姿に素直に好感を覚えてしまうがそれはそれ。この場で何を、と聞き返そうとした刹那、迫る二つの気配を前に自らの失念に気付く。

轟がそうであるように、ステインもまた興奮してしまっていた。緑谷出久という後継者に相応しき少年と戦えた喜びに、それが醒めぬ内に轟との戦い。素晴らしき少年と二人も出会えた。類稀なる本物のヒーローとしての素質を前にした喜びか、もしくは別の要因か。何にせよ、ステインの体内時間は狂ってしまった。

「しまった時間、ガバツ——!?!」

顔面に突き刺さる拳と脚。それは先程まで動けず、氷壁の向こう側で守られて動けずにいた緑谷と飯田のもの。

ステインの個性は永続的なものではなく一時的なもの。その持続時間は自らの血液型と同じものから順に少なくなっていく。よって、時間があれば動くことはできる。

本来なら決してしないミスだった。普段より細心の注意を払っているため起こりうる事など決してなかった。特に個性を使用したならば気を張っているため気付かぬことなど有り得ない。武器として扱っている以上、自らの個性のことは自らが一番知っている。しかし、それを忘れさせるほどの要因が存在していた。先述した緑谷、轟兩名と、学生の域を超えた轟自身の実力。ここにはない別の思惑。

そして一番の要因は轟が一人ではなく、三人だったということだ。「ヒーローは、諦めが悪いんだよ」

「は、・・・あ？」

その結末を見ていた女は、呆けた声と共に自らの失敗を悟ってしまった。都合よく動く為しか価値がない駒に余計な行動や思考は不

要と、下手な疑問や思考に齟齬が出ないように方向性を確実なものにしたり等の細工を施していたこと。

罷り間違っても自分の害にならないように考え抜いて施した細工が、逃れられない故に規定していたこととはいえ今回の一件を失敗に陥れる一番の要因にしてしまった。

途中より己の失敗、というより懸念に気付いていたが、追加で介入することは出来なかった。何せあの場には最大の不確定要素がいるのだから。持ち得る手札を使わずと取っておくというのは愚かだが、状況に流され気安く手札を切るのは更に愚かな行動だ。

細工を施した。捻じ曲げた信念を貫かせるために、少しばかり素直な性格にしてあげたら、まさか裏目に出て時間を測り間違えるという有り得ないミス。

なんと下らなくつまらない意味の無い幕引き。どれだけ時間を無駄にしたか。いや、もとより計画とはそういうものだ。万事が思い通りに進んでしまう事の方が感覚的だが良いことではない。そういういた時に限って、土壇場でどうしようもない卓袱台返しが起こるのだ。

終わってしまえば怒りを募らせるよりも呆気なさに苦笑してしまう。細工を施したせいどころなつたとはいえ、それでも最期の顛末以外には何も影響しなかった。だと言うのにこの結末、結果として役立たずとしか言い様がない。

そして、どうやらまだ足りないらしいと心中で甘い考えを行った己を戒め律した後で、全てを見ていた女は携帯を手取る。

「予定通りだ、伝えておけ。ちゃんと見えるように、クソカスでも理解できるように丁寧に分かりやすく殺せよ」

命を下し、荒ぶる内心を表すようにそのまま握り潰した。

人とは思えぬ程に全身が青白く、その巨軀に反して細い身体を持つ脳無を幾人のヒーローと協力して拘束しながら、相澤は決して閉じないように目を見開く。

正直な話、相澤はこの間のUSJでの事件から、保健医であるリカバリーガールに安静にしていると念を押された身である。あれから時間が経ち、継続して治療を受け続けたため身体の負傷は大体が治ったが、それでも全てとは言いがたく、未だ節々に痛みは残っている。

相澤は知らないことだが、その負傷は幸運のものである。もしあの時、死柄木がメデイジーナではなく脳無を向かわせていたのなら、相澤はさらに重い負傷と目の付近に傷を負ったことで個性の使用に小さいが、しかし無視できない重大な後遺症を残すことになる。

最低限、誰かの足を引つ張らないように戦えるだけの力も戻した。怪我をするなどいつもの事だ。勘は失っていない。何も無鉄砲に感情に流されてステインを追って保須へ入ったわけではない。

「偶然、とは考えられないな」

拘束され、引き摺られていく脳無を個性を使いながら見送ると、嘆息したように息を吐く。ステインを追って保須に入った。連続ヒーロー殺人事件の容疑者。そしてパツシヨーネの関係者候補。いや、最早候補などではなく、関係しているのは確実だろう。

ステインは必ず保須へと戻ってくる。それはこれまでの行動から見て間違いのない事だ。そろそろ犯行が再開するのでは？といった段階で、この複数体の脳無の襲撃。^{ツイン} 敵連合も何かしらの目的があるのか。それとも子供の癩癪か。

測りきれない。

数多の犯罪者を見てきた。小さいものから大きなものまで。雄英で教師を始めてからも、それこそ学生の時から。

単純なプロファイリングで見れば、連合のリーダーである死柄木は大人子供と呼べる人間だ。力を持って子供のまま成長した大人。そんな人間は、悲しいことに少くない。この個性社会、力を持って余している者は残念ながら多すぎる。そんな人間を、何人も見てきた。

だがこれまで見てきたどれにも、死柄木は該当しない気がするの

だ。確かに行動として見れば大人子供だが、何かそれだけでは無い、底知れなさを感じてしまう。歴戦の相澤でも見た事のない、人の宿す真実の狂気のような何か。歪んだからそうなった訳ではなく、なるべくしてそうなったかのように。

もし、悪になることに素質というものがあるのであれば、死柄木は飛び抜けてしまっているのだろう。それこそ、人とは全く違う生物だと思ってしまうほど。

そんな男が、突然このような行動を起こしたことに、なにか意味があるのかも考えるべきなのか。それとも本当に癩癩のうちに起こしたことなのか。どちらが正しいかなど、分かるはずがない。

「もしかしてイレイザーヘッドですか?!」

脳無を見送り次の現場へと向かおうとした時に、誰かに呼び止められた。誰かは分からない。もしかすれば一般市民か?と思つて声の方へと振り向く。そこには魚を象つたようなヒーロースーツを着た明らかに一般人とは違う男性がいた。

彼のことは知っている、今回のインターンで飯田から逆指名の形を受けていたヒーローで、ノーマルヒーロー・マニユアルだ。

「・・・どうしました?」

度々このような状況で呼び止めるといふことには理由があるのだろう。まさかインターンで来てくれた生徒の担任だから、などという理由で呼び止めるなど現状では考えられない。だとすれば、マニユアルの付近に知っている姿がないことを考えれば自ずと答えはやってくる。

「それが、この騒動の間に飯田君がどこかに行つてしまつて・・・私の監督不行き届きです。申し訳ありません」

やはりだ。飯田はインターンの目的を忘れ、ステインの討伐へと身を乗り出したらしい。それこそ担当のヒーローのことすら考えず、今起きている脳無の発生さえも無視して。

「いえ、寧ろ謝るのはこちらの方です。こうなることが予想されていた以上、飯田を保須に近づけるんじゃないやなかつた」

「こうなること・・・?」

「飯田が、ステインを追っていることを。もしかすれば既に交戦しているかもしれない」

もしくは既に殺されているかも知、などとは口が裂けても言えなかったし、考えたくもなかった。少々強引になってしまいが、無理矢理にでも言いこめるか、教師としての権利を無理に行使してでも、あらゆる可能性を潰しておくべきだった。

「おい、イレイザーヘッド」

これからの身の振り方を考えていた時に、不意に背後より重圧溢れる存在感と、発汗を引き起こす程の熱が相澤へ叩き付けられた。

「エンデヴァー・・・さん」

怯えと尊敬混じりの呟く声はマニュアルのものだ。マニュアルは大手の事務所に所属している訳でもなくて、また本人のランキングが高いというわけではない。よって、国内でのヒーローランキング第2位の男と、ここまで身近に接することはほとんどなかった。

相澤と同じく、事務所をあげてステイン確保の為に動き出していたのは知っていたが、まさか遭遇するとは思っていなかった。

「焦凍の奴がいなくなった。直前に携帯で何らかのやり取りの後、勝手にどこかへ行ってしまった。貴様、何か知っているか？」

エンデヴァーの息子である焦凍は、インターンの先を父であるエンデヴァーの事務所にしていた。エンデヴァーも自らの最高傑作ということもあって、己の力を間近で見せようと奮起しながら共に動いていたのだが、友人のピンチだと言って脳無との戦闘中にふらりとどこかへ行ってしまったとのこと。

「まあ・・・予想はついていますが」

「言え。焦凍は今、何をしている？」

「恐らくですが、保須に来ている他の生徒とステインの捜索——いえ、既に戦闘しているかと」

「・・・そうか」

焦凍がいなくなる直前の行動を、エンデヴァーは思い返す。己の背を見て、現場のヒーローの何たるかを、そして受け継がせた炎の扱い方を見ておくように告げた時、焦凍はその言を聞かずに、スマホへ落

とじていた視線を上げたった一言、「ダチがピンチかもしれないねえ」と静かに言つて現場より離脱した。

離れていくその背に怒鳴るも、そんなことよりも大切な物があるのだと、周りを振り切つて進んでいく、ずつと見続けてきたような迷惑な背中を幻視して、引き止めることは叶わなかつた。

「貴様もついてこい、イレイザー。迅速に焦凍を、そして生徒達を見つめるぞ」

「ええ、ですがまず先に――」

共に空を見上げる。先程まで暴れていたのか、それとも他のヒーローに追い詰められて逃げてきたのか、傷だらけの姿を修復しながら飛行している脳無。しかしこちらを敵と認識して、空より襲いかかつて来る。

「こつちから片付けましょう」

目を見開く。炎が噴火した。

さよならなんて言わないさ。使い潰すだけだから

救いなんて一切なかった。神なんていない。誰も手を差し伸べない。それが少年が知った、自分に与えられた世界の形だった。

個性という存在が現れてから、当たり前のように戸惑いは起こった。それでも10年も経てば順応し、人の意識も、人の価値も、社会の形式も個性を取り入れたものに変化していった。

そして取り入れ変化し、常識となったことで当たり前になり人の価値は傾いた。個性という新たな基準が命に明確な格差を付けたのだ。

国の制度は変化し、優れた個性を発現させた者には睡つけとして惜しみない支援を行った。優れたとはいかぬ、汎用的な個性だとしても、もし家が貧窮に陥っていれば多少の支援を受けることが叶った。

敵を生みにくくする政策。優秀なものをより先へ進ませるべく。^{サイラン}その一方で当然、一切を持たざる者達には希望はない。

欠片も支援を受けることなく、路傍に打ち捨てられるのみ。誰からも拾われることなく朽ち果てていくだけだった。

当たり前前の家庭に生まれていけば、無個性だとしてもそれなりの生き方はできただろう。親から愛情を貰い、友と友情を育めただろう。それも仕方の無いことだ、変えようのない運命なのだと言われただろう。何せ無個性に生まれる確率は今でさえ僅かだが、少し前までは約二割。五人に一人である。決して少ないとは言えない数字だ。

そう、無個性とて少くないのだ。それこそ優良な個性と比べたら圧倒的に多いと言える。だがそれを知らぬか、それとも知ってか、愚者というのは多く存在するのだと。

優等な個性を持つ家庭には支援の見返りとして生活の監視などがつくものの、万全の支援を行うというのがその国での常識だ。この制度を狙おうとして、人生の一発逆転を狙おうとする人間として少なくない。

少年も、その逆転を狙って産み落とされた失敗作の一つ。彼の母親は麻薬狂いの娼婦というロクデナシ。これまた筋金入りのロクデナ

シの彼氏に、借金の肩代わりをさせられてあつという間に地獄に落ちた。いつの時代も存在するどこから見ても底辺の人間だった。

管理するのは街一帯を占めるマフィア。下っ端とはいえ逃げ切れずもなく、元より煌びやかでなかった人生はより最悪へと変貌した。

その現状を抜け出したい為か、彼女は自分を買客と体を重ね、個性を選別しながら毎年子供を産み落とした。彼女は待った。待ち続けた。数年経てば大抵の子供は個性が発現する。自らを地獄から救い上げてくれる子供を、彼女は延々と待ち続けた。

結果は言うまでもないだろう。産み落としたどれもが失敗作。個性を持つていたとしても、金になるほど良いものではない。産み落とした子供達を麻薬狂いの娼婦如きが養えるはずもなく、またその気があるはずもない。

よって当たり前前に捨てられる。毎年、個性発現の限界を超えた五歳の子供を捨てていく。

捨てられた彼は、孤独な世界で必死に生きた。幼い体に鞭打ち、拙い知恵を働かせ、盗みを働き、同じ様な境遇の仲間達とコミュニティを作り上げた。同じ様なコミュニティとも衝突した。少ない食料の奪い合いになり、何人もその手にかけた。

裏社会とすら言えない場所で、彼は生き残った。相棒と呼べる友とたった二人で、彼は最後まで生き残った。そう、たった一人になる前に最後まで。

狭い路地裏で、雨が降っていた。身体はマトモに動かない。地面は目に見えないほど小さな波紋を大量に作る雨と、大量の流血に彩られていた。

二人分の血だった。自分と、そして共に地獄を生き抜いた相棒の物。自分たちは撃たれたのだ。かつての報復か、それとも全く関係の無い何者か、はたまた薬でもキメていたのか。判別する方法はないが、ともかく自分達は撃たれたのだ。

銃口が向けられたのは自分だった。発砲音は六回。脇腹と肩に一発ずつその身に受けた。後のことは覚えていないが、自分を突き飛ばした相棒の現状が続きを物語る。その身体には四個の穴が空いていた。故答えは明白。

自分を庇って倍の弾丸を撃ち込まれたのだ。

当たりどころがどうかなどとは分からない。だが放っておけば確実に死ぬ。それだけの出血をしている。病院に連れていこうにも金などなく、自身もマトモに動けない。発砲音を聞いて近隣住民の誰かが助けに来るはずもない。ここがマフィアの支配地なのは有名だ。厄介事に態々首を突っ込むバカがどこにいる。

神はいない、救いはない。用意された結末はただ一つだけ。

価値のない彼らはただ、淘汰されて死ぬだけだ。

「あちやー、こりやアイツやっちまったな」

熱に浮かされる市民達の中に潜みながら、スクアアロは端末でステインの状況を確認する。ステインに与えた数多の装備品。その中に隠されていた装置でステインの身体状態は筒抜けとなっている。

鉄火場での唐突な意識の断絶は、即ちステインが何者かに敗北した事を示していた。

「あんまし詳しくねえけどよお、エンデヴァーの名前くらいは知ってるぜ。国を守るNo.2のヒーロー様。性能はどれも高水準。オールマイト抜きなら間違いなく最強。でもよお、状況的に違えよなあ」スクアアロとティツアアノが紛れたのはエンデヴァーとそのサイドキックのヒーロー達に熱をあげる集団だ。紛れ込みながらも周囲の把握は怠らず、エンデヴァーが少し前まで付近で戦闘行為を行っていたのは周知のことだ。

「興奮して横っ面ぶん殴られたのか？攻撃受けて弱った反応は一つもねえ。体温の変化にも焼かれたとかさういった異常はないからエソデヴァーじゃねえ。どこかの雑魚が不意打ちでか。はっ、大口叩いた割には呆気ねえ」

ヒーローの認識を、社会を変えると息巻いて、いつか自分達に、何よりボスの喉元を喰いちぎると宣言した男は歩き始めて躓いた。名の知れた強敵と出会うことなく。

それが大元からの干渉があつたとはいえ、それでも失敗は失敗であり――

「指示が来ました。予定通り彼はここで始末します」

許されることは無い。

「漸くこの時が来たか。あの生意気な糞野郎に牙を突き立てられると思うと、身体が疼いて仕方がねえ」

「あまり興奮しすぎないように。今回はいつもとは違い、ただ行えばいいというわけではないのです。ボス直々の指示。次へ繋げる為に大切なことです。我々にも微塵の失敗も許されませんか？」

「ああ、分かっているさ」

たった一つ、ボスの命令だと言うだけでスクアア口の悦に満ちた顔から、ゴツソリと表情が抜け落ちる。この件に関しては確かに前々から楽しみにしていたものもあつた。気に入らない奴を一方的に捌るのは、趣味が良いとは言えないが気分が良くなるのは違いない。これまで足になったり等で、相棒とのせつかくのドライブの気分を崩されてきた分の恨み辛みを残らず晴らしてやろうと思っていたが、しかしそんな遊びをする余裕はない。

ステインが敗北すれば始末するのはボスから言われるまでも無い規定事項で共通認識だ。『パッションネ』は決して表に出ることは無い。繋がりができてしまったステインは早急に切らねばならない癌である。

その始末役であるスクアア口とティツツアアノに、ボスからの指令が下された。内容には首を傾げるものではあるが、しかし拒否することなど有り得ない。そんなことをしてしまえば、命がないのは自分達

の方であるのだから。

スクアールもティツツアールもシーラもスキューロも、ボスからすれば都合良く動く手足でしかなく、必ず居なければいけないという存在では決してない。よって下手をするのであれば、ステインの立場に立たされることは当然のことである。

「問題はないようですね」

何かと気分が変動しやすいスクアールだ。浮つく前に釘を刺しておけば余分なものは切り落とせる。スクアールもティツツアールもプロだ。尤もプロでもヒットマンとしてではなく、ボスの命令を実行するプロ。

「では、行きましょう」

人混みに紛れながら、ステインの倒れている場所、その付近まで歩く。ここら一带の情報は頭に叩き込んである。予定外の脳無の襲撃で人の流れや瓦礫による道の封鎖などがあるものの、しかし彼らは迷いなく進んでいく。

「無事か、お前ら・・・」

刃を突き立てられた腕に応急処置を行いながら、轟はステインにトドメを刺した二人へ声を送る。現着した時、倒れる緑谷の背中は裂傷と血で濡れていた。そして砲弾にした指の一本は相も変わらず腫れていた。

しかし不思議なことに背中への傷はそこまで大したものではなかった。あの状況で、尚且つステインという男が狙いを外すなど有り得ない。

対して飯田は、分かりやすいほどボロボロだ。新品同然だったピカ

ピカの鎧のヒーロースーツは擦れた痕が幾つもある。飯田自身も無傷ではなく、スーツで守りきれない部分にステインの高い技量で直接刃を突き立てられている。浅い傷ばかりとはいえ、放っついていいものではない。

更に轟はその状態の飯田に無理をさせている。飯田の『エンジン』を限界を超えて駆動させるレシプロバースト。籠る熱を逃すためにステインと戦いながら飯田の脚を冷やしていたが、それでも無茶の類に変わりはない。

「うん、僕は何か。動けないほどじゃないよ」

緑谷はそう言いながら、倒れているステインを見る。壊死してしまふ可能性もあるが、しかし決して侮ることが許されず、ほんの少しでも自由を与えればどのような被害を出すか分からない相手であるため、四肢を轟の氷が強靱に固定している。

白目を剥くステインは、気絶して尚執念を忘れていないのか、刃は決して手放さなかった。

「どうして……この人は……」

気が気でない。緑谷はステインを複数の意味で警戒している。凶悪な敵^{ライオン}としては当然だが、残る理由は彼が緑谷とオールマイトの秘密を知っているような素振りを見せたからだ。

全て、と言っていた。ならば彼は何をどこまで知っているのか。個性の譲渡のことか、歴代より受け継がれてきたことか、オールマイトの弱体化のことか。

そして何があつてステインはそれらを知る機会を得たのか。

秘密を知るのはオールマイト曰く、数えられるほどしかない。勿論ながら秘密を知る全員が信頼を置ける相手であり、彼らが漏らすようなことは考えられない。ならば、一体誰が――。

「すまなかった」

飯田の枯れたような声で思考が引き戻される。そうだ、今はこのことを考えても仕方がない。所詮自分はまだこの件について詳しく知

らない。過去に何があったのかさえも。ならばこのことは今は胸に秘めて、後でグラントリノと合流した時に言えばいい。

そうだ、今はまず、今出来ることをしなければ。

「謝るのは後でもできるよ」

「ああ、まずはこいつからだ」

そう、緑谷達が今行わなければならないのは目下の脅威だった存在、ステインを身動きが取れないように拘束することだ。今は気絶しているからいいが、もしもう一度目が覚めればきつと抵抗するために暴れ回るだろう。

「拘束用アイテムは持ってるか？」

「僕はないよ」

「勝手に飛び出してきたからな・・・それに今回は現場の空気を知ることが目的だった」

「つまり全員持ってねえってことだな」

だとすると話は早い。ここから無理に動かすことは出来ないため、ずっと四肢を凍らせたまま拘束しておくしかない。地面と接合している氷を外して滑らせるという方法はあるが。

「親……エンデヴァーに連絡しとく。お前らはそいつのこと見て――」

轟の言葉は最後まで発されなかった。何せ彼は見てしまった。ほんの一瞬とはいえ、路地裏の出口にそれは通りかかった。飛んでいた。

人とは思えぬ肌の色に、剥き出しの脳みそ。歪に成長した肉体。

USJで見た個体とは肉体の細さもまるで違うが、それでもあんな不気味な生物を見違えるはずがない。改造人間・脳無。

そして何より脳無は今、こちらへと滑空してきているのだから。

「大人しく焼け落ちろ！」

噴火の如き勢いで放出される灼熱。堅牢な個性で無ければ忽ち火達磨になってしまふ炎に対して、最後の脳無は防御もせず背中を向けて逃げ回るのみ。元より普通の思考など欠け落ちているから、暴れ回ることも出来ていない。

そも今放たれた脳無達は命令系統の調整をマトモに終えていない。形だけ整ったとりあえずの中途半端。判別出来ず味方にも牙を剥く兵器としても落第点。

事実、黒霧のワープゲートで別々の場所に転移させなければ脳無同士で殺し合いをしていただろう。

死柄木の与えた命令もその一助になっているのかもしれない。壊せ、暴れろ。細かいことなど欠けらも無い、ただの暴力装置に与えるには真つ当すぎる命令だけは、単純すぎるからこそいい。

ならばなぜ今逃がっているのか。恐怖？否。脳無にそのような感情は存在しない。そんなものは製作者の手によって真つ先に取り除かれるものだ。

理由は一つ。ヒーローという邪魔がいるから。脳無の命令に戦うなんてものは無い。だからヒーローに対して目もくれない。邪魔がいるのなら場所が悪いのだと、こうして背中を晒してより壊しやすく暴れやすい場所へと移動する。少なくともこの脳無はそうだった。

「罅が明かない・・・イレイザー!!」

『もうすぐ見えます』

逃げ回る脳無の速度は速い。それこそエンデヴァアの炎を全て自分の飛行へ回さなければならぬほどに。ちよつとやそつとの噴射では追い付けないくらいには。

ならば切り札として、イレイザーヘッドによる個性抹消によって飛行能力を奪い、そこから一気に畳み掛けるのが最適解なのだが、イレイザーヘッドの足では追い付けない。先程から幾度か回り込んで見ても、常識的な思考をしていないため無駄に終わる。

だが同時に、分かったことがある。

「この不自然な回避、複合個性か」

イレイザーヘッドの元へと追い詰めるために網を張っても、脳無はかかる直前で急に進行方向を変える。距離が詰まるのもお構いなく、何故そこなのかと不自然なまでに、多少の無理をしたとしても。

脳無。初めて発見されたのはUSJ襲撃事件。その際の報告はエインデヴァーも聞いている。ヒーローとして、親として。

オールマイトに匹敵する増強系とショック吸収、そして高い再生能力。あまりにも出来すぎな三種類の個性の組み合わせを持つ存在。それ以外にもこの保須で相手をした数々の脳無。

そういった先達がいたのなら、今追っている脳無も複数個性と考えるのが自然だろう。

（異形系としての飛行能力。そして、恐らくは虫の知らせ程度の危機察知個性。思考能力は殆どないという話だが、生物としての本能か）翼も危機察知も強個性とは言えない。そも凶悪なのは個性ではなくその改造された身体能力。細身なその四肢にはどこに源があるのか分からないほどの力がある。

追い詰められ個性が発動するまで逃げもせず、炎を恐れる恐怖もなく、痛覚すらも機能していない。

ただ暴れる為だけの暴力装置。

「ならば逃げ場がなくなるまで追い詰めればいいだけだ!!」

都合五度目のアタック。叫び、爆炎の両腕が奔る。威力や密度よりも飛距離や壁として必要な火力を。街への多少の被害に目を瞑ってでも、このまま暴れ回る脳無の生み出す被害の方が甚大だ。

「正面は任せろ!!」

通信機越しに叫ぶ。応答と共に脳無の正面に様々な個性による壁が出来る。炎の、大地の、鉄筋の、水の。ステイン捕獲の為にエインデヴァーと共に保須へと乗り込んでいたサイドキック達、そして別事務所ヒーロー達。

エインデヴァーの炎で横道を塞ぎ、数多のヒーロー達の個性で正面を塞ぐ。これで脳無の逃げ場は防がれた——などという簡単な話ではない。

声にならない絶叫を上げながら、エンデヴァーの作った炎の壁を突っ切った。元々火力度外視の、単純にここを通ったら危険だと危機察知を発動させて警告する為だけの炎でしかない。普通に走ったとしても腕などで顔を軽く防ぎ突っ切れば、火傷すらもしない程度。

危機察知の個性は数こそ少ないが珍しいという程でもない。彼らは個性使用時は、本能的に個性を発動させ、その優先順位もなんとなく分かるという。その性質、利用しない手はないだろう。

これまで脳無が捕まらなかったのはエンデヴァーよりもイレイザーヘッドの個性である抹消を最優先で警戒して移動していたためだろう。だからセオリー通り逃げ道を潰し、誘導する。

脳無にほんの少しでもものを考えられる知性があれば話は変わったのだろうが、しかし脳無とは改造人間と銘打たれているが、その実恐れを知らず主の命令を実行する生きた屍でしかない。

そも脳無は単調でいいのだ。改造された身体能力はただ強いというだけで全てを壊せる。恐怖を振りまける。ならばそれだけで十分だろうと。

そして何より、今の状況がそもそも運用状況から外れているから。

「捉えました」

見られる。人類が持つほぼ当たり前な機能だけで、その個性は発動する。翼の機能が消失し、グライダーにすらもなれない肉の塊になる。危機察知は元より、危険な状況でなければ発動さえもしない。

「思ったよりも墜落がはやい。早めに」
『わかっている』

脳無の質量と、これまでの速度が加わって落下の速度は予想以上だ。正確な速度が分からない以上、どこまで脳無が視界に入っているか。また視界の外に出てしまえば、鬼ごっこの再開だ。別にチャンスがないわけではないが、そこまで余裕をするつもりは無い。

だからこれで仕留めきるのがヒーローだ。

「燃え滓にしてやる!!」

後退は一切考えない、愚直なまでの全力突撃。大気圏から流れ落ちてくる隕石の如く、全身より赤を発生させながら流星の如く突撃する。

空中に投げ出された状態である脳無では、どうにかできるはずもなく。

「はああああッ！」

貫かんばかりに右の拳が脳無へ突き刺さる。ただの打撃のはずがなく、自らも焦がさんとする全力の火力。炎という単純にして強い個性。その頂点が真価を発揮する。

奇怪な叫び声を上げながら、脳無は焼かれても暴れ回る。そも止まることなど命令されてはいない。壊れるまで、死ぬまで、遂行するまで。与えられた理由を達成するべく、己が不利な状況に置かれていることすらも理解出来ずにただ暴れ回る。

「ゴイツ、耐性が強い……！」

絶命寸前まで暴れ尽くす、その甲斐はあった。エンデヴァアの個性である炎は言うまでもなく轟焦凍と同じもの。容易く人を屠れる凶器である。よってエンデヴァアは他のヒーロー達よりも、個性使用に一層強い縛りを己に課している。

たとえ改造人間と言えども、絶命させるのは不味い。ヒーローとして当然の倫理観が、脳無の耐久限界の訪れが近くなると同時に強まっていた。

「ぐっ、しまったっ……！」

改造人間としての常識外れの臂力がエンデヴァアに直撃する。普通であれば届かぬ場所も、改造された長い手足が関節の動きを無視して届かせる。苦悶の声とともに右腕が脳無より離れていく。左腕を伸ばしても間に合わない。

飛ばれた。逃がした。

全ての力を振り絞り、天高く脳無が空を飛ぶ。エンデヴァアが飛翔すると同時に発される危機察知。この場に留まっていたは不味いと鳴り響く警鐘に従い、脳無は蛇行しビルの合間を縫うように飛翔する。

「すまん、逃がした!」

『アレの素のパワーは身をもって知ってます。恐らく個性関係なく脳無という個体共通で、身体能力が並外れています。個性の攻撃でなくても、増強型でなければ相当キツイ』

「捕縛は無理か・・・ならばいいだろう、今度こそ焼き尽くす!!」

勝利への道は結局の所一つだけだった。オールマイトのように天候を変えるほどの増強系ならば限界以上のダメージを殺さず与えることが出来ただろうが、エンデヴァーの殺傷性は息子と同様に本物だ。本気を出せば鉄すらも溶かしてしまう炎、使うしかないというのなら。

「はははは!おいおい黒霧見てみろよ、あの無様なN.O. 2様をさ。ガラクター一体に対して執拗に追いかけてやがる!しかもあんなにヒーロー動員して、結局捕らえきれずに逃がしちまってさ。まじ笑えるぜ」

事件の渦中にある保須市の一際高いビルの上から、黒霧の個性によってワープしてきた死柄木が、眼下で起こった一連の流れを見て腹を抱えて爆笑する。

言わずと知れたN.O. 2のヒーローが調整も完了していない、ましてや戦闘特化でもないドクターの気まぐれで作った脳無一体に良い様に翻弄されている。その姿はヒーローを嫌う死柄木にとって、なんとも愉快な光景か。

「危機察知、生命力増加、翼、そしてドクターによる改造。改造はともかくどれもそこまで強い個性じゃない。同系統の個性の中でも、下の上に位置する位の没個性。翼に関しては最近出てきた公安のアイツ・・・ええつと・・・誰だっけ?」

「ホークスですか？」

「そうそう、そんな奴。アイツの完全劣化版なのにさ。いやあ、科学の力ってのは偉大だねえ。あんなゴミ個性でも個性増強剤をゲーム前に適量無視してぶち込んでやればアレだけ頑張れるんだもんなあ。ホント、お前のお陰だよ、メデイジーナ」

そう言うって死柄木は自らの足元、正確には自分が腰かけている物へと視線を向ける。そこには四つん這いになり、自らに乗りながらはしやぐ死柄木がいても欠片も微動だにしない怪人、メデイジーナの姿がある。

脳無製作にあたって、個性使用の単一化や思考能力の低下によって有力な応用が出来なくなるといふ弊害により本来想定していた使用を行えなかった個性。それらを解決する案として採用されたのがメデイジーナと同じ手法。即ち限界以上の薬を投薬することによる肉体面と個性面へのドーピング。究極の脳筋思考。

多種多様な薬物の一斉投薬は代償として脳無特有の無限のスタミナを瞬時に燃やし尽くす。長期的な戦闘には向いていないが、それでも一時の悦を満たすには十分だ。

「そろそろ限界かな」

脳無の肉体が端から屑となって零れ落ちる。ドーピングで消耗された肉体に、エンデヴアーの炎を長時間浴びたのだ。幾ら改造人間と言えども、肉体の崩壊までは秒読みだ。だから最後は、せめて華々しく散らせてやろう。所詮道具のことだから気にも止めないけれど、それでもNo.2でさえ倫理という足枷があることは判明した。大収穫だ。

オマケに命令の内容は暴れることだけ。単純故に加減の必要も余地もなく、常に自己の限界点を出し続けている。

「んじゃ、負け犬の先輩へのプレゼントにでもなつてくれ」

遠くとも構わない。優れた感覚、そして改造による電気信号を通じて同じ保須市にいる死柄木の命令は聞き届けられる。だから最後に、子供に負けた情けない先輩と共に処理しようとする命を命ずる。

「ステインの最後、見届けなくても構わないのですか？」

「いやいや、アイツにそんな価値ないだろ。あ、でもヒーロー殺しの名前だけは貰ってくか。こないだ減った雑魚の分、補充しないとだな。しかも今度はちゃんとしたのをさ。」

義爛に伝えとけ、ヒーロー殺しは連合の傘下だったってさ。ちゃんと宣伝してもらわないとな。あ、でも負け犬の名前なんて汚れるだけか・・・まあしようがない。そこは清濁併せ飲もうか」

「死人に口なし。だから可愛い後輩の未来の為に死んでくれるよなあ、先輩」

どう転ぼうが構わない。目的は一つなのだから

「私は結構優しいと思うんだよ。何せ信頼を裏切って後ろから刺したわけじゃないんだから。端から信用してないだろうし、こうなることもある程度は想定していたことだろう。それにきちんと求めるものが確かにあると、死際に教えてやったんだからさ」

「だから喜んで死んでくれるだろうさ」

テレビから聞こえてくる悲劇を背に澄み渡る青空を眺めながら、彼女はただ優しく微笑んでいた。

たった一瞬、気を緩めただけだった。

ステインを拘束し、各所に散らばっていたプロヒーロー達が集い始める。緑谷のインターン先であるグラントリノや、No. 2であるエンデヴァーの姿は見えないが、しかし緑谷達学生組も含めれば十名程のヒーローがいる。

ステインは捕らえた。脳無も次々と撃破されている。事は収束へと向かっている。だからだろう。気が緩んだのは至極当然の事だった。

屑になる体を撒き散らしながら翼の生えた青ざめた巨体が、空からピンボールのように彼らを蹴散らす。気が緩んだ時に襲った命を懸けた無謀な奇襲は、本来の標的には当たらなかったものの、しかし障害物は取り除けた。

襲ってきたのは最後に残った死柄木弔からの命令を受け取った脳無。彼は最後に下されたステインの殺害という至上命令を果たすべく、旋回しながら今度こそ突撃を仕掛ける。

態々握りつぶす必要も殴る必要もない。自身の身体が、突進がステインへと当たる。それだけで一人の男の命が無惨に散ることを理解している。故に小細工は不要。力技で押し通す。

「させない……！」

誰よりも何よりも、再起が早かったのは緑谷だった。元よりそのままダメージがなかったこと、そして運良く飛ばされた先でフルカウルが発動出来たこと。

敵は脳無。USJとは別個体とはいえ、現状のオールマイトの100%の連撃を受け止めた怪物。腕が壊れてもいいという覚悟で、緑谷は自身でも扱いきれない最大の力を発揮するべく拳を握ろうとするが。

「加速、間に合わ——」

計算違いがあるとすれば、脳無は今この瞬間に命を燃やし続けていることでこれから先を考えずに行動出来る。即ち死ぬ事が決まっているためどのような無茶でも可能な状態だったということ。元より脳無とは兵器であり、そうあるべく造られているのだが、死柄木からの命令がそれをより一層加速させた。

自壊しながらの飛行は限界以上の速度を出した。緑谷の拳の振りが間に合わない位置で衝突する。そうなればどうなるか。緑谷は自身の肉体がどれだけ耐えられるのかは分からないが、あれだけの速度と巨体がぶつかるのならば、少年一人の肉体などすぐ様ミンチになるだろう。

迎撃の為に咄嗟に跳び上がった。現在の場所は空中で、更なる移動は一度何かに足をつけなければ不可能だ。反射的な行動は致命的な経験不足を引き出した。よって、先にあるのは死。

そのはずだった。

糸が切れたかのように脳無の身体が急に落下する。大地を割りながら転げ回る脳無に、鮮血を撒き散らしながら飛びかかる影が一つ。

「どうして、拘束が・・・!?」

何故自由になっっているのかは分からない。ただ何故だか先程までよりも確実に負傷が増えている。オマケに破損が少なかったボディアーマーがまるで内側から弾けたかのように壊れている。

疑問は置き去りに。解放され、脳無へ飛びかかったステインが無抵抗な脳無の頭をいつの間にか持つていた刀で貫く。容赦のない一刺しは一撃で脳無の神経中枢を破壊した。神経中枢を破壊されればいかに脳無と言えども上位の治癒系の個性がなければ再起は不可能。いとも容易く機能停止へ陥らせた。

最後の一体になるまでエンデヴァーやレーザーヘッドから逃げ延びた脳無の末路は、非常に呆気ないものだった。

「おい、こつちに一体来て——あの男は……焦凍、まさか」

「ああ、アイツがヒーロー殺しだ」

手遅れとなった追撃組がやってきた。エンデヴァー、グラントリノ、レーザーヘッドをはじめとした脳無の撃退に当たっていたヒーロー達が漸く本来の目的であるステインと対峙した。

脳無という尽きかけていたとはいえ命を一つ容赦なく消した男は、訳の分からぬ負傷を抱えながら声の方向、エンデヴァーの方へとゆっくりと振り向く。その幽鬼の如き動作に誰もが身構える。

「レーザー」

「消しています。ですが——」

「分かっている。奴の本領は個性ではなく併用している技術だ。一瞬で仕留める」

互いのコンディションや数の差などで有利なのは間違いなくヒーロー側だ。個性を抹消する個性に、No. 2になれるほどの火力に誰よりも老齢ながら誰よりも熟練した老人。他にも他にも——。

数が多い。質もある。実際これから戦闘が始まれば一人の犠牲を出すことなく捕縛することが可能だろう。しかし誰もが動けない。先手を取ることが出来ず、なすがままにステインの歩みをただ見ている。

「エンデヴァー……はア……ヒーロー。そうだ……誰かが、正さ

ねば・・・問わなければ・・・」

口から溢れ出る涎と血を拭くことも無い。垂れ流される血に気を止めることも無い。ただ己がやらなければと定めた至上命題に対して、自らの使命を果たすべく執念によってここまで生きてきた。たかだが内臓がイカれた。骨が折れた。その程度で止まるような生き方はしていない。

何故なら自分は知っている。ヒーローとは何か、ヒーローとはどうあるべきか。尊く美しく素晴らしく。当たり前前に日常を過ごす人々のための心の拠り所。個性黎明期、数多の敵が己の力を誇示し、望むままに暴力を広げる中で誰かを守るべく立ち上がった守護者達。

彼らの煌めきを穢してならない、残さなければならぬ。しかし気付けば社会に飽和したのは本質とは致命的にズレている贋作達。

過程ヒーロー科は何も教えなかった。教えるとしてもそれはヒーロー活動をするための必要な知識だけで、その芯に対して触れることさえもしなかったのだ。贋作が見過ごされて数十年、砂場に沈んだ宝石のように、本物のヒーローは埋もれていた。

「英雄ヒーローを取り戻さねば・・・！」

悲しいことに世には偽物が多すぎる。しかし誰もそれに気づかない。ヒーローを名乗る贋作が、甘ったるい制度によって軽々しく量産されている。だから自分が指し示す。ヒーローとはどうあるべきか、誰がヒーローなのかを。

たった一つの思いを胸に生きてきた男に、誰もが気圧される。あのエンデヴァーでさえもが無意識に足が退がっている。プロも学生も関係ない。たとえ次の瞬間には捕えられるのだとしても、この場はステインによって支配された。

滾る妄念に際限はなく、ステインはどこまでも進み続ける。

「来い、来てみる贋作共。自らがヒーローだと言うのなら、この俺を殺して証明してみせろ……!! 本物なのだと呼んでみる!! 俺を超え、真に残った本物で——」

——極大の悪を裁いてみせろ。

『クラツシユ』は既にお前にお前に喰らい付いている、ってな。あばよクソ野郎、地獄に落ちな」

「ぐっつ——ぐっつおおおおおおつっ!？」

グチャリ、バキリ。ステインの言葉を遮る余りにも軽い二つの音。音の発生源はステインからで、より詳しくいえばステインの喉だった。この場にいる全ての者達に見せつけるように、ステインの喉が捻じ切られて砕かれる。溢れ出る血潮は確実に首の脈が切断されていると分かってしまうほど大量だ。

ヒーロー達が硬直から解放され、駆けつけた時にはもう遅く。血の軌跡を描きながら仰向けに倒れるステイン。No.2すらも圧倒していた男、真のヒーローを求めた故に贗作を駆逐し続けたヒーロー殺しの末路は、誰にも何が起きたのかを理解されない、救いようのない余りにも呆気ないものだった。

「ヒーロー殺しが、ステインが、死んだ・・・？」

理解できないかのように、緑谷の隣に立っていた飯田が呆然とした声を出す。確かに飯田はステインへの復讐を望んでいた。殺してやるとさえ思っていた。間違っていると指摘され、実際自分でもその間違いを理解したが、しかし根本から殺意が無くなったというわけではない。

だがそれでも。憎んでいた相手が眼前で死ぬということにどう思えばいいのか分からなくて。

「どうなってやがる・・・」

シヨックから解放された轟はヒーローに囲まれているステインを、正確にはステインの死因である喉を怪しむように見る。轟は誰よりも長くステインと一対一で戦った。いいや、殺しあった。禁じ手を幾つも解放し、より確実にヒーロー殺しを終わらせる選択をとった。

しかし全てが実らなかった。あらゆる技はそのどれもがいなされ砕かれた。まるで未来でも見ているかのように、綱渡りのような賭けに出る必要性が感じられなかった。

轟も詳しいわけではないし、感覚的なものなので根拠があるわけではないが、ステインは殺気や攻撃の気配といったものを読んでいたのではないだろうか。数多のヒーローと戦うことで鍛えられた戦闘感覚は、その執念に呼応して高まったというのなら。あの不思議な喉への攻撃は、事前に避けられた、もしくは何らかの動作を見せたのではないのだろうか？

(どうして誰も見えなかったんだ!? どうして僕には見えなかったんだ!?)

そして緑谷はヒーロー達の上げる声から、自らの認識した現実との食い違いを考え込んでいた。ヒーロー達は口々に何が起きたのか分からない、空間系や風力系等、ステインの急な死因に様々な予測を並べながら状況をどうにかするべく動いている。

だが緑谷だけは違った。緑谷には見えていた。魚のような形をした何かかステインの喉に食いついていたのを。骨が折れるほど噛み付いていたのを。そしてステインが倒れると喉から跳ね上がり、血溜まりに飛び込んで姿を消したことを。

なのに誰も見えていなかった。誰もそこにいると認識していなかった。

そして――

(あの喉の傷・・・同じだ・・・イタリアで殺された犯罪者達と。やはり、ステインはパッショーネと何らかの形で接触していた可能性が高い)

「スキューロ、私です。ご命令通りステインは始末しました。証拠隠滅の為にスーツは事前に自壊させたため脈拍などを計測できているわけではありませんが、周囲のヒーロー達の動きから死亡しているのは間違いないかと。更なる確証が必要なら追加で動きますが？」
「だが安心していいぜ、心配無用だ。『クラッシュ』はステインの首半分を確実に潰した。食込みや感触からしても間違いねえ。アイツは間違いなく死んでいる」

この日この時の為だけに借用していた保須市内の幾つもの部屋の一つ。水道しか通っていない部屋で、白いカーテンの隙間から双眼鏡を片手にティツアアノがインカムで報告を行っている。傍らには相方のスクアアロが、水の入ったグラスを零さぬように回している。彼らがいるマンションはステインの倒れている場所からそう遠くはない。寧ろ近所と言える程だ。何せステインの死体からこの場所までの距離は、たったの40mしかない。

その40mは今回の仕事で使用した幽波紋スタンドの射程距離最大。即ち40mこそがスクアアロの『クラッシュ』の射程距離。

『クラッシュ』。鯨型のこの幽波紋スタンドは液体から液体へと移動する遠距離操作型。液体であればスプーン一杯程度であつても移動を可能にするこの幽波紋スタンドは、パワーは移動した液体にサイズと共に依存する為そこまで高くはないものの、その特殊な性能からの屈指の暗殺性能は、ボス曰くスキューロの保有する幽波紋スタンドにも引けを取らない。

何せ『クラッシュ』は液体であればなんであつても移動できる。スープもワインも関係ない。そして幽波紋スタンド故に、その存在を誰も視認することは出来ない。

液体という人間にとっては必要不可欠なものを摂取すると同時に、

クラッシュは楽々と対象の体内へと潜り込める。ならば後は低いパワーも関係ない。外側からなら急所を狙う必要があるものの、しかし人間の体内は急所だらけだ。臓物を喰い破るなどは朝飯前。

「しかしまあ毎度の事だが、スキューロはどこであんなもん調達してきやがるんだ？」

「やはり気になりますか？」

「ああ。あの野郎がなんでも出来るってのは知ってるよ。だからボスの側近として隣に立つことが出来ている。それは否定出来ねえさ。実際アイツが持ってきたこいつのお陰で、今回は楽に仕事が出来たんだからな」

通信の切れたインカムをグラスの中に落とす。スクアアロが見るのは持っているグラスの中の液体。その中では悠々と『クラッシュ』が泳いでいる。

「濡れない液体ってのがあって知ってるさ。少して言っているのは分かるねえが話題として耳に入ったしな。原理としては同じようなもんだとは聞いたが・・・」

「問題は液体をどうやってステインの喉へと付着させたのか。彼はステインに渡した装備の各所に仕込んでいたと言っていました。それだけでは説明がつかない。何せあの装備は逆反応装甲。ステインの肉体を砕くためのもの。強引に考えれば機能が果たされたその時に内部に仕込まれていた液体がステインへと付着したと考えるのが妥当ですが……」

ボスもまた謎の多い人物だが、側近であるスキューロも大概だ。経歴を言うには何の変哲もないスラムの屑がボスに拾われた、という大して面白みもないストーリーだ。しかしスキューロに関してわかっていることは本当にそれだけだ。

「そろそろ行きましょう。騒動が収まって街に人が戻り始めています」

「そうだな。車もさっさと処分しねえとだしな」

スキューロの過去の詮索などに興味はない。余計なことをして虎の尾を踏む趣味などない。ただでさえ過酷な世界に生きているのだ

から。それに二人の命は彼らのものでは無い。髪の毛一本から薄皮一枚まで、ボスの所有物なのだから。

「ボス、今回のステインと緑谷出久近辺の動向を纏めた」

「今見る」

『ホワイトスネイク』を使って十枚ほどの用紙を受け取る。本題は今しがたスキューロが言った通りなので、一枚目から本文が目に入る。ご丁寧に画像付きだ。まあ漫画のコマのように作者特有の癖みみたいな描き方とかがあるわけではない。当たり前だが現実で、写真である。

予め保須にある路地裏で、ステインが狙いやすいであろう箇所に監視カメラを仕掛けさせておいた。このために用意された監視カメラはスキューロのコネで何とかとかいう所から受け取ってきた試作品らしい。漫画の知識なんか部分的過ぎて当てにならないから、相当な数を仕掛けさせた。

私自身が『ホワイトスネイク』の射程距離を弄って、何時ものように超長距離からの視界共有をすればもつと楽に済んだのかもしれないが、生憎私はこの手はもうあまり使わないと決めたのだ。既に一度、AFOという厄災を引っ張ってきたのだ。本格的に始動したこの世界で不用意な手段はいただけない。

AFOを打ち倒す、その過程で敵が何人いるかは想像がつかない。漫画の世界の一年なんて言うのは大抵信用ならないものだ。月一で災厄が防がれていても驚かない。

「変化は……ないわけじゃない。数だけじゃない。脳無の動向がやはり派手になっている。それにこの最後の奴、行動的に緑谷を狙っていないな」

私の知る限り、ステインを捕らえた緑谷達を最後の脳無が襲撃、死柄木の大嫌いな緑谷を連れ去ろうとしてステインに葬られるはずだった。しかしそれは起きていない。実際にあったのは自爆紛いの特攻。見れば画像の脳無の身体は所々が欠け、翼にも穴が空いている。

これも知らぬ現象で、しかし幾らかの予想はつく。

「はっ、アレの使い方を実似でもしたのか。成程、そりゃあ強くなるわけだ」

備考としてこの脳無、どうやらグラントリノにエンデヴァー、加えて相澤にまで追われていたらしい。No. 2にAFOと戦える化物ジジイ、そして躊躇を無くし枷を外せばAFOを封殺して一方的にぶち殺すことさえも可能な奴まで参戦している。

にも関わらずこの脳無、どうやらこの三人からかなりの時間逃げ回っていたらしい。脳無は複合個性や改造があるとはいえ、そもそも視界に入っただけで詰まされる相手から逃げ続けられるのは脳無ながらも尊敬に値する。

「だが脅威ではない」

どこまで行っても脳無という脅威はヒーロー達側のもので、私に影響を及ぼすものではない。何せD I S Cは脳無では防げない。

「その脳無をステインが惨殺。その後『クラッシュ』によるステインの殺害」

この情報は実際に映像としてSNSにまで上がっていた。野次馬根性逞しい自称無力な一般人が態々危険地へ赴いて、スマホのカメラとは思えない距離と精度の撮影だ。テレビ局も混じっていそうだが、こちらはモラルの問題もあつたのだろう。

しかし一般人はその限りではない。瞬く間に映像は拡散された。その死に際も執念も全てが世界に広まった。反応を見れば予想通りで、ステインの批判派と擁護派に分かれている。この辺りの展開も問題ない、というかどうかでもない。

「そしてこの位置ならば、見えているはずだろうな」

本来であれば緑谷出久はステインの人質のような扱いだったが、し

かし実際は違う。脳無は緑谷を連れ去らなかつたことで、緑谷はヒーロー側にグラントリノに庇われるように立っている。そして位置を計算すれば絶対に見えている筈だろう。

「そう、見えないなんてありえないし、そんな可能性は考えない」

絶対に見えるはずだ。AFOでも見ることが出来たのだ。ならば対極の存在であり、且つ『矢』を持つ緑谷ならば見えることこそが普通だろう。だから今回、態々目の前で、人目が多大にある場所スタンドで幽波紋を使用して殺させたのだ。これだけの為に、ステインに手を出したのだ。

個性という超常が当たり前に存在する世界で、易々と別の異能の存在など考えつかない。AFOと同じだ。いや、寧ろ緑谷はそれ以上だ。無個性として生まれ落ち、無個性というだけで蔑まれ、夢を目指すことさえ出来なかつた。それだけに個性に対する思い入れは強いはずだ。

そしてAFOの時のように——と言ってもあれは私自身だが、答えを教えてくれる存在はいないし、もしいるのだとすればそれはそれであり悪である。幽波紋スタンドという真実を知ることになった契機、単なる思いつきや仮定に仮定を重ねた上で真相に近づくのならば構わな
い。それは行動に伴うリスクとしては想定内だ。しかしもし第三者の何者かが、仮定や予測を通り越して断定を教えたのであれば、ソイツもまた私やアイツと同じということ。即ち殺すべき敵の証明。

「逃れられないんだよ、私もお前も。立場に力に生い立ちがある限り、運命の車輪になるのは避けられない」

ならばこれは明らかな失敗だったと。緑谷だけに見えるとはいえ見せる必要などなかったのではと。いいや否、見せるべきだ。全ては脳裏に焼き付け心を掻き立てる為に。緑谷出久にしか見えない、緑谷出久しか戦えない、緑谷出久以外では邪魔になる、緑谷出久でなければ殺される。

特別故に緑谷出久は必ず動く。汗水垂らし、命を懸けて、誰かの命を守るために。

「でも支えはあるだろう。彼らから見れば良い奴だということは理解

出来る。他人の為に善意のみの粉骨砕身で、ましてや命を懸けて動いているのだから当然だろう。よって必ず緑谷出久の味方は出来る。個か集団かは定かではないが。まあ不明に対しての証言には世迷言でも必死に訴えかければそれなりに信じてもらえるだろう。本質の真偽の判別には困らない」

だから、後は語るまでもなく。元より手段を選ぶ余裕はない故に。「心が壊れるまで抱え込み続けさせる。何度でも幽波紋スタンを使ってやろう。そうだな、スキューロ。警察へと探りを入れておけ。対象はステインの殺害に対する目撃証言を集めた刑事。緑谷出久近辺は特にな。必要なら追加で出してやる。シーラも使って構わない。

——さて、蝙蝠は上手く飛んでいるかな」

「遅くにどうもすみません。私、ヴラディミール・コカキと申します。どうぞコカキとお呼びください。数日後に隣室へ越させていただく為、こうしてご挨拶にお伺いさせていただきました。どうかよろしくお願いたします」